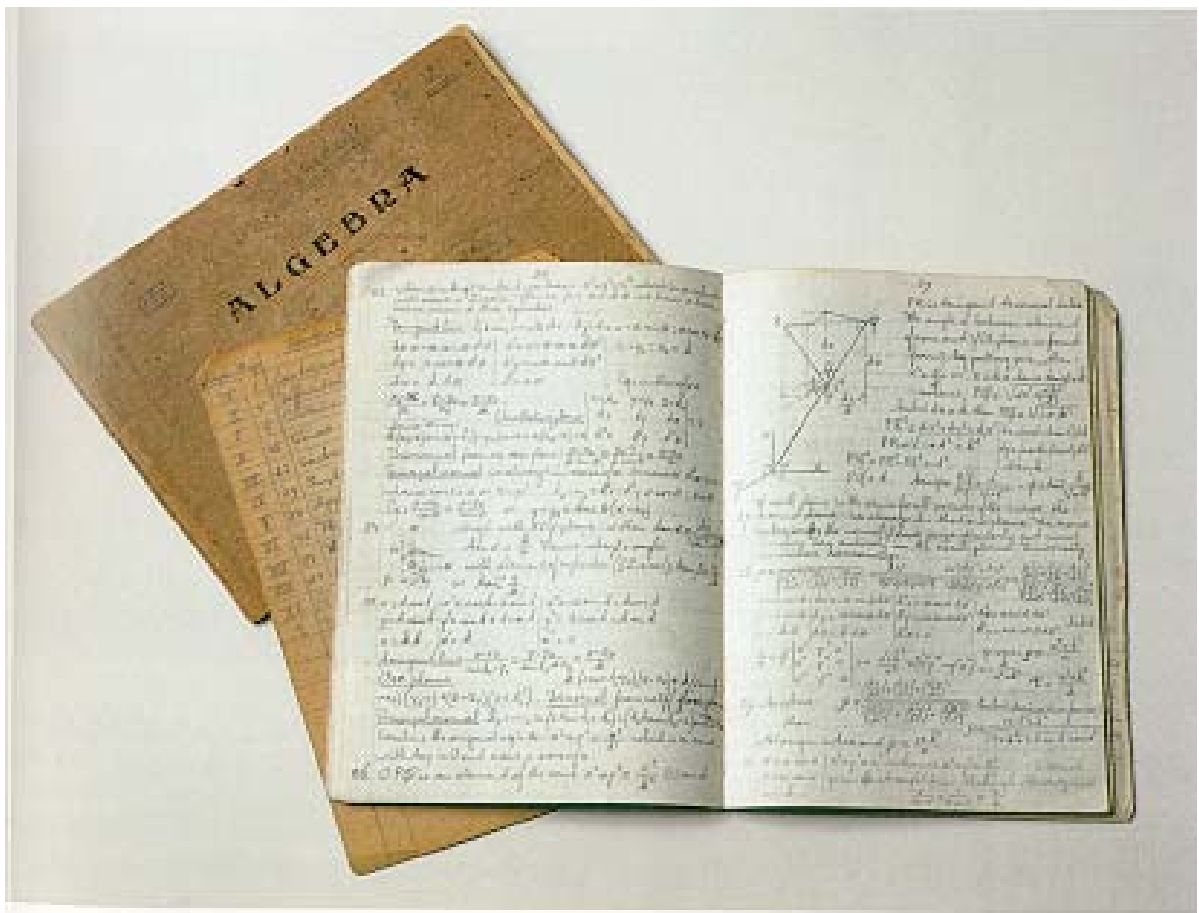


日記でみる日本占領時代の蘭印

バロス6に於いて書かれた日記



この出版物はオランダ戦争資料研究所が「日蘭歴史研究プログラム」の一環として行った『日記プロジェクト』の成果の一つである。「日蘭歴史研究プログラム」は、1994年に当時の村山富市首相が提唱した<平和友好交流計画>から生まれ、日本政府による助成金により運営されるものである。

2004年、オランダ戦争資料研究所

A digital version of this manuscript can be studied on <http://niod.nihon.nl>

日記でみる日本占領時代の蘭印

バロス6に於いて書かれた日記

編纂：Mariska Heijmans-van Bruggen

編集：Elisabeth Broers

翻訳：Michiko Visser-Kameyama and second translator

目次

背景	1
序	3
移送・居住	32
抑留所の組織／日本人責任者と欧州人責任者	70
日本人による抑留者の取扱い	104
食糧・物資	130
作業	200
保健・医薬	241
養育・娯楽・宗教	266
抑留者の精神状態	305
抑留者相互の人間関係	313
抑留所外部とのコンタクト	335
戦争の経過についての報知と流言	353
抑留所での戦争終結の発表	371
人名表	376

出版にあたって

日本の蘭領東インド占領に関して残された一次資料は数少ない。日本の公文書は終戦時に大量に破棄され、インドネシアの資料は殆ど無いか、またあったとしても、その入手は困難である。一方、オランダの資料は主に戦後になって作成された報告書や声明書に限定されるが、その中で例外が戦時中に記された日記である。この日記を基に十一巻からなる〈日記シリーズ〉が編纂され、これはそのシリーズの一冊である。シリーズのうち五巻分の日記集はすでに『日記の中の日本占領』シリーズとして、ベルト・バックナー社（アムステルダム、2001–2002年）からオランダ語で出版されている。日記は現実の主観的表現ではあるが、日本占領下での日常生活の様子を良く表している。

ここで言う日記はすべて、オランダ人が記したものである。日本人管理下の収容所では‘書き物’をする事は禁じられていた。収容所外でも、家宅搜索の際に日記が見つかるとうる受けられる可能性があった。それでも多くの人々が敢えて日記を付けていたことから、日記が書き手にとっていかに重要な意味を持っていたかが窺われる。彼らの個人的な語りは、これまでに形成されてきた日本占領のイメージに新たな視点を提供するものである。

シリーズでは各巻毎に強制収容所、あるいは捕虜収容所に焦点を当てたが、収容所外の生活にも関心を注いだ。シリーズにはある日記を一冊、丸ごと収めたわけではなく、日本占領下の西欧人の日常生活がはっきりしたイメージが得られるように、取捨選択が行われている。

選択に先立って、複数の日記からの情報をいかに明瞭な方法で組み合わせるにはどうしたらよいか、熟考され、長い議論が行われた。一見すると、それぞれの日記から部分を選んで、日付順に並べるのが最も妥当ではないかと思われた。しかしこのように並べると、日記の各々の部分が提供する収容所生活の独立した側面についての情報を全体の中から抽出する事が難しくなり、そのために情報が失われてしまう恐れがあると懸念された。また、我々は日記の部分を中心に細かく項目分けすることで、全体がさらに読み易いものになるではないかと考えた。さらに最終的には、シリーズには各収容所毎、独立した巻が設けられ、複数の日記が出版されるということがあり、我々は複数の日記からの情報を並べ、比較することができるような方法を見いだそうとした。

そこで結論として、日記を各々、収容所生活の重要な側面を表す項目に分ける方法が選ばれた。項目毎に日記の部分を日付順に並べ、時の経過がはっきりと分かるようにした。さらに、こうすることで、シリーズ内の複数の日記に見られる話題の発展、例えば医療状況を、互いに比較することができる。しかし実際、項目内容はそれぞれ相互関係にあり、分け難い。したがって日記の部分の多くは幾つもの項目に跨るものである。

編纂にあたっては日記原本を使用した。ただし、読み易くするために、文章は現代オランダ語に統一する方法が採られた。また、紙不足から日記の書き手があまり考慮しなかった句読点や段落を付け加えることにより、読み易さを促進した。略語は幾つかの例外を除いて通常語に戻した。読み易いようにするためか、あるいは説明のためか、いずれにしても原本に後から書

き加えられた文章は、すべてカギ括弧で括った。プライバシー尊重の観点から、文中、書き手を著しく傷つけるような文脈、あるいは犯罪的な行為をしたとなどの非難の文章に限り、その個人名を伏せるようにした。時には書き手自身が、ある状況の中では名前を伏せている場合もある。全体として、書き手の認識は個人的なものであり、彼らが置かれていた極端な状況に影響されているものであることを特記しておきたい。

使用した日記の著者およびその近親者からは、我々が彼らを捜し出せる限りにおいて、この日記プロジェクトに彼らの日記を使う許可を得ている。

序

1942年と1943年のジャワにおけるヨーロッパ人の抑留にあたり、日本人は少年と成年の区別を一般的に年齢17歳（中央ジャワでは18歳）においた。17歳未満の少年は、母親や姉妹たちと一緒に女性抑留所に収容された。17歳になると少年たちは男性抑留所に移された。1944年7月までは16歳以上の少年たちが間欠的に、女性抑留所から出されて男性抑留所へ送られた。

1944年7月以降は、抑留少年について日本軍の施策に変更が生じた。これは1943年11月7日の軍の規程に伴い、ジャワの民間人強制収容所が、日本軍の管理下に置かれた後に始まった進展の結果である。同日、「*軍抑留者取扱規程*」が現地の日本陸軍に通達され、その第8項に、10歳未満の者は子供と見なすこと、と書いてあった。¹ それにより1944年7月よりジャワでは、10歳およびそれ以上の少年は女性抑留所の母親から引き離された。その一部は、既設の男性抑留所へ移された。その他は新設の少年抑留所に入れられた。病気と高齢の男性たちも、これらの少年抑留所に入れられた。

1943年11月に公表された規程が、なぜ7ヶ月経ってやっと実行されたのか、理由は判らない。しかし、それは異例のことではない。ジャワにおける抑留所管理の日本陸軍への移行は、同様に1943年11月に発令されたのだが、実施されたのはやっと1944年4月1日になってからであった。施策の決定から実行まで、このように長い時間がかかったのは、おそらく日本軍政の構造によるものである。その上、異なる抑留所ごとの所長の恣意的な自立性が、ここに重要な影響を及ぼしていた可能性がある。

オランダの文献では、日本軍がなぜ10歳以上の少年たちを女性抑留所から引き離すという処置を取ったか、ということについて種々説明されている。最も考えられることは、女性抑留所での性的な問題と秩序の維持とが挙げられている。思春期にある少年たちにとっては、女性ばかりに囲まれることが気詰まりであり、逆に女性たちは肉体的に少年たちに魅せられるということが起こった。その上、母親によっては、これらの少年たちの手綱をしめることができなかった。² これらの問題は女性抑留所では確かに目撃されたが、それは主に14歳から上の少年たちの場合であった。H.L. ズヴィッツァーによると、説明はまず日本の風紀と習慣に求められるべきである。当時、日本の学校では十歳になってから成年に達するまで、男生徒と女生徒を区別した生活の指導をした。日本人が、何を以って子供と規定するか定義を下さなければならなかったとき、当然のことながら日本の基準である10歳を少年の境界とした。³

¹ H.L. Zwitter <ズヴィッツァー> 著、*Mannen van 10 jaar en ouder. De jongenskampen Bangkok + Kedoengdjati 1944-1945*、(発行：1995年 Franeker) 70。

² とりわけ D. van Velden <ファン・フェルデン> は、このことが日本軍の政策声明の理由であるとは言及していないが、これらの問題を指摘している。D. van Velden 著、*De Japanse burgerkampen* (発行：1985年 Franeker) 第4刷。

³ Zwitter <ズヴィッツァー>、75。

ジャワでは5ヶ所に少年抑留所が設置された。3ヶ所は中央ジャワに、2ヶ所は西部ジャワであった。1944年7月19日に西部ジャワのチマヒで、最初にバロス第6少年抑留所の使用が開始された。1944年8月末にはバタバに少年抑留所として、グローゴル抑留所が設置されたが、この抑留所は1944年11月末には早くも閉鎖された。中央ジャワでは1944年9月に、アンバラワでアンバラワ第8抑留所が、そしてスマランではバンコンが少年抑留所として機能し始めた。最後に1945年1月、少年抑留所として、さらにアンバラワにアンバラワ第7が開設された。1945年5月にアンバラワ第8が閉鎖された。少年と年配男性たちはアンバラワ第7へ移された。

本稿の表題は、バロス第6少年抑留所である。この序の中では、この抑留所のみならず他の少年抑留所における生活のいろいろな面についても注意を払う。

抑留所住人と抑留所の外観

チマヒはバンドンの西方、およそ15キロメートルの所にあり、戦前はジャワでの蘭印軍(KNIL、Koninklijk Nederlands Indisch Legerの略称)の駐屯地であった。いくつかの軍の建物が町の外観を決定づけていた。バロスとヴィルム通りの両地区は、大部分が下士官用のこじんまりした家から成っていた。これらの地区には日本軍の占領中、バロス第6抑留所が設置され、バロス第I(女性抑留所)またはバロス第II(少年抑留所)とも呼ばれた。⁴ 抑留所の敷地は、一部はバロス通り<Barosweg>、もう一部はバロス通りに直交するヴィルム通り<Willemstraat>(付図I参照)から成っていた。1942年12月に、チマヒとその周辺地区から来た女性と子供たち約1,200名が、バロス第6(バロス第I)に収容された。1944年7月17日に女性抑留所は閉鎖され、その際母親たちは13歳以上の息子たちを置き去りにしなければならなかった。これらの少年たちおよそ15名は、バロス第6少年抑留所(チマヒの地図参照)の最初の住人となった。

オランダの抑留所指導管理(次項参照)は到着後、そこに既に居た少年たちと共に、まずヴィルム通りに入居した。しかし、1944年8月3日に抑留所はバロス通りの家へ移転した。増加をたどる人数の抑留者たちを収容可能にするため、男性抑留所バロス第5から移送された1,000名の少年たちが到着した1944年10月15日即日に、ヴィルム通りはまた抑留所に加えられた。そして、その時から抑留所は「バロス側」と「ヴィルム通り」の二部分から構成されることになった。両者はバロス通りによって分けられていた。監視付の二ヶ所の門を通過して、互に行き来できた。つまりバロス側の抑留者から見るとヴィルム通り、逆にヴィルム通りの抑留者からはバロス側となる「向こう側」へ訪れるのに、しばしば正当な理由を言わなければならなかった。

⁴ ローマ数字による抑留所の表示は、D. van Velden <ファン・フェルデン>により、*De Japanse burgerkampen*で扱われている。

抑留所住人の増減は、付表Ⅱに示されている。この表によると、バロス第6少年抑留所には1944年11月から1945年5月まで、約1,800名の少年と男性が住んでいた。その後、抑留者数が減少した。1945年4月21日にヴィルム通りは、3ヶ所のチマヒ抑留所からの病人たちのために、中央病院として機能し始めた。その3ヶ所とは、チマヒ第4男性抑留所（抑留者10,000人）とバロス第5（バロス第Ⅲ、抑留者3,000人）および少年抑留所であった。それ以前は、陸軍病院が中央病院となっていたのだが、1945年4月、日本軍に明け渡さなければならなくなったのだ。ヴィルム通りに住んでいた少年たちは、バロス側へ移動した。1945年4月28日に、バロス側の住宅1番と2番の中に設備されていた病室はとりやめられた。病人はヴィルム通りに移され、さらに1945年6月4日には、バロス側にいた医師たち全員がそれに続いた。この移動により、バロス側の人口はおよそ1,100名までに増加した。この状況は日本降伏まで存続した。

前述したとおり、バロス第6の抑留者たちは、既存の下士官用の家に住まわされた。その大部分が、一棟二戸建てのこじんまりした家であった。それぞれの家には、小さな部屋が二つ<夫婦の寝室と子供部屋>と大きな部屋<リビング>が一つあり、台所と浴室が付いていた。もっとも台所は抑留者の住み場所としても使われた。物置がある場合にも住居となった。さらに、家々には電気と水道があった。住宅一軒に平均9名から10名が住んだ。

給水設備では時々かなり問題が起こった。また、遮光が完全であった場合でも、各家には電灯1個しか許されなかった。もっとも電球が不足していたので、どの家にも明かりがついた訳ではない。電気のある大きな利点は、ドンペラー<水につけて加熱する電熱器>が使えることであった。それはあらゆるものを煮たり、暖めたりすることができた創意にみちた道具であった。それは木片の表面に、わずかな間隔をおいて細い溝が彫られた物から出来ていた。これらの溝の中に二枚の小さなブリキ板を、滑るように差し込む。それぞれのブリキ板に電線の端子を取り付ける。そしてその全体を水の中に入れて、希所の温度まで上げる。よくショートを起こしたので、危険がない訳ではなかった。それでこのドンペラーを使用することは、早くも1944年10月には禁止された。しかし、禁止にはあまり効果がなく、禁止令は何度も出された。

家の裏手には小さな庭があり、いろいろな種類の野菜が配給食の補いとして栽培された。「畑」の作物はまず栽培者のものだった。ドンペラーまたは普通に薪、あるいはアラン〔炭〕で補いの食べ物をこしらえた。しかし、他の抑留所と同様、バロス第6でも木材の不足に苦労した。そして抑留所の周囲に立っていたゲデック〔竹で編まれた仕切り〕の所々が何回も「消失した」ので、1945年5月31日に火を燃やすことが禁止された。1945年6月からはこれらの畑からの「収穫」は、抑留所の炊事場に届けることになり抑留所全体のために調理された。

抑留所の衛生状態は、まずまず良好であった。1945年の初めから抑留者たちはクトゥブスックス、つまり南京虫にだんだんと悩まされるようになった。特に木製の寝台は、この厄介な害虫にとって理想的な温床となったのだ。

バロス第6の特異な建物は、戦前に騎兵のために建てられた蹄鉄工学校で、これは抑留所時代にはグダン〔倉庫〕および大工の仕事場として使われた。1945年6月初旬に蹄鉄工

学校はもとの機能に戻り、日本人により再び鍛冶場が開設され、多くの抑留者が働かされた。

組織

1944年7月17日にバロス第6から女性たちが出発したとき、若干数の抑留所指導者が数人の修道女と共に残った。それは、居残った少年たちと新しく入ってきた少年たちを暫くの間指導するためであった。この状況は1944年7月21日にチマヒ第4抑留所から、抑留所の指導という特定の命令を受けた数人の男性が、バロス第6に到着したために変わった。指名された抑留所リーダーは、G.A. スホートウル氏（1904－1983）で、この人は戦前バリ島の *Nederlandsche Handel Maatschappij N.V.*（NHM）〈ネーダーランツェ・ハンデル・マートスハッパイ（オランダ貿易会社）〉⁵ に勤務していた。彼の回想録から、日本軍はチマヒ第4のオランダ人の抑留所指導管理に対して、少年抑留所の運営に着手できる人々を指名するように、発令していたことが明らかである。⁶ その結果、スホートウル以外に、およそ9名の男性と18歳と19歳の少年20名が、1944年7月21日にチマヒ第4からバロス第6へ向かった。男性の中から、スホートウルの腹心ヤープ・モールナーアが管理運営の役割を受けた。ブラム・ナウタは炊事長になった。医師のヴィンスとパールトゥマンは、医療管理における責任を負った。8月初旬には、残留していた女性たちが、バロス第6からバンドンの女性抑留所へ向かった。

バロス第6少年抑留所の日本側の指導管理は、女性抑留所の警備指揮者であったクニモト ヨシオの手中にあった。警備指揮者に過ぎなかったのだが、クニモトはバロス第6で事実上、牛耳っていたので抑留所住人にとっては抑留所長でもあった。バロス第6抑留所の公式の責任者全員については、付表 III に記されている。1945年5月20日頃、クニモトはバロス第5抑留所へ異動させられた。バロス第6での彼の後任は、軍属のモリ トシユキであった。

バロス第6抑留所は幾つかの班に分けられ、それらが更に組に細分されていた。各組には責任者の組長がおり、普通は大人がなった。次に、それぞれの家には住宅主任がいた。この役割をしたのは、たいてい年長の少年であった。1945年4月以前は、バロス第6は四つの班に分かれて、第I班と第II班はバロス側に、第III班と第IV班はヴィルム通り沿いにあった。1944年10月15日から、ヴィルム通りが再び抑留所に加えられると第III班がD. クウティンヨーの指導のもとに最年少の少年たちの宿泊場所となった。この班は「少年班」とも呼ばれた。1945年4月に抑留所中央病院がヴィルム通りに設置されると、第III班と第IV班は合併してバロス側へ移され、それからは三つの班となった。

さてバロス第6には少年の人数と比べて、どの位の割合で男性がいたのだろうか？この抑留所における度々の移送のデーターからは、この質問に対するはっきりした解答は得られ

⁵ 1824年創立の輸出入会社は20世紀初頭、蘭領東インドにおける農業・工業企業の融資者として活動に専念していた。1882年に、NHMも銀行として業務活動を開始した。

⁶ *Memoires G.A. Schotel* 〈回想録スホートウル〉, 88。

ない。『チマヒのバロス第6少年抑留所、1944-1945』という本には、それについて次のように述べられている。「この少年抑留所における少年と成年との比率の概算は、1対2から8対1とずいぶん開きがある！しかし、全般的な印象として少年の方が大人よりずっと多かったので、少年と成年の比は6倍位だったと見積もるのが、妥当ではないか」。⁷ 1945年4月以降はこの比率は、当然バロス側に住む抑留者たちだけのものである。ヴィルム通りではこの時以降、比率はむしろ逆転した。それは、中央病院の患者の大部分と職員が、大人であったからである。

抑留所生活

食糧が、日記で圧倒的なテーマである。本稿の「食糧・物資」の項目が最も分量の多い項目となったばかりではなく、このテーマは他のすべての項目に織り込まれている。バロス第6での食糧配給はまとめて炊事され分配された。当初は、バロス側の第I班にたった一つの炊事場が設けられていただけだった。しかし、1944年12月20日にヴィルム通りの方でも、炊事場の使用が開始された。食事は家々がグループで炊事場から受け取り、その場でそれぞれの住人に分配された。日々のメニューは1945年半ばには、およそ次のようなものであった。⁸

- 8時 茶とアジアパップ<お粥>、約450cc、グラ ジャワ
 [赤シュロ糖] 付。
- 13時 茶（時々コーヒー）とパン。通常、ロバック [大根の一種] または
 セルンデン [おろして焼いたココナッツ] が少量。
- 17時 米（およそ260グラム、炊いたもの）と約150ccの野菜、
 わずかな分量の魚または肉。
- 21時 稀に、茶またはコーヒーの配給。

それ以外に、主に砂糖、グラ ジャワ [赤シュロ糖]、それに果物などが配給された。しかし、定まらない分量と異なる時間帯にであった。

⁷ D. van Engelenburg<エンゲルンブルフ>著、*Jongenskamp Baros 6, Tjimahi 1944-1945*, (発行：1989年 Amsterdam, 21)。

⁸ F.W. Weeda<ヴェィダ>の日記に基づき再現した。Amsterdam, Nederlands Instituut voor Oorlogsdocumentatie (NIOD), Indische Collectie (IC) <在アムステルダム、オランダ戦争資料研究所、蘭領東インド収集>nr. 082158。

抑留者たちはバロス側と同様ヴィルム通りでも、抑留所内にあるトーコー [売店] の「出店」で購入することにより、配給を補うことができた。繰り返し変更が実施されたため、トーコーにとって良い規則を見つけることは難しい、と抑留所指導管理が思ったことは日記の断片から分かる。一時は各々の抑留者がトーコーで当座預金のようなものを貰い、そこから注文品の費用がトーコー自身によって、残高から引き落とされていた。ある時は現金で払わされた。日本側からの諸々の命令に併せ、変更が並行して進んでいたことはあり得る。

抑留者たちは兵補 [日本軍における原住民の補助兵] または原住民と、ゲデック [竹で編まれた仕切り] で取引をすること、または食べ物を抑留所内に密かに持ち込むことによって、補足の食糧を得ることができた。このすべてが極度に禁止されていたにもかかわらず、大勢がこれを頼みの綱とした。発覚の際、日本人たちは厳しい処置を取った。何回かは見つかった者のみならず、抑留所の全住人がその結果を体験した。そこで、1945年1月10日にバロス第6のトーコーは、密輸者の露見により、ほぼ一ヶ月にわたり閉鎖された。1945年2月5日に、バロス側のトーコーで再び注文が許された。ヴィルム通りのトーコーは再開することはなかった。

短期間のうちに二回連続して適用された別の集会的罰則は、終日、抑留者向けの食物が停止されたことである。この罰則を日本人たちは、1945年5月29日と1945年6月4日に適用した。何回にも亘りオランダ側の抑留所運営管理は、抑留所の抑留者仲間に対してゲデック [竹で編まれた仕切り] で、あるいは雑役中に、取引を行わないように協力を求めた。これにより『大勢の病人、身体虚弱者と子供たちが、死の危険を冒す』からである。⁹ 懇請が希望した結果をもたらさなかったことは、1945年7月29日に指導管理から出された次の通達から明白である。『今なお、外部雑役で取引が行われている。警告も、独房監禁の罰も役立たないように見えるため、違反者は今後叩かれ、継続した場合には数日間、食事抜きで牢屋に閉じ込められる。本日、殴打により罰せられた...』¹⁰ そして、その後には四人の名前が続く。

バロス第6の抑留者たちに対して、食糧配給が一日停止された第一回目に、この処置は抑留所全体に適用された。従って、ヴィルム通りにある中央病院にいた患者たちに対してもそうであった。1945年6月4日に、患者たちはその罰則から除外された。病人たちのみならずバロス第6のすべての少年、定期的な健康診断を受けていた。異なるグループの抑留少年たちの体重は、定期的に記録され、種々の予防接種も実施された。バロス第6では、赤痢や浮腫の非常に多くの例が発生していたが、とりわけ40歳以上の男性抑留者たちのグループに、これらの病気の犠牲者が出た。ヴィルム通りに中央病院が開設された後、バロス第6での死亡件数が夥しく増加したことは不思議ではない。そこには大勢の高齢者が収容されたのである。日記で調べた限り、バロス第6抑留所では1945年4月以前に、9名が亡くなった。1945年4月から、ヴィルム通りの病人たちがバンドンへ移送された1945年9月9日の当日までに、死亡者数は1

⁹ NIOD, IC nr. 082150, 'Appèlboek van J.W. Donkers, kumicho Sectie I, blok II, Baros 6' <バロス第6、第II班、第I組、組長ドンカースによる点呼記録>、33。

¹⁰ 前記と同一の出典、56。

36名に達した。¹¹ 1945年7月から、抑留所での生活はバロス第6の少年たちの間にも犠牲者を出し始めた。1945年の7月と8月に20歳以下の少年4名が命を落とした。

抑留所指導管理は配給以外の、場合によってはトーコーで抑留所全体に購買された食糧を、抑留者つまり追加の食物を買う所持金が無かった者、あるいは殆ど持っていなかった者の間でも、可能な限り平等に分配するために最善を尽くした。1945年2月からは、茶色い隠元豆、テンペイ〔醗酵した大豆からできたクッキーの一種〕、ウビ〔サツマイモ〕そしてトウモロコシのために、いわゆる「定期購入券」が若干発行された。わずかな金額で数週間にわたり毎日、これらの食物の一つが一定量、煮たもので、または生のままで定期利用者に配給された。誰でもその特典を共に利用できるように、例えば極度に衰弱した者の例外を除いては、1人当たり定期購入券1枚しか発行されなかった。

トーコー<での購入>そして取引をすることの次に、雑役を担当することが補足の食糧を得るための第三の方法であった。第一に、雑役手当が支払われたためである。これは1日に15セントになり、そのうちの14セントが支払われ、1セントは医薬品購入のため抑留所運営管理により貯金された。特に1945年4月以降、手当は現金のほかに現物でも支給され、それは丸パン、いわゆる雑役パンが丸ごとまたはその一部分であった。第二に、いわゆる外部雑役の際に取引をすること、または単に「見つけた」食物を抑留所に内密に持ち込むことで、補足の食糧を得る機会があった。この点での特殊な外部雑役は、ルーウィガジャ農園(チマヒの地図参照)で働くことであった。この雑役は抑留者の間で、すこぶる人気があった。一般に知られていることとして、作業中に食事が配給され、質および量ともに良好であったためである。その上、労賃も支払われた。しかし、この雑役には殆ど年長の少年たちのみが適しており、重労働でもあった。

ルーウィガジャで労働することは任意の雑役で、抑留者たちが呼び集められた多くの義務づけられた雑役とは、異なっていた。強制された雑役は、抑留所の外部で塹壕を掘ること、チマヒにある他の抑留所から糧秣を受け取ること、そしてバトゥ・ジャジャルの周辺の軍陣地で働くことに至るまで種々異なっていた。抑留所内部では、畑で作業することと家屋を解体するというような雑役であった。決して予期できない日本人の抑留所長からの呼集に対して、可能な限り即刻、雑役係を満たすことができるように、待機体制が取られ始めた。そこで一定数の抑留者は、不測の雑役のために用意している必要があった。当初、待機組は普通に屋内やその近辺に留まることができたが、1945年1月からは「門戸待機」が導入された。つまり、指定された時間に、抑留所入り口にある班長事務所〔オランダ側の抑留所指導管理の事務所〕に居なければならなかった。

特殊な「雑役」は、チチャレンカ鉄道の雑役であった。すべてのチマヒ抑留所そしてバンドンからも、男性と少年たちがチチャレンカとマジラジャ間の鉄道敷設にあたり働かされた。鉄道雑役での特徴は、チマヒから来た抑留者たちは一日の作業の後、自分たちの抑留所へは

¹¹ NIOD, IC nr. 082202, H. van der Blom, Naamlijst overledenen in het Militair Hospitaal Tjimahi in de periode van maart 44 tot September 1945.<ファン・ダー・ブロム編纂、1944年3月から1945年9月までの期間における、チマヒの軍病院での死亡者名簿>。

戻って行かずに、現場で作業キャンプに収容されたことである。バロス第6では、1945年7月初旬、いわゆる S.S. <鉄道> 作業員から成るグループが選抜された (S.S.は Staatsspoorwegen <国有鉄道 (国鉄)> を意味し、一般的に使われた短縮形)。1945年8月10日になると、この一部がチチャレンカに向けて出発した。

抑留所外部で雑役をすることは、チマヒ第4とバロス第5など、他のチマヒ抑留所の抑留者と連絡を取る機会をしばしば提供した。バンドンまたはチマヒから来た少年たちは、これらの抑留所の何れか一ヶ所に入っている、知人または親戚が実際のところ常時いた。1944年12月に、お互いに異なるチマヒ抑留所にいた親族は一緒になり、同一の抑留所に住み始めることが認められた。

特に食糧を受け取る時間帯には多くの人々が出会い、知らせが交換された。大部分の食糧は山岳砲兵隊の兵舎へ、そして兵舎から集められた。そこには日本の占領中、食糧が貯蔵され、すべてのチマヒ抑留所を管轄する日本の抑留所事務所が設置されていた。別の情報源は、他の抑留所からの輸送で入ってきた抑留者、そして抑留所内で稀に出回る日本の宣伝紙である *グォイス・オブ・ニッポン (Voice of Nippon)* であった。バロス第6の囲いの外部で何が起こっていたか、わずかな知識しか持っていなかった多くの少年たちとは対照的に、抑留所指導管理に携わる若干の者は事情に良く通じていた。つまり、抑留所にはラジオがあった。元抑留所責任者であったスホートゥルは、1944年10月末か11月初旬頃から週に数夜、臨時に組み立てたラジオを極秘で聴いたことを、回想録の中で語っている。抑留者たちがすべてのニュースを聞き逃さないために、抑留所指導管理は『抑留所内の人々が、情報は新聞から来たものであるという印象を受けるように、時折、抑留所に内密に持ち込まれたインドネシアの新聞記事の翻訳に、元気づける情報を挿入すること』を決めた。¹²

チマヒ以外の抑留所に入っていた家族に関する情報については、バロス第6の男性と少年たちは、輸送されてきた抑留者たちが提供できた情報以外には、時々、抑留所に到着する郵便葉書に頼るしかなかった。日記の中で、バロス第6では葉書が7回到着した報告があるが、これは各々の抑留者が7回葉書を受け取った、ということではない。日記の筆者6名のうち、1人が母親から2回便りを受け取り、3名にはそれぞれ葉書が1枚届いた。ほかの2名の筆者たちは、個人的な知らせは全く受け取っていなかった。1944年7月から1945年8月までの期間に、バロス第6の抑留者たちは、自分たちの葉書を4回発送する機会があった。その内容に関して、諸々の規則に縛られた。

最後に、バロス第6での余暇の使い方について、少しふれておこう。雑役が非番の日には衣類の洗濯や清掃など、あまり面白くない雑用のほかに、長時間の睡眠、読書や勉強に費やした。1944年9月11日に、小規模な抑留所図書館が開設され、そこからは書物の貸し出しが可能であった。バロス第6では当初から授業も行われた。男性だけではなく年長の少年たちも、少人数グループの生徒を教えることに専念した。抑留期間中、何回も受験した。

¹² Memoires Schotel <回想録スホートゥル>, 91。

恐らく教育をすることは、抑留所内では実際のところ公式には禁止されていたが、それは黙認され日本人から容認されていた。バロス第6での抑留所生活を回想して、元数学部長であったA.J. バウズは、次のように語っている。

個別の家に住むことによって、[...] 突然、姿を現す日本人に対して、絶え間なく用心する必要はなく、小グループでより静かに授業をすることができた。バロス第5でも、第6 [バロス第6] においても、我々の授業について、日本側の抑留所指導管理と面倒なことが無かったことは、認知されなければなりません。¹³

礼拝を実施することに関しても、日本人たちは同じ思いやりのある態度をとったに違いない。礼拝は殆ど毎週日曜日に、異なる場所で行われた。

ディック・バース・ベッキングと、ヤン・ヒルンの二人の少年は、バロス第6に到着した直後に、抑留所小新聞 *De Kamppest* <ドゥ・キャンプペスト>を編集し始めた。¹⁴ そこには、抑留所の厄介な出来事が諸々取り上げられていた。1部作られ、抑留者たちの間で回覧された。ドゥ・キャンプペストは7回発行された。そのうち6回は、1944年7月から1944年10月までの期間に出された。1944年10月15日に1,000名が抑留所に輸送されてきたとき、バロス第6での抑留者数はそれに伴い二倍以上になった。抑留所共同社会は急激に膨大したので、編集者の考えからその発行を中止した。しかし、その後の期間にドゥ・キャンプペストはもう一回発行をみた。これは1945年7月21日の、バロス第6開所一周年記念であった。

戦後

1945年8月22日に抑留所指導管理者のスホートルは、日本の降伏を正式に発表した。既に1945年8月20日から、抑留所では噂が広がっていた。その日、チチャレンカ作業員たちの一部が、戦争は終わった、という知らせを持って戻ってきたからである。また、警備指揮者のモリもその日、同じような言い回しによる発言をしていた。しかし、22日になって漸く確実性をもたらした。日本人たちが暫定的に引き続き抑留所の指導管理をすること、そして彼らの命令には普通に従わなければならない、と指示された。

1945年8月31日、女王誕生日の祝祭は、過去13ヶ月に亘り抑留所に良好な指導を与えたオランダの抑留所運営管理に、感謝する機会となった。特にスホートルは称賛された。彼は「少年班」の共同制作による回顧録を贈呈された。

抑留所から立ち去ったままにならないように、再三警告されていたにもかかわらず、

¹³ Van Engelenburg <ファン・エンゲルンブルフ>, 82.

¹⁴ NIOD, IC nr. 082011.

毎日、人々は家族を求めて離れて行った。1945年9月8日に、この問題に関して次の事柄が点呼の際に伝達された。

無断外出

すべての抑留者にとって重要な事柄として、今後さらに大きな混乱に陥らないため、抑留所指導管理の許可を得ずに、外出するつもりでいる者一人一人に、少なくとも行き先の住所だけは届けるように依頼する。¹⁵

その時点で、正規の組織構成は殆ど残っていなかった。抑留所住人の在、不在の全体的な把握は完全に無くなってしまった。元抑留者たちは外出することを知らせずに抑留所から立ち去り、一方ではそれと並行して家族を探す人々が抑留所に入ってきた。

1945年9月9日に、ヴィルム通りの病院にいた患者たちは、バンドンのユリアナ病院へ移送された。その間、ベルシャップ<蘭印独立運動(1945年10月-1949年)の初期混乱時>も開始した。バロス第6はいくらか離れた位置にあったことから、起こり得る国民派インドネシア人の襲撃に対し、抑留所を防衛することは困難であった。そのため1945年10月末、バロス第6にまだ残っていた人々を、チマヒの山岳砲兵隊の兵舎へ移すことが決定された。

少年抑留所

日本の占領期間中、ジャワに設置された他の少年抑留所での状況について、簡潔な概要が以下に記されている。西部ジャワに一ヶ所、そして中央ジャワに三ヶ所あった。次に、異なる少年抑留所における生活での注目すべき状況について、さらに詳しく記述されている。

いずれも中央ジャワにあった、いわゆるバンドンガンとクドウンジャティ作業キャンプでの状況については、扱われていない。これらのキャンプへは、中央ジャワの少年抑留所からの少年たちが移送された。バンドンガンでは(1944年9月-1945年8月)耕作が行われた。抑留所には、最高220名の抑留者が収容された。クドウンジャティ(1945年6月から8月まで)には木材伐採者キャンプがあった。ここへ連れて来られたおよそ200名の少年たちは、スマラン、アンバラワ、そしてバンジュビルの抑留所での継続的な木材不足の状態を、終わらせる必要があった。しかし、それはごく部分的にしか成果がなかった。

¹⁵ NIOD, IC nr. 082150, 68.

グローゴル抑留所（1944年8月29日－1944年11月25日）¹⁶

グローゴル女性抑留所は、バタビアの近郊にあった精神異常者のための元一時保護収容所内に開設され、1944年8月29日に明け渡された。11歳になった少年たちは、後に残らなければならなかった。その同日、チデン女性抑留所から少年と年配の男性たちがグローゴルに到着した。数日後、タンゲラン、クラマツト（いずれもバタビア）、そしてボイテンゾルグのクドングバダックの抑留所から、少年と年配の男性たちがそれに続いた。1944年9月12日にボイテンゾルグのコタ・パリス抑留所から輸送がさらに続く。グローゴルでの抑留者数は、その時点でおおよそ1,050名であった。1944年9月に抑留所の聖職者たちは、他の抑留所住人たちから隔離された。そして当時の抑留所責任者であったH.J. カーター牧師はクレイヴウルス氏と交代した。1944年11月25日および26日にグローゴル抑留所の人々は退去させられた。男性と少年たちはチマヒに移送され、そこでチマヒ第4男性抑留所とバロス第5、そしてバロス第6少年抑留所に分けられた。諸々の資料でさらに確認する限り、1944年9月から11月までの期間に、グローゴルでは18名が亡くなり、すべて高齢の男性であった。グローゴルでの状況についての資料は非常にわずかである。その上、この抑留所は少年抑留所として3ヶ月間、機能したにすぎない。これが、ここに続く記述の中でグローゴル抑留所の状況について、それ以上は殆んど注意が払われていない理由である。

アンバラワ第8抑留所（1944年9月16日－1945年5月17日）¹⁷

アンバラワ第8少年抑留所は1944年9月16日に、小さな町アンバラワにある以前のローマカトリック施設セント・ルイスに設置された。それ以前は、その場所は女性抑留所として役割を果たしていた。1944年11月末までは、抑留していた少年の人数は年配の男性たちのそれを上回った。チマヒとバンドンから輸送された706名の年配の男性と12名の少年が到着したその日、1944年11月25日から状況は逆転した。その時点での抑留所の住人総数は、約1,300名に達した。抑留所責任者はベルギー人のC.B.F. ルフージュであった。少年たちと年配の男性たち以外に、1944年9月末からアンバラワ第8には133名の修道女もおり、抑留所が順調に進行するように協力した。

1945年5月17日に抑留所は閉鎖された。抑留者たちの大部分は、アンバラワ第7抑留所へ移送された。1944年9月から1945年4月までの期間に、アンバラワ第8では、229名の年配の男性と3名の修道女が亡くなった。少年たちの間には犠牲者は出なかった。1

¹⁶ この抑留所に関する資料は、H.J.M. Joosten<ヨーストウン>、R.A. Salomons <サロモンス>及び A.J. Vergroesen<フェアフルゥスン>の日記から引用された。

¹⁷ この抑留所についての資料はその大部分が、Joop Al<ヨープ・アル>著、*Ambarawa, Bandoengan en de Belg Refuge. Mythe en werkelijkheid over twee Japanse kampen*（発行：1994年 Rotterdam）から引用された。

1945年4月26日に、抑留所で或る少年が確かに命を落とした。しかし、この少年はアンバラワ第7抑留所からの外部雑役中に気を失い、最寄りの抑留所であったアンバラワ第8に運ばれ、そこで息を引き取った。

アンバラワ第7抑留所（1945年1月5日－1945年8月）

アンバラワ第7は、アンバラワの不認可となった陸軍病院内に設けられた。1945年1月5日に、それは少年抑留所として設備された。アンバラワ第8と同様に、それ以前はアンバラワ第7にも女性と子供たちが収容されていた。指導するために暫定的に後に残った者少数を除き、女性たちは他の場所へ移された。残っていた人たちも退去した後、抑留所指導管理は、エンジニアのT. テルヘンヌの手中にあった。

アンバラワ第7でも、若干数の修道女たちが抑留所住人に加わった。閉鎖されたアンバラワ第8より、殆どすべての抑留者が到着した1945年5月に、アンバラワ第7の人口は倍増した。抑留者の総数は、それでおよそ1,800名に上り、少年と年配の男性たちはほぼ同等数に配分されていた。

D. ファン・フェルドウン¹⁸の資料によると、アンバラワ第7抑留所では、1945年の1月から8月までの期間に640名の方が亡くなった。日記に基づく、死亡者数は恐らくさらに多かった、と推測することができる。一日当たり7名から8名の死者が出たことが何回にも亘り報告され、1945年7月12日に或る筆者は『6ヶ月間に、ここではおよそ600名が亡くなった』と綴っている。¹⁹ 降伏までの残り1ヶ月半に、40名以上の人々が命を落とした、ということは信じるに値する。亡くなった方々の大多数は年配の男性であった。

バンコン抑留所（1944年9月16日－1945年8月）²⁰

元女性抑留所でもあったスマランのバンコン修道院は、1944年9月16日からオランダの抑留所指導管理としてE.A.J.P.F.T. ミュウラーを責任者とする少年抑留所として開設された。両方のアンバラワ抑留所とは対照的に、ここでは全抑留期間を通じ、絶えず少年の人数は年配の男性のそれを上回った。少年たちの人数は、およそ840名に定着していたにもかかわらず、この抑留所では年配男性の人数に顕著かつ劇的な減少が見られた。1945年1月5日に抑留所に収

¹⁸ Van Velden<ファン・フェルデン>, 537.

¹⁹ NIOD, Indische dagboekencollectie nr. 238, dagboek L. Wichers. <オランダ戦争資料研究所、蘭領東インド日記収集238、ヴィッハースの日記>。

²⁰ この抑留所に関する資料は、その大部分がH.L. Zwitzer<ズヴィッツァー>著、*Mannen van 10 jaar en ouder. De jongenskampen Bangkong + Kedoengdjati 1944-1945* から引用された。

容された年配の男性たち614名のうち、1945年8月末には284名が生存していたにすぎない。修道女たちも、この抑留所で若干の仕事をした。

抑留所指導管理

様々な抑留所における、ヨーロッパ人の抑留所指導管理に関する評価を見る際、すべての意見が戦後になって述べられたものである、ということが考慮されなければならない。アンバラワ第7抑留所の抑留所指導管理については、否定的な評価が述べられている。不正行為が横行したが、抑留所責任者テルヘンヌは、この問題に効果的に対処する裁量がなかった。

アンバラワ第8抑留所の指導管理に関しては、さらに多くの異なる見解がある。何れにしても、抑留所責任者ルフェージュの統率下で、厳しい指導管理が実施されたことは明白である。しかし、特に127名から成るグループの抑留者たちが、追加の食糧を受け取り配分したという行為があった事実には、やはり批判も出た。このグループは医療班の63名、炊事班の34名、その他の業務30名（恐らく抑留所指導管理自身）から成っていた。事実は確かに、アンバラワ第8での全般的な状況は、アンバラワ第7のそれよりも著しく良好であった、ということである。アル氏はアンバラワ第8を次のように記述している。

前述〔食糧状況について〕を読んだ後でさえ、人々が第8抑留所から受ける比較的穏健なイメージ — 少年たちの多くが後に残った — というイメージは少数の屈強な者を除き、最終的には殆ど全員が病人に属した年配男性たちの巡り合わせと、極めて対照的である。²¹

バンコン抑留所における抑留所指導管理に関する意見は、あまり喜ばしくなかった。抑留所内で頻繁に犯された盗みに対して、抑留所指導管理からはわずかな、あるいは全く何の対策も講じられなかった。バンコンでの約200名のいわゆる「指導的な人物」は、抑留所指導管理、炊事場勤務者、食糧配給担当者、そして修道女たちで編成され、二倍に盛り付けられた食事の分配を受けた。²² ここでは修道女の全グループに対して（役割に関係なく）追加の食糧が割り当てられた。これは未だ半数に及ばない修道女しか、追加の食糧を貰っていなかったアンバラワ第8での状況とは、対照的なものであった。確かに抑留者たちの所持金が日本人の命令により没収され、抑留所指導管理によって抑留所の金庫に預けられた上、すべての抑留者の間で均等に分配された。この資金でトーコーの品物が購入され、次に抑留所住人全体の間で同等の量に分けられた。

バロス第6での抑留所指導管理は、他の少年抑留所のそれと幾つかの点で異なってい

²¹ Al<アル>, 163.

²² Zwitter<ズヴィッツァー>, 163.

た。第一に、この抑留所には修道女は一人もいなかった。従って抑留所指導管理の中にも見られなかった。しかし、彼女たちの存在が、恐らく抑留所生活での宗教的な面をさらに強調したに違いないということ以外には、このことは抑留所の運営において、本質的な相違の原因とはならなかった。第二に、バロス第6の抑留所指導管理については、元抑留者からは、殆ど賛辞のみが話されるだけである。抑留所指導管理に関する不服は日記の中に確かに綴られてはいるが、非常に稀である。不満は特に、ナウタ氏の管理による炊事場から出された献立に関するものである。ドンカース氏が記録した *Appèlboek*〈点呼記録〉からは、抑留所の細部に至るまでの一切合切が手配され、「少年たち」は良く配慮された、ということが注意を引く。

一冊の日記の中では、抑留所指導管理に追加の食物が配給されたこと、が書かれている。1945年2月20日にドウ・マイヤーは「抑留所のおじさん」（筆者紹介参照）は毎日いわゆるパップビーツ、つまり分配後に残ったパップ〈お粥〉を彼と友人のために手に入れる。『彼は、組長の立場にあることで、それを毎日もらうことができる』と綴っている。²³ 従って、特配は抑留所指導管理の役職と確かに関連していた。それはバロス第6においても適用され、炊事場で役目がある者は常時、何かしら追加の食物が得られた。しかし、この特配は明らかに限度内に留まっていた。二倍の割り当ては、何れにしても確実にあり得なかった。

食物

異なる抑留所で配給された食物の分量を、列挙比較することは非常に難しいことである。それでもやはり食物は、理由なくして無視されてしまうことができないほど、抑留所での生活の重要な面である。

1994年のオランダの食物一覧表に基づき、熱帯地方の値に調整した一日に摂取すべき熱量（5の単位ごとに切り捨て）は、次のとおりである。

年齢	カロリー
10－13	2,140
13－16	2,520
16－19	2,850
19－22	2,760

1945年7月末のバロス第6での日記の断片を読むと、当時、抑留者たちは一日当たりおよそ

²³ 項目「抑留所の組織」日記の断片ドウ・マイヤー、1945年2月20日参照。

1,600カロリー相当の食物配給を貰った。²⁴ それと同時期にバンコン抑留所での献立は、1,324カロリーに値するものであった。²⁵ アンバラワ第8抑留所では1945年1月から抑留所が閉鎖された4月までの期間に、供給されたカロリーの平均値は1,409であった。これは25パーセントから50パーセント以上も異なる後退を意味する。アンバラワ第7とグローゴルについては、残念ながら、グラムまたはカロリーで表示された配給食物に関する手持ちの資料は無い。利用できる他の抑留所の情報は、配給された献立の栄養価をさらに明確にするためには、あまりにも制約される。

死亡

最後に、4ヶ所の少年抑留所における死亡について、若干述べる。下記の表から、グローゴルが絶対的に最少の死亡数であることが読み取れる。しかし、抑留所は3ヶ月のみ存在したにすぎない。その点を考慮した上で見ると、総数およそ1,000名に対し1ヶ月当たり、6名の年配男性が亡くなったことが分かる。グローゴルをこの先考慮に入れない場合、バロス第6は少年抑留所として、最も長期間にわたり機能した事実にもかかわらず、バロス第6抑留所での死亡例は、他の少年抑留所よりも遥かに低かった。この点における最も重要な原因は、この抑留所での年配の男性数が、他の抑留所との比較において相対的に少なかったことである。何れにしても、1945年4月までであった。かなり大勢の病気の年配男性が収容されたヴィルム通りが、中央病院として4月に使用開始されてから、死亡件数の増加が顕著に見え始めた。その上1945年5月には、未知数の病気の男性たちがヴィルム通りから、バタビアのシントウ・ヴィンセンツィユスとマーテル・ドロローサの両抑留所へ移送された。抑留所での少年グループの死亡例を調べると、差異は確かに小さくなるが、絶対数<死亡者数>も相対数<住人総数に対する死亡者数の割合>もバロス第6での少年の死亡数は最低（アンバラワ第8は含まれていないが、この抑留所は1945年5月1日に廃止された）であった。

バロス第6とその他の少年抑留所との区分に関する主な違いは、ヴィルム通りの中央病院が、現に1945年4月から正規にバロス抑留所の一部を構成したことである。しかし、実際にはほぼ完全に独立していたことである。少年たちは1945年5月6日より、バロス側からヴィルム通りへの訪問を認めてもらうために、抑留所指導管理からの特別な書面による承諾が必要であった。その上、各抑留者は1週間に2回のみヴィルム通りに行くことができた。これによりバロス側の少年と男性たちの、ヴィルム通り側との連絡は非常に制限され、例えばバンコンでの状況とはかなり異なっていた。そこでは少年たちが実行しなければならなかった雑役の一つに、いわゆる「死体運び」があった。亡くなった方の「棺」は、抑留所を通り抜けて進む葬列で、

²⁴ Van Engelenburg<ファン・エンゲルンブルフ>, 42

²⁵ Zwitzer<ズヴィッツァー>, 190

若干数の少年たちにより抑留所の裏口へ運ばれた。死者との対面は、したがって他の抑留所ではバロス第6よりも、さらに身近な存在であった。

月間の少年抑留所における死亡者数一覧

月	グローゴル 1944年 9月ー11 月		アンバラワ7* 1945年 1月ー8月			アンバラワ8 1944年9月ー 1945年4月			バンコン 1944年9月ー 1945年8月			パロス6 1944年7 月ー1945 年8月	
	男	少	男	少	修	男	少	修	男	少	修	男	少
1944													
7月													
8月													
9月	6							1	8	1			
10月	10					6			14				
11月	2					11		1	19				
12月						44		1	8				
1945													
1月						71			83				
2月						42			69				
3月			126			34			53	1	1	**9	
4月						21			34	4		8	
5月									25	2		16	
6月			474						25	1		24	
7月									25	2		31	2
8月			33	7					16	2		47	2
合計	18		633	7	?	229		3	379	13	1	140	4
抑留所毎 の合計	18		640			232			393			144	

男 年配男性

少 少年

修 修道女

*アンバラワ第7に関する資料は、日記からの抽出に基づいて定められた。数字は1945年1月から4月までの期間に126名が、4月から7月までは474名が死去したことを意味する。亡くなった少年たちの人数は、1945年1月から8月までの全期間の合計である。

**1944年7月から1945年3月までの期間に、パロス第6では合計9名が亡くなり、まず間違いなく全員が男性であった。

筆者²⁶

ファン・エングルンブルフ

ディック・ファン・エングルンブルフは1928年5月17日に、ボルネオのプルックチャオ、現在のカリマンタンに生まれる。父親、J. ファン・エングルンブルフは一等軍医、将校で何度も異動させられる。家族にはその間、娘マウトウが増え1941年12月にはアチェ（北スマトラ）に住む。しかし、この同じ月に父親はバンドンに送られる。家族全員が彼に従う。蘭印軍（KNIL）の降伏後、父親は俘虜となる。

母親そして妹と共に、ディックは1942年11月にバンドンにあるチハピット抑留

²⁶ この項に載せられた情報は日記からの抽出以外に、日記の筆者から個人的に、直接または書状により提供された資料によるものである。

所に収容される。1943年10月19日に、チハピット抑留所にいる1927年または1928年生まれのすべての少年たち（年長の少年たちは既に抑留所から退去させられた）は、抑留所を去らなければならない。ディックもそのうちの一人である少年グループは、チマヒにあるバロス第5男性抑留所へ移送される。約一年後、ディックはバロス第5からバロス第6へ向かう1,000名の少年たちの中に入っている。

チハピットから出発する日、母親と妹に別れを告げなければならないその時に、ディック（15歳）は日記をつけ始める。これについて、彼は1943年10月28日に次のように話している。

到着すると彼らは、僕の帳面と鉛筆を取り上げた。ナイフとはさみは、見つげなかった。いやな奴等だ P.B.O.たち [?]. [...] 見るとおり、僕は残ったもので工夫した。ほかには適当な物が無いのでモノポリ紙幣<ゲーム用の模造紙幣>が筆記用紙に代用になった。短くなった鉛筆をもらった...

バロス第5で、ディックはコンスタントウ・フォーフルサングと親しくなる。しかし、ディックがバロス第6へ出発する際、この少年は後に残る。バロス第6では、何人かの男性がディックの面倒をみる。しかし、寝食を共にする友だちは既におらず。家族を恋しく思う。父親の誕生日に彼は綴っている。『僕には普通の生活を想像することが、もう殆どできない。みんなと一緒にいること、おいしいものを食べ、普通に学校に行き、家の手伝いや、そのほかにも愉快なことをする』。「普通」に通学できないにも拘わらず、ディックは抑留所で可能な限り自己啓発に努める。かなり読書をし、とりわけオランダ語、フランス語、ラテン語そして代数学の授業を受ける。彼の向学心は大きく、それは日記に述べられた次ことから明らかになる。『1月26日。僕は日記を英語でつけることにする。なぜならば、その言葉で練習したいからだ』。これは、それでも長くは続かない。1944年2月1日には、早くも再度オランダ語に切り替えている。『この練習は、それにしても殆ど無駄なことだからだ』。

ディックの健康は傷つきやすい。短期または長期にわたり何回も、抑留所の病院に入れられた。終戦の発表は、ディックにとって実際の解放を意味するものではなかった、ということが1945年9月1日に、彼が最後の日記を締め括る文章から明白である。『それでも僕は、終わりを待ち焦がれる』。この「終わり」はその後1945年11月5日に来る。その日ディックは、バンドンからバタビアへ飛行機で運ばれる。そこではオーストラリアに航路を向ける帰国船『オランユ号』に乗船し、両親と妹に再会する。母親と妹はバタビアのチデン抑留所から退去した。福岡収容所の一つで働かされていた父親は、1945年10月に日本からバタビアに到着した。

フックス

ヤン・フックスは1924年10月21日メダン(スマトラ)に生まれる。フレイドウリック・フックスとグウルリィ・マイクン・ペーターズの長子である。父親は *Nederlandsche Handel Maatschappij N.V. (NHM)* <ネーダーランツェ・ハンデル・マートスハパイ(オランダ貿易会社)>に勤務。1926年に妹イングウボアフが、そして1930年に弟ペーターの誕生で一家族が完全と成る。何回にもわたる転勤の結果、家族は1930年代に結局バタビアに落ち着く。

1930年代の後半、フックス夫人は遺産を受ける。これでプンチャク(西部ジャワの山麓)に土地を購入し家を建てさせる。これはその後、母親と子供たちのために週末と休暇の宿泊所となる。父親は仕事のため、たいていバタビアに残る。1942年3月に日本人たちがバタビアに侵攻し、あらゆる家々を没収する時、家族はプンチャクの家へ移転することに決める。しかし、父親フックスは *NHM* から銀行業務を横浜正金銀行に譲渡するため、バタビアへ戻るように直ぐ命令を受ける。

1942年内に父親フックスは抑留される。実際的な理由から、彼は抑留が始まる以前に妻と離婚する。そうすることで、フックス夫人は日本の民法に従い、今までのデンマーク国籍を再取得する。日本人たちがデンマークとは戦争中ではないと考慮することから、抑留の危険はこれにより縮小される。イングウボアフとペーターもデンマークの国籍を得る。ヤンだけは日本の法律に従うと、成年であるため同様ではない。(恐らくヤンが18歳になった月、1942年10月以降に離婚が成立した)。この結果、1943年6月末に、ヤン唯一人が抑留の呼び出し状を受ける。

1943年7月7日に、ヤンは母親、弟、そして妹に別れを告げ、ボイテンゾルグにあるクドンバダック男性抑留所に収容される。1944年2月にこの抑留所は明け渡され、抑留者たちはチマヒのチマヒ第4抑留所へ移送される。そこからヤンは1944年7月21日、スホートル氏と抑留仲間たち(序の「組織」参照)の直ぐ後を追って、バロス第6少年抑留所へ出発する。

バロス第6では、ヤン(19歳)は1944年8月20日に日記をつけ始める。数日前、雑役中に無人の家の中に、*Van Dorp's Nederlandsch-Indische zakalmanak* <ファン・ドルプ制作の蘭印ポケットカレンダー>を一冊見つけ、それを抑留所に持ち帰った。それに抑留所生活について書き留めていこうと決める。毎日、既に抑留された日数を記録する。1944年8月20日に、それは417である。各々の日記断片の上部に、その日何を食べたか記している。

抑留所で寝食を共にし、かつ彼の親友でもあるのはハンス・ヌウマンであるが、それ以外にも何人か、しばしば一緒に行動をし、互いに助け合う少年たちがいる。雑役をすることは、ヤンにとって予備の現金または食物を得るための重要な手段である。それ以外には — わずかながら — 戦前父親が勤務していた会社で、ヤンが「ファクトライ(商館)」と呼ぶ *NHM* から時々受け取る手当てが、ヤンの収入源を構成している。*NHM* の社長夫人がこの援助組織を創設した。

ヤンは、NHMの従業員でもありバロス第6に抑留されていたS.v.L.²⁷氏から少額を受け取る。

仕事以外に、ヤンは1945年1月から英語の授業をファン・ダァー・スホートゥ氏から受ける。これには極めて熱心であった。ファン・ダァー・スホートゥ氏は、日記の中では短縮して「先生」と呼ばれている。ヤンと「先生」の間には友情が芽生え、同氏が1945年5月にチマヒ第4抑留所に移送される時まで続く。

残りの家族についての知らせを、ヤンはチマヒ第4抑留所でしたようにバロス第6でも、雑役中に人々と話しをする機会があると分かると、他の抑留者たちと接触することで入手する。この方法により、父親はバンドンにある第15大隊に抑留されたこと、そして母親、弟、妹はまだ抑留所外に住んでいることを知る。1945年8月16日にヤンは綴っている。

明日また家にいるとしたら、僕の新しい木靴にひもをつけて完成させよう。木靴をはいて絶対に自由への道を歩くのだ。新しい日記帳を作る時期だ、あと3日でいっぱいになる。こんなに長くはなくてはいらないことを、幸いにも一年前にはまだ知らなかったけれど、もし知っていたらひどく癪に障ったことだろう。

1945年8月20日に、新しい日記帳で始める。その時点で、抑留所内にはあらゆる噂が広まる。しかし、それについての真実、つまり日本が降伏したことに関する確実性はない。その確実性は8月22日に、抑留所責任者スホートゥルの講話がもたらした。

即時に抑留所の食糧事情は改良される。ヤンは分量の多いかつ脂っこい食べ物で下痢を起こす。1945年9月1日に、父親を第15大隊で捜すため、バンドンへ向かって散歩することにする。父親は病院の空腹性浮腫科に運ばれたことが、明らかになる。

僕は頭を見て、父さんだと直ぐに分かった。まだ全く同じだった。ただ、殆どの奥歯や前歯が無くなって、口もとはひどく落ち窪んでいた。ももと脚は、ものすごく腫れていた。それには僕はひどく仰天した。父さんは僕が来たこと、そして僕が父さんと再会したことで、何と嬉しそうだったことか。最初の数分間は、二人とも感激のあまり言葉が出なかった。

ヤンはその瞬間に、バロス第6へは再び戻らないと決める。

1945年9月8日に父親とヤンは、母親とペーターの二日間の訪問に驚かされる。9月末に残りの家族が、プンチャクでの不穏な状況により、バンドンに到着しその後もずっと留まる。母親、イングウ（ボアフ）とペーターは、バンドンの救援施設へ臨時に収容される。1945年10月初旬、家族は町のフランス・ハルス通りに自分たちの住居を割り当てられる。し

²⁷ この名前は、日記の中では頭文字のみで表現されている。jhr. J.C.W. Strick van Linschoten（ヨルクヒョーア<爵位を持たない平貴族の称号>ストリック・ファン・リンスホートゥン）と意味される。

かし、ヤンはそこに長くは留まらない。オランダで就学するため1946年1月に、帰国船『ブルウムフォンティン号』の船上での雑役係として出発する。NHMから新たに提供された支援のおかげで、入学が認められたリセイアム<中等教育機関>があるヒルヴァルサムに宿泊場所を見つける。

ヨーストゥン

ハリィ・ヨハン・マリア・ヨーストゥン（1931年8月11日生まれ）の家族には5人の子供がおり、その3番目である。父親、J.H.L. ヨーストゥンはエンジニアで、西部ジャワ州の農業顧問である。1942年3月、家族はバタビアに住む。1942年6月、父親が最初にバタビアのアデック抑留所に収容される。1942年10月19日に、母親と子供たちへの呼び出しがつづく。町のチデン地区に収容される。

1944年8月に、家族はさらに互いに引き離される。チデンでは、1932年及びそれ以前に生まれた少年たちは、抑留所を去らなければならない、と知らされる。これはハリィ（13歳）が二人の兄たちヴィムとレオと共に、どこか他の場所へ移送されることを意味する。移動は1944年8月29日に行われ、兄弟3人はチデンからおよそ5キロメートル離れたグローゴル抑留所に結局着く。同日、ハリィは日記をつけ始める。

1944年11月にグローゴル抑留所は閉鎖される。二回の輸送で抑留者たちはチマヒへ移送される。第一番目の輸送の最終目的地はチマヒ第4抑留所、第二番目はバロス第6抑留所である。ヴィムは最初の輸送で一緒に行けなかったため、兄弟三人のうち一人だけバロス第6抑留所に到着する。チマヒの異なる抑留所に離れ離れにされた家族が再会するため、1944年12月に日本人が提供した機会のおかげで、ハリィとレオも1944年12月20日にバロス第6抑留所へ移動する。

三人の兄弟は、互いにたいへん良く助け合う。しかし、カトリックの信仰も彼らの生活において重要な役割を果たす。ハリィがバロス第6抑留所に入った最初の日に、日記に綴っている。『ここでは、一週間をとおしてふだんの日には聖ミサがない。[チマヒ第4とは異なり]日曜日にだけ聖ミサがある。それ以外のことは、ここではみんなふつうだ』。兄弟たちの健康は、バロス第6で著しく後退していく。三人とも、一度は抑留所の病院に運ばれ、レオは二回もある。ハリィの体重は1945年8月8日には31.6キログラムまでに減った。

日本の降伏後、状況は幸いにも早く改善される。父親はバンドンにある以前のチハピット抑留所に居ることが判る。1945年9月11日に、ヴィム、レオ、そしてハリィは父親を見舞い、バンドンへ転居することに決める。引っ越しは二日後に行われる。その日、ハリィは日記に書き留めている。『今、僕たちは無事にお父さんのそばにいる。そして僕の日記をやめる。僕たちが、お父さんとお母さんから離れていた時のことを話した』。1945年10月30日に、父親と息子たちはバタビアに向けて出発し、チデンで家族は再会する。

メィムリンク

戦前、メィムリンク一家はバンカ島に住む。父親、O.W. メィムリンクはエンジニアで、そこで採掘に従事する。オスカー（1927年4月11日生まれ）は長男で、続いてエリィとハンズがいる。日本の攻撃が接近する時、母親は子供たちを連れて「安全」なジャワへ避難し、父親は後に残る。しかし、ジャワでも日本軍による占領は免れない。

ジャワでは、メィムリンク家族はバンドンに着く。1943年4月2日に、チハピット地区で日本人により抑留される。チハピットでのオスカーの滞留は、1943年10月まで続く。10月18日の午後、彼は呼び出し状を受け、翌日、母親、妹、そして弟と別れ、抑留所を出発する用意ができていなければならない。1927年と1928年に生まれたすべての少年たちは、1943年10月19日にチマヒにあるバロス第5抑留所に移送される。

ディック・ファン・エングルンブルフそしてハリィ・ヨーストウンと同様、母親と別れなければならないオスカー（16歳）にとって、その日が日記をつけ始める動機となる。毎日ではないが、定期的には記している。バロス第5では、チハピットで既に存在していたヒルクウ・ファン・ダー・ハラストウ、そしてチャールス・ドゥ・ヴィルドゥとの友だち付き合いが盟友に発展する。チャールスの兄フレットウも盟友の一部をなすが、オスカーは彼との真の友情の絆はない。1943年10月26日に記している。

チハピットを去ったのは、もう一週間前のことだ。お母さん、エリィ、ハンシュそして[ガールフレンドの]エリィに最後に会ったのは一週間前だ。いつ、僕はまたみんなに会えるのかなあ？ 何年後に？ 時々、むしゃくしゃする。例えば、今日がそうだ。そうすると、単調で退屈なそれらすべてのことを、心からののしる。携帯用マットレス、ティカール[睡眠用マット]、それに灰色の薄暗いバラックなど、それらすべて。それらの中には、シャツとズボンまたはズボンだけをはいた男たち。ここでの生活の仕方もそんなふうにならぬ。

彼のガールフレンドがいなことの寂しさは、バロス第5でも引き続き、時々、日記の中で取り上げられているが、徐々に減りその反面、家族への懐かしさが募る。オスカーが得る家族について情報の大部は、その後の時期にチハピットからバロス第5（及びその後バロス第6）に到着する少年たちから受ける。

1944年10月14日に、既に長い間噂されている移動が、本当であることが明らかになる。翌日、およそ1,000名の少年たちは抑留所を去らなければならない。オスカーの盟友全員がこれに含まれる。1944年10月15日に少年グループは、抑留所バロス第6へ向けて出発し、そこでは盟友4人で一部屋を分ち合うことに成功する。

1945年5月に盟友は互いに分散する。ヒルクウは殆ど永続的に入院しているため、既にその以前から多少遠ざかっている。そして兄フレットウとの仲がよりうまくいくようにしよ

う、と考えるチャールズと良く相談し、オスカーは他の部屋に移ることにする。その時点から、ヤンとテオ・ハーリング、そしてグッツ・ナスツツのいる部屋で寝る。

オスカーは自由時間に好んで読書をし、既に読み終えた多くの書物の感想を、日記に書き留める。学習にも関心を寄せる。1945年7月4日に綴っている。

近ごろ「向学心」というようなものが出てきた。これは僕がいくつかの科目（例えば、電気学と物理学）を習えるという嬉しさや、正確には言えないけれども、良いニュース、話し合い、あるいは講演やら、そういったことからの刺激による影響から来ている。

1945年8月22日に、日本の降伏が正式に発表される。三日後、オスカーは最終日の日記を綴っている。

1945年9月に彼は、抑留所に両親の友人であるマルムロス夫人の訪問を受ける。彼女はスウェーデン国籍のおかげで、占領中は抑留されなかった。オスカーをバンドンにある彼女の家に連れて帰る。マルムロス夫人はその間、既に赤十字社で残りの家族に関する情報を得ている。オスカーの母親、弟と妹はスマランのランペルサリ抑留所に居ることが明らかになる。父親は1945年5月22日にスマトラの抑留所、恐らくはベララウ抑留所で亡くなった。オスカーが父親と最後に会ったのは、したがって4年前のことになる。

ドゥ・マイイヤー

ヨハン・テオドルス（ハン）・ドゥ・マイイヤー（1929年8月23日生まれ）は、コルネリス・テオドルス・ドゥ・マイイヤーとルウイズウ・エルナ・アドウリヌウ・ダウウエス・デッカーの一人っ子である。父親と母親の結婚は失敗する。母親はヨハン・ヘルハアトゥ・ヤンスンと再婚する。この結婚により1935年に娘エルスウ・マリア（エルス）が生まれる。戦争勃発の際、ヤンスン家族はバタビアに住む。しかし、直に母親と子供たちは、バンドンのベンガワン通りにある祖母ダウウエス・デッカー宅に移り住むために引越す。²⁸ ハンの義理の父親は俘虜となる。1942年11月に、ベンガワン通りはバンドンのチハピット抑留所の一部となり、残りの家族の抑留も現実となる。

1944年7月に、13歳と14歳（それより年上の少年たちは1943年10月、既に出発した）のすべての少年たちは、60歳以上の男性と共にチハピット抑留所を去らなければならない。彼らはチハピット抑留所の向かい側にあるブルムン抑留所に入れられる。両方の

²⁸ Erna Janssen-Douwes Dekker<エルナ・ヤンスン — ダウウエス・デッカー>の執筆。‘Grote en kleine zorgen in het Tjihapit-kamp’ <「チハピット抑留所における大小の心配ごと」> *Moesson* 29 (1984) 6-7, aldaar 6 に掲載。

抑留所間のわずかな距離は、ハン同様母親にとっても時々、手紙を内密にやり取りする機会を提供する。したがってお互いの禍福について、わずかながら最新情報を得る。1944年7月19日に秘密通信は終わりを遂げる。少年と年配の男性たちは、ブルウムン抑留所から移動しなければならないためである。目的地はチマヒのバロス第6抑留所である。母親とのすべての連絡が途絶えた後、ハン（14歳）は1944年8月1日に日記をつけ始める。

ハンには当初から抑留所の友だちがいる。まず、ヨアン・デン・ブウスターアトゥ。しかし、彼との関係は悪化する。そして内部で再び移動が実施される際、両方の少年は異なる家に住むようになり、交友関係は殆んど終わる。1944年11月から降伏まで、エドゥガー・ラウレンスは、ハンがすべての行動を共にし分かち合う友だちである。

抑留所でほかにもう一人ハンにとって重要な人物は、マックス・フラーザーである。フラーザー氏は家族の知人であり、1944年10月15日にバロス第5から、抑留者の輸送でバロス第6に到着する。彼はハンとエドゥガーの面倒を見、直ぐに彼らのマックス「おじさん」となる。「おじさん」があれこれ注意を与えることで、ハンは時には嫌気がするにもかかわらず、「おじさん」の親切な世話なしには、更にひどい状態になる筈であることを確かに自覚している。

マックスおじさんが1945年1月2日に組長の任務に就くとき、ハンとエドゥガーの二人は彼の当番〔伝達係〕となる。マックスおじさんは抑留所内で移転しなければならず、1945年2月16日にハンとエドゥガーは彼の所に住み込む。この日はハンにとって明らかにたいへん重要であり、彼は次のことを決定する。

数日すればまた実際に毎日のようにマーカンヘバットゥ〔豪華な食事〕になるだろう。確かにより良い時期へと向かっている。本当に終戦までもう長くはかからないことを、僕は知っているんだ。そうしてこの恐ろしく汚れたひどい抑留所から解放され、家にお父さん、お母さん、たぶんチデンにいるだろうおばあちゃん、そしてテオ、エルシュのところに行けるんだ。やっと、一緒になれるだろう。ここにて僕は日記をつけることを止めるんだ。僕らは新しい時代へと向かう。もう長くはかからない、別なもっと素晴らしい時代に。

彼はその決意をわずか数日しか維持しない。1945年2月20日に記している。『駄目だ、計画したことを続行できない。僕は日記なしではやって行けない。一度始めたことだから、やはりやり続けなくてはいけない...』

これを1945年8月29日まで実行する。その日、叔母のリンが抑留所の門に訪ねて来る。叔母は祖母、母と妹が、スマランからバンドンに向かう途中であること、そして彼女宅に住み始めることを話す。チハピットから彼女たちは1944年末に、中央ジャワに移送された。そこでは降伏の直前までムンティラン抑留所に、そして最後の週はバンジュビル抑留所の一つに収容された。

二日ほどしてハンはバロス第6抑留所を去り、バンドンのナイラントゥ通りの祖母宅

に行く。そこでは早速、母親、妹、そして祖母と再会する。暫くして、父親ヤンスンの消息についても明らかになる。彼はタイに居て、戦時中はビルマ－シアン鉄道で働かされていた。その間、再び完全に揃った家族は1947年にオランダに向けて出発する。

サロモンズ

ロブ・サロモンズ（1929年11月17日生まれ）は1942年の初め、両親と弟ペーターと共にソロに住む。父親フィリップ・サロモンズは教師であるが、その間に動員される。蘭印軍（KNIL）の降伏の際、父親サロモンズはバンドンで俘虜になる。残った家族はその間、ソロの自宅から逃げ去る。1942年3月6日、つまりソロに日本軍が到着する翌日、インドネシアの国民は市内で大規模な略奪行進を始めた。それにより特にヨーロッパ人地区が犠牲となった。ヨーロッパ人たちは家から追い出され、政府官吏の家々に集められた。数日後、日本軍により略奪行進は終結された。しかし、大勢のヨーロッパ人は完全に破壊された自分たちの家には、もはや帰ることはできなかった。

サロモンズの家族は、ソロのファン・デイヴンター学校に臨時に收容される。1942年6月に彼らはバタビアに移動し、そこでは父親サロモンズの兄とその妻の所に宿泊する。1943年6月に、抑留はもはや免れることができなくなり、サロモンズの家族はバタビアのクラマツ抑留所に結局着く。多分、彼らは1943年末にバタビアのグローゴル抑留所に移送される。1944年8月29日に、ロブはチデン抑留所に移される母親と弟に別れを告げなければならぬ。10歳から14歳までの少年たち、そして60歳以上の男性たちはグローゴルに残る。バタビアの他の抑留所からは、この年齢区分に該当するの抑留者たちはグローゴルに移される。グローゴルはその時点から、少年抑留所の格付けを受ける。1944年11月25日にグローゴルは閉鎖され、抑留者たちはチマヒの抑留所へ移送される。ロブはバロス第6抑留所に着く。ここで彼は、1944年12月14日に日記をつけ始める。

ロブ（15歳）は、1944年8月29日以降に起こったことの報告で、日記を始める。彼にとっても、母親との強制的な別離は抑留中、致命的な意味があったということがそこから明らかになる。日記はさらに、バロス第6における変化と出来事が明瞭に記述されている。物事についての個人的な見解、または家への思いをロブは書いていない。

1945年6月4日に、日記はその動機については語ることなく、かなり突然に終わる。ロブ・サロモンズ自身の、1999年7月20日付の説明は次の通りである。

私の「在庫目録」を記した、1945年6月9日付の一片の小さな紙があります。当時、私たちの所持品の一部、特に衣類を保存するためにヤップに届けなければならなかったことを、私は思い出します。限られた部分だけを、所持することが許されました。なぜでしょうか？ 私の日記の中に、6月4日が「空腹の日」で

あったこと、を読みました。抑留所の或る仲間が、密かに物を持ち込んだためでした。多分、ヤップは私たちにわずかな物品を所持させることで、繰り返しの機会を減らしたかったのです。私はその時「家宅捜査」を恐れ、筆記用具を隠してしまった、ということは考えられます。

日本の降伏後、ロプは母親が1945年5月28日にバタビアのシントウ・ヴィンセンツイユス病院で亡くなったことを聞く。1945年11月にロプはバタビアに向い、そこで弟のペーターに再会する。彼は1943年6月以前に宿泊していた先の家族の人々に迎えられた。父親サロモンは戦争で生き残ったこと、そしてスマトラに留まり日本人にパカンバルウ鉄道で使われていたこと、が判る。1946年2月にロプとペーターは、パレンバンの父親の許に向かう。数週間後、彼ら三人はバタビアに戻る。1946年5月につづいてオランダに帰国する。

ヴェイダ

F.W. (フレイク) ヴェイダは1925年4月15日に、スラバヤに生まれる。F.W. ヴェイダとN.A. クライスマンとの四番目の子供である。彼のあとに弟と妹も増える。1940年10月に父親ヴェイダは、腎臓の手術中に息を引きとる。その直後に家族はバンドンへ移転し、そこでフレイクの最年長の兄は就学する。

蘭印軍 (KNIL) の降伏後、1941年12月に動員された兄ヘンクは、俘虜となりチラチャブで投獄される。フレイクについては1942年11月20日に抑留が始まる。バンドンの 's Lands Opvoedingsgesticht (L.O.G.) <旧地方少年院にある抑留所>に入れられる。おそらく残りの家族も同時に、町にあるチハピット女性抑留所に収容される。1943年4月13日にフレイクは、チハピットから旧地方少年院へ移送される2歳下の弟ケイスと再会する。

旧地方少年院でフレイク (19歳) は、乾電池から取り出した棒状の木炭の先を石で尖らせ、小さなタバコの箱の内側に、たまにメモをつけ始める。1944年4月15日からは毎日、書き留める。旧地方少年院の抑留所はその間に閉鎖され、フレイクと弟はチマヒ第4抑留所に着く。1944年12月20日に兄たちはバロス第6抑留所に移送され、そこには日本の降伏後まで留まる。母親と姉妹は降伏の際、バタビアのチデン抑留所に留まる。彼女たちはフレイクそしてケイスと共に、バンドンへ向かうため迎えられる。1946年1月にオランダへ向け帰国の途につく。

フレイクの日記は、日本人から配給された部分と、自分が補足のため購入した毎日の食物の分量と種類を、個条書きにのみしたものである。この日記からの抽出は原稿として取り上げられなかったが、この序にあるバロス第6抑留所における、食糧状況に関する重要な情報源を構成している。

あとがき

バロス第6少年抑留所に関する原稿用の、日記断片の選択が完了した後、この抑留所に関する日記二冊が利用可能となった。これらの日記からの抽出を、既に選択されたものにさらに追加することは、もはや不可能であったにもかかわらず、これらの日記は重要な情報の補足源となっている。不確実である諸々の事柄は、これらの日記の助けにより明確にすることができた。それは H. Kalshoven<カルスホーヴン>と J. Coehoorn<クウホーン>の日記に関するものである。

ヘンク・カルスホーヴンは1944年9月12日に、チマヒ第4からバロス第6に着く。彼は父親と別れなければならないが、バロス第6では兄ヒェアトゥと再会する。1944年10月15日から1945年3月6日まで、日記にしばしば話の出るフックスの部屋に住む。ヨープ・クウホーンは1944年9月10日に、チハピット女性抑留所からバロス第6に到着する。バロス第6では、ドウ・マイイヤーも住んでいる家に収容される。お二人とも日本降伏後まで抑留所に留まる。

付表 II - バロス第6を往復する輸送

西暦による日付	出発地	移動先	人数	特記事項
44年7月17日			18	女性たちの出発後も残留
44年7月19日	ブルウムン抑留所		270	
44年7月21日	チマヒ第4		30	スホートウルほか
44年9月10日	チハピット		3	
44年9月12日	バロス第5 チマヒ第4		100	「蹄鉄工」*
44年10月15日	バロス第5		1,000	
44年11月26日	グローゴル、 タンゲラン		400	
44年12月5日		アンバラワ第8	12	健康の劣る少年
44年12月20日		バロス第5、 チマヒ第4	146	
44年12月20日	バロス第5、 チマヒ		146?	
45年2月26日	チデン		150	
45年3月1日	バトウ		6	
45年4月7日		第15大隊	200	
45年4月8日		チマヒ第4	400	
45年4月8日		バロス第5	100	
45年4月21日	陸軍病院		約75 0?	250名の職員と約500 名の患者
45年5月4日		チマヒ第4	200	
45年5月20日	チマヒ第4		100	
45年5月20日		チマヒ第4	100	
45年5月		マーテル・ドロロ ーサ、 シイントゥ・ヴィ ンセンツイユス	?	バンドンとチマヒの抑留所 から来ていた合計およそ1, 100名の病気の男性抑留 者が両抑留所に移送された。
45年7月3日		?	20	自動車工、電話、電信工
45年7月25日		[チチャレンカ]	14	医師2名と看護婦12名
45年8月10日		チチャレンカ	約85	グループAとB (Cは転出せず)
45年8月20日ー8 月21日	チチャレンカ		約85	

*これらは男性で、実際には予備管理員が必要であったのに、日本人は蹄鉄工を求めているという口実でバロス第6に移した。この移送のためなげ、日本人がこの理由をつけたのかは判らない。

付表 III - 1944年7月-1945年8月における抑留所管理の日本人氏名

チマヒ統括抑留所長 - チマヒ第4、パロス第5、パロス第6

氏名と等級	期間
タカギ セイゴ、大尉	1944年7月18日-1945年9月30日

チマヒ抑留所事務所の総務部長

氏名と等級	期間
エガミ ミノル、曹長	1944年2月8日-1945年9月30日

抑留所長

氏名と等級	国籍	期間
サガミ トラオ、 軍属*	日本	1944年7月-1944年12月
クニモト ヨシオ、 軍属	朝鮮	1945年1月-1945年5月
シモンヤ カズジ ²⁹ 曹長	日本	1945年5月-1945年8月
渾名ヤン・ドゥ・ビィツァー (たかり屋ヤン)		

日常の抑留所指導管理

氏名と等級	国籍	期間
クニモト ヨシオ、軍属	朝鮮	1944年7月-1945年1月
オーヤマ ミツオ、軍属	朝鮮	1945年1月-1945年5月
モリ トシユキ、 軍属	朝鮮	1945年5月-1945年8月

監視

50名の兵補

²⁹ 日記には種々異なる名前で登場し、シモミヤ、シモムともある。

移送・居住

ドウ・マイイアー

1944年8月2日

僕たちがどんなふうに住んでいるのか、昨日もう少し話すのを忘れた。僕たちは二人だけで、台所に住んでいる。自分たちで、そのように選んだのだ。なぜならば他の部屋では、5人が入れるだけの場所は無かったからだ。大きくても小さくても、どの部屋でも5人でなければならなかったからだ。この台所はそれでタイルを横に11、5枚と縦に13枚並べた大きさなので、優に4平方メートルということだ。そこには調理台が備え付けられているので、僕たちの持ち物をその上に置いた。その調理台があるのは、本当に幸運なことだ。なぜなら、ここには棚が無いので他の人たちは、がらくた物を床の上に置かなくてはならないからだ。その上、グダン [物置] の奥には僕たちがせしめた背もたれのない小さな腰かけがある。そして僕たちは二人で使う携帯用マットレスを持っている。たくさんの家財道具がある、とは思わないかい？ 水道の蛇口、トイレ、そして浴室の近くにいることも都合がいい。

ドウ・マイイアー

1944年8月3日

昨日、日記をつけていた時には未だ静かに、そして確かにヴィルム通り164番にいた。今、僕たちはバロス女性抑留所³⁰の中にある家にいる。昨日の晩、また移転しなければならないという通知を突然もらった。聞くところでは、僕たちは荷物（他の人たちのバラン [荷物]）を取り出すためにだけ行き、4日以内に再び戻って来なければならない。僕たちはまた二人だけで、狭い台所にいる。でも、これ [台所] は前よりずっと小さい。かろうじて入れる。ともかく居心地はいい。それで僕たちには、さらに小さな自転車置場 [物置] もある。それにしても、そこに通じているトイレから来る悪臭はひどすぎる。マットレスはまだ無いけれど、これからきつともらえる。

³⁰ バロス通りにあった元女性抑留所が当時、少年抑留所として開設された。

フックス

1944年8月21日

今日、僕たちは〔住宅〕3番から、4番の表側にある部屋へ移った。この家にはチマヒ〔第4〕³¹ から来た少年たちもいる。〔ヤン〕ヒルンは住宅責任者。ここはかなり騒々しいけれど、それでも3番より、むしろここにいる方がましだ。

ドゥ・マイイアー

1944年8月25日

今晚また電気がつくといいいのだけれど。さもなければ、いつまでも宿題が仕上がらない。本当のところ、できるかどうか分からない。なぜなら、一つのランプをこの家全体で使わなければならないし、ここには13人いる。でも、明日また通常移転があり、それで僕たちはもう少し広い所がもらえる、と言っている。年をとった人たちは明らかにもう来ない、とは残念。³²

ドゥ・マイイアー

1944年8月27日

今日、通常移転のため、僕たちは午後のうちに他の台所へ移った。つまり、この抑留所にある鍛冶場にさらに100人来るのだ。³³

フックス

1944年8月27日

再び移転させられる。どこか通りの下の方に住むことになる。明日、移る。〔ディック・デン〕バーアスとピットトゥ〔ザイルマーカー〕は別々に炊事班のいる場所に来る。僕たちが互いに離

³¹ チマヒの民間人男性抑留所のことで、第4大隊とも表わされる。戦前に第4と第9歩兵大隊が設営されていた二ヶ所のKNIL<蘭印軍>駐屯地に、日本軍によりチマヒ第4抑留所が設置された。第4と第9大隊は軍領地のほぼ中央に位置し、この近接地に陸軍病院と山岳砲兵隊の兵舎（日本の占領中は在庫品が貯蔵された）、又いわゆる「競馬場」があり戦前は閲兵が行なわれた。二ヶ所の大隊駐屯地では、1942年3月より1944年1月末まで俘虜たちが収容されていた。（M.P. Heijmans-van Bruggen<ハイマンス・ファン・ブルッフ>, Inleiding Tjimahi 4<チマヒ第4、序（NIOD 1998年）1）。

³² 項目「作業」、日記の断片 De Meyier <ドゥ・マイイアー>1944年8月4日参照。

³³ これらは男性で、実際には予備管理員が必要であったのに、日本人は蹄鉄工を求めるという口実でパロス第6に移した。この移送のためなぜ、日本人がこの理由をつけたのかは判らない。

れ離れになることは本当に残念だ。そして[ハンス]ヌウマンと僕は、誰と一緒に住むようになるのか知らない。

ドゥ・マイイアー

1944年8月28日

今朝、僕たちはその台所から再び出て、仕官用住宅の食堂へ移った。そこには僕たち3人が住んでいる。それで今は、とてもゆったりとしている。3人とは、ヨアン[デン・ブウスタアトゥ]、ヘンク・ティアリンク（喘息のある）そして僕。ヘンクはとても親切な少年で、幸いに騒々しくない。ヨアンには今ベッドがあり、僕は携帯用マットレスを持っている。それを初めは二人で使い合ったけれど、今は一人だけ。ヘンクは自分専用のマットレスを持っている。僕はその上うまく手に入れたトランクに本、帳面、コップ、瓶や他のがらくた物を詰め込んだ。ただ、それに鍵を掛けることはできない。

ドゥ・マイイアー

1944年8月29日

今日は新しい家での二日目で、[...] ところが僕たちの携帯用マットレスは、再び取り上げられてしまった。それらは、今バンドンで不足している子供用のマットレスだったからなのだ。僕たちにとっては本当に迷惑なことだ。この携帯用マットレスはそれでバンドンに送られる。知らせと一緒に渡すことができたらなあー。

ドゥ・マイイアー

1944年9月10日

読者諸君、以下、最新のニュースです。チハピットから3人の少年が到着。³⁴ 僕たちの家に今落ち着いた。僕たちが出発した時、彼らはまだ入院中だったから遅れて来たのだ。立派な自家用車で到着した。バラン [荷物] は後から送られるのだろう。今、僕たちはとにかく、またチハピットのことが少し分かる。

³⁴ バンドン郊外にある女性抑留所。

ドウ・マイイアー

1944年9月12日

今日、鍛冶場のために、その100人が到着した。50人はバロス[第5]、³⁵ そして50人は大抑留所[チマヒ第4]から。彼らの中には、ここに抑留している少年たちのお兄さんやお父さんが何人もいる。彼らはものすごく幸せだ。この家に住んでいる少年たちと、新入り3人の名前を次にあげるとー

ティンチュ・ファン・ダウヌン (住宅主任)

ヘンク・シイルフェルトウ (スマランから)

ヘンク・ティアリンク (上と同じ)

ノル・ファン・オルムン (赤毛)

メイナウトウ・クライシャー

ヨアン・デン・ブウスタアトウ

ルディ・バッカー (生意気)

フリッツ・スタム

ボプ・フルウンとベアトウ・レントウマ (引き離せない二人の友だち)

ヒューホー・フォーフル (本人は学識あると感じるが、なんとも退屈なやつ)

パウル・ケアストウンス (愛犬ボニィと一緒に)

エドゥガー・ラウレンス (今、入院中)

ジャックとヤン・レイリック (兄弟)

新入り3名ー

ヨーピィ・クウホーン

ヴィリィ・バイラーアトウ

ハンス・クリック

それにまだヘンク・ヴァイフンバッハ (組長) と僕自身。ティンチュ・ファン・ダウヌンは今ここにお兄さんがいる。そしてヨアンの友だちクウキィ・フェルストウラーアトウはここに今 (けさ到着した) お父さんがいる。

³⁵ バロス第5 (バロス III をも意味する) はユダヤ人及び社会的に地位のある人たち (中でも行政官、伝道師、牧師、警察高官やフリーメーソンの会員) が入れられた抑留所であった。彼らは日本人によって、チマヒ第4 から放逐された。彼らを、抑留所内に不穏をもたらす者、とみなしたためである。日本人たちは彼らを「ジャハツ」 [悪い分子、犯罪者] という用語で表わした。(Heijmans- Van Bruggen <ハイマンス-ファン・ブルッフウン,2>。

フックス

1944年9月12日

100人の男性が到着した。バロスから50人、そして僕たちの古い抑留所[チマヒ第4]から50人。全体的には、ごろつきで、その中にはボールボーイさえもいる。³⁶

ドウ・マイイアー

1944年9月17日

ところが、もっとひどいことは今、水不足なのだ。一つある蛇口からひどく細く流れるだけで、午後には全然出ない。

ドウ・マイイアー

1944年9月19日

今日、この部屋にもう一人少年が加わった。ヘンク・ニックスだ。またもう一人のヘンク。今、部屋には二人のヘンク[ティアリンクとニックス] がいる。

フックス

1944年10月9日

今日は運良く、水が一日中が出た。僕たちは[炊事用に]何も取りに行く必要はない。

³⁶ ここでは Pagi-Groep (Persaudaraan Asia Golongan Indonesia = Aziatische Broederschap, Indonesische Groep <「アジア同胞インドネシア」グループの構成員を意味し、P.H. van den Eeckhout<ファン・デン・エイクハウトウ>の指揮により、1943年4月に東部ジャワのケシリル強制収容所に設立された。このグループの会員はインドネシア支持派であり、インドネシア人として、日本軍の指揮する大東亜共栄圏の建設に参加を希望した。彼らは、白地に赤い丸(日の丸)のある記章をつけ、他の抑留者たちとは区別したことから、彼らは「ボールボーイ」という渾名をとった。(Heijmans-Van Bruggen<ハイマンス-ファン・ブルッフウン>, 5-6)。

ドウ・マイイアー

1944年10月10日

今日、ヨアン[デン・ブウスタトゥ]は病気。下痢のうえ彼も[ヘンク・ティアリンクと同じように喘息のため]病院へ運ばれた。この部屋は、もう僕たち二人きりになってしまった。ヘンク・ニックスと僕。今、ベッドと携帯用マットレスとの上に寝ている。素晴らしい、と思わないかい？ でも、二日もすれば、ここでは6人になる。新入りのうち10人はこの家で、そのうちの2人が僕たちの部屋に住まなければならないからだ。僕たちはそのために名前をあげた（そうすべきだったからだ）－ ヘンク・ニックスの弟ロブとヘンク・ティアリンクの友だち（僕にも弟がいたら、いいのになあ）。なぜならば、1931年生まれのチハピットからの少年たちであることが、今は確実だからなのだ。もしかすると彼らは明日にでも来る。

フククス

1944年10月12日

今日、抑留所全体、水が出なかった。炊事[班]はヴィルム通りで水を汲んだ[...]。明日、水浴や飲料水をどうしたらよいか分からない。

ドウ・マイイアー

1944年10月14日

さて、僕たちは再びヴィルム通りにいる。また今日は、つらい一日だった。今日、僕たちは3時にまた移転するのだ、という通知を昼の12時に突然もらった。それで、何もかも大急ぎで詰め込んだ。ところがこの3時というのは、あり余る時間だったことがはっきりした。その午後の暑い太陽の下で^{みじ}惨めにも重い物を引きずる、というそのことでのどが渴いた[...]。僕の小さな畑を置き去りにしなくてはならないとは、残念だ。僕の白菜（サウイ）は今ちょうどおいしそうになり始めたところだし、サラダ菜は葉っぱが出そろい、初めてのトマトはほとんど熟し、チャベ [唐辛子] 菜には、もういっぱい実がついた。でも、できる限り急いで取り集め、それでスープをこしらえた。もちろん、こっそりと。一番奥の家に僕たちは約一ヵ月半住んでいた。今は、ここ右側最後のこじんまりした家G188番にいて、表側の部屋にビィア・カサ（ポーア）、そしてがっかりルディ・バッカーも一緒。

ファン・エンゲルンブルフ [書いている時点では、まだバロス第5]

1944年10月14日

新しい献立だけでなく、新しい噂も、そうこうする間に本当のことになった。急にB2の住人³⁷と衰弱している人々は、少年抑留所[バロス第6]に移転しなければならない。1,000人は確実。それも明日にはもう!! 人々のこと(誰が行き、誰が行かないか)で大騒ぎだ。でも僕も一緒に行くだろう。もしかすると我が家のことを何か聞くかもしれない。コンスタントゥ[フォーフルサンク]は病気だけれど、どうしたらいいのかな? とにかく、まずは荷物を詰める。今夜、班責任者の事務所で決定するから、明日、最終的な名簿が出される。やっと一度、変化がある!

フックス

1944年10月14日

3時にすべての(年少の)少年たちは、ヴィルム通りに行くこと、と12時に通知が来た。1時には、20歳以下のすべての少年は一緒に行かなければならない、との知らせ。その後、数人[の少年たち]は、ここに留まるように指示された。僕は一緒に行くことになるだろう。3時に、年長の少年たちは明日になってから行く、という連絡。[それで]再び全部をトランクから取り出す。

フックス

1944年10月15日

今朝6時半に僕たちは起床、9時に[ヴィルム通りに]移転した。[ハンス]ヌウマンと[ヘンク]カルスホーヴンと一緒に奥の部屋にいる。僕たちの部屋と同居人[...]のことでは、ずいぶん運が良かった。まずは、<身の回り品を>きちんと配置した。今度も棚があり、[僕は]壁にいくつか釘を打ち込んだ。

ファン・エンゲルンブルフ

1944年10月15日

さて、コンスタントゥ[フォーフルサンク]は怒っている。彼は[ヴィルム通りに]移転させられる

³⁷ バロス第5「少年バラック」のバラック第14、第21と第22棟の住人を意味する。

少年たちの名簿から]削除された。別れる以外、どうしようもない。かなりてこずったあと、結局1,000人が門を出た。しかし、可能な限りたくさんの物を携行しなければならなかった。それで秩序のない集団の中の僕は、それでもバケツと携帯用マットレスを引きずりながら、新しい居場所へ行った。最初に或る抑留所を通り抜け、半分がそこに残った。僕たちは、年少の少年たちがいた他の抑留所の方へ通りを横断した。それにしても、バロス[第5]とは何と違うことか！ 女の人たちが去ってしまった普通の家。年少の少年たちは、7月19日にチハピットから別の抑留所に着き、昨日ようやくここに来たのだ。ここには2ヶ月くらい前に、バロスから去って行った鍛冶工たちもいた。少年たちは、もちろんニュースを話してくれる。ヴィリィ・アイスマとヘンキィ・フェイヌマもいる。ハンス v.d. ハイドゥンは第15[大隊]³⁸ にいることが判る。僕は [A.J.]バウズウ氏、ヴィプ・クウホーン、ヨアリツマ氏、そしてディルク・ノーアドウフラーフがいる部屋を見つけるまで、家から家へと歩いた。その家の残りの住人はルーウィガジャ作業員で、³⁹ 彼らにはまず会うことはない。ここでは住む場所に関しては、かなり普通の生活のように見えるけれど、食事 [について] は駄目だ！

メィムリンク [バロス第5抑留所より転出]

1944年10月18日

日曜日、[10月]15日に元の女性抑留所チマヒ[バロス第6]へ移動した。そのことを土曜日の午後、パップが出た後で聞いた。これを予想する噂が、もう前からしばしばあったけれど、それにしても思いがけないことだった。ヒルクウ[ファン・ダー・ハーストゥ]と僕が行き、チャールス[ドゥ・ヴィルドゥ]とフレットゥ[チャールスの兄]は残るだろう、と思っていた。なぜならば一週間ほど前に、医師が病気の少年全員の名簿を作ったからなのだ。(僕は心臓肥大のことを話した)。チャールスとフレットゥは健康だった。医者はその時、僕たちが母親のもとに帰る可能性が少しある、と言い足した！！

さて、その午後のお話に戻ると、僕たちはがらくた物を少し集め始めた。その午後、オランダの地理について口頭試験があるはずだった。それももちろん行われなかった。その日、僕たちは待機⁴⁰ させられた。それで山岳砲兵隊⁴¹ から女性/少年抑留所へ竹材を輸送するために、いくらか遅くなって整列した。それで僕たちは、抑留所の近所を少し見せてもらった。

家に着くとフレットゥと僕だけが[移転すれば]よいのだ、と聞いた。まずいことになっ

³⁸ 1942年3月から、Tjikoedahpateuh (Bandoeng-Noord) <チクダパトユウ (バンドン北部) > 地区にある蘭印軍の第15歩兵大隊の駐屯地に、日本軍により俘虜収容所が設置された。1944年初めから、この収容所は男性と少年のための民間人抑留所として機能した。(R.P.G.A. Voskuil 編纂, *Bandoeng. Beeld van een stad*, (発行: 1996年 Purmerend 68, 80)。

³⁹ 抑留所外部にあるルーウィガジャ農園で雑役をする抑留者たち。

⁴⁰ 待機させられるとは、つまり不測の雑役が生じた場合に即刻、作業を開始できるように若干数の抑留者は用意していなければならなかった。項目「作業」も参照。

⁴¹ すべてのチマヒ抑留所を統括する日本の抑留所事務所から、食糧在庫が配給された。

た。ヒルクウとチャールスは、それで後に残るのだろう。その後、チャールスも一緒に行かなければならない、と正式に「知らせが」来た。兄弟を別れ別れにはしたくなかった。そして幸運にも、ヒルクウも一緒に行かなければならない、と夕方通知が届いた。トーコー〈商店〉からお土産として棒状の石鹼1本、お砂糖2キログラムと、100グラムのタバコをもらった。夕方、僕はタッシュウ[エンジニア、W. J. H.]さんに別れの挨拶をした。飛びぬけて親切だった。もし僕が何かの都合で、直接家に帰ることができないような場合のために、小さな紙切れにもう彼の「外部」の住所を記してあった。彼の乏しい所持金から、1ギルダーを僕の手握らせたのだ。またわずかなものを売ったところだ、と彼は話した。部厚いクウェイ チナ [中国のクッキー] 二つおごってくれた。それからまだ短い時間おしゃべりした。この後、さらに家の方へわずかな距離送ってくれた。翌朝、彼も野原に出ていた。タッシュウさんは僕にとって、父親のような愛情を抱かせた。いつも、とても思いやりがあった。技術のことなどについて、僕たちはさらに素晴らしい話しをすることができただろうに。

日曜日の朝、トウモロコシのポップが出た。パンは午後新しい抑留所でもらえるはずだった。夕方、ポップをもらった。病院の前はものすごく混雑していた。一人一人、トランクと携帯用マットレスを前の方へ苦労して引きずった。鉛のように重たい！ 僕のそのトランクの中に、15キログラムのお砂糖が詰まっていた。僕たちのバラックにいる殆どすべての少年たちが一緒に行った。ヘアリィ・アッカーアスダイク、プロウニィ・アルプス、ルック・ヴォーアトゥマンたちは後に残った。僕たちがそこでそんなふう立っていた時、まず初めに名前が呼ばれた。それから出発[できた]。[バラック]第21、第22、と第14棟の少年たちが先頭。可能な限りバラン [身の回り品] を携行しなければならなかった。なぜなら、荷物を置き去りにしなければならぬ、ということがあるかも知れなかったからだ。輸送手段は非常にわずかしかなかった。すべてが^{おど}脅しなのだ！ いずれにしても重たいリュックサック、手荷物、バケツ、時には携帯用マットレスとトランクも苦労して担いだ。全くひどい旅だった。規律なんか、あったものではない。誰もが自分たちの荷物を無くさないように、気をつけて歩いた。

僕たちはまず、台所もある大きな抑留所[バロス側]に着いた。そこで組に分けられた。それから組長に、小さい抑留所、別の言い方をすれば少年抑留所[ヴィルム通り]へ連れて来られた。ここでさらにいくつかの家に分けられた。僕たちの所ヴィルム通りの住宅66番では、15名で一つの家の半分をもらった。とにかく引き離されないように、おたがいに気づかいあっていた。うわあ、やったあ。僕たち4人で一部屋をもらえたのだ。全然良くはないし、気に入らなかった。でも後になって、仕方なく我慢するようになった。前側の部屋には年をとった男の方二人、それに加えてルーウィガジャ作業員が[住んで]いる。前側の他の部屋には住宅主任、ヴィトゥボルス・フューフン氏が二人の息子のほかにも何人かと一緒に住んでいる。僕たちの隣の寝室にはファン・フェイン氏、彼の息子、そしてディック・シュフラーがいる。食堂に僕たちは住んでいる。そのうえ最初の日、僕たちはトイレだけは使えたのだ。浴室、台所、そしてグダン [物置] は家具で満杯だった。そしてその回りはゲデック [竹で編まれた仕切り] で囲まれていた。二日目に僕たちはそこを貫いて壊し、浴室を空にした。ここに「価値ある」物を大量に見つけた。

裏にある井戸は、脚立きやたつや小さな手ぬぐい掛けでいっぱい詰まっていた。その脚立の下に、チャールズと僕はアラン [炭] の入った大きな箱を見つけた。後で使おうと思って、それを内緒にしておいた。他の人たちはそのことは特に気に掛けていなかった。その炭を、この前側の少年たちが [持ち去ってしまい]、大きな箱はある晩、跡形もなく消えてしまった。物置などの中にある家具の間に、まだ使える物があるかどうか数回探しにも行った。あるとあらゆる物を見つけた。宗教の本とパンフレット、衣類、シガレットケース、紙など。折たたみ式の小テーブルを手に入れた。そして小さな手ぬぐい掛けも。本当はしてはならないのだ。

メイムリンク

1944年10月20日

僕たちの部屋に、今度ラィティンクという名前のルーウィガジャ作業員が加わった。表側の部屋は空にされた。僕たちの家全体でたった一つしかないランプが、そこに下げられたからなのだ。今ここは皆が共同で使う部屋になった。この前側にいる二人の男の方たちは、ファン・フェイン氏の所に来た。

フックス

1944年10月23日

ああ、ひどい。トイレ、そして台所の蛇口が詰まった。今、僕たちは<以前は>使用人専用であった便所を使い、[僕たちは] 浴室で皿を洗う [しかない]。

ドウ・マイイアー

1944年10月25日

今日は多くの人たちにとって、また大がかりな移転日となった。ここにいる子供たちの父親でも教師でもないすべての大人は、向こう側[パロス側]に移された。今朝、僕は「J.P.」ハルラアトウ氏を手伝った。[...]まだ向こう側にいた父親たちは、今こちら側へ来てよかった。例えば[P.M.]ケアストゥンス氏[パウル・ケアストゥンスの父親]などのように。

メイムリンク

1944年10月26日

幸運なことに、ここではまだ蛇口から水が出る。炊事[班]でさえ、ドラムを洗いにここまでやって来る。

ファン・エングルンブルフ

1944年11月11日

僕たちは今、浴室の不足からトイレで水浴している！

ドウ・マイイアー

1944年11月14日

深刻な水不足！ 僕たちとこの隣だけが、両方の抑留所の中で唯一水が出る家々なのだ。災難だ！ 今ではみんなが僕たちのところに汲みに来る。時々、水汲みの人々でひどく長い列になる。僕たち自身にも、もう水はほとんど無い。それでも、少なくとも蛇口から水が出ることでは、僕たちは今でも幸運だ。水を汲むまでとても長い時間待たなければならぬけれど、幸いに苦勞して担がなくてすむ。

ドウ・マイイアー

1944年11月17日

今日、また移転した。今度はこじんまりした家59番の[レインダートゥ]ステイハーフックの部屋に、ハンス・クリック、ヴィリィ[バイラーアトゥ]、そしてエドゥガー[ラウレンス]と一緒にいる。今ようやく幸運にも、僕がそう希望していたように、気に入るルームメイトに巡り合えた。僕たちの家は今、^{はしか}麻疹の患者のためだけになった。今、僕はマックス[フラーザー]⁴² おじさんからも、さらに近い所に住んでいる。

⁴² 或る男性たちはいくらかの少年たちに同情し、彼らにとって「抑留所のおとうさん」または「抑留所のおじさん」というようなものになった。ドウ・マイイアーはマックス・フラーザー氏の人柄に、そのような抑留所のおじさんというものを見出した。彼はドウ・マイイアー一家の知人で、1944年10月15日にバロス第5からの輸送でバロス第6に到着した。

フックス

1944年11月23日

多分、再び移転させられる。近いうちに400名の新人が来る。聞くところ、バタビアからの少年たちだ。それに際し、抑留所は大いに混乱するだろう。少年たちは既に移転し終わり、僕たちは恐らく明日行く。畜生、めちゃくちゃだ。4ヶ月のうちに、これでもう6回目だ。全部合わせると、既に12回も移動し、それも過去17ヶ月のうちに。彼ら<日本人>は、僕たちを望むがままにするけれど、僕たちは何もお返しをしない。なぜならば、僕たちにはそれができないからなのだ。

ドゥ・マイイアー

1944年11月23日

今日、また移らなければならなかった。僕たちが前にいた家の隣にあるこじんまりした家に今いる。また表側の部屋。見取図Iと同じ。[1944年]7月19日から8月2日まで最初に住んだ、ここの筋向こうのこじんまりした家の見取図とも同じ。

フックス

1944年11月24日

僕たちは幸いにも移転する必要はない。確かに、誰か追加で来る。ヘンク[カルスホーヴン]が出て表側の部屋へ移り、ハンス[ヌウマン]と僕は今ここで、両方のアムスン<兄弟>[彼が部屋を分かち合うスリナムの少年二人]と一緒にいる。彼らとはうまくやっていると僕は思う。その間に向こう側[パロス側]の年配の人たち(400名)が、こちらへ来た。そして今度は新人が、火曜日に向こう側に住み始める。幸いにもウビ[サツマイモ]は確保した。しかし、ヘンクは他の部屋にランプがついていた、という唯それだけのことから、ひどいやり方で僕らを置き去りにしたのだ。

ドゥ・マイイアー

1944年11月24日

今日は再び大移動の日だった。すべてのルーウィガジャ作業員は、この抑留所から向こう側[パロス側]へ行かされた。そして向こう側からはかなり大勢がこちらへ来た。主に50歳以上の人

たち。[G.D.]ハウウェン氏と[D.D.]ジュムレットゥ氏は今もこちら側にいる。ハンス・クリックは今、向こう側の病院に運ばれた。この隣にある^{はしか}麻疹の人たち用の家は再び空けられ、早くも少年たちが住んでいる。明日400人が来るけれど、バンドンからの少年たちではない。彼らはバタビアから来るのだ。僕たちは今この瞬間、この部屋に4人一緒にいる。僕たち3人と、不運にもルディ・バッカー。クリックが戻ってきたら5人で寝ることになる。

ファン・エングルンブルフ

1944年11月24日

長い間に確かに何かが起こった。まず、僕たちは時々パン五分の一ではなく三分の一をもらう。そして本当に400人が追加で来るのだけれど、外部勤務者や雑役係だけなのだ。そして他の抑留所には、多分[11月]28日だ。そうなったとすると、こちら側[ヴィルム通り]は、そういわれるように静かな抑留所になるだろう。次に、お互いに相違する諸々の移転命令 [...]。最後に、僕は扉一つ先の6人いる部屋へ移った。パウズゥ父子、エングルンブルフトゥ父子、そして[ディルク]ノーアドゥフラーフ。確かに前より静かではあるけれど、明かりがない。その上、食事を取ってくるための僕のバケツは、だまし取られてしまったのだ。引越しすることで人々を互いに振り分け、この家はさらに過密状態にある。要するに31人のところ47人いる。仕事を続けることを希望し、ここには弟などがいないすべてのルーウィガジャ作業員は、向こう側に移された。それとは逆に幾らかの年配の人たち、中でもファン・ラインとハルムスがこちらに来た。すべてがかなり順調に進んだ。僕たちは今度、専用の台所をもらう。

フックス

1944年11月25日

ハンス[ヌウマン]と僕は、やっぱり [ヘンク]カルスホーヴンと組長[ハンス]ヤンスンがいる表側の部屋に移った。ここは居心地が良く、ゆったりしている。一人当たりタイル6枚分。

サロモンズ [グローゴル⁴³ から転出]

1944年11月26日

朝早く雨が降っていた。僕たちは玄関と台所の前に整列させられた。僕はこの組だった。まずト

⁴³ バタビア近郊の、かつて精神病院であった所に開設された抑留所。

トラックが着いた。それには人がぎっしり詰め込まれた。それからバスが来た。僕が最初に乗り込んだ。これもいっばいに押し込まれ、走り出した。アングケ[バタビアにある駅]で下ろされた。それからバスとトラックは、他の人たちを連れて来るために戻って行った。全員が駅にそろってから、さらに1時半頃まで待たなくてはならなかった。装甲列車が入って来て、僕たちはそれに乗せられた。僕はうれしかった。なぜならば僕たちのグループは、一番後ろのクーペがある唯一の車両をもらえたからなのだ。ヤン・ワルトウマン、クリス v.d. ベルフ、そしてアルバートウ v.d. カーイと一緒に座った。パンを少し食べ始め、それからこっそりと小窓を開けた。それはしてはならなかったし、僕たちはこの車両にいたN[ニップ]<日本人>に用心したほうがよかった。チデン⁴⁴ に沿って走っていたとき、僕たちみんなは<窓越しに外を>眺めはじめた。<他の車両から顔を出していた>幾人かは見覚えがあった。ところが町の郊外に出ると小窓はますます開けられ、カーブした所でNが後ろを振り向き、それを見られてしまった。彼は後ろの方にやって来て、小窓を開けることを禁止した。Nがしばらく姿を消していたとき、同じ車両にいた兵補⁴⁵ の所でおしゃべりをはじめた。時々、パンを少し食べた。やっと4時頃チマヒに到着し、汽車から下ろされた。僕たちは15分歩かなければならなかった。そして新しい抑留所にたどり着いた。こじんまりした家々が並ぶ道。昔は兵隊の住宅だった。3部屋<普通は居間、夫婦用寝室と子供部屋>あり、それに台所、浴室とトイレ。僕たちの家には9名いた。僕たちは床の上に寝た。

フウクンス

1944年11月26日

昨夜7時頃、バタビアからその人たちが到着した。9歳から20歳までの少年たちと年配の人たちも一緒にいる。その中に知り合いがいるかどうか気になる。年を取った人たちはここから向こう側[パロス側]へ、きっと再び戻らなくてはならないだろう。ここには年少が確実に来るからなのだ。新しい炊事場の建築がどんどん進んでいる。トラックがドラム、石灰と石などあらゆる物をこちらへ重そうに運んで来る。

ドウ・マイイアー

1944年12月4日

昨日、大騒ぎ！ 僕たちの仲良しヴィリィ・バイラーアトゥが汽車でアンバラワ⁴⁶ へ行くように、通知を受けたからだ。そこへは、すべての身体虚弱者が行く。それは病人収容所となるから

⁴⁴ バタビア郊外にある女性抑留所。

⁴⁵ 日本軍における原住民の補助兵。

⁴⁶ アンバラワ第8抑留所。以前のローマカトリック寄宿学校セント・ルイス内に開設された。

で、彼は喘息がある。ヘンキィ・ティアリンクもこの家から出て行ってしまう。明日、出発だ。老いぼれも一緒に行く。この抑留所から出る少年は10人だけ。殆ど全員が喘息少年。そこでは良く面倒をみてもらえることを、僕は願っている。ここにいる僕たちよりもましに。そこでは、おいしいものが食べられ、カトリックの療養所では親切に世話をしてもらえる、と言われている。彼が去ってしまうことを、僕たちは皆もちろんとても残念に思っている。何かとてもさびしく、悲しいことに思われる。[...] お別れ会のために、きのう僕たちがもらったお砂糖でカチャン [ピーナッツ] 入りの砂糖菓子<砂糖をクリーム状に練った柔らかいキャンデーふうのもの>を作った。すべてのワインの瓶も、新規に<水を>詰めた。それでも僕には、一方ではまた大冒険に思われる。そして少しの間、彼[ヴィリィ]はその日の英雄。

フックス

1944年12月5日

今朝早く6時半に、マインコ[トクソペイユス]もそこに含まれる病人たちは既に去って行った。

ドウ・マイイアー

1944年12月5日

今朝、ずいぶん早く[ヴィリィ]バイラーアトゥはもう行ってしまった。未だ暗かった。ローソクの明かりのそばで、彼は着替えて仕度をした。[...]7時15分前に、出発しなければならなかった。僕たちは彼と一緒に門のところまで行った。そこでは他の組の組[長]ペーター・スタムが、少なくとも10分ないし15分『トゥアン兵補』[『兵補様』]と叫び続けた。なぜならば、彼が消え失せてしまったからだ。やっと通りのずっと下の方のワロンキユス[屋台]から返答があった。『バゲイロー！<バカヤロー！>』。少し経って扉が開けられ、彼らは向こう側へ行くことができた。僕たちはついて行くことはできなかった。でも、点呼の後で、僕は急いで向こう側へ走った。彼が門を出て行くところを、かろうじて見ることができた。ヒール・クレアク、アルド・ボンガース、パウル・ハアトゥ、ヘンキィ・ティアリンク、そしてマリウス・ファン・ノートウンもその10人の少年たちの中にいた。大声で『さようならー』と叫びながら手を振り、駅に向かって進んでいった。[...]そして今度は、僕たちの友だちがいない。きっと未だ汽車の中にいるのだろう。アンバラワは遠いいるのだから。またあした。

メイムリンク

1944年12月5日

そう、住宅70番の部屋で僕たちは今、ヤン・[ハーリング]とグッツ・[ナスツ]と一緒に寝ている。向こう側[バロス側]から400人が、こちら側へ移ってきた。その代わりに、バタビアからの360名が向こう側の彼らの場所に到着した。僕たちはそれで場所を詰め、今は一部屋に5人が寝ている。

フックス

1944年12月6日

僕たち全員が、日本人からバレ[寝台]をもらう。呪わしい南京虫が板の隙間にいる。バタビアから来た人たちのために、わら布団も取ってこなければならなかった。それらの物も本当の南京虫の温床地だ。

ドウ・マイイアー

1944年12月9日

父親か兄弟が、第4大隊またはバロス[第5]にまだいる少年たちすべては、今日そのことを申し出ることができた。そして希望すれば、多分この数日中に、そちらへ移転できる。

ドウ・マイイアー

1944年12月15日

この頁の裏面に、ここ抑留所の見取図(見取図II)を描いた。何とも小さな抑留所であることが分かる。道は実際ヴィルム通り、たった一本しかない。比率のうえでは、道を広くしすぎた。いかにも細いからだ。Nは僕たちの抑留所の門。その向こう側がバロス抑留所の入口。両方の抑留所をまとめて「ジャワ第6」。バツ印x x x xはゲデック[竹で編まれた仕切り]を表す。囲いの後ろ、門の脇にある小さなバツ印をつけた最初の家には、マックスおじさんが住んでいる。これは二つの部分からなる家。ところで、ここでは大部分の家が一棟2戸建てになっている。向こう側も同じ。それらの殆どに 凹 の印をつけた。ヴィルム通りの上方に、多くの家並みが見える。実際には、もっとたくさんある。でも、それら全部を描くことは無理だ。最初の左上は、この抑留所の責任者カイザー氏の事務所。([G.A.] スホートゥル氏は両方の抑留所の責任者で、

向こう側に住んでいる)。それは同時にトーコーにもなっている。別の半分には、[C.] ザイル
ストゥラ氏 (歴史の授業担当)、とケイス [C.M. ブロースホーフトゥ] おじさん。その筋向い
に、ハウウェン氏 [A.L.J. ソッフアス] とケイス・ソッフアス氏が住んでいる。その隣69
番には、英語の授業の [W.] ヨアリツツマ氏 (ヨーブ・クゥホーンのおじさん) と、ここでの
教科責任者ですべての試験を実施するバウズゥ氏。黒く塗りつぶされた家 ■ 64番に僕たち
は住んでいる。最初は隣の65番だった。それから59番 [レインダートゥ] ステイハーフック
の所、その後59番から64番に移転した。65番の隣に、それも僕は描かなかったけれど、今
まだ完成していないこじんまりした家がある。その向かいに、台所を改造している未完成の家が
二軒ある。右側の家の筋向い、電気室 (Gebeo)⁴⁷ の隣に僕たちは最初、向こう側へ移転する
まだ前に住んでいた。

ヨーストウン [日記を書いている時点では、まだチマヒ第4]

1944年12月17日

パロス [第6] にもしお兄さんがいたならば、そこへ行かせてもらえたので、お昼すぎに名前を
いってもよかった。

ヨーストウン

1944年12月18日

夕方、レオ [兄] とぼくは、あしたかあさってヴィム [長兄] のところへ行くかもしれない、と
いわれた。

ヨーストウン

1944年12月20日

ぼくたちは朝6時半にパップをもらった。8時に、出発するように並んだ。9時に少年抑留所 [パ
ロス第6] へ行った。そこにつくと、ロビィ、シェフ、ハンス・ヘー、エドゥワアトゥ、ヴィム・
ペー、カーアル・カー、ヴィム [長兄]、レオ [兄]、イエィとぼくで一けんの家に入れられた。
ぼくたちの新しい家には、ナンキンムシはいない。それで、自分たちのトランクにはいないかど

⁴⁷ Gebeo = Gemeenschappelijk electriciteitsbedrijf Bandoeng en omstreken <バンドンおよびその周辺の共同
電力会社>。

うか調べた。食べものは第4抑留所〔チマヒ第4〕よりも多い。その夜ぼくたちはとても気持ちよく眠った。

フックス

1944年12月20日

今日、僕は balan〔荷物〕を引きずって移動させることを、自主的に申し出た。つまり、ここにいる146名の少年たちは、父親または兄たちがいる抑留所〔チマヒ〕第4と〔バロス〕第5に行く。

ドゥ・マイイアー

1944年12月20日

父親または兄が第4〔チマヒ第4〕かバロス〔第5〕にいるすべての（先週、申し出た）少年たちは、今日そちらに移転してよかった。ルディ・バックーは今度行ってしまった。肩の荷がおりるとともに、今度はビア・カサが再び僕たちの部屋に加わった。僕たちは、空にしなければならぬ家65番から出る5人のために、場所をつくらなければならなかった。今、脇の小さな部屋に寝ている〔ヒューズ〕サールティンクとその弟アールントゥ・サールティンクの二人、それにルディ・ベーニング、V.d. ホアストゥ、そのほかにも名前が良く聞き取れなかったもう一人。これら最後に言った少年たちは、この裏側の部屋にノル「ファン・オルムン」とメイナウトゥ「クライシャー」と一緒にいる。ティンチュ「ファン・ダウヌン」とそのお兄さんはバロス「第5」へ、さらにこの家からは友だちベアトゥ・「レントウマ」を置いて行かなければならぬボブ・フルウン。第4へはこの家からさらに、レイリック二人「ジャックとヤン」、ヒューホー・フォーフル、エディ・プラートゥ、それにパウルチュ・ハアトウマンが行ってしまった。後になって考えると、ルディ・バックーは、それにしても外見ほど、そんなにいやな奴ではなかった。

ドゥ・マイイアー

1944年12月28日

やっと今、僕たちの部屋は整頓された。板をレンガの上のせて2つの小さなベッドにする。エドゥガー〔ラウレンス〕のベッドは窓の下にある。それと僕のとの間にティカール〔睡眠用マット〕をカーペット代わりに敷いた。僕のトランクはテーブルのつもり。小さな貯蔵箱は僕たちのベッドのすその方に置いてある。僕のベッドがある上方の壁に、何枚かの写真を掛けた。ニップ

は認めてはいないけれど、そこには鏡、手ぬぐいと歯ブラシも掛かっている。本当は壁に釘を打ち込んではいけないのだ。

ドゥ・マイイアー

1945年1月3日

民間人抑留所に男の家族がいる人たちは、彼らがここに入ってもいいという許可をもらっているかどうかを、今日尋ねることができた。もし、それが本当に行われるならば、再びかなりの移転となるだろう。エドゥガー [ラウレンス] はお父さんに尋ねた。僕は、ヨーブ [G.J. ランヌフトゥ] おじさんやジャックおじさんには問い合わせなかった。彼らはあちら [チマヒ第4] でたぶん順調に、そして僕もここではうまくいっている。

フックス

1945年1月10日

今晚、点呼の際に突然、雑役係80名はここ [ヴィルム通り] から向こう側へ移動すること、と言われた。フラーザー氏は、僕たちが行かなくてもすむように取り計らった。僕はものすごく嬉しい。ここは、何としても抜群に素晴らしい。これは大きな問題なのだ。なぜならば誰も行きたくないからだ。彼ら殆ど全員がスホートウル氏の所へ行ったけれど、何の役にもならなかった。それは [S.J.H.G.] バーリンク [雑役リーダー] の考えなのだ。彼にはその件で、今までもヴィルム通りの雑役係たちはいつも遅いうえ半数しか来ない、というような悩みごとがあった。半分は彼から逃げ出してしまった。

ドゥ・マイイアー

1945年1月11日

今朝、マックスおじさんは移転した。今はとても細い道、見取図では住宅51番^{b48}に住んでいる。僕たちは今朝、引越しを手伝った。その家には3人住んでいる。[ヨーブ] ヴィルムスウ、[ハリィ] オッスンドライヴァー (二人の感じの良い年上の少年たち) とおじさん自身。それにしても、こじんまりした家で二部屋しかなく、一つは事務室として使われる。椅子が二脚、寝台、机、それと背もたれのない腰掛けがある。食卓にはテーブル掛けが敷いてある。角には棚があり、

⁴⁸ 本項、日記の断片ドゥ・マイイアー、1944年11月23日の挿絵、見取図I参照。

三人の身の回り品が置いてある。[...] 最初に名前をあげた少年<ヨープ・ヴィルムスウ>の弟ルウディ・ヴィルムスウもそこに住むようになる。しかし、僕たちはきつとここに残る。

フックス

1945年1月11日

少年たちは今朝移転した。それに代わりバタビアからの人たちが⁴⁹、僕たちの所に来た。実に気持ちのいい連中だ。フラーザー氏 [組長] は机、椅子2脚、ランプを要望した。彼はこの組に移り、これらすべてのバラシ [物] が必要である。またもや電灯が無い。今晚はローソクの明かりの傍でお茶を飲み、すごく楽しかった。

ドウ・マイイアー

1945年1月19日

ここ数日ほとんど毎日、雨模様。いやになる。すべてが汚れ、洗濯物は乾かない。それにひどく寒い。時々、それで震えるほどだ。

ドウ・マイイアー

1945年2月3日

今、南京虫に悩まされている。いまましい。一度それに取りつかれると、追い払うことはできない。しかも、この頃は蚊でもひどくうんざりしている。

ドウ・マイイアー

1945年2月16日

僕たちは今日、[マックス] おじさんの所に移った。

⁴⁹ バタビアにあるいくつかの抑留所から、バロス第6に移送された抑留者たち。

ヨーストウン

1945年2月17日

きょうの朝、ぼくたちの所にベッドがおかれた。いくつかの小さな部屋は全部いっぱい。そして表側の部屋でも、タイル4枚分のすき間のほかは [全部いっぱいだった]。

フックス

1945年2月22日

今日もそれほど寒くなかった。太陽は9時半にもう顔を出した。すぐさま外に出て座った。今日の午後はさらに水浴さえもした。それから、最後に残った太陽の光で暖たまった。4時半には早くも雨が降っていた。相変わらず雨が降っているので、ここ何晩か点呼がなかった。

フックス

1945年2月25日

明日また移転させられる。今晚または明日の朝、バタビアから150人が来る。最初、僕たちは今晚さっそく移動させられるところだったけれど、それはなかった。人々は明日になってから来る。僕たち三人は、それでグダン [物置] 部屋に住み始める。実に狭く寒い。しかし、とても愉快にできる。不平は言うけれど、それほどひどくはない。いずれにしろ、そうすることは助けにはならない。さらに悪くはないのだ。そこにまた棚を吊ることができるのは好都合。それに僕たち専用の表ベランダがある。どんな連中なのか、僕は興味津々。誰かが、ブッキトゥドゥリィ⁵⁰ からの国家にとって危険な者、と言っている。別の人たちは、そうではなくチデンとクラマツト⁵¹ からの年少の少年たちである、と言い張る。

サロモンズ

1945年2月26日

バタビアから年少の少年たち150名がここに着いた。バタビアから来ていた人たちの殆ど誰もが、伝言をもらった。亡くなった知らせもたくさん聞く。僕たちはここでずいぶん苦しい時を過

⁵⁰ バタビアのブッキトゥドゥリィ通りにある刑務所。

⁵¹ バタビア郊外にある抑留所。

ごした、と考えていたけれど、バタビアではそう聞くように、もっとひどかったのだ。

ファン・エングルンブルフ

1945年2月26日

今朝ばかり早く、11歳くらいの少年150名がチデン（バタビアの女性抑留所であると判る）から到着した。それほど年少なのに、それでも国家にとって危険と見なされるとは！⁵²

フックス

1945年2月26日

今朝は早くから、ひどく騒々しかった。バタビアからの人々が到着した。11歳と12歳の少年たち150名と判った。ペーター〔弟〕は一緒ではなかったし、母さんのことも何も聞くことができなかった。僕たちはポップを食べた直後に移転を始めた。僕が既にすべての物を運び棚も吊り終わったところへ、中止である、と連絡が来た。その同じ午後、再びあらゆる物を引きずって元に戻した。少年たちは、僕たちのベッドでまだ眠っていたが、今は少年班へ移された。

ヨーストウン

1945年2月26日

きょうの朝ずいぶん早く、7時15分前に、バタビアから11歳とそれより年上の男の子たちが来た。みんなは一晩中、汽車の中にいた。ヴィルム通りに入れられた。午後は、チデンでぼくたちの家に住み込んでいたJ. ボットウマンヌのところへ行った。

フックス

1945年3月1日

急にハンス〔ヌウマン〕が来て、僕たちの部屋に3人加わる、と言った。別段ひどいことではなかった。ところが、暫くして彼はまたやって来て、僕たちは奥の部屋に移されるのだ、と言った。

⁵² 1944年7月よりジャワでは10歳及びそれ以上の少年たちは、女性抑留所の母親から引き離された。それは1943年11月7日に、日本陸軍に通達された軍抑留者取扱規程第8項に基づくものであった。この中に、10歳未満の者は子供と見なすこと、と書かれている。バロス第6序、1頁参照。

それから再び大急ぎで移動した。反対しても仕方がなかった。6人の新参者は一緒にかたまっていなければならなかった。そして彼らは美味しそうな物、例えば、本物の肉ルンパース [＜バナナの葉に＞巻かれた肉入りもち米ご飯] そしてハム、ソーセージとベーコンのサンドイッチなどを持っていた。組長フレーザーを、もちろんそれで買収したに違いない。僕たちが騒がないように、僕たち3人もルンパーを2回もらった。ご飯は酸っぱかった。でも、本当に素晴らしくうまかった。

フックス

1945年3月2日

ここでの第一夜は、心地よかった。寒くも息苦しくもなく、実に爽快だった。ただ、小便の悪臭にだけは悩まされた。不精な習慣から下水溝に放尿するからだ。しかし、明日で終わるだろう。それはだめだ、と僕は断固として言い切るつもりだ。なぜならば、それはマッチャム [作法] ではないのからだ。

ドウ・マイイアー

1945年3月3日

[3月] 1日 [...] バトゥから6名の「紳士たち」が到着した。⁵³

フックス

1945年3月5日

飛びぬけて思いやりのある知らせを、僕たちは受け取った。何回目になるやら、再び移転させられる。それにしても、ひどいことだ。僕たちの快適な部屋は、この抑留所の犯罪者と殺人犯のための牢屋となる。至るところで僕たちは反対し、騒ぎを起こした。しかし、役に立たなかった。彼らは今、正に僕たちの小部屋が必要なのだ。それでも、わずかながら確かに成果があった。

1. 明日、移動すればよい。最初、彼らは今日の午後、速やかに立ち去ることを望んだ。
2. これと全く同等のグダン [物置] 小部屋をもらう。

少なくともハンス[ヌウマン]と僕はそうだ。なぜならばヘンク[カルスホーヴン]は仕事

⁵³ これらの人々はバトゥ (東部ジャワ) の病人収容所に抑留されていた。(Van Engelenburg＜ファン・エンゲルンブルフ＞、38)。

を失いたくないので、エビンク配給係の所に住むことになるからだ。ハンスと僕は、つまり第IV班の1組へ行く。ヘンクはもし第IV班へ行くのであれば、第III班の配給係のままでいる訳にはいかない。ものすごい騒ぎと不平が出るかも知れない。それで僕たちは互いに別々になる、とは厄介なことだ。もはや時計は無く、ヘンクはトゥンパット [ここでは、台所用品] を持っていない。さらに僕たちは、共同で持っていたバラン[物]をくじ引きで決めて分けた。僕たちには椅子、そしてがらくた物を詰める[ハンス]ヤンスンからの古いトランクがある。ヘンクはタイプライターとゲンディ[水差し]を持っている。

フックス

1945年3月6日

今日こそは、全く混乱した移転日だった。随分歩いたものだ。早朝から僕はもう可能な限り荷物をトランクに詰め始めた。直ぐには移転はできなかった。僕たちがこれから入る予定のトゥンパット[寝場所]に居た人たちは、未だそこから出ていなかったし、そこを去りたくもなかったためだ。僕はそれで、その連中とスホートウルの所に行った。彼はそれから再びすべてを調整してくれた。その間、僕たちの古いトゥンパットの混乱の中で、もうパンを食べてしまった。この後、新しいトゥンパットを掃除し、がらくた物を移した。僕は直ぐに小さな棚を吊り、衣類を掛けるため壁にいくつか釘を打ち込んだ。ここは僕たち二人で飛び切り快適。

フックス

1945年3月14日

大きな表側の畑を手離すとは、実に残念だ。一体僕たちは何回スープを作ったことか。ここでは今また、狭い地面を獲得した。すべてのチャベ [唐辛子]菜に、ちょうど十分だ。今日午後、雑役の後でそれらすべてを植え替えた。辛抱しよう。もう暫くすれば、ここにもう少し広い場所を貰える。そうなれば、またバイエム[ほうれん草]を植え、スープを作ることができる。

フックス

1945年3月26日

45歳以上の人たちは、第4[チマヒ第4]へ移転できる。

メィムリンク

1945年3月29日

タイス・ドゥ・ハースは、抑留期間中に二回目として家に帰った。しかし、今回はこれが最後となる。ある朝、お父さんとお母さんの所へ戻るため、バラン[荷物]を持って届け出なければならなかった。僕は彼を山岳砲兵隊まで見送っていった。そこで、荷物と一緒に小さなトラックに乗せられ、堂々と走り去った。ある人たち、中でもヒルクウ[ファン・ダァー・ハーストゥ]はタイスがお父さん（まだなお働いているわずかな人々に含まれる）⁵⁴ と残りの家族と一緒にビルマへ行くか、または他の場所に運ばれる、と考えていた。それだからヒルクウは、彼のことをそれほど羨ましいとは思わなかったのだ。僕には、両親の元に戻り、また何か違ったことを経験するのは、確かに素晴らしいことのように思われる。

フククス

1945年3月31日

陸軍病院はヤップのために明け渡さなければならず、そこに病院が来る。僕たち全員が第4「チマヒ第4」へ移転する、という噂が流れる。病院を管理する日本人たちは、至る所に来て見張っている。すべての家具保管倉庫も空にする必要がある。[...]今晚、僕たちは安心させられた。当面、僕たちはまだここに留まる。しかし、ほぼ確実にここへは400人が追加で来る。とにかく何が起こるのか、まあ、様子を見よう。愚痴をこぼすことは何の助けにもならない。いずれにしても起こるはずだ。第15[大隊]への移動も、有志が求められることを願っている。そうなれば僕は即座に志願する。彼らは既に、誰が第4へ行きたいかを尋ねたけれど、あそこへは僕は絶対に自発的には戻らない。確実にしない。

フククス

1945年4月2日

パロス[第5]または第4「チマヒ」へ移動したい有志が求められる。殆ど誰も希望しない。バタバアからの年少の少年たちの大部分は、そこに兄たちがいるので行くが、彼らが唯一である。年長からは誰も希望しない。十分な志願者がいない場合には、僕たちはきっと指名されるだろう。し

⁵⁴ これはいわゆる Nipponwerkers<日本協力勤労者>のことで、本来なら抑留されるべきヨーロッパ人及び蘭印人のうち日本軍の命により、いろいろな企業や事業の運営を維持させるため引き続きその場所で働かされた人たちのこと、を彼は意味している。(Heijmans-Van Bruggen<ハイマンス-ファン・ブルッフウン>、5-6)。

かし、噂によると可能な限り年配の人が去らなければならない。僕はここに滞留できることだけを望んでいる。腐敗した抑留所[チマヒ第4]に戻る必要がないのであれば、ここに他の人たちが入って来ようが、僕は全く構わない。

フックス

1945年4月4日

45歳以上の人たち全員が、ここから去ることはほぼ確実だ。病院にいる人たちは、日曜日に荷造りをさせられる。そうすれば月曜日にきっと移転を開始するだろう。僕たちはそれで金曜日[4月6日]と土曜日[4月7日]にも行かれる、と考えている。

ドゥ・マイイアー

1945年4月5日

今晚、最初の人たちが呼び出しを受けた。明日の朝8時半に点検、あさって4時に出発しなければならない。たぶん汽車なので、バンドンかどこかそっちの方へ。抑留所のみんなの考えは、この抑留所全体が閉められるだろう、ということだ。それで道路の両側<両方の抑留所>から、大部分がバンドンに移されるだろう。

ドゥ・マイイアー

1945年4月6日

明日、出発する人たちは、今日の午後バラン[荷物]を出口まで運ばされた。彼らはそこで、荷物をほどこなければならなかった。ヤップが点検したかったからなのだ。携帯用マットレスは奪い取られた。

ドゥ・マイイアー

1945年4月7日

出発は早められ、今日の午後、出発組は3時にはもう出ていく。この中には[M.]ドゥ・ブウ氏がいる。いまだに何処へ向かうのか彼らは知らない。名簿2番と3番も今、発表された。これら[の人々]は明日出発する。名簿2番は第4[大隊]へ、名簿3番はパロス[第5]へ行く。第4[大隊]へ

は、ハウウェン氏、ジウムレットゥ氏、シーモンス氏とエルンバース氏たち、そしてこの家からはヨプ・バイスターが行く。僕は忘れないように、ここにエルンバース氏の名前を記しておく。

B. エルンバース — 経済省、産業部、企業規制。今後、彼に会えないのであれば、その住所あてに書くことはできる。僕は出発する彼らに、ヨープ[ランヌフトゥ]おじさんとジャックおじさんよろしく、と伝言した。

メィムリンク

1945年4月7日

移転のことでは、大した進展はまだ何もない。正確には何が起こるのか、いまだに判らない。僕が知っている唯一のことは、陸軍病院がこちら側[ヴィルム通り]に移って来ることなのだ。この抑留所は向こう側に移転する。そして両方の抑留所から700[人]が第4抑留所「チマヒ第4」、第5抑留所[バロス第5]とチマヒの外にある抑留所に送られる。僕たち全員は第15大隊へ行かされる、という噂もとっくに流れている。でも、それは未だ全く確かではない。700人のうち200人が、今日の午後出発するように、知らせを受けた。昨日の午後、その人たちはバラン[荷物]を、もう表に運ばされた。それからクニモトともう一人のヤップに点検された。携帯用マットレスと小さな腰掛けは、持って行ってはならなかった。[オランダ]の抑留所運営管理はこの機会を、違反行為を犯したすべての者を退去させるために利用した。200人すべての一人一人が、何かを犯している。彼らは以前に一度、盗み、へパッハートゥ [闇取引をし]、組長と口論をしていた。ザイルストゥラ氏もその中にいる。なぜならばディッキイ[彼の息子]とエディ・エマヌエルスがある時、取引をしたからなのだ。これらの人たちは『チマヒ外部』へ行く。その間、僕たちにも何か通知があるかどうか待ち受ける。全くびくびくする。なぜならばこの先、何が起こるかわからないからだ。

ヨーストウン

1945年4月7日

きょうの朝8時半に、一番目のグループ[200人]のバラン[荷物]が駅まで運ばれた。あしたは500人のうち400人が第4抑留所[チマヒ第4]へ、100人が第5抑留所[バロス第5]へ行くのだろう。4時に一番目のグループはバンドンへ行った。

フックス

1945年4月7日

今、問題がある。僕たちは明日[他の抑留所へ]移動するのだ、と10時ごろ発表された。即刻、第4[チマヒ第4]とバロス「第5」へ行く人たちの名前が挙げられ、先生[A.H.M.ファン・ダー・スホートゥ、彼の英語の教師]はその中に入っていない。

フックス

1945年4月8日

今朝、点呼の前に僕はウビ[サツマイモ]を食べてしまい、パップは点呼の直ぐ後で出た。それから荷物を詰め始めた。わずかしかないから、直ぐに仕度が出来た。ハンス[ヌウマン]は更に椅子をくすねた。僕たちにはトランク、それに雨ガッパいっぱい包まれた材木がある。差し当たり、薪木には不足しない。10時にバラン[荷物]を道路に置き、家や畑を清掃させられた。幸いにも、僕たちの家はそれほどひどく汚れていなかった。それから向こう側へ行く許しが出るまで待たなければならず、それはやっと1時になってからだった。その間に早くもボル<丸パン>を貰った。あちらこちらで若いサラダ菜を少しつまみ、それに塩をかけ丸パンにはさんで食べた。行くことが許された時、僕は膝をがくがくさせてトランクを向こう側に引きずって運んだ。ものすごく重かったので、新しい家にたどり着いた時には、へとへとに疲れ果ててしまった。そこにはルーウィガジャ所属の連中が、間違っ場所を占めていて、彼らはそこから出たくなかった。4時になってやっと彼らは出て行き、僕たちは入ることができた。ハンスと僕は、再び二人専用の小部屋だ。苦労と口論が確かにあったけれど、そこに留まることではうまくいった。壁は穴だらけで、^{おびただ}夥しい数の南京虫がいる。壁にはつぶされた南京虫の血痕が数百もついている。ここに住んでいたのは、不潔な奴らだったのだ。できる限り南京虫を殺した。それから板と携帯用マットレスを広げた。寝台もあったのだけれど、それは外に投げ捨てた。当面することが十分ある。畑は荒れてものすごく汚い。その後、すべてがきれいに整ったら、実際に活動を開始するけれど、今日はまだ何もしない。

ヨーストゥン

1945年4月8日

9時に人々は、はじめに積まれたバラン[荷物]といっしょに、第4抑留所[チマヒ第4]へ行った。11時には第5抑留所[バロス第5]へ彼らのバランと出発した。きのうぼくたちは引越しの知らせをもらっていた。ぼくたちは水がない家に入れられる。そこは、その上とてもきたない。こん

どは一つの家に11[人]。向こう側からこちら[バロス]側へ住みにくるし、ヴィルム通りには病院がくる。

ドゥ・マイイアー

1945年4月8日

今朝、向こう側の抑留所は空にされた。立ち退かなければならなかった人たちは出発した。そして僕たちもその一部である残留者たちは、向こう側へ移動した。僕たちは今、こじんまりした家30aに住んでいる。「A. W.」スホットゥ氏 ([マックス]おじさんの義理の兄)、ヨープ・ヴィルムス、ヨープの知り合いカアルゥ氏と [P.]ファン・アプカウドゥ氏と一緒に。ヨプ[パイスター]も誕生日の今朝、出発した。彼は僕のために、美しい銀のナブキンリングを置いていった。昨日出発した人たちはバンドンへ向かった。

ドゥ・マイイアー

1945年4月9日

この新しい家は、恐ろしくひどいクトゥ ブスック [南京虫]の巣。夜中はその害虫に攻められた、という感じだ。木の寝台にいて、そこから来るのだ。それらはTD[技術部]で作られた木の寝台なのだ。ニップからに違いない。僕たち5人で一つの[寝台]に寝る。

フックス

1945年4月9日

昨夜は殆ど眠れなかった。夜どおし掻きつづけ、そして痒かった。ハンス[ヌウマン]も同じだった。どうしようもない。それで僕たちが最初にしたことは、南京虫狩りだった。僕の携帯用マットレスには、ぞっとするほど詰まっている。ハンスは壁の穴を土で塞いだ。今晚は、それほど悩まされないだろう。[...]僕はそれから水浴びをしたけれど、水がうまく出なかった。浴室の蛇口からは夜しか出なかった。その上、[水]槽は最小限のものなのだ。昼間は本管から汲まなければならないし、それは常時うまくいく訳ではない。

メィムリンク

1945年4月10

決定された。ここから向こう側の抑留所「本部抑留所」[バロス側]への移動にはなるとしても、僕は残った。200人の「ブアヤ」[扇動者]を除き、さらに100人がバロス[第5]へ、その中にエングルブルフトゥ氏と息子たち、それにコース・バングウ、さらに400人が第4[チマヒ第4]へ向けて出発した。自分から進んで申し出ない限り、少年は殆ど誰も行かなかった、と僕は思う。たいていの年取った人たちは移っていった。土曜日にこれらの人々は通知を受けた。日曜日に彼らは出発しなければならなかった。そして僕たちは向こう側へ移転するのだ。[...]バラン[荷物]の山をずいぶん苦勞して引きずって運ぶのに、手押し車は無いのだ。それで今、住宅42A、つまりグダン[物置]に落ち着いている。小さなグダンで僕たちが何とか入れる。狭い、でも実に楽しい。感じの良い家で広いし、裏ベランダ、台所、浴室、それに畑がある。一日中、水が出ることもこの抑留所の利点。その上グダンにはソケットがあり、4日に一度は明かりがつく(ランプは部屋毎に交替で使う)。僕たちは班長兼組長のいる家に寝ている。B半分は年少の少年たちがいる。僕は住宅主任。

フックス

1945年4月20日

点呼終了後、殆ど直ぐにバラン[荷物]を日干しするため外に置いた。ここ数日、南京虫に少し悩まされている。何処から来るものか、それは謎だ。すべての穴と隙間は土と石鹸、それにスレイ[香辛料として使われるインドネシアの草の一種]を混ぜ合わせたもので塞がれた。

フックス

1945年4月22日

パップを食べ終わってから、部屋を掃除した。それから南京虫のため暫く外に置いてあった寝台を、薪にするため崩した。このところずっと板が盗まれていた。台所の水道の蛇口を下へ向けたけれど、水は夜遅くと朝早くにしか出ない。それで、たいして役に立たない。

フックス

1945年4月26日

水は現在、非常に深刻である。常時水が出る蛇口でさえ、日中は乾いている。やがて水浴びでさえできなくなる。

ファン・エンゲルンブルフ

1945年4月28日

今日、[抑留所の] 病院全体は陸軍病院 [ヴィルム通り] に移転させられた。

ドゥ・マイイアー

1945年4月30日

向こう側 [ヴィルム通り] からは大勢の雑役係が、今度こちらへ移ってきた。彼らは今、全員がここ、以前の病院に住んでいる。ヤギや犬も連れてきた。ずいぶん肥えている。陸軍 [病院] には、いつも不正の一味がいたらしい。

フックス

1945年5月3日

[夜] 7時頃、明日第4 [チマヒ第4] へ移動させられる200人の名前が発表された。今回はその中に先生 [ファン・ダァー・スホートゥ] もいた。授業と楽しい晩のことを考えると、非常に残念だ。しかし、その反面、僕はもはや食事の仕度をしなくてすむのでたいへん嬉しい。なぜならばルーウィガジャ雑役は本当に厳しくなっていて、僕自身の時間が全然なかったからだ。今、また新しい時期がやって来る。

ドゥ・マイイアー

1945年5月4日

第4大隊から103名の機械工が今日来た。そして200名がここから第4 [チマヒ第4] へ移った。その第4大隊の人たちの中に、前回ここから去って行った人たちがまた戻ってきた。第4

からここへやって来た人たちは、この上なく感謝している。ここは何倍もいいのだ。

ドウ・マイイアー

1945年5月22日

最近、何組かの人々が再びここから去って行った。全員、向こう側〔病院〕から。いわゆる病人たちが、またアンバラワへ向かった。しかし、それはバタビアだと言われている。そうであれば、彼らは修道院の「De Goede Herder(ドウ フドゥ ヘアダー)〈よき牧者〉病院」⁵⁵ に収容され、看護婦さんの世話を受けるに違いない。

ドウ・マイイアー

1945年5月25日

昨日は『クトゥ ブスック〔南京虫〕一掃』だった。大ボンカー〔清掃〕日だった。僕たちの所からすべてのバラン〔荷物〕を外に出し、木のくさった寝台は板切れにばらし、焚き木にする。やっとその汚い寝台の処分が終わった。[...]僕は今、床の上で寝ている。気持ちのいいこと。トランクを足元に、そして小さな貯蔵箱を脇に置く。その隣にエドゥガー〔ラウレンス〕が寝ている。それで、この箱を小さなテーブル代わりに使える。とても快適だ。特に僕にとっては、そうなのだ。今、誰も僕とはそれほど接近して寝ていない。息づかいには何とも迷惑させられるから。エドゥガーの携帯用マットレスは幅がとても狭いので、その間にもう一つトランクを置けるのだ。なぜならば僕たちは今、ブルウムン抑留所⁵⁶ でのように接近して寝ていて、一人あたりタイル4枚の幅、と僕はもう測ってあったのだ。やっと部屋をすみずみまで掃除した。そしてヨーブ〔ヴィルムス〕は一日3回、この部屋の誰もが交替で雑巾がけをしよう、とそれを始めた。素晴らしい。

ドウ・マイイアー

1945年6月1日

これは住宅30番。左側半分には僕たちが、右側半分にはヤンスン氏が住んでいる。こちら側、つ

⁵⁵ ‘De Goede Herder-Ziekenhuis’ bij het Mater Dolorosa Klooster te Meester Cornelis, Batavia. (バタビアにのメイスター コネイリスのマーテル・ドロローサ (悲しみの聖母) 修道院にある「ドウ フドゥ ヘアダー〈よき牧者〉病院」を意味する。(Lijst van kampen〈抑留所リスト〉 (NIOD, IC z.j.<年号不明>) 4)。

⁵⁶ バンドン北部の住宅地に設置された抑留所で、1944年11月に閉鎖された。(Voskuil〈フォスカウル〉, 79)。

まりバロスの殆どすべての家は、どれもそんなふうになっている。なかなか感じがいい、とは思わないかい？ ヨアン [デン・ブスタトゥ] と一緒に狭い台所で寝ていたこじんまりした家も、そんなふうな家だった。台所と浴室の上部には（右奥に延びた）平らな屋根がある。各々半分に当たる家は、二部屋に分けられている。その二部屋のうち、左から最初の部屋または右から最初の部屋一つは、確かによく見えるように、石の間仕切り壁でさらに二分されている。家の左隣にはバイエム [ほうれん草] の苗床が見える。少なくとも、それを想像しなければ。でも、小さな畑は殆ど、いずれにしても家の裏側にある。

ファン・エングルンブルフ

1945年6月10日

一昨日、10人の患者がバロス [第5] と第4大隊から入ってきた。そのため [ヴィルム通りの病院内に] 医師たちは場所を空けなければならなかった。そういう訳でヒリンハーと僕は、仮滞在用の家45番に移る通知をもらった。これから何が起こるのか分かるかい。彼らはここから追いつもりなのだ。本当にそうだ。翌朝、早くも僕たちの抑留所へ戻された！ 静けさ、たくさんのお食事、心地よい場所、そして特に読書することなど、すべてがおしまい。ああ、ヒリンハーと僕は、何と腹が立ったことか！ それにしても、どうしようもないさ。そうして別の家 [45番] の心地よいベッドでもう一度、快適に眠った後で僕たちのわずかな持ち物に移した。最悪だったのは、僕がどの家に来るはずであるのか知らなかったことだ。それは年少のチハッピー少年<チハッピー抑留所に収容されていた少年>の家になった。場所の割り振りはうまくいった。少し騒々しい。水が無いのはひどいことだ！ でも、後になれば気に入っている。少なくとも、そうならなくては。昨日、僕はものすごく腹が立った。面白い話しをする相手ももういない。向こう側の愉快的仲間たちからは離れてしまった。でも、僕はきっと最後まで頑張るだろう。もうそれほど長くは続かない。

フックス

1945年6月10日

僕はパンの補足としてフン ケーパープ [グリーンピースの粉を使ったパープ] を作りたかった。ところが、電気がきていなかったの、実際にはできなかった。6時15分過ぎになってようやく、わずかな間だけ明かりがついた。そしてその時からろうじて作れた。仕上がった時、電気はまた消えてしまった。9時頃やっと再びついた。朝また消えてしまわないように願っている。

そうでないと、夕方と早朝以外はドンペラー<水につけて加熱する電熱器>で暖められない⁵⁷からなのだ。明かりは悪くなった。何が起こるか様子を見よう。

フックス

1945年6月11日

畑の大掃除で、一週間が好調に始まった。そこは荒地になっていた。午前中ずっと草取りをし、へパチョルトウ [鋤で土を掘り起こした]。それにしても今は素晴らしく奇麗になった。今日もまた電気がきていない。何かを暖めたいと思うならば、夜しなければならぬ。もし、盗んだ野菜を煮たいと思うならば、そのために夜中には起きていなければならぬとは、実に不愉快なことだ。

ファン・エングルンブルフ

1945年6月17日

すっかりスナン [満足] している。[G.W.] ヤンスン氏の家にいる。とても思いやりのある人だ。あらゆる事を手伝ってくれるだろう。場所もいい。僕の気性のありかたと、特に一般常識と教養が高まる、と思う。

ヨーストウン

1945年6月27日

午後3時に『君たちは住宅36Bへ移ること』と急に知らせがある。ぼくたちは水の出る（前に住んでいた人がトイレのじゃ口を外に曲げていたので、そこから水が流れている）家に来た。今は床の上に寝ている。

ドウ・マイイアー

1945年6月28日

事務所は移転する必要があった。そこにいた人たちはその大きな建物を、譲り渡さなければなら

⁵⁷ 項目「食糧」、日記の断片ドウ・マイイアー、1945年1月12日参照。

なかった。そして今、彼らは前に図書館だった住宅5番にいる。その上、働いていない人つまり働けない人、または働いてはならない人は誰でも、向こう側 [ヴィルム通り] に移される。

ドゥ・マイイアー

1945年6月30日

また向こう側から、第4抑留所 [チマヒ第4] と第5 [バロス第5] へ300人の移動。僕は [エンジニア、F.L.P.G.] フォーニア氏が行ってしまわないように願っている。でも、今までなじみになった人たちのいるグループへ行かれることは、彼にとってはもっと楽しいことだろう。

ドゥ・マイイアー

1945年7月3日

大人が20名、今日の午後トラックで知られざる目的地へ向けて出発した。彼らは自動車工、電話／電報工たちだった。

フックス

1945年7月13日

この2日間、3ヶ所ぐらいを除き蛇口は止まってしまい、8時にはもう全然出なくなった。わずかな飲み水のために、抑留所の半分ほどの距離を歩き、その上15分は列に並ばなければならない。

フックス

1945年7月19日

ここ数夜、恐ろしく暑く、無数の蚊がいる。寝床にもぐり込んでひどく汗をかくか、または蚊に刺されるか、一体どしたらいいのか分からない。

ファン・エングルンブルフ

1945年7月29日

水曜日 [7月25日] に駅の近くで、木材雑役をした。第4 [大隊] からの S.S.<鉄道>作業員たち⁵⁸ を乗せた汽車が出発するのを見た。向こうに2, 500人いる。ここからのその [S.S.<鉄道>作業員] はまず300人、その次に170人で既に2、3週間、運ばれていくのを待っている。彼らは余分の食べ物をもらえる。900ccのパップ、パンに合わせ300グラムのウビ [サツマイモ]、夕方は500グラムのご飯、時々コーヒー。そして僕たちは最近0.5キログラムの砂糖もらったところ、彼らは1キログラムなのだ。水曜日に、そのグループの看護婦10名と医師2名だけが出発した。

フックス

1945年8月7日

僕たちの電気回線が点検された。技術部の誰かが屋根に上り、1時間は確実に取りかかっていた。すべての回線を切断してしまった。でも、ドンペラー<水につけて加熱する電熱器。項目「食糧」、日記の断片ドウ・マイイヤー、1945年1月12日参照>を少し改造すれば、幸いにも普段のように使うことができる。それを使わせないようにすることが、彼らの企てであったならば、それは残念ながら大失敗なのだ。

フックス

1945年8月9日

明日、検査に合格した S.S.<鉄道>作業員は出発する。ハンス [ヌウマン] はその中にいない。彼らは、明日の朝6時15分前に整列しなければならない、と今晚6時に知らされた。明日の朝はオブラル [大混乱] になるだろう。

⁵⁸ S.S. は当時 Staats Spoorwegen (国有鉄道) の略称であった。ここで言われる S.S.<鉄道>作業員とは、1945年7月にチチャレンカとマジャラジャ間の鉄道敷設にあたり、日本軍に使われた抑留者たちを意味する。詳細は項目「作業」参照。

ヨーストウン

1945年8月10日

きょうの朝6時15分に、グループAとBの85 [人] が出発した。2, 3日前3つのグループに分けられた。A,BとC。AとBは今行ってしまい、Cはまだ家にいる。

ドゥ・マイイアー

1945年8月16日

ちょうど1ヶ月、何も書き留めなかった。その月にはいろいろ変化した。300名のS.S.<鉄道>作業員のうち170名しか合格しなかった。残りはすべて年少の少年たちで、不合格となった。合格した人たちは3つのグループに分けられた。グループAは頑健な、グループBは普通の、グループCは合格者の中でも虚弱な少年たち。ヨープ・ヴィルムスゥはグループAに属する。グループAとBは出発した。グループCはまだ抑留所にいるけれど、間もなく彼らも行かなければならない。まず間違いなく、彼らはガルットゥから遠くないナグレグ近くにあるチチャレンカに向かった。出発にそなえ、彼らは最初の1ヶ月間ご飯は2倍、パップ2倍、ウビ [サツマイモ] 2倍もらっていた。それは彼らを丈夫にさせるためだった。現在、彼らはもっと快適な状況にあると言われている。そのように願っている。ヨープの代わりに、ここにはハンク [フラインスゥ] とローディ [フルゥヌンダイク] が来た。

フックス

1945年8月19日

今日の午後、道具類を中に取り入れ水を担いだ後、急いで水浴びした。ラッキーだった。なぜならば、そのほんのわずか後に、もう水が出なくなった。そして昨日は、水不足のために水浴はできなかった。

ドゥ・マイイアー

1945年8月20日

昨日の夜遅く、35人のS.S.<鉄道>作業員が戻ってきた。この中にはヨープ [ヴィルムスゥ] もいた。彼は11時半に、ここへ興奮して話をしにやってくる。ヨープによれば、そこは地獄のように悲惨だったに違いない。ここから出ていった他のS.S.<鉄道>作業員たちは今日、帰宅す

るだろう。彼らは住宅Ⅰ番に収容されたが、おじさん [マックス] はヨープをここ僕たちの所に入れたいのだ。

ヨーストウン

1945年8月21日

大工ベンケル [作業場] は引き払われた。そして、そこには住宅3番と4番の人たちが入れられた。

抑留所の組織 / 日本人責任者と欧州人責任者

ドウ・マイイアー

1944年8月5日

今日、僕たちはクウェイ マンコック [＜小鉢の形をした＞ケーキ] を5セント、そしてお砂糖 6オンス<600グラム>を12セントで手に入れた。それは事務所で僕たちのお金から差し引かれる。なぜならば僕たち全員、お金はそこに預けなければならなかったからだ。もう一度グラフィャ [赤シュロ糖] をもらえたらいいのになあ。それに僕たちのピサン サーレイ [薄切りにした甘い乾燥バナナ] ももうない。

ドウ・マイイアー

1944年8月12日

僕たち全員、身長、体重の測定、そしてすべてを検査する必要がある、と医師が言った。父親、母親、姉妹、兄弟と自分自身について、あらゆる情報をあげなければならなかった。[...] ここに見られる衛生についての次の規則は、医師が示したもので、厳しく守らなければならない。

体を清潔に保つ。毎日午後マンディ [水浴]、毎朝、石鹼で頭と手を洗う。就寝前に歯を磨く。朝夕、上半身裸で歩かない。

最低、一週間に一度、衣類を洗濯する。家ではすべての物を整頓、寝具は毎日、外で風通しをしなければならぬ。トイレは一日二回清掃、便器の縁の上には立たない。そしてトイレから出てきたら常に石鹼で手を洗う。

食事の直前に手、皿、スプーンなどを洗う。食後は食器を直ちに洗う。犬にきれいに^なめさせない！ 食べ物は常に^{ふた}蓋をして保存しなければならぬ。絶対に皿を^{ほこり}埃の立つ床に置かない。

はえ 蠅を殺す。

ドウ・マイイアー

1944年8月13日

この隣の家にいる男の人たちの畑に、僕たち用にいくつか小さな畑をつくることのできる。それはうれしい。なぜならば、どっちみち他の少年たちに、ここは踏みつぶされてしまうからだ。さらに、ここには1,000本のパイヤの木が植えられるだろう。それらは6ヶ月もすれば、

もう実をつけることができる。

新しい規則一

すべての身の回り品、書物とゲーム、箱と瓶、そしてその他のバラン [荷物] は全部、自分のトランクに保管 [しなければならない]。食事用のカップ、鍋、皿とその他の食器以外は外に出してはならない。そして、それはすべて台所の調理台の上に置かなければならない。それで僕たちがいる所、というわけ。(迷惑だと思わないかい?)。その上すべてのトランクはどの部屋でも(本当は家全体で一つの山)、積み重ねなければならない。僕たちは幸運だった。なぜならば僕たち二人でトランクが三つ、それに僕のカバンは今、携帯用マットレスの隣りに置いてあるからだ。

ドウ・マイイアー

1944年8月14日

新しい規則一 1軒当たり1ヶ所にのみ、火を焚くことが許される。但し11時から [午後] 4時までのみ。お湯は毎日午前と夕方、炊事場で供給される。さらに一 水浴し、衣類 (シャツ) を着て点呼に来ること。各々の家は電球2つだけ持つことが認められ、そのうちの1つは台所に。それで僕たちはラッキーなことに、まだ明かりがある。

ドウ・マイイアー

1944年8月16日

目下、非常に厳しい灯火管制。どの家が最も清潔で最も規則に従順であるか、家対抗の試合が行なわれる。医師が検査に来て、爪を短くしていなかったり、歯を十分に磨いていなかったり、不潔そうで衣服が汚れている少年たちに罰点を与え、[...]、トイレ、エンペル [廊下]、部屋、畑が整頓されていなかったり、食べ物がこぼれていたり、またはむき出しになっていたり、夜 (10時15分過ぎ) 時間通りに消燈しなかったり、夜10時半になってもまだ完全に静かでなかったり [...]、食事の受け取りが順序正しく行なわれなかったり、ひどく散らかしたり、すぐ正しく命令に従わなかったりすると、ヘンク [ヴァイフンバッハ、組長] から罰点をもらう。

その試合の賞品は一

一等賞 (すべて一人当たり) 一 砂糖3オンス<300グラム>、または棒状の石鹼半分、またはクウェイ マンコック [<小鉢の形をした>ケーキ]

二等賞 一 砂糖2オンス<200グラム>、または棒状の石鹼三分の一

三等賞 一 砂糖1オンス<100グラム>

それらの賞品は家単位でしか獲得できない（共同の畑と廊下ということ）。

ドウ・マイイアー

1944年8月22日

僕たちの家では、もう数十点の罰をもらう（昨日の夜、ばか騒ぎで16点）。それで僕たちはもう三等賞でさえもとれない。

ドウ・マイイアー

1944年8月26日

試合〔の〕結果が発表された。僕たちは当然、何の賞も獲得しなかった。

フックス

1944年8月29日

今朝、ク〔ニモト〕は突然、いくつかの新しい命令を与えた—

1. 誰でもベッドの上で寝ること—一人用に2名、二人用には4名。
2. すべての^{つぼ}壺や鍋は台所にしまうこと。トランクだけは部屋に置いてよい。

4人がベッドに寝るには、あまりにも狭すぎる。それでヌウトウ〔ハンス・ヌウマン〕と僕は静かに床の上に寝る。そして他の二人はベッドに入る。[...] 僕たちは全員、急に整列させられた。警備指揮〔者〕が懐中電灯と乾電池を取り上げたかったのだ。

ドウ・マイイアー

1944年9月2日

一日の予定を僕はいまだに書いていなかった。それは—

- | | |
|-------|-----------------|
| 7時30分 | — 起床 |
| 8時 | — 朝の点呼（この後、お湯） |
| 8時30分 | — パップ、それから部屋の掃除 |
| 9時 | — 雑役係は整列 |

- | | |
|----------|---|
| 11時 | － 授業と雑役の開始 |
| 1時 | － 食事の受領、ご飯とスープ |
| 4時または4時半 | － もしあれば、トーコーパン<売店で購入できたパン>と
ピサン<バナナ> |
| 5時 | － お湯 |
| 6時または6時半 | － 夕食 |
| 7時 | － 夜の点呼 |
| 10時15分 | － 消燈 |
| 11時30分 | － 無言 |

ドウ・マイイアー

1944年9月3日

新しい規則－ 携帯用マットレスは、もう床の上に敷いてはならない。ベッドの上に置くこと。面倒なことだ。でもヨアン [デン・ブウスタトゥ] はそのために今晚ラッキーだった。なぜならば彼はベッドに寝るからなのさ。でも、これからはそれを順番にするはずだ。

フククス

1944年9月4日

今朝、僕たちは残っていた鉄製のベッドを分解し、積み重ねなければならなかった。鉄製と木製のベッドを3グループにまとめる必要があった(全部で142台)。それは明日、運び出される。僕は今日、班長 [ここでは作業班の班長] だった。これは好調な進歩。今日のところはスープを一回 [貰った] だけで、五分の一のパンは無かった。今まで炊事場へ行っていない少年たちは、これからまだ [炊事場雑役のため] の順番をもらう、と言われている。

ドウ・マイイアー

1944年9月6日

道端に沿ってパパイヤの木を植えなければならない。そして、すべての裏の畑もニップ<日本人>からの指図で栽培する必要がある。彼は自分が去った後に、畑が素晴らしくなることを願っているのだ<と僕は思う>。

フックス

1944年9月8日

今日、僕たちは炊事場では何も仕事はしなかった。野菜は殆ど入荷しなかった。今晚は、パンと砂糖抜きのお茶、ということなのだ。[...] 10時半に僕たちは早くも仕事を終えた。ところが、4時以前には家に帰ってはならなかった。なぜならば [ニモト] が来る時に誰もいなければ、[A.J.N.] ナ [ウタ] [炊事責任者] は罵^{ののし}られる。ナ [ウタ] は無論そうされたくないのだ。

ドウ・マイヤー

1944年9月9日

すべてのゲームは手渡さなければならない (もちろん、僕のゲームを手離そうとは思わない。僕のモノポリイを一度貸したけれど、雑なうえ、無くなった物があり、箱は完全にこわされ、ゲームの規則もなくなったまま返されたからなのだ)。さらに、工作をしたいすべての少年は申し込まなければならない。

フックス

1944年9月9日

配給パン⁵⁹ は再び酸っぱかった。しかし、[ディック・デン] バーアスはク [ニモト] の所で苦情を言った。それからク [ニモト] はパン屋にお目玉を食らわせ、ここにはアンジン [犬] はいないぞ、と言った。パン屋の話しでは、良くなる筈である。(年長の) 少年たちは再びナ [ウタ] に、炊事係は交替するようにし、炊事場が稼ぐ金は基金へ納めるように、頼み込んでいるところだ。

フックス

1944年9月10日

炊事班は、少なくとも三分の一が交替し始める。まず初めに雑役係は2週間にわたり、仕事がうまくできることを示さなければならない。適切に働けない者はチャンスがない。それで1週間、炊事場で試験的に働き始める。そこでも成績を見られる。もしすべてが順調に進めば、恐らく炊

⁵⁹ 抑留者は配給パンまたはトーコーパンを、抑留所の売店で購入することができた。

事係の三分の二が交替する。

フックス

1944年9月15日

今日の午後、急に大規模な消防演習が行なわれた。僕たちは確実に2時間は「火」を消す作業に取り掛かっていた。「負傷者」も出た。戸外でも演習された。

ドゥ・マイヤー

1944年9月16日

僕たちは、今、鐘の合図を暗記しなければならない。なぜならばニップが昨日、空襲警報のことで僕たちがまだ合図の識別ができず、それらが何を意味するものか知らないと、怒ったからだ。通りを歩いて来ると今は停止させられ、ちょっと次の質問に答えなければならない— 鐘が6回打たれると何か？ 3回では何か？ 10回では？等々。もし、それらを識別できなければ怒鳴られる。これを暗記できないならばとても愚かだ、と僕も思う。

2回 = 点呼。

2回に、1回追加 = 班長と組長たち整列。

3回 = 消燈。

4回 = 全員整列。

5回 = 消防団と事故の際の応急手当班整列。

6回 = 空襲の危険あり— 扉と窓を閉鎖、自宅付近に留まり、待機。

鐘の連打は「空襲警報」を意味し、「警報解除」は鐘10回。

フックス

1944年9月20日

当座預金は廃止され、今後はすべて現金で払わなければならない。この方が確かに良い— 彼らはもはや^{だま}騙せない。今は小銭のことで問題があるだけだ。

ドウ・マイイアー

1944年9月23日

君たちは、食事をどのように受け取るのか、まだ知らないね。さて、何軒かの家々の分をまとめてバケツに取ってくる。僕たちの家はG126で、住宅127と共同で受け取り、(どの家でも21名)42名分(そのうち1名は入院中)、そしてそれらは5つのグループに分けられる。各グループに約8名。ところが、僕たちのグループは最も長く13人。交替で、一つのグループが1番になる<列の先頭に来る>。明日、僕たちのグループは1番。分配後の余りは、僕たちの名簿の順に進む。ポップ用の名簿、スープ用の名簿、ご飯用とヒュッツポット<マッシュポテトにゆでたニンジンとタマネギを混ぜた料理>用がある。すべてきちんと準備されていることが分るでしょう。ああ、そうそう。トーコー<売店>の品物は家単位で受け取る。

フックス

1944年9月24日

明日、炊事[班]は交替する。しかし、僕は明日始まる班には入っていない。

ドウ・マイイアー

1944年9月24日

ヘンク [ヴァイフンバッハ] また^{なぐ}殴られ、部屋主任としての役割から外された。カッシアン [かわいそう]！ 新しい部屋主任は [ヤン] ネイダァホフで、その人もずいぶん親切だ。僕たちみんなは、ヘンクが今去って行くことを残念に思っているけれど、仕方がない。

フックス

1944年10月10日

昨夜2時頃に空襲警報 [があった]。僕たちは整列させられた。そして暗闇の中で45分間はじっとしていた。喫煙してよかった。バケツが十分ではなく、相当の人たちも欠けていた。

ドウ・マイイアー

1944年10月13日

水道の蛇口からの水は、もう殺菌されていない。それで水は一度煮立たせたものだけを飲む。ドンペラー<水につけて加熱する電熱器。項目「食糧」、日記の断片ドウ・マイイアー、1945年1月12日参照>はもう持っていてはならないし、火もこれ以上たいてはならない。それでは一体どうすればいいのか？ でも、中央炊事場ではきっと方法がある。献立が変わりー 7時半お湯、8時ポップ、12時お茶、午後4時にお茶、6時にパンとお茶。それでお茶が3回、多すぎてお茶腹になる。

ドウ・マイイアー

1944年10月15日

4時にコントラ [臨時の] 点呼があった。その後、(もし十分におおい隠されていたならば) 各家に一ヶ所は明かりをつけることを認める、と知らされた。ところが、まだ電球が無い。今晚の点呼はヤップ自身により検査された。僕たちは今4班の2組。今、組 [長] はもう [ヤン] ネイダホフではなく、ステイハーフック氏 (前の授業担当)。僕たちの組 [長] が交替したのはこれで2回目だけれど、新任の人も感じがよい。

ドウ・マイイアー

1944年10月18日

再び鉛筆10本と帳面 (未使用) 10冊を、ヤップのために届けなければならなかった。鉛筆1本または帳面1冊につき、お砂糖1キログラムが支給されるだろう。それでも僕はそれをしない。僕たちはこの先、いつまでここにいるものかわからないし、もし鉛筆がもう無くなってしまったならば、勉強するのにとても困ってしまうだろう。フレーザー氏は、それをしないように僕に忠告してくれた。

メイムリンク

1944年10月18日

朝夕の点呼で発表された多くの規則がある。家具を抑留所内に持ち込んではいけない。トランクは部屋の隅に積み上げなければならない (6個積み重ねることが最も望ましい)。壁には釘を打

ち込んでではない。食器類はダブル [台所] の奥に整頓されなければならない (保管場所の不足から、それらのために大きなテーブルがある)、等々。それらのすべてが正にブスック [厄介な] ことなのだ。平手打ちを非常に恐れていたヒルクウ [ファン・ダー・ハアストウ] の願いとは全く反対に、僕たちはこれらの規則の違反をたびたびする。

ドゥ・マイイアー

1944年10月19日

その [トーコー] パンを現金30セントで買うことができる。年長だけなので、僕たちはだめなのだ。[...] 僕たちは今また毎日、朝7時半と8時半の間、そして午後2時と3時の間に火をたくことができる。

メィムリンク

1944年10月20日

一般的なことをもう少し話そう。僕たちの抑留所は実際のところ、たった一本の長い道、ヴィルム通りから成っている。多くの家々が集まって、いくつかの組を構成している。そして、いくつかの組の集まりが一つの班となっている。僕たちの組長は [ハンス] ヤンスン氏で感じのよい青年。[彼] は僕たちの向かい側の、事務所として昇格された家に住んでいる。そこにはトーコーと図書館もある。

ドゥ・マイイアー

1944年10月26日

いくらかの家々は監督される。僕たちの家にも、年長者が来て寝なければならない。そして今、ヘンク・ヴァイフンバッハは再びここに入って来る。

ドゥ・マイイアー

1944年10月29日

年長者たちも今また所持金をすべて、届けなければならない。ニップからの命令。

フックス

1944年10月30日

今日、自分たちの所持金のすべてを、手渡さなければならなかった。今なお身に付けている現金が見つかったならば、半死半生状態に殴られる。その現金は、実のところ抑留所では無価値で、単にこの規則のためなのだ。

メムリンク

1944年11月5日

二、三日前、僕たちはすべての現金を手渡した。少なくとも、それはタワナンス [抑留者たち] と何人かの兵補との取引関係が見つかったことに、原因しているに違いない。今はもう取引はできない！ とにかくトーコーでは品物を注文することができ、それらは僕たちの預金から差し引かれる。

フックス

1944年11月8日

僕たちは新しい統括抑留所長を迎える。そして今、すべてが最大限に整然として見えなければならない。

フックス

1944年11月10日

今日、僕はまた終日、雑役をした。午後はその高官ヤップのために、向こう側の抑留所で掃除をさせられた。その高官は、現在、全部の抑留所の最高位にいる人の後任として来る。僕たちの抑留所には警備指揮者たちは最早いない。門には今、一人のヤップしかいない。第5抑留所 [バロス第5] のヤップ、つまりワダとカネミツも去ってしまった。

フックス

1944年11月11日

今日の午後、チマヒのタワナンス [抑留者たち] の責任者ミガベ、⁶⁰ 通訳のハッタ [ショーゴ]、そして兵補タンクシイ [兵舎] の責任者による事前視察を受けた。僕たちは、彼らが姿を現わすまでだいたい1時間半、道に整列したまま立たされていた。彼らはかなり満足した、と僕は思う。そして明日は、その最高位のヤップが視察に来る。それで引き続きすべてを整頓しておかなければならない。小さな壺や鍋はすべて台所にしまわれ、何も見つからない。火を焚くこともできない。

フックス

1944年11月12日

今日はその高官訪問により、誰でも雑役は無かった。今日、僕たちの所は特に整然として見えた。トランクを積み上げることさえした。彼が到着する1時間余りも前から、僕たちは既に整列していた。およそ20人のヤップンだった。彼らは抑留所内を歩いて行ったり来たりし、それから再び姿を消した。年少の少年たちの写真を彼らは数枚撮った。それらは *Voice of Nippon* <ヴォイス・オブ・ニッポン>⁶¹ に掲載されるのだろう。[...] クニモトとヤン・ドウ・ビツァー <たかり屋ヤン>⁶² は訪問の結果に大いに満足した。

ドウ・マイイヤー

1944年11月12日

今日はようやく、その本物の大視察だった。なぜならば大尉自身が大勢の部下を引き連れてきたからだ。昨日はちょうど最終リハーサルだった。僕たちは一^{いっしょうら}張羅と靴、実際には長靴下も [はいて]、日向で確実に1時間半は立たされていた。なんと暑かったことか。それらのニッポン<日本人たち>の一人に、僕たちは写真を撮られた。今日の新しい命令は、すべての花は抜き取らなければならない、ということだった。なぜならば^{あわ}哀れなタワナンス [抑留者たち] である僕たち

⁶⁰ 恐らくフックスは、ここでは曹長エガミ ミノルを意味していると思われる。チマヒ (山岳砲兵隊兵舎) に設置された民間人強制収容所のための第2州本部、第3地方本部、総務部長。1944年2月8日から1945年9月30日まで在任。

⁶¹ これは英語による日本の宣伝紙で、バタビアにおいて抑留者 A.F.D. Brodie <ブロディ> , J.H. Ritman <リットウマン> と A. Zimmerman <ジムマーマン> によって編集された。(L.F. Jansen <ヤンスン> 著 *In deze halve gevangenis. Dagboek van mr dr L.F. Jansen, Batavia/Djakarta 1942-1945*. G. Knaap (出版), (発行: 1988年 Franeker, 286)

⁶² 多分、軍属サガミ トラオの渾名と思われる。1944年7月から1944年12月まで抑留所長。

にとっては、あまりにも陽気に映るからなのだ。

メィムリンク

1944年11月12日

今日、「高官」の訪問があった。将校たちは列になった勲章を胸に付けていた。一人は写真機さえ持っていた。数日前に僕たちは、すべてを清掃させられた。昨日は「リハーサル」をした。道路で二列横隊になり、それほど偉くないヤップに『ヨーツケ、ケイレイ』[気おつけ！ 敬礼！]。今日こそは、やっと本番だった。その中の一人が、全部の抑留所を代表する新しい責任者に違いない。

フククス

1944年11月14日

ここヴィルム通りにもパップとご飯のために炊事場ができる、と噂が流れている。

フククス

1944年11月18日

今日から僕たちは、[毎日午後] 1時から4時[まで]火を焚くことができる。

ドゥ・マイイアー

1944年11月20日

ベッドを持っている人はもういない。この数日前に再び、それをすべて引き渡さなければならなかった。

フククス

1944年11月22日

ヴィルム通りの炊事場は、通りのずっぽとはずれにある居住不能な家々の傍に来る。そこでは常に

水が出る。

ドウ・マイイアー

1944年11月24日

ステイハーフック氏は大急ぎで入院した。そして今、[H.] オルトゥホフ氏が代わりの組長。

フックス

1944年11月25日

僕たちの現金を再び手にする。当座預金は廃止された。

ドウ・マイイアー

1944年11月26日

今ちょうど、またトレーラーが石灰を運ぶために入って行った。なぜならば、ここのこの向かいでは何軒かの空き家から、中央炊事場が造られるからだ。[...] 彼らは^{かま}窯のために、もうかなり深い穴を床に掘った。屋根裏から石綿セメントをこわし、壁を打ちくずした。作業はもうはかどっている。

フックス

1944年11月27日

僕たちは支払いを受けた。今後、僕たちは14セント [に加え]、病人のために [割り当てる] 1セントを稼ぐ。

フックス

1944年11月28日

僕たちは再び焚くことが許されている。それで早速お茶を少し用意した。

ドウ・マイイアー

1944年12月8日

僕たちのトーコーは今、完全に変わった。基金はいろいろな理由から廃止された。「無銭」少年たちだけは、月に3キロのお砂糖と棒状の石鹼一本半を無料で支給してもらえる。次に、毎週日曜日にロントン [＜バナナの葉に＞巻かれた蒸しご飯の包み] を一袋。まだ所持金がある人たちは、月に3キロのお砂糖と棒状の石鹼2本を、支払と引き換えに受け取ることが義務づけられる。さらに毎週水曜日と土曜日には、もしそれを欲しければ、僕たちはパンとロントンを注文することができる。その上、今はその3キロのお砂糖と2本の棒状の石鹼を除いて、1ヶ月あたり1ギルダー30セント以上使わなければ、何でも買うことができる、と言われた。それらは例えば、カチャン [ピーナッツ]、タマネギ、チェンゲェ [小さな唐辛子]、チャベ [唐辛子]、タウチョ [発酵させた大豆]、塩漬けの魚など。全部合わせると、1ギルダー30セントに、75セントと38セント (お砂糖1キロ当たり25セントと石鹼1本19セント) で、しめて月に2ギルダー43セント。トーコーにある僕の残高は、あと5ギルダーほどだ。そのお金で僕はまだあと2ヶ月は続けられる。そのほかに、僕はいくらかのお金をマックス [フラーザー] おじさんの所に持っはいるけれど、それが全 [て]。

ファン・エングルンブルフ

1944年12月12日

オランダの貨幣はもはや通用しないので、日本の紙幣と換金しなければならない、という命令が出された。それで僕の最後の2ギルダー50セント札、2枚を手離した。本当にそうするしかなかった。さもなければ、僕はやがてそれを使えなくなってしまう。

ドウ・マイイアー

1944年12月16日

クリスマスのために僕は、半オンス<50グラム>のセルンデン [おろして焼いたココナッツ] と1オンスのロンボック [唐辛子] を注文した。僕はプディス [ぴりっとする味] が大好きだ。やっと僕たち年少も一度、トーコーで何か注文することができた。

ドウ・マイイアー

1944年12月17日

今朝、この向かいの中央炊事場で初めてかまをたいた。試すためだけ。大勢の少年が見に行った。カトリック教会は今日も、こちらの抑留所で行なわれた。別の空き家の中であった。それで僕たちがいる方の>抑留所は、きっと直に向こう側 [バロス側] とは別になるだろう。僕たちの抑留所はもうほとんど独立している。

フックス

1944年12月19日

ヤップの高官の誰かが再び視察に来る。すべてがまた、きれいでなければならない。

ドウ・マイイアー

1944年12月20日

今日、この向かいの炊事場が開いた。まだパップとお茶しか作れない。他の物は相変わらず、向こう側から来るのだけれど、すべてこちら側で食事受領係が受け取らなければならない。

ヨーストウン

1944年12月21日

ここでは、一週間をとおしてふだんの日には聖ミサがない。日曜日にだけ聖ミサがある。それ以外のことは、ここではみんなふつう。点呼はここでは朝と午後にある。朝は7時50分に、午後は7時に。でも、それは1分もしないうちに終わってしまう。

ドウ・マイイアー

1944年12月23日

今また新しいトーコー規則がきめられた。今度はブトゥル [本当に] 何でも買える。買うことでは何も義務づけられていない。僕たちは一ヶ月あたり自分たちのお金から2ギルダー、「無銭者」はひと月に1ギルダー分使える。次に、全員一ヶ月に4回、労賃がもらえる雑役をしてもよい。

そうなる僕たちは合計で56セント完全にもらえ、それを使ってもよい。これは少なくとも良い規則だ、と僕は思う。それで僕たちは、そのことではフレーザー氏をもうそれほど必要とはしないけれど、お砂糖を借りるためには確かにまだ必要なのだ。なぜならば僕たちの分はもう底をつき、新しく注文ができないからなのだ。

フックス

1945年1月1日

ハンス・ヤンスンは恐らく明日、去って行く。役割を果たせず外された[ヒューズ]サールティンクの後任として、彼は年少の少年たちの雑役主任となる。新しい組[長]はフレーザーと呼ばれ、教師ではあるけれど実に好感がもてそうだ。彼はそれまでいたトゥンパット[寝場所]に留まり、寝るためにここへは来ない。

ドウ・マイヤー

1945年1月2日

マックスおじさんは今、向こう<バロス>側にあるいくつかの組の一つで組[長]。そして僕は彼の当番、つまり伝達係になる。

フックス

1945年1月3日

新しい組長はフレーザーという名前。悪い人ではない。この部屋には住まないが、彼の事務所はここにある。そのことで悩まされることはない。それで僕たちは3人で、彼が一時貸してくれたテーブル1つ、椅子3脚、ランプ1つと自分たちの部屋にそのまま残る。

ドウ・マイヤー

1945年1月3日

マックスおじさんは移転する。なぜならば彼は自分の所属する組に、住まなければならないからだ。彼は当番[伝達係]たち4人だけは、そのまま使う。それはハンク[フラインスウ]、ローディ[フルゥヌンダイク]、エドゥガー[ラウレンス]と僕。僕たちは一ヶ月に、彼自身が払う

1 ギルダー5セント分の現物を受け取る。実際のところ、彼は僕たちのためにそうする必要はないのだけれど。引越しすれば、エドゥガーと僕はもしかすると彼の所に住むようになる。

ドゥ・マイイアー

1945年1月4日

両方のサールティンク [ヒューズとアールントゥ] はこの家から引っ越した。空いた場所にヤンスン氏が来た。彼は今、僕たちの雑役リーダーとなり、彼の以前の役職であった組 [長] を、マックスおじさんが今一時的に引き受けている。彼<ヤンスン氏>はとても親切な人だ。

フックス

1945年1月6日

ヤン・ドゥ・ビツァーは退任した。代わりにクニモトがその役割 [に就いた]。警備指揮者として現在オーヤマがいる。ものすごい商売人で、それ以外のことでは悪い奴ではない。

サロモンズ

1945年1月7日

今日、ヤン・ワルトウマンは事務所に呼ばれて、彼のアコーディオンを返してもらった。これは荷物が送られた時、たまたまバロス [第5] に着き、彼ら<日本人>に取り上げられてしまった。でも [抑留所] 管理はヤンがそれを取り戻せるように、きっと世話をしたのだ。

サロモンズ

1945年1月11日

僕たちは12月20日から12月31日までの期間、10日分の支払額をもらった。僕は57セント受け取った。

ドウ・マイイアー

1945年1月12日

今またニッポンの警備[指揮者たち]がいて、定期的に抑留所内を自転車で巡回する。それで時々ちょっと家の中へ入っていく。

フックス

1945年1月15日

今朝、僕はまた点呼にも目が覚めず、心地よく眠ってしまった。僕は毎日午後の点呼にだけ出よう、と考えている。毎朝、寝床にいる方がずっと快適だし、彼らは僕がいなくてもどっちみち気がつかない。

ドウ・マイイアー

1945年1月18日

これからは再び、僕たちの番号をきちんと付けていなければならない。僕[の]はもちろんとつ^{こわ}くに壊れてしまったので、竹で一つ作ろうと思う。

フックス

1945年1月18日

今朝、僕はまた点呼に姿を現わした。住宅主任によると、僕の不在はかなり目立った、ということだ。

ドウ・マイイアー

1945年1月30日

[マックス]おじさんの所に一人の少年が入ってきた。そこで監視される。彼は相当の盗みなどをしているらしい。罰として彼は3ヶ月間、その家にいなければならない。

ドウ・マイイアー

1945年1月31日

トーコーは〔密輸が原因となる罰則で〕まだ再開していないのに、2月1日からまた新しいトーコー規則がある。僕たちは今、手に2ギルダーもらったし、それで欲しい物を買うことができる。さらに週に2回、雑役をさせられるので月に1ギルダー追加にかせぎ、これも僕たちの手に入る。ところが、今は小銭のことで問題がある。ここでは、まず僕たちは小銭を届けなければならなかった。そして今、大きいもので返してもらおう。それはもちろん面倒なことだ。でも、きっと解決するだろう。

フックス

1945年2月5日

今朝、僕はそれほど長くは寝床にいなかった。かなり早くから僕たちは片付け始めた。壁に掛かっている物や、貼ってある物は全部取り外さなければならない。写真や、壁に書いた物も、そして電気のコンセントでさえも。すべて再び台所に置かなければならないのだけれど、僕はそれをしない。僕の棚は床の上に置いたし、帽子と靴はその隣りに。がらくた類を捨てるのが、正にそうする目的であったのに、今は初めよりも更に混乱している。[...] こちら側のトーコーは廃業となった。向こう側のトーコーは今、バラン〔品物〕を直ちに僕たちの組の配給係たちに送る。ヘンク〔カルスホーヴン〕は組の配給係になった。

フックス

1945年2月11日

今朝、僕は再び点呼には確実に出なければならなかった。パップが運ばれてくるまでベッドで寝ていることは、今や永久に終わってしまった。

メィムリンク

1945年2月12日

お金を持っている人たちが、茶色い隠元豆を買い占め、お金をわずかしか持っていない人たちが、

何ももらえなくなってしまうことを防ぐために、茶色い隠元豆の定期購入券⁶³を受け取ることができる。1ギルダー50セントで20日間、生のまま50グラム、または煮たもので100グラムもらう。体の弱い人たちは更に定期購入券の完全なものまたは半分を、追加で受け取ることができた。チャールス [ドゥ・ヴィルドゥ] はまだ10日分の追加がある (それを僕たちが一緒に分ける)。そしてヒルクウ [ファン・ダー・ハーストゥ] は20日分。

ドゥ・マイイアー

1945年2月20日

パップも [マックス] おじさんは、ビイツ [配給後の余剰] をいつも僕たちのために獲得する。彼は組長の立場にあることで、それを毎日 [余分に] もらうことができる。

ヨーストウン

1945年2月22日

きょう、ハンス・ヘーとぼくは野菜洗いをさせてもらえた。これは今度、そのようにきめられた。14歳になっていない少年たちは軽い雑役をもらい、そうすることで少しはかせげる。

フウクンス

1945年2月28日

今晚、僕は番号を刺繍し始めた。彼ら<日本人>は随分細かいことに目をつけ始める。明日の朝には仕上げよう。今はもう暗くなりすぎた。あと数字を二つと縁をしなければならない。

⁶³ 抑留所のトーコーにより購買された配給以外の食糧を、可能な限り平等に分配するために、抑留所指導管理により茶色い隠元豆、テンペイ [発酵した大豆からできたクッキーの一種]、ウビ [サツマイモ] とトウモロコシの定期購入券が少額で発給された。数週間の一定期間中に毎日、この食糧の或る分量が煮たもの、または生のままで定期購入者に配給されていた。

ドウ・マイイアー

1945年3月7日

今日はまた、ご飯、スープ、サンバル<細かく刻んだ唐辛子入りの、ぴりっとする味の添え料理> (そのサンバルは、またものすごくおいしかった) と茶色い隠元豆が出た。その茶色い隠元豆は、僕たちが受け取ることを義務づけられた20回分で2ギルダー50セントの、新しい定期購入券からのものだ。

ドウ・マイイアー

1945年4月4日

トーコーはここでは、チハピットとは全然違うやり方で営まれている。そのことは君たちもきつと分かると思うけれど、そうでしょ？ 毎日、品物を注文できる。けれども、注文した品物をいつも完全にもらえる訳ではないのだ — それで、すでに預け入れたお金の一部を — その場合には返してもらおう。果物も同じように殆ど毎日トーコーから (もちろん払わずに) もらえる。トーコーからそれは組の配給係たちのところに行き、そこからさらに各家のトーコー係へ届き、その人は自分が所属する家全体に分配する。ここでは列に並ぶ必要は決していない。

ドウ・マイイアー

1945年4月24日

規則厳守のこと、そして整理整頓のことでまた試合があった。僕たちは三等賞をとった。一等賞は茶色い隠元豆1キロ、二等賞は2分の1 [キロ]、三等賞は4分の1 [キロ] だった。

点呼記録 ドンカース [J.W. Donkers、組長により記録された]

1945年5月10日

ニップの^{いらだ}苛立ちと関連して、規律正しく敬礼 [お辞儀!] と叫び、そしてお辞儀をすることを、各人のために忠告する。はっきり敬礼と叫ぶことにより、同時に仲間に警告し厄介なことを未然に防ぐ。

ドウ・マイイアー

1945年5月21日

抑留所長のクニモトは去った。彼は兵補たちを訓練しなければならない、と言った。それを彼はうまくできる。門の所でいつもそれをやっていた。今、別のヤップがいて、軍曹だ。⁶⁴ 僕たちの方から協力するのであれば、彼の方からは罰則をできる限り軽くするだろう、と言った。それだから僕たちは、お米を230グラムしかもらえない。

フックス

1945年5月22日

昨日、クニモトは去って行き、その代わりに二人のエコノーム⁶⁵ がいる。早速、僕たちはバナナとパイナップルを [もらった]。そして今日は結構な分量を。大きな進歩だ。どんな変化がこれからも更にあるのか僕は興味津津^{しんしん}。今までのところ実際に、僕たちは変化には何も気が付いていない。しかし、きっとあるだろう。ル [一ウィガジャ] のヤップも恐らく去るだろう。彼は養魚池の魚をすっかり釣ってしまい、続いて豚をつぶしにかかる。

フックス

1945年5月23日

僕は歯医者には行かなかった。10時に臨時点呼があったためだ。僕たちが新しいヤップンに念入りに数えられてから、ヤップンは二人とも演説をし、両方とも同じことを言った。つまり、僕たちは行儀よく行動し、家の中などすべて清掃しなければならない。そうすれば彼らの方も、僕たちを支援するであろう、ということだ。戯言^{たわごと}は11時10分過ぎに終了した。

⁶⁴ 曹長シモンヤ カズジで、1945年5月から1945年8月まで抑留所長。

⁶⁵ 1943年12月末から1944年3月末まで民間人抑留所は、日本軍属による管理下にあった。彼らは一般に *econom* <エコノーム> (複数 *economen* <エコノームン>、原義は経済学者) と呼ばれた。恐らくフックスはここで、軍属だと考えたのだろう。<訳注：軍属には行政一般、運輸通信などの要員も含まれ、純粋の経済人 (経済顧問) のみをさすものではなかった。>

ヨーストウン

1945年5月27日

これからはトーコーで1日1人あたり10セントしか使えない、ときょう知らされた。今は抑留所に入ってくる物すべてについて、10日毎に1ギルダーの定期購入券をもらえた。[それ]は炊事場をとおして配られる。

ファン・エングルンブルフ

1945年5月29日

^{おととい}一昨日新しいヤップが、一日あたりタワナン [抑留者] 一人につき出費が許される金額を7セントまたは10セントに決め、どちらなのか僕は知らないけれど、その結果5.5オンス<550グラム>のグラ ジャワ [赤シュロ糖]、100ccのシロップなどのようなトーコーのバラ^ン [(抑留所の) 売店からの品物] が再び配給された。今日、幾人かは医者^のの証明書に従って卵をもらい、それもただ。僕も幸運な一人だった。

ドゥ・マイイアー

1945年5月30日

雑役作業員たちはこの頃、上半身は裸で出かけなければならない。ズボンだけをはき、ハンカチか手ぬぐいを帽子の中にかぶる。[...] これらはもちろん、取引を失敗させること、または前もって防ぐための手段なのだ。[...] お金を持って行くことは最も厳しく禁止されている。エドゥガー [ラウレンス] はお金をズボンの折り返しにはさんだ。それを巻き上げると全然感じない。彼らは僕たちを今、望むだけボディチェックすることができる。

ドゥ・マイイアー

1945年6月1日

ところで、大部分の畑は [家の] 裏側にある。たくさんのトマトなど。しかし、スホートウル氏の許可無しに、畑から何か取り入れることは禁止されている。それにスホートウル氏がまず初めに、ヤップに聞かなければならないのだ。複雑でしょ？ この禁止にも拘わらず、僕たちはそれでも昨日トマトをもぎ取った。そしてクロコットウ [スベリヒユ<食用野菜>] も。これで [マックス] おじさんの誕生日のために、僕たちはサラダをこしらえた。最高においしかった。

ドウ・マイイアー

1945年6月2日

僕はこの新しい帳面をさっそく、愉快的なことで始められる。炊事用のつぼ、おなべ全部と、アングロ [こんろ] を届けなければならない。[マックス] おじさんは一番きれいな炊事用の缶を選び出し、失敬してどこかに隠したか、または屋根裏にしまった。おなべなどはもちろん誰も届けなかった。

フックス

1945年6月2日

ヤップは今後、3点以上の衣類を保持してはならない、と決定した。残りは渡さなければならない。僕はズボン2本とシャツ4枚を手離した。ズボン以外はすべて擦り切れていた。僕たちは交換することができる。

ドウ・マイイアー

1945年6月3日

その新しいヤップは、さらに愉快的なことを考え出す。本当は彼ではなく、それを決めるのは山岳砲兵隊なのだ。彼はすべて正確に従うだけなのだ。彼は模範で、昇格したいように見える。命令は次のようなものだ。ズボン2本とシャツ2枚を除き、すべての衣類を手渡さなければならない。それを抑留所管理が、ズボン3本、シャツ3枚、パジャマ2揃い、袖なしのアンダーシャツ3枚、パンツ3枚、長靴下4組、ハンカチ6枚を除くすべての衣類を届けなければならない、と変更した。それでももちろん相当にひどいものだけれど、僕は構わない。万一、何も着ないで家に帰るとしても、家に着きさえすれば、それでいいのだ。僕の衣類からは白いズボン、作業ズボンと、もちろん長ズボンをとってある。シャツについては、ブルー、風除け用のスポーツジャケット、そしてその白いワイシャツをとっておこう、と思う。それは僕の最愛なる優しいお母さんが、彼女の誕生日に去年、僕のために作ったものなのだ。お母さんはその機会に、僕がきちんとして見えることを心から願っていた。

メイムリンク

1945年6月3日

青少年医療管理というようなものがある。2週間前、僕はそれで健康診断された。体重がかなり減ったかどうか調べられ、空腹かどうか、視力が更に劣えたかどうかなど、他にももっと質問された。ひどく衰弱していれば、雑役食を受けるために鍛冶場か炊事場で働かされる。

点呼記録 ドンカース

1945年6月3日

ニッポンの責任者〔日本人の抑留所長〕は次のことを決定した。

1. 家の周囲及び裏側を、さらに念入りに清掃すること。
2. まだまだ植付けされていない土地（家の裏側も同様）に、ス〔リナムの〕スベリヒユを植付けること。接ぎ穂は菜園班に申し込む。さらに、定期的に除草すること。自分の家の裏側にある畑は、各自の責任で面倒を見ること。花々は禁止されている。

ドウ・マイイヤー

1945年6月5日

ジャヘ〔しょうが〕を今また開店しているトーコーが、閉鎖される前に注文することができた。ところが...今、大きな問題が起こる。一日に10セント分しか注文できない。この〔10セントで買える追加の食べ物〕はあまりにもわずかなので、料理に使われたもので炊事場から〔直接〕もらう。なぜならばテンペイ〔醗酵した大豆からできたクッキーの一種〕なども、すべて抑留所基金から支払われる必要があるからだ。抑留所基金はトーコーがいろいろな品物から得た収益により、これから設けられるか、またはもう出来上がっている。これは確かに良い規則だ、と思わないかい？

フックス

1945年6月6日

衣料品引渡しでも、多くは集まらなかった。大勢がそれをしない。僕の物もトランクにまた詰め戻した。もし、家宅捜査が不意にあれば、僕はそれをうまく隠す。

ドウ・マイイアー

1945年6月9日

昨日、班長たち〔何組かをまとめる責任者たち〕と組長たち〔何軒かの家をまとめる責任者たち〕は再び整列させられた。山岳砲兵隊は僕たちが次の物だけ（したがって更に多くのもをを引き渡す）は保持してよい、と決定した。作業着（ズボンとシャツ）2着、外出用のパカヤン〔衣服〕。さらにパンツ3枚、ハンカチ3枚、ソックス2組、靴2足、毛布2枚、カバーつき枕1つ、シーツ1枚、マットレス1枚と蚊帳^{かや}1つ。睡眠用にはパジャマがたった1揃い、コート、レインコートとチョッキそれぞれ1着。それで袖なしアンダーシャツはだめ。ずいぶんたくさんあるように見えるけれど、それはひどいことだ。僕は白いズボン2本を作業ズボン2本として取っておいた。[...] 僕のパンツはもうすっかりいたんでいた。それで僕はその代わりに、グレイの作業ズボン2本をパンツとして残しておいた。ファン・エス氏からもらったズボンはかなり使い古され色あせていたので、それもパンツ代わりに取っておいた。[...] ファン・エス氏のその袖なしアンダーシャツは、まだ一度も着たことがない全くの新品で、僕は雑役丸パン2つと交換するため渡した。今、1つ4ギルダーする。[...] 僕の何枚かのアンダーシャツから、とにかくさらに1枚だけは取っておいた。ここ数日ばかりに寒いので、重ね着しなければならない。他の2枚を僕たちは雑巾として台所にほうり投げた。もしも、それらが必要になれば、またいつでも使える。そうじゃないかな。[...] 僕の風除け用のスポーツジャケットは、コートとしてとってあった。パジャマ2揃いは届けた。[...] トランクの中は今、かなり空きができた。当然でしょう。

フックス

1945年6月9日

今日の午後、急に LBD [Luchtbeschermingsdienst] <空襲防衛演習>があつたが、僕は病気の報告をした。全然やる気が無かった。2時半から4時15分前〔まで〕続いた。家々は閉ざされ、消防士と EHBO<応急手当班>の人たちは塹壕の中になければならなかった。消火用バケツを使つての演習は全く無かった。それがしばしば繰り返されないことを、僕は願っている。

フックス

1945年6月11日

ヤップは再度、いくつかの規則を設けた。すべての壺と鍋は台所に、棚は壁から取り外し、マットレスは毎朝、巻いてトランクの上に置く。明日、彼は検査に来る。僕たちは、そんなやり方を多分10日間ほどは、守らなければならないだろう。それから棚は再び壁に吊るし、衣服は釘に

掛けられるようになる。僕のマットレスはいずれにしてもトランクの上には置かない。トランクはつぶれてしまうからだ。保持してはならない衣料品は、しっかりとひとまとめにした。もし、彼が僕たちの家の中に足を踏み入れたとしたら、それを急いで屋根の上に放り投げることができる。

フックス

1945年6月12日

今日、僕たちは大掃除をした。僕は自分のトゥンパット [寝台] を日向に出したので、マットレスの上に置かなくてすむ。棚は壁からはずし、壺、鍋と皿は台所にある。そこはオブラル ブザール [大売り出し] のように見える。今、汚れた足では誰も家の中に入ってはならない、と決めた。奥の方も台所も駄目だ。交替で、一人が家全体の雑巾がけをしなければならない。それで11日に1回、順番が回って来る。この方法で、すべての物を少なくとも清潔に保てる。パンが出る少し前に、軍曹が僕たちの組を点検するためにやって来た。彼は僕たちの家の中には入って来なかった。しかし、すべて見事に整頓されている、と組長のフラーザー氏に言った。彼がここ二、三日中に再び点検のために、戻って来るようなことをしなければ良いのだが。そうすればタワナン [抑留者] は狭いトゥンパット [寝場所] をまた「楽しく」するのだ。

ドゥ・マイヤー

1945年6月12日

新しいプリンタ [命令] — 家の中に物干し用ロープを張らないこと、壁には何も貼らないこと。すべて各自のトランクに詰め、トランクは携帯用マットレスの下に置く。壺、鍋、スプーン、その他の雑品は何もかも台所にしまう。まあ、愉快的なことだ。トランクを簡単に取り出せない。この帳面を台所にある僕の小さな箱の中にしまった。本当は、これはもう前に出されていた命令で、今もし実行されなければ、厳しく処置されるだろう。それからは逃げられない、そうあるべきだから。11時にニップは点検に来る。家々の前にある抑留所菜園班の所有する小さなウビ [サツマイモ] 畑は今、各々の家で手入れをし、水をまかななければならない。それは、もちろんそう樂觀 [的に] は望めない。なぜならばウビは、つまりヘランバストゥ [奪われ] たのだ。僕たちが前回何も食べ物をもらえなかったとき、おおっぴらにサツマイモがすっかり奪われてしまった。

フックス

1945年6月16日

今朝はパップを貰う第一番目になるために、僕は既にかなり早く起きた。僕たちの家は今日、最後の順番なので、もし列の後ろに並ぶと、鍋の底から擦り取ったものを貰う。もし足りなければ、全然もらえない。今日も新しい盛付係だった。パップの分配盛り付けはものすごく難しい。それで僕はもう長いこと問題がある、と気が付いていた。そして本当に最後には彼は分量を減らし始め、それでも2盛り分不足だった。ハンス [ヌウマン] と僕はまだ大盛りを貰えた。

ドウ・マイイアー

1945年6月17日

届けられたトウモロコシも今は煮てから、それを届けた人たちに配給される。そしてトウモロコシを今、注文することができる— 生^{なま}で50グラムは、煮ると150グラムにもなるだろう。トウモロコシは<煮ると>3倍重くなるからなのだ。その値段を僕はまだ知らないけれど、10セントほどのことなのだ。⁶⁶ 雑役係でも例えば、鍛冶工、ルーウイガジャ<農園>作業員などはこれに参加しない。彼らはもうパンとロントン [バナナの葉に>巻かれた蒸しご飯の包み] を買うことが許されている。時々、石けんとタバコも実際には買える。前日、翌日のために何が注文されたか知らされる。ゆでたトウモロコシとウビ [サツマイモ] が主になるだろう。皆がそうすることはもちろん分るので、女性抑留所でのように誰にでも同じ分量が配られる。

ドウ・マイイアー

1945年6月20日

僕たちは家宅捜査を受ける。おそらく、電気 [器具] についての (日本人自身による) もの。お皿を持っていない人々は皆、グダン [倉庫] から一枚もらえる。[マックス] おじさんは52枚のお皿を申し込ん [だ]。

⁶⁶ これは抑留者たちが配給の食糧を補うために、抑留所のトーコー<売店>で出費することが認められた一日当りの金額であった。本項、日記の断片ヨーストゥン 1945年5月27日及びファン・エングルンブルフ 1945年5月29日も参照。さらに項目「日本人による抑留者の取扱い」参照。

ドウ・マイイアー

1945年7月9日

16歳から20〔歳〕までの少年たちは、交替でトーコーパンを買う機会がある。〔パン〕四分の一で20セント。昨日、僕たちの組が順番〔だった〕。僕たちがもちろん全員16歳から20歳までだったこと、知っているでしょ。

フックス

1945年7月12日

ヤップは全く愚かなものだー 今日から、すべての寝台とマットレスは9時から5〔時まで〕日に当てなければならない。人々もみんな戸外に出て何かしらさせられる。彼が直に立ち去ることだけを僕は願っている。日曜日に170人の作業員と共に去る、と言われている。

ヨーストウン

1945年7月12日

寝台は毎日外に出さなければならないと、きょう知らされた。そして、雑役がない人はだれでも、ナンキンムシまたはナンキンムシのたまごを20個、わたさなくてはならない。スヘンク氏はしばらくの間もう授業をしない。ヤップがあいかわらず上の方<バロス側>に来て、みんなにナンキンムシを何ひきつかまえたか、と聞いたからなのだ。

フックス

1945年7月13日

今朝、点呼の後、僕は直ちにトウンパット〔寝台〕を外の通りに運び出した。〔そこ〕はひどく場所不足をきたすに違いない、と思ったからなのだ。現にそうでもあった。寝台やマットレスのために、通りでは殆ど歩けなかった。もし僕たちも皆が新しい寝台を貰うことになり、この数日中にあるならば、実際にもっとひどくなるだろう。[...] ヤップは各々のタワナン〔抑留者〕が明日20匹の南京虫を届けなければならない、と命令した。さらに彼は〔音楽〕バンドとボクシング試合を計画したいのだ。厄介な奴だ。

フックス

1945年7月14日

今朝、再び混乱しているもの全部を外に出し、南京虫を捕まえる。ハンス [ヌウマン] と僕は僕たちのトゥンパット [寝台] から、[それ] を一回に40匹は捕まえられなかった。心配には及ばない。なぜならば他の連中が十二分に捕えたからだ。僕たちの家は、義務づけられた数以上を届けた。ヤップは今日、昨日ほどひどく厳しくはなかった。今朝、彼は誰かを短時間また殴った。しかし、それからは戻って来なかった。彼はそれでも、クトゥ ブスックス [南京虫] を今から毎日20匹届けなければならない、と決めた。僕には、それらが既にはいないと分っている。それで、そのいやな害虫が見つければ、まだその代価さえ貰えるのだ。

フックス

1945年7月15日

さらに大量のウビ [サツマイモ] が期待できる。トーコーが一日10セントで、今にわかに開店するらしい。これまでに僕たちが入手したトーコー ウビ<売店で販売のサツマイモ>は、雑役係たちだけが買うことができた。これからは<雑役係以外の>普通のタワナン [抑留者] も10セント出費することが許される。

フックス

1945年7月16日

今朝もまた同じ時間割だった。あらゆる物を外に出し南京虫探し。雑役係たちは、それを免除されたことで、家にいる仲間が彼らの割り当て分も探さなければならない。

点呼記録 ドンカース

1945年7月16日

抑留所管理は次の点について、特別な注意を払うように要請する。

我々の抑留所における現在の食糧事情は、大多数の抑留所住民にとって非常に不利であることは、我々全員に周知している。我々はそのことに関連して、特に病院に収容された患者たちのことを思い出す。しかし、我々の抑留所には立場上、極めて有利な状況にある幾らかの人々のグループ

がある。そしてその人たちは、常識的に考えて食べられる分量以上を確保することができる。そういう事が、例えばパンのような食物が定期的に販売されている、ということから判明している。

この食糧が販売され、広範囲に配給されることについての反対は何もない。しかし、この有利な状況下で不当に得た食糧を販売できることに関して、厳しい反対がある。わずかさざる食糧をもらう彼らの抑留仲間に対して、異常に高い価格が計算され、その結果、絶対に買うことができない状態にある。少量の分配を与えられるこれらの人々の厚生を、保護することの必要性との関係で、食糧販売にあたり次に挙げる価格が設定された。それ以上の価格は認められず、それを超えた場合には罰則により提供された食糧は没収される――

大型ボル<丸パン> ⁶⁷	1ギルダー50セント
小型ボル<丸パン>	1ギルダー
ウビ [サツマイモ]、100グラム	25セント

我々は各位の協力を求めると共に、各位がこの価格を守ること、そしてその違反について報告することを依頼する。より高い価格で買う人たちも同様である。不測の違反者に対して厳しい処置をとる必要ではないだろうと期待する。この規則はこの通達の発表後、直ちに実施される。

フックス

1945年7月18日

マットレスは午後1時に、再び家の中へ取り入れてよかった。僕は気持ちよく眠った。[...] スホートゥル氏はヤップのところへ行き、人々が点数を完全に得るために、南京虫を捕りに行くというこの事は最早できない、と言った。彼が<話し合いで>達成したものは、今や南京虫の代わりに [南京虫の] 卵も届けてよい、ということだ。

フックス

1945年7月19日

抑留所のために現在、新しいトーコー規則がある。儲けになるものはすべて一般基金に納める。鍛冶とル [ーウィガジャ] 作業員は今後、トーコーパンまたはロントン [＜バナナの葉で＞巻かれた蒸しご飯の包み] は貰えない。そのお金で彼らは10日に [1回] 70トンのウビ [サツマイモ]、200キロのトウモロコシ、さらに塩漬けの魚少量を購入する。それは順調に進みそう

⁶⁷ 1945年2月20日から、抑留者たちはカデット形のパンをもらった。簡単にはボル<丸パン>と呼ばれた。

だ。21日から実施。

フックス

1945年7月23日

今朝、僕は意地を張ってマットレスを外に運ばなかった。ヤップは罵^{ののし}ったり殴ったりするためには、抑留所には絶対にもう来ないからだ。

フックス

1945年7月25日

僕は今日、食事受領係だった。コーヒーを配った。その結果は一 ボス [＜彼＞自身] のために1リットル。僕の砂糖の備えは、何と少なくなったことか。今晚はスープを取ってきた。明日はパップを取りに行かなければならない。

フックス

1945年7月26日

すべての道具が持ち去られた。抑留所は素晴らしくきれいでなければならない。明日、すべてのタワナンキャンプ [強制収容所] の最高責任者が訪問する。再び明日は楽しい日になる。今晚、点呼の後で20分間、敬礼学習があった！ [お辞儀の練習]。ヤップによると、僕たちはまだ十分に良く分かっていなかったのだ。

フックス

1945年7月27日

高官ヤップは鍛冶場にしか行かなかった。従って彼らのことで僕たちは悩まされなかった。

フックス

1945年7月30日

今日、僕たちはパンをもらえず、トーコー ウビ [抑留所の売店から買うサツマイモ] だった。それで彼らは小麦粉を節約する。その小麦粉の代わりに僕たちは、毎朝およそ500ccではなく600 [cc] のパップを貰う。1週間に1回、彼らはそれを実施する。極めて良い対策だ、と僕は思う。それで毎朝いくらか多くも貰う。

フックス

1945年8月2日

食事の受領はひどく複雑になっている。僕自身、トゥンパット4つ [ここでは、4人分の食事] が必要だ。さらに雑役係のために手配しなければならない。けれど一人一人がすべて違うように希望する。サンバル<細かく刻んだ唐辛子入りの、ぴりっとする味の添え料理>は別に、またはウビ [サツマイモ] はご飯のわきではなく、などと全くそれは頭に来るね。間違いも結構あるので、それを直さなければならない。

フックス

1945年8月3日

その上、僕は丸パンも買った。僕はマーカン ヘバットウ [豪華な食事] が欲しかった。この丸パンは第4 [チマヒ第4] では1ギルダーで買い占められ、僕たちの抑留所では1ギルダー50セントで販売されている。収益は [抑留所] 基金へ行く。これは確かに良い規則だ。

フックス

1945年8月7日

僕のトゥンパット [寝台] をもう一度外に放り出した。幸いに、そのことでも変化があった。僕たちの家は今、月曜日と木曜日にのみバラン [荷物] を外に運べばよい。したがってそれは良い処置だ。なぜならば、毎日ではあまりにも馬鹿げていたからだ。

ヨーストウン

1945年8月8日

点呼の時に知らされた。ナンキンムシがいない人はだれでも、ベッドを家の中においてよい。でも [それを] 週に一度はさがしまわり、風通しをしなければならぬ。そしてすべてのナンキンムシを [僕たちは] わたさなければ [ならぬ]。

日本人による抑留者の取扱い

フックス

1944年8月26日

今晚、ヤップの監視係と言い争いをしたのは空襲警報中に電気がついていたからだ。僕たちには警報など聞こえなかった。すると急にあいつは外に出て来いと、ドアの前で罵っていた。僕たちはかなりひどくぶたれたが、ヌトゥ [ハンス ヌウマン] だけは打たれなかった。

フックス

1944年9月3日

今晚10時半に電気を消した時、K [クニモト] が突然部屋に足を踏み入れた。マットレスは床に敷かれてあった。あいつは懐中電灯を手にして部屋に入り、また出て行ったようだった。僕は死にそうになるほどびっくりし、少なくとも半死になるくらい殴られるだろうと思った。

ドウ・マイイアー

1944年9月11日

残念ながら、少年たちが闇取引で捕まり、ヘンク [ヴァイフンバッハ] はひどい目にあった。つまりヘンクはかなり強く殴られ、もう少しで収容所のトーコー [商店] が1ヶ月閉店されるか、又は捕まえられた少年たちが憲兵隊の所で20日間の禁固を受けるところだった。どんなにひどく恐ろしい結果になるのかをあの連中たちは前もって考えるべきなんだ。しかしもう一度闇取引をした者はこれからの抑留生活中、僕らの (オランダ人収容所リーダー] 事務所によりトーコー [商店] 番からはずされるのだ。

フックス

1944年9月17日

初めは無料だったグラバト [氷砂糖] を (100グラム65セントで) 買わなければならないという通知を突然受けた。その金はK [クニモト] のふところに入るのだ。悪党め。

フックス

1944年9月26日

今晚、病院の誰かが闇取引をした。今晚9時に収容所全員が整列しなくてはならなかった。犯人は発見され殴られ、僕たちの仲間たちにもひどく打たれた。

ドゥ・マイヤー

1944年9月27日

昨夜、急に全員がトーコーの前で整列しなければならなかった。もう既に暗かった。病院でまた闇がおこり、今度彼らは誰がやったのかを探り出したいのだ。その結果の全てを話すのはよそう。楽しいことだけを覚えておこう。

ドゥ・マイヤー

1944年10月4日

今朝初めのうちニップ（日本人）はとても上機嫌だったが、不意にひどく不機嫌になった。それは誰かの100ギルダー（少額ではない）が盗まれたという申告があったからだ。（全抑留者がトーコーの前へ）急に整列しなくてはならない時まで、全員真昼の太陽の下で草むしりの雑役をしなくてはならなかった。[...]今日の午後：100ギルダー盗難事件のために、皆は持参金を全部出さなくてはならなかった。本当にしゃくにさわる。

ドゥ・マイヤー

1944年10月7日

ニップによると僕らは重労働をしてはいけないのだ。例えば年少の少年たち、つまり僕らはもう庭での鋤作業をしてはならず、だから年長の少年たちがそれをしなくてはならない。なんて良い待遇なんだろう？！僕らはもう打たれることに恐れる必要はないんだ。ニップは小さな少年たちを決してぶたないと言った。その一方、ニップに鍵とポケットナイフを押収されてしまった。

フックス

1944年10月22日

この頃、兵補たちが如何に親切で、融通がきくのかには驚くべきだ。働かなくても決して打ちもせず、何も言わない。時には完全に姿を消し、しばらく監視なしのままのときもある。

メィムリンク

1944年10月23日

浸水電熱湯沸かしの使用は黙認されていた。今度一つ作ったが、屋根にある電線が欠けているのでまだつなげられない。

ドゥ・マイヤー

1944年10月28日

今日、僕らは向こう側 [ヴィルム通り] にあるベッドを取りに行かなければならなかった。それはニップによると13、14才の少年たちは皆ベッドに寝なければならないからだった。昨日マットレスをまだ持っていなかった大部分がそれをもたらした。

フックス

1944年10月29日

今日もまた一日中道路で雑役をした。石を粉々に砕き、かなりの石のかけらを担いだ。午後戻って来ると、ヤップは長々ととがめるように説教をした。僕たちは監視が来るときだけ仕事をするが、いなくなると休憩をとると言った。今度は3日間で残りの道を終了させなければならない。更に原住民や兵補に衣類を売ることについてのプルカラ [問題] に関して説教した。それが再度起きた場合には、トーコーは閉店されるだろう。憲兵隊によりタワナンス [抑留者たち] に対してはタバコのみ売ってよいと決められた。従ってパンと砂糖は手に入れないのだ。昨晚トーコーの大売り出しがあった。

フックス

1944年10月31日

ヤップは浸水電熱湯沸かしのことで誰かを捕まえた。今、全部の浸水電熱湯沸かしを提出しなくてはならない。[...] その上、夜10時半に電灯の元栓がしめられ、翌日の夜9時にやっとまた開けられる。だから浸水電熱湯沸かしはもう使用できない。

ファン・エングルンブルフ

1944年12月7日

ヤップがどのようにごまかし、だましているのか今度良く分かった。13セントで買えるロントン[バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み]はヤップが僕たちの分である配給米を取り上げていたのだ! 肉は入手できないが、収容所は肉を買うことができる。あきれたことに豚は800ギルダーもするのだ。蛋白質として収容所が既に(トーコーの品物に対する利益で)買ったオンチヨム[醗酵させた小さな黒豆料理]は調べの後でココナッツの繊維であることがはっきりした。有り難いことに調理場では時々アチャール クティムン[キュウリの酢漬け]を出してくれるので、残りの食べ物にいくらか味がつく。各タワナン[抑留者]に対して、わずか84グラムのブラス[精米]が割り当てられる。

フックス

1944年12月7日

兵補たちもひどく親切で、時たま僕たちに手製巻きタバコをおごってくれた。彼らも戦争がほとんど終わりに近づいていることに気付いているのだ。

ドウ・マイイアー

1944年12月16日

話し変わって、門の所にいた兵補がエドガー[ラウレンス]を激しくぶったのは、お辞儀をしなかったからだ。今日あいつは一日中殴りまくっている。どうやら嫌な奴らしい。

フックス

1944年12月22日

今晚ヤップが巡回に来た。あいつは窓から中を覗き見したが、全て大丈夫だった。僕たちの隣の部屋で、ヤップは覆いのないランプを壁にぶつけて壊した。

フックス

1944年12月27日

ヤップはものすごく神経質だった。僕たちは道整理を1時までに終わらせなければならないと午前中に聞き、時間どおりに終了できた。その後午後には5時までに全てを『きれいに』しなければならなかった。それから突然7時に13才から45才の人たち全員が雑役のために整列しなければならなかったのだが、僕たちは戻された。今度は朝の6時半に点呼があり、パップ [粥] を取りに行き、7時には全員並ばなければならない。騒々しくなる。最後にヤップはきちんと覆いがされていないランプを壁に投げて粉々にし、今度は新しいランプをその人たちにあげた。あいつらは本当に馬鹿げたことをする。

ドゥ・マイヤー

1944年12月31日

今朝、おじさん [マックス・フラーザー] の所でサラダ菜を洗っていると、追加点呼があった。全員整列しなくてはならなかったのは兵補との闇取引がまた起きたからだった。レインダート・ステイハーフック [組長] さんがむちで打たれたと人は言うが、幸いにも僕はそれを見ることができなかった。僕はベルトでたたきピシッと鳴る音を聞いた。それも大晦日だというのに恐ろしいことだ。それから犯人が現われ、もちろんその人もむちで打たれた。ヴィルム通りの班長と組長たち全員は辞職しなければならず、新しい人たちに交替される。マックスおじさんはこの班の班長をやってみるつもりだ。

フックス

1944年12月31日

また闇取引が行なわれ、それは山岳砲兵隊のヤップに発見された。11時に僕たちは突然全員整列しなければならず、犯人が名乗り出るまで直立していなければならなかった。3分以内に犯人が

出て、その人はその場で物凄く打たれ、蹴られた。少し後、ヤップがヴィルム通りの全班長と全組長たちを首にしたのは、道が掃除されていなかったというのだが、もちろんこれはこじつけだ。

ヨーストゥン

1945年1月2日

11時45分追加点呼。僕らは皆整列しなくてはならなかった。ヤミが行われ、今犯人が名乗り出なくてははいけなかった。でも誰も出て来なく、僕らは1時45分に家へ戻ることが許された。午後にもう一度追加点呼があり、同じような事件と結果になれば、トーコー [商店] は閉店されるだろう。7時半に僕らは皆一緒になって広い原っぱに立っていなければならなかった。それからクニモトは犯人が出て来るために5分間の猶予を与えた。誰も名乗り出なかった。するとクニモトはたいへん腹を立て、ある男の人をひどく殴った。8時45分にひとまず家に帰ることができた。僕らはまだ食事をしなくてはならなかった。その後はもう何も起こらなかった。

ドゥ・マイイアー

1945年1月2日

今日は追加点呼の一日で、新年の良い始まりだ。12月30日と31日の晩の後、再びヘデックトゥ [闇取引が行なわれた]。大晦日の晩に、またばれたのだ。またもや何と収容所にスサー [厄介事] を引き起こしたことだろうか。全員約11時45分まで整列しなくてはならず、僕らは2時間ほど焼けつけるような太陽の下で待っていなければならなかった。それは犯人が名乗り出たくなかったからだ。

夕方6時半にもう一度追加点呼があり、薄明りの中をまた2時間待っていなくてはならない。僕はきれいに赤みがかかり、澄み切った青空を味わって見ていた。[...] ついに完全に真っ暗になった時、家に帰ることができた。ああ、嬉しかった。僕らはいわゆる犯人たちを指し示すだろうという兵補を待っていなければならなかったが、もちろんのこと兵補は全然現われなかった。罰として、今度はトーコー [商店] が期限なしに閉店され、明日はたぶん食事抜きだ (パロス第5でも受けた罰)。これで事件が解決された訳ではない。[...] 第4班の組長たちはそのままだが、第3班の組長たちは辞職しなければならなかった。

ドウ・マイイアー

1945年1月3日

今日はまだあのゲデックン [闇取引] の事件に関する日だった。彼らはいくじ引きをして、悪いくじを引いた二人の青年たち (大きいお兄さんたちだ!) はものすごく殴られ、今は独房に入っていると人は言う。

フックス

1945年1月4日

トーコーは未だにトゥトゥップ [閉店] で、ちょうど今砂糖が入って来ると、あの悪党はそれを送り返すのだ。幸いにも5袋だけだったが、それでも一人につき250グラムにあたる訳だ。

サロモンズ

1945年1月5日

[1月] 2日ルーウィガジャ [農園] にいると、その時僕らの収容所副責任者が来て、『ブリル⁶⁸』と話した。全員整列しなければならず、『ブリル (メガネ)』は演説し、ある兵補が4回に渡り同人物と闇取引を行なったことを白状したと言った。その張本人が姿を現わさなければならなかった。さもないと厄介なことが起こるだろう。収容所で彼らは既に11時半から太陽の下に立っていた。本当に誰も前に出て来ず、『ブリル (メガネ)』は収容所に戻って行った。僕らが家に帰って来た時、皆もう一度整列しなければならなかった。K [クニモト] は罰を与えると脅かしたが、誰も名乗り出なかった。翌日、トーコー [商店] は閉店され、その時誰かが出頭しなければならなかった。そこで前闇取引者20人の間でくじが引かれた。3人が罰を受けなければならず、彼らは叩かれて監禁された。

フックス

1945年1月6日

トーコー [商店] が再び開店された。昨日僕たちは今日の分を注文することができた。バラン [品物] はそこにあるのだ。

⁶⁸ - ルーウィガジャ (農園) の日本人管理者の一人のあだ名で、メガネという意味。

フックス

1945年1月7日

また事件が始まり、今回は手紙に関してであった。全収容所のトーコーが未期限閉店となる。明日の注文だけがまだ入ってくる。

ドゥ・マイヤー

1945年1月9日

警報中にピットゥ・ザイルマーカーは外を歩いたために打たれた。

ファン・エングルンブルフ

1945年1月9日

トーコーは闇取引のために閉店し、その件は憲兵隊に扱われている。犯人たちは誰がヤップの罰を受けるかをくじ引きしなければならない。運の悪い7人は恐ろしいほど激しく打たれた後、呆れたことに、もう一週間も独房に入っている。

サロモンズ

1945年1月10日

トーコーが2月6日まで閉店されると公式に報告された。これは闇取引に対する罰で、収容所責任者により命じられた。

フックス

1945年1月12日

今日は終日文字どおり何もしなかった。9時半まで布団の中にいることから始まり、ちょうど気持ち良く本を読んでいると、頭の上にある窓が急にボタン開き、もう少しで僕の頭に飛び落ちてくるところだった。日本人の監視長が窓から部屋へ頭を入れた時、僕は丁度なのしりたかったがその代わりに、その時敬礼と叫んだ。彼は僕たちにもう食事をとったかどうか尋ね、はいと僕が答えると、再び去って行った。クニモトが1500個のロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご

飯の包み]をこっそり持ち込んだ。彼は雑役係たちに必要だと思ったのだ。なんていい奴だろう！もし彼がもっと金を必要とするならば、他のものも持ち込ませるだろう。

ドゥ・マイイアー

1945年1月19日

25袋のトーコー用砂糖が入って来たのに、それらはトーコーが開店されたら販売されるのだ。開店は2月6日だ。

ファン・エングルンブルフ

1945年1月21日

闇取引で捕まった人たちが独房19日後、ありがたいことに釈放された。

ヨーストウン

1945年2月4日

今日、僕らはスープをつくった。午後ちょうどスープが出来上がった時、いたずら書きされた壁全部をこすり落とさなくてはいけないというニップの命令があった。全ての釘を壁から取り、壁には洋服を掛けてはならなかった。その後、家は申し分ないほどきれいになった。

ドゥ・マイイアー

1945年2月5日

トーコーがまた開店され、僕たちは注文することが出来る。

メィムリンク

1945年2月12日

ヤン [ハーリング]、[グッツ] ナスツツとコース [バングウ] の事件が見つかり、彼らはひどく殴られ、その後日本兵の監視で約3週間の独房に入ることになった。彼らはディッキィ・ザイル

ストウラとエディ・エマヌエルス、それに他のディーラーたちと一緒にいた。彼らの食事は塩味のポップ、塩味のパンに塩味のご飯だ。運良く野菜などかなり多くのものが持ち込まれた。彼らは弟たちにもっと物を買わせられるほど十分に儲けたのだ。それに独房の部屋には読み物があった。彼らはそれほどひどく痩せてはいなかった。彼らはゲデック [竹で編まれた仕切り] の近くに住んではならないので、今5人一緒に僕たちの斜め向かいに住んでいる。

フックス

1945年2月15日

昨夜どしゃ降り中、ヤップがここへ浸水電熱湯沸かしを探り出しに来て、かなりの浸水電熱湯沸かしを押収した。今度は一時までに全ての電気バラン [製品] を引き渡さなければならない。それがべらぼうに不快なのは、これからまた浸水電熱湯沸かし使用がむずかしくなるからだ。[...] 今晚8時に Kun [クニモト] が自転車で疾走し、スイッチを回し、僕たちを暗闇に放ったままにして又直ぐに立ち去った。それから仕方がないので早く床に就いた。あいつらは自分たちの思いどおりなことをして、僕たちの快適さなど何も認めないのだ。

ヨーストウン

1945年3月15日

夜11時15分、追加点呼の為に突然起こされた。僕らがそこに行くと、ルーウィガジャの闇取引人のコックがここでひどくたたかれたのがわかった。今度はそれをした連中が12時前に名乗らなければならない、さもないと僕らは3日間食事抜きになる。その連中が出て来て、僕らは家⁶⁹に帰ることが出来た。

⁶⁹ — ヨーストウンの収容所時代について戦争直後に書かれた話に、日記著者の R.サロモンズ氏はこの件についての報告をする。サロモンズ氏によると、ルーウィガジャの常任雑役班に属するコックは『ロード (君主)』と『ブリル (メガネ)』というあだ名の2名の日本兵の監督たちと良い関係を保っていた。彼らは農園にある在庫のトウモロコシ、米や砂糖の出入り管理をしていた。コックは闇品をうまく収容所に入れ込み、収容所の仲間たちに法外な値段で売っていた。収容所警察員である2人、ヤン・コーニングとパウル・ファン・オンスルンはある日コックをかなりひどく叩いた。彼は暗闇のため襲撃者たちを見分けられず、クニモノに苦情を出したため、全抑留者は追加点呼で整列しなければならなかった。コーニングとファン・オンスルンは名乗り出て、各自平手打ちを食い、その後全員再び戻ることができた。収容所委員会はこの事件後コックを直にブラックリストに載せ、その結果彼は2週間後少年収容所からの最初の移動で移送されることが決められた。ファン・エンゲレンブッフ p.71-72 も参照。

ドウ・マイイアー

1945年4月1日

復活祭の本当の楽しみとして、ヤップは女の人たちの物でグダンス [倉庫] に積み上げられ、まだここに置かれてあるダンス、テーブル、イスそれにならぐた全部を外へ持ち出すことを考え出した。さあ、ダンスの持ち運びだ。復活の主日に全員でダンス運びの雑役をしなければならないとは。

ドウ・マイイアー

1945年4月6日

ヤップはまた道にイネの葉が生えていると愚痴をこぼし、僕たちは草むしりをしなければならない。

フウクンス

1945年4月14日

僕たちの班は既に午後4時半にルーウィガジャ [農園] に整列した：バロス第5へ野菜を持って行かなければならなかった。他の人たちは整列中に身体検査をされ、あいつらはトウモロコシ、テロン [ナス]、ブンキル [ピーナッツやココナッツを圧搾した後のかす]、ジェルックス [ライム] を見つけた。今ヤップはルーウィガジャで僕たち用に食事がつくられることを禁止した。という訳で当分はそこではパップもスープもなしだ。ひどくしゃくにさわり、全ての楽しみがなくなってしまった。[...] しかし僕はただ生きて行くのだ。いつかは良くなるだろう。それはヤップたち自身に有益であり、あいつらは余りにも多すぎるほどもうけている。この調理禁止はせいぜい続いても数日で、それからもしかしたら以前より良くなるかもしれない。

サロモンズ

1945年4月15日

昨日、僕は初めて兵補にビンタを受けた。僕らは外で働かなくてはならなかったが、何もやることがなかった。なぜなら石が来るのを待っていなければならなかったからだ。兵補は僕らが働かなかつたので、12人互いに向かい合って整列しろと言った。それから30分も相互にぶたな

ければならず、十分きつくぶたなかったというので、あいつはそれぞれ各自にビンタを食わした。

ドウ・マイイアー

1945年4月18日

ヤップより元栓から水を取るのを禁止されたが、蛇口は家の中では夜だけ流れている。そういう訳でどうしようもないのだ。丁度ファン アブカウドゥさんはバケツを持って蛇口に行った。クニモトが自転車で通りかかり、それを見たという不運に見舞われた。彼はかなりひどく殴られる目に遭った。

フックス

1945年4月21日

ヤップは今朝再びここで怒鳴りまくった。僕たちの組全員整列しなくてはならず、あいつは僕たちに水のことでもものすごく罵った。最後にあいつは皆が水をもらえるように規則をつくと約束した。どのようにやりたいのかは誰にもなぞである。

フックス

1945年4月25日

ボスマンは数個のサラダ菜を持ち帰ったので、ルーウィガジャの雑役班には同行できない。彼自身のせいなのだ。僕は彼に十分警告したのだ。たきつけ用にパガ [柵] が取り壊されたので、収容所内ではもう火をおこしてはならない。先生 [ファン・ダー・スホートゥ] は今不愉快である：パンを米と交換しなければならないのだ。

ドウ・マイイアー

1945年4月26日

火をおこすために収容所の周りにある竹の柵がタワナンス [抑留者たち] に使われた。余りにもひどいのでヤップがそれに気がついたのだ。さて収容所は厳しいしりぬぐいをしなければならぬ。昨日もまた新しい命令が出されていた。ヤップは今度は火をつけること全てを禁止した。こ

れは皆全員にとってどんなにひどい処置だか分かるだろう。だから今日はパガ [柵] をできるだけ直すために雑役人が必要だった。

ドゥ・マイイアー

1945年4月27日

ヤップはパガ [柵] がまた元に戻ったので、再び料理を許可した。それに彼は各組一軒が元栓から水を取ってよいことを許した。それはこの班では向かい側にある家屋25番になる。これは非常に幸運なことだ。なぜなら夜にも既に蛇口に水が来ないからだった。僕らはもちろんのこと直に火をおこすと、煙の柱は通路中に立ち込めた。

フックス

1945年5月19日

僕たちの班は再び終日ルーウィガジャでバイエムリッツン [ほうれん草を切る] しなければならない。ヤップは不機嫌で、僕たちは7時になってやっと家に帰った。ヤップは僕たちが初めに一定の広い土地をオムヘパチョットゥ [鍬で掘り起こす] するようにしたかった。先に立ち去ってはならなかった。

フックス

1945年5月22日

今朝僕はL [ルーウィガジャ] へ出かけるために整列させられたが、その際僕は一週間L [ルーウィガジャ] に行ってはならない⁷⁰と聞いた。さあ、家に帰ろう。僕は死ぬほどうんざりした。

⁷⁰ — フックスは雑役長のファン・ベルクラーアにパイヤ盗みの現行犯で押さえられ、そのため一週間L (ルーイガジャ) に行っていけないことになった。項目「収容所内での人間関係」日記抜粋、フックス1945年5月21日参照。

フックス

1945年5月27日

今朝、収容所警察官が僕たちの家を不意に搜索するだろうとまたびくびくした。というのは、僕たちはウビ〔サツマイモ〕をひどく略奪したからだ。それはまるでバビス〔豚〕が来た後かのように見えた。運良く何も起こらなかった。[...]

また問題が起こった。チマヒ第4ではディーラーが見つかり、今度は山岳砲兵隊が、各々のタワナン〔抑留者〕は一日わずか10セントだけをトーコーで費やして良いと決めた。それは何もないと同じことだ。うずら豆、トウモロコシやテンペイ〔発酵した大豆からできたクッキーの一種〕に対する定期購入券は終わってしまった。これからはまた本当の空腹期間になる。

フックス

1945年5月28日

今日BDD〔バトゥ・ジャジャル⁷¹〕に行った。僕たちは10時半に来たが、パチョルス〔鋏〕は一本もなかった。それが来たのは11時半で、それからやっと仕事を始めた。兵補からタバコを2本もらった。彼らはたいへん気さくで、もし爆弾が落ちたならば皆でそこから退去するだろうと話した。ヤップにピサン〔バナナ〕を買うことを許可された。シシル〔バナナの一房〕は1ギルダーだ。各自30セントでバナナを4本買った。

ヨーストウン

1945年5月29日

10時にJ.W.ドンカース（組長）さんが来て今日は食事なしだと話した。僕らは11時に点呼に行かなければならなかった。ヤップは闇取引があったため、食事抜きだと言ったのだ。しかしディーラーが出て来たら、多分すぐにまた食事をもらえるだろう。けれども、もし誰も出て来なかったら、これが3日間延ばされる可能性がある。夜8時半ドンカースさんが来て、10時前までに生では食べられない食糧とまきを全部手渡さなければならなかった。

⁷¹ — 収容所より南方長距離に位置するバトゥ・ジャジャルの雑役は強制であった。抑留者たちは日本人のためにここに陣地を作らなければならなかった。（ファン・エンゲレンブーフ #54）この雑役に関しては項目「諸活動」を参照。

ファン・エンゲルンブルフ

1945年5月29日

今日数人が（医者証明書上で）卵を、それも無料でもらった。僕は運の良いうちの一人だった。それは本当にちょうどいい時機だったというのは、様々な収容所でパガ〔闇〕取引が発見されたため、罰の日としてチマヒにある全収容所で食事抜きが命じられたからだ。これは実際に行われ、そこで今のところ－〔午後〕7時－僕たちの食事はパイヤ、グラ ジャワ〔赤シュロ糖〕と冷めたコーヒーで間に合わせなければならない。本当に病院でもひどい食事だ！⁷²

フックス

1945年5月29日

僕たちの収容所でも闇取引が発見された。今日彼らは食事を抜かされた。全ての薪は手渡さなければならぬ。その後、全部の食糧を渡さなくてはならなかった。僕はまだフン・キュー〔大豆粉〕200グラムを持っていたが、靴の中に隠した。ここにいる人たちは僕たちも3日間、ということはあとまだ2日間あるのだが、食事をもらえないと信じている。僕が元気に見えるのは明日もあさってもまたチミンディ⁷³に行くからだ。今晚僕は全然腹が減っていなかった。

ドゥ・マイヤー

1945年5月30日

闇取引がまたここで見つかった。それは予想できたことで、非常に明白だった。再び追加点呼があった。それは犯人を出頭させるためだったが、出て来なかった。直ぐその後、犯人が兵補に指差され、ガス管でひどく殴られた。罰として全収容所は食事抜きで、朝食用パップだけだった。朝はパップさえでなかった。

⁷² ファン・エンゲルンブルフは胃痛のため、この日記をつけている時点ヴィルム通りの病院に入院している。

⁷³ チミンディ（チマヒの近郊）の用地にはルーイガジャと同様に抑留者が雑役を行なう農園「ゾネフヴ」があった。チミンディ雑役はただ臨時雑役で、つまりチマヒ第4の抑留者のための「代役」としてであり、少年収容所がルーイガジャに対して行なったようにチミンディに常勤雑役班を提供したことが明らかである。（ファン・エンゲルンブルフ #61-62）。

フックス

1945年5月30日

今朝T [チミンディ] の雑役へ行くために整列した。僕たちはこれからブラウスやシャツを着ずに外勤雑役に行くことが許されたのは、ヤップは僕たちがそれを売らさうと恐れたからだ。僕は寒さで震えていた。10時に雑役が中止されるという通知を受けた。チマヒ第4では普通にまたT [チミンディ] に行く。トーコー [商店] は実際には閉店と同じだ。10セントでまだ買えるものは全て炊事場経由だ。もうタバコも石鹸ももらえない。

ドゥ・マイイアー

1945年5月31日

おととい多くの抑留者たちが死ななかったことに僕は未だにびっくりしている。チマヒ第4では、同様な処置が取られ、やはり死者が出たのだ。ヤップたちは大変驚き、この罰を中止した。というのは彼らは全チマヒ収容所で10日間食事なしで、ただパンのみにするという計画を既に立てていたからだ。何て恐ろしいことだ！ ヤップたちはもう十分なほど酷いというのに、今度はまたトーコーを閉店させ、おとといから未来永劫、決して火をおこしてはならなかった。そうなんだ、僕たちは自分たちの食糧在庫さえ手渡さなければならない。生のジャグン [トウモロコシ] や豆などの食糧在庫品。[...] まきも全部渡した。それらは炊事場にいかねばならず、そこでは幸いにまたかなりの期間使えることができる。

フックス

1945年5月31日

ものすごい期待はずれだった。トーコーの人たちは [およそ一人につき500グラムある] グラジャワ [赤シュロ糖] を分配しないほど愚かなのだ。ヤップが今度トーコーを閉店したので僕たちはもうそこへは行けない。僕たちが費やせた一日10セント制も今は続行できない。トーコーにはタバコとカウン [ヤシ葉のタバコ用巻き紙] がまだあったが、それももう手には入らない。[...] 僕はどのくらいトーコーが閉店するのか気にかかる。少なくとも1ヶ月は閉まっているだろう。そのころには外ではバラン [物品] は僕たちが買えられないほど高くなっているだろう。ともかく、あまりきびしくならなければよいが、最終期が一番耐え難いのだ。

メィムリンク

1945年6月3日

僕たちは丁度また騒がしい日々を過ごした。パガハンデラーズ [闇取引者たち] がチマヒの全収容所で見つけられた。処罰は：一日食事抜き。朝はまだパップをもらえたが、午後のパンは既に除かれた。運良く僕たちはまだ前日のパンを2つ持っていた (僕は5月24日からヤン [ハーリング]、グッツ [ナスッツ] とテオ [ヤンの兄] と同居している)。それから僕たちはそのパンを食べた。

午後、調理禁止にもかかわらず、4リットルのトウモロコシパップを料理した。生の野菜を少しちょろまかした。そうして僕たちには晩と翌朝にも少し食べ物があつた。その晩はあまり愉快的状況ではなかつた。僕たちが3日間断食をするだろうという話があつた。晩になって全てのアングロス [こんろ]、薪、平なべや食糧を手渡すよう命令を受けた時、断食するかのよう感じた。僕たちは薪だけを提出し、残りは仕舞い込んだ。それでも僕は腹が減り、めまいがして弱く感じた。有難いことに翌日12時に再び炊事場で火をおこして良いことになった。午後にはご飯とサンバル [唐辛子入りの添え料理]、晩にはパン、スタムポット (200cc)⁷⁴とコーヒーをもらった。これは全て、激しい東京爆撃に対する仕返しだとある人たちは言っている。

メィムリンク

1945年6月4日

昨日誰かが少年の仲介で兵補の米を一袋買った。これが発見され、3人ともかなり殴られた。それで済んだのではなかつた。今日、病人150人を除いて全収容所は食事なしだった。たぶん明日も又食事ぬきかもしれない。ディーラーはヤップから一日米150グラムと塩の食事で20日の禁固を受ける。もし彼が釈放されたら、オランダの収容所委員会により再度3ヶ月収容される。僕たちは少し働いたり本を読んだりして一日を静かに過ごす。時々グラ ジャワ [赤シュロ糖] を食べた。僕たちはたまたま昨日取って置いたパンを各自四分の一ずつ食べた。空腹は思ったほどでもない。もちろん気が抜けて、ふらふらするが、それでもまだ何かやれる。今晚僕たちは沢山の生野菜、スリナムのスベリヒユ (食用野菜) やロバック [大根の一種] の葉を食べるだろう。それに屋根裏にはまだ他の食糧がある。ニッポン (兵) による品物や用具調査がまだあると予想できる。彼らが何か見つけたら、僕たちはまた数日断食する可能性がある。

⁷⁴ — オランダの家庭料理。ゆでた野菜をマッシュポテトに混ぜソーセージなどを添える。

フックス

1945年6月4日

腹が空く！！昨日はタワナンス〔抑留者たち〕の一人がパガ〔柵〕を通しナシィゴレン〔香辛料のきいた焼き飯〕を買い、それをヤップに見つけられた。その晩、全収容所の責任者イガミ〔エガミミノルのこと〕が来て、当分何も買ってはいけないと言った。人が死のうがいつにはどうでも構わないのだ。こういうことを考えて床に就くのは本当に不快なことであった！。今日雑役はなかった。

朝、本を手に取り読み始めたが、時間は進まないもので、相変わらずまだ朝早い。本当に憂鬱で、誰もがぼんやりとして見つめ、何もしないで座っていた。午後、少し寝たがそれほど長くなかった。それから頭痛がするまで又本を読んだ。夕方になるともう空腹感はなく、ただ途方もなく虚脱状態を感じた。そして急に立ち上がるのが恐かったのは、また床に倒れてしまうからだ。一番嫌だったことは、明日何か食べられるのかどうか分からないことだった。晩の8時半ごろ、イガミ〔エガミ〕が来て、僕たちはクンプウルン〔集合する〕しなくてはならず、あいつは演説を始め、パガ〔柵〕を通し絶対に何も買ってはならないと言った。さもなければ、7日間食事抜きになるだろう。ビアルマティ〔死なせる〕。ところが明日また炊事場が使用される。それは最も重要なことだが、僕はくたくたになった。

ドウ・マイイヤー

1945年6月4日

またもや同じ、今日も食事なしだ。ヤップ当番は、15才の少年でヴィリィ・ヨハンスンという名で、クロケイ（前ヤップ当番）の命令でナシィゴレン〔香辛料のきいた焼き飯〕を収容所内に持ち込み、ヤップに見つけられたのだ。このことをきっかけに、ヤップは後でここへ検査に来る。目下、次の回覧状がまわっている：

収容所委員会による重大警告にもかかわらず、再び兵補との取引が行なわれた。この結果として、収容所は再度、食事禁止処罰を受ける。イガミ上級曹長〔恐らくエガミミノル〕は本日中に処罰執行期間について報告に来られる。重病人25名は例外とする。予想される調査に関連し、砂糖などのような食糧は適切に保管しなければならず、没収される可能性を考慮し、ともかくニッポン兵の近くでは飲食しないように気をつけなくてはならない。どのようなことがあっても料理をしたり、浸水電熱湯沸かしを使用してはならない。それを犯した者たちはニッポンの所長により、規定食として米150グラムと塩付きの禁固20日を宣告される。クロケイによる振る舞い、つまり少年たちが仲介人として利用され、それにより収容所が再度危険に陥ること、これは非常に卑劣であるため収容所委員会は処罰が軽いと見なし、それを3ヶ月間に延長することとする。

同様な方法で取引を行なうものは、同じ処罰を受けることとなる。

収容所リーダー

この新任のヤップは余りにもずる賢く、余りにもやかましいすぎる。彼が事件を発見した後、直ぐに山岳砲兵隊に伝えた。上級曹長イガミはここチマヒにある全収容所の最高責任者であるのは明らかだ。たぶん今日は特別の日ではなく、まだこれから数日告発されることだろう。

フックス

1945年6月5日

今朝僕たちはパップ680ccとパップのような固めのプディングで起こされた。直ぐに雰囲気が変わった。皆陽気になり元気づいた。[...] ヤップは不機嫌だ。あの奴[クロケイ]はナシゴレン[香辛料のきいた焼き飯]を持ち込み、ヤップに規定食米150グラムのみを禁固20日を宣告された。この処罰が終了後、僕たちの収容所で彼は食事付きだが更に3ヶ月の独房を受ける。残りの者たちはもう闇取引を行なわないだろう。

フックス

1945年6月8日

今朝僕は9時から12時半まで班長事務所に待機させられた。彼らはそこで測りものをしていて、[...] 僕たちは皆でそれを見ているとヤップが後ろ側からやって来た。彼に気がつかず敬礼をしなかったことに、あいつはひどくむっとなった。僕たちはお互いに向かい合って立ち、叩き合わなければならなかった。僕の前には14才ぐらいの少年が立っていた。僕がその子を強くぶつ気になれないことにヤップは気づき、それから僕はパンチを2発くらい、床に倒れた。その後、さらに4発くらった。全部で約10分間ほど互いにぶちあった。終わった後、かなりの頭痛と耳痛がした。僕の耳は腫れ上がり青あざができた。[...]もしあのヤップの臭いがしたらならば、僕はオルマツト[敬意]を表し、このような事がもう二度と起こることのないようにするのだ。僕たちはまた衣服、それに加え未だ持参している物の表を提出しなくてはならない。それを出す気など僕には全くない。余分に持っているものはブクース[束]にして、ヤップが自宅捜索に来たら、それらを隠すのだ。

ファン・エングルンブルフ

1945年6月11日

ヤップは全く至る所に干渉する。新しい鍛冶場に相変わらず彼はちよくちよく来て、僕たちを働かせるための方法を思案する。そうして彼は一定の時間に菜園と道路に水まきをしなくてはならないことを考え出した。クニモトより彼のほうがずっと厄介で、ほんのちょっとしたことで班長、組長それに中央軍病院の組長も整列しなくてはならない。

フックス

1945年6月15日

[塹壕雑役にて] 兵補たちは非常に感じが良く、決して文句も言わず、以前のように急き立たされることはない。彼らはカチョンガチュ[少年たち]より多量の品物、食物やタバコ類を買うが、僕たちが何かを買うことは好まない。実のところ僕たち自身も買いたくないのだ。収容所でまた食抜き日があったり、トーコーが再び閉店したり、数本のピサンス[バナナ] またナシィ プチヨル[ピリッとするソースのかかった野菜料理とご飯] だけしかない食事のことを想像して見てごらん。

フックス

1945年6月23日

今日僕たちが2時に家に戻って来た時、ヤップはものすごい大騒ぎをした。あいつが既に所外労働の班長たちとバーリンクさん[雑役長]を数回激しくぶつたのは、僕たちが余りにも早く帰って来たからだった。これからは9時から1時、そして2時から5時まで働かなくてはならない。ということはもう1時間長い訳だ。今はちょうど食事をして、ちょっと座れるだけの時間しかない。ヤップはたいへん不機嫌で、何度も見に来るので仕事は全然面白くなかった。

ドウ・マイイアー

1945年6月26日

ヴィリィ・ヨハンソンはまた独房から戻ってきた。ただクロケィだけは普通の収容所食事付きで収容所にある独房に数ヶ月費やさなくてはならない(クロケィはしかしヤップに不平を訴え、ヤップはそれ以上の処罰は必要ないと考え、従って彼はまた自由の身だ)。

フックス

1945年6月26日

約1時ごろ曹長が見に来たとき、僕たち全員は日陰で休みをしていた。あいつはむっとし、僕たちはただマイン [怠けている] だけで、働かないのだと言い張った。運良く『エコノーム⁷⁵』ではなかった。さもなければあいつは僕たちをひどくぶん殴っただろう。

フックス

1945年7月1日

ヤッペン [日本兵たち] は実にいまましいやつらだ。今度また、ウビ [サツマイモ] を積んだ2台の荷車を戻したのは、僕たちが10セント以上注文できないからだった。ここでは惨めにも一日につき200グラムだが、チマヒ第4では平均750グラムももらえるのだ。直にウビ [サツマイモ] の時期が終わり、規則にきびしい軍人たちだけで、僕たちにはあまり手に入らないだろう。

フックス

1945年7月5日

今朝ちょうど気持ち良く休んでいると、曹長が来て僕たちを現行犯で押さえた。罰としてシアン [午後の初めのうち] まで働き続けなければならなかった。非常に不快だったのはひどく暑く、日陰がなかったことだ。そして僕たちはあいつがまた急に姿を現わさないかと常に用心しなくてはならない。そうしないと完全に困難な目にあうからだ。[...] 僕たちは5時に他の人たちと普通に家に戻ったが、それは間違っていた。なぜなら食事後雑役長のところに呼ばれ、5時後も僕たちは働き続けなければならず、そのため1日食抜きを罰を受けると言われた。公式には今日僕たちにはパン、雑役パンと夕食がなかった。明日は従ってポップなしだが、どうにかなるだろう。僕はすぐにこいつも忌々しいヤップだと気がついた。あいつは叩きはしないが食抜きの罰を与えた。『エコノーム』は幸いにも近いうちにいなくなる。その代わりに太ったヤップが来て、そいつはこの規則にやかましいろくでなしたちより厄介でひどいはずはないだろう。

⁷⁵ — 原義は経済学者。脚注#36参照

フックス

1945年7月6日

今朝班で普通にパップを取りに行ったのは、非公式には食事がいつものようにでると思ったからだったが、僕の方はなかった。その為にひどい大騒ぎが起きた。僕が事務所に行かねばならなかったのは、パップをもらえないことを知っていて、そこでその分を盗んだのだとあいつらが思ったからだ。僕はそれを説明したが、やつらは少しも信じなかった。畜生。僕たちは午後パンももらえなかった。[...] 夕飯は普通で、僕もまた貰えた。[...] 6時に突然炊事番の少年たちが僕のために炊事場にパンがあると言いに来て、直ぐにそれを取りに行った。[...] 何のための大騒ぎだったのか。僕たちが1時にいつものようにパンをもらえなかったことが僕には分からない。

ファン・エングルンブルフ

1945年7月13日

おとといからヤップンの一人はむら気で、サディストの獣のような奴だ。検査で始まり、その際彼は勿論あらゆることにけちをつけた。ベンチとマットレス全部を毎日9時から、なるべくならば5時まで！ 太陽にさらせるという指令がでた。また検査が始まり、棒で武装した彼は全ての家に立ち寄り、整理されていないと叩いた！ 命令は時間が経てばたつほど厳しくなった。次に僕たちは日中もう家にはいってはならず、働き続け、窓とドアは全て開けて置かなくてはならない。そして最もひどいのは彼が一日中外に出て僕たちにながみながみ小言をいうことだ。どの瞬間にも棒を持ったヤップがいるのだ。もし殴りたければ、何かけちをつければ良いのだ。その結果、絶え間なくびくびくしながら緊張して暮らす訳だ。僕たちはいつも『敬礼』と叫ばれるのを想像し、それから大急ぎに飛ぶように走り、何かものを手にして仕事をするか、マットレスのほこりをたたき始めるのだ。彼は家で眠っている2、3人の少年たちを見つけると、息が詰まるほどの暑さの中で大通りを40回走らせた。そして気の毒なスホートウルさんは彼と一緒にいって行かなければならず、叫び声を聞かなければならなかった。[...] けれど僕はまだ不平を言うことはない。僕はまだ打たれたことはない！ この文は韻を踏んでいる！ 何事にも終わりがあるもので、この苦難も同様だろう。

フックス

1945年7月13日

ヤップは狂ったように忙しかった。終日中あいつは収容所に留まり、家の中にいた少年たち、または他の違反を犯した少年たちに逆立ちをさせ、互いにボクシングをさせたり、25人の少年た

ちに駆け足させ、又はこの目的の為に特別に作られた木製のサーベルで打ったりした。一日中、あの野郎に用心しなくてはならない。

フックス

1945年7月16日

今晚、ナンキンムシを十分提出しなかった組は互いにぶち合わなければならない。彼らが解放されるまでには30分かかり、相当はげしく殴らなければならなかった。

フックス

1945年7月19日

また闇取引のプルカラ [事件] が発見された。雑役係たちは兵補指揮長サヌシに米売買で見つけられたが、幸いにも彼はヤップに報告しなかった。さもないと明日は食事抜きであり、この頃ちょうどうまくいっているトーコーが閉店されただろう。雑役係は収容所委員会にかなり叱られた。

ヨーストウン

1945年7月25日

昨日の午後、僕らはきれいに掃除をしなかったので、昨夜、点呼の後呼び出され、罰としてジャラック [ひましの木] の種を探し集めなければならなかった。暗くなり、もう何も見えなくなった時、家に帰ってよかった。けれど今日8時にそこに戻り、ジャラ [ひましの木] の種をまた見つけなければならなかった。9時半に僕らは兵補パン⁷⁶と甘いお茶をもらい、10時に家に帰ることができた。

フックス

1945年7月28日

トゥンパット [ソファー式ベッド] をまた外に出さなければならないが、僕はやらなかった。午

⁷⁶ — 抑留者が常に得るパンより質のより良いパンのこと。

後、気持ちよく寝ていると、『敬礼』という叫びで驚いて起き上がった。それは殴り屋のモリで、運良く奴は僕たちの方には来なかった。僕はマットレスをどうすればよいのか知らなかった。ともかく、それが危険というものなのだ。

ファン・エングルンブルフ

1945年8月2日

ヤップは昨日の空襲警報中、ある家で一列の瓦が足りないのを発見した。今度はその班の班長、この場合ヤンスンさんが犯人を指し示さなければならない。昨日彼らは探せ出せないことを分からせようと試みたが、ヤップは頑固として聞き入れない。ヤップは班長、組長、スホートウルさん、J.J. モールナーアさん[収容所管理長]と問題の住人たち34人を換気なしのグダンキュ[小倉庫]の中に夜の10時から1時まで押し込んだ。ひどいことだ！そして犯人を告発するため更にまだ2日間ある。どうなるのだろうか？

メィムリンク

1945年8月4日

僕たちの一般市民の収容所長はモリという名で、厄介なしろものだ。あいつはぶつ機会をうかがっている。今度毎日マットレスやベッドなど全てのものを外に出し、一人につき20匹のクトゥブスック[南京虫]を提出しなければならない。彼の命令に不注意だった者たちはかなりの平手打ちを受けた。

フックス

1945年8月17日

今ルーウィガジャでは毎日畜殺が行われ、僕たちの収容所はそこでヤッペンから豚一頭を買った。バイエム[ほうれん草]の荷車の下に入れ持ち込んだのは、門にいるヤップに気づかれないためだ。

フックス

1945年8月18日

この豚の金はルーウィガジャにいるヤップが自分の懐に入れるのだ。奴は1キログラムつき20ギルダー請求したと思う。山岳砲兵隊の司令部で、ヤップは豚が一頭死亡したと報告し、または子豚が生まれたことを秘密にしておく。勿論のこと門にいるヤップンがそれを知ってはいけなかったのは、彼らは非常に規則にやかましい軍人たちだったからだ。だからそれはバイエム [ほうれん草] の下に置き運ばれたのだ。そのようにして収容所もしばしば十分なトウモロコシ粉、カチャン イジウ [青えんどう] やチェンゲェ [ミニ唐辛子/ジャワ語] を買う。それで僕たちももっとパップがもらえる。ただ僕たちが多額を支払わなくてはならないのは、ルーウィガジャのあの汚いヤップが娼婦たちの世話をするためにはもちろんのこと甘い儲けが必要なのだ;多額の金がかかるからだ。もし門にいるあのヤップンも少し不正がきける者たちであれば、ここはもっとうまくいっていただろうに。

ドゥ・マイアー

1945年8月18日

ヤップが先月悪巧みをしたことをもう聞いたかい? では説明しよう。長い間、全部のベッドを毎日9時から5時まで外にさらさなくてはならなかった。全部のマットレス、寝具類なども同じだった(良い規則)。更に働いていない者は各自20匹のクトゥ ブスック [南京虫] を提出しなければならなかった。ヤップは時々余りたくさん提出しなかった組全員を整列させた。罰として、各2名一緒に立ち、互いにぶち続けなければならなかった。そして十分激しくぶたないと、その合間にヤップはロータン [とう] の棒のようなものでまた叩いた。全部のドアと窓、それに玄関のドアも開けなくてはならず、誰も休みをとってはならなかった。一日中ヤップ自身で全てを検査しに来た。彼はちょうど雑役をして一休みしている連中たちに20分間大通りを駆け出させた。罰としてヤップは一度誰かを30分柱に逆立ちさせた。そして小さな少年たちも例外ではなかった。とても幼いバタバ出の少年たちは恐らく除いただろう。その少年たちは一度ビリック [竹で編んだ仕切り] のそばで天日取りレンズのようなものを使い火をつける遊びをして、そのためゲデック [竹で編まれた仕切り] が突然燃えた(一部燃えただけだった)。再び全員が門に整列、たいへんなプルカラ [騒ぎ] だ。他の時には、ヤップは家の瓦がまたないと言った。そこで又もや多くのいざこざが起こり、そういう風に繰返されて行くのだ。クトゥ ブスック [南京虫] がなくなると、向かい側の病院に行ってみなければならなかった。後で僕たちはしらみの卵を集め提出しなくてはならなかった。[...] 番号札も変えなくてはならなかった。新しい番号札は収容所の工場で作られた。それから予備としてもう2つ真似てつくらなくてはならなかった。門の所ではヤップがこれらの番号札にひどく注意を払った。それに敬礼も変わり、夕方

の点呼ではしばしば敬礼の練習をしなけばならなかった。

食糧・物資

ドウ・マイイアー

1944年8月1日

あと一日でここに来てからもう2週間になる。既にその間牛乳が3回でて、この頃バターが5分の1箱であるが、僕らはそれをかなり喜ばなければならないのだ。朝食は大抵かたまりの入った[タピオカ粉でつくった] でんぷんパップ⁷⁷を食べ、変化がなくなり、砂糖をたくさん使うことになる。グラ ジャワ [赤シュロ糖] はもう直ぐになくなってしまおう！ 幸いにも午後にはトーコー [収容所にある商店] の白砂糖がまたもらえる。

午後にはスープとごはん、そして時々ジャグン[とうもろこし]クッキーをもらう。ナシィ ゴレン [香辛料のきいた焼き飯] を2回食べたが、とてもおいしかった。そしてある時はクデレ [大豆] だけのハヤシ料理、夕飯はパンとスープまたはコーヒーだった。今日はオンチョム [醗酵させた小さな黒豆料理] 入りのレゴ [とても美味しい] スープだった。まあ、これが食事なんだ。

ドウ・マイイアー

1944年8月7日

昨日と今日の朝食はアジアパップ⁷⁸で、とてもおいしかった。

ドウ・マイイアー

1944年8月15日

今日僕らはまたバター5分の1箱をもらい、僕はスプーン一杯の砂糖とサンドイッチをバター5分の1箱と交換し、これで今バターは2つになる。どのようにやったか知りたいかい？ スプーン一杯の砂糖を今朝の一人前分パップと交換し、もう一度誰かにそのパップを一人前分のパンとサンドイッチに交換する。そして僕の割り当てパン (全部) を割り当てバターと換えるのだ。有利だろう？ さてこれで僕には何も足りないものはなく、割り当て2倍のバターもあるし、砂糖

⁷⁷ — (オートミール・パンなどを煮詰めた) おかゆ。

⁷⁸ — このパップ (おかゆ) はタピオカ (キャッサバ塊茎のでんぷん) 50-60%、とうもろこし粉30-40%、及び大豆10-15%から成るアジア粉で作られた。アジア粉でパンも作られた。(Van Velden, 344 noot 1)。

もまだ十分持っている。ただグラ ジャワ [赤シュロ糖] が手に入れるようにしなければならぬ。

ドウ・マイイアー

1944年8月18日

農耕は既にかなりうまくいっている。サラダ菜はもうだいぶ成長し、今日ジャグン [とうもろこし] を植えた。更に、バイエム [ほうれん草]・サウイ [白菜]・キクヂシャ・テロン ブランダ [トマトのような果実]・他のテロン [ナス]・小さなクティムン [きゅうり]・トマト・カテス [パパイヤ]・カチャン [ピーナッツ]・ながねぎ・パイナップル、そして楽しみとしてサボテンがある。

ドウ・マイイアー

1944年8月19日

僕らはほとんど毎日ジャグン [とうもろこし] 水とジャグンをもらい、今日もまたスープとごはんと一緒にジャグン [とうもろこし] クッキーを (2個) もらった。

ドウ・マイイアー

1944年8月21日

また今日も良い一日だった。トーコーから700グラムの砂糖をもらい、それが丁度よかったのは僕らの砂糖はもうなくなってしまったからだ。サユール [野菜] はプディス [ぴりっとして] おいしく、夕食はパンとコーヒーに3/2のジャグン [とうもろこし] クッキーだった。

フックス

1944年8月24日

昼飯を十分に食べた：それはキャンプパン⁷⁹ 10分の3+配給の丸パン3分の1+バター5分の

⁷⁹ — ここでは収容所の店を通し購入できた配給パンやトーコーパンと異なり、抑留者に与えられた普通配給の一部であるパンを意味する。

1箱+ピサン [バナナ] 2本+スープ400ccだった。その上にスープ300ccを2杯目のおかわりでもらった。僕たちは衣類も受け取り、僕はくじでパンツを引いた。こんなものを今まで見たことがない。それは蚊帳で作られ、股が20センチメートル長く、すそは膝まで来る。僕がそれをはいた時、僕たちは腹をかかえて大笑いした。[ディック・デン] バーアスとピットウ [ザイルマーカァー] は各自きれいなオーバーを引き、巨大なパンツとシャツもくじで引いた。僕はバーアスのズボンをもらい、それはぴったりだった。ピットウはズボンで包帯らしいものをつくる。

ドウ・マイイアー

1944年8月24日

僕らはまたバター5分の1箱とピサン [バナナ] 2本をもらった。もうそろそろもらってもよい時期だった。僕らは殆ど1ヶ月ほど果物を食べていなかったのだ。

フックス

1944年8月25日

昼飯にはウビラッツ [さつまいものスタムポット⁸⁰] 600ccがでたが、スープはでなかった！僕はフン・キュー [グリンピースの粉] 一袋をパン5分の2と交換した。これでキャンプパン10分の7と配給パン3分の1を持っていることになる。スープではなくコーヒーをもらえたが、砂糖なしのひどい味なのであげてしまった。アッスム [インドネシアのタマリンドの実] でできたゼリーも250ccから300cc、熟してないパイヤそして砂糖ももらった。これは既に2度目だ。僕は全部パンにつけて食べたにもかかわらずまだ腹が減っている。戦争が終わったらいいのだが。

ドウ・マイイアー

1944年8月29日

僕はこの頃いつもお腹が空いている。ヨアン [デン・ブスタートゥ] があり余るほどたくさんのパンを持っているのは、彼の父親 [チマヒ第4に収容され、雑役中に会おう] から殆ど毎日パンやルンパー [肉入りのもち米をバナナの葉で巻いたもの] をもらうからだ。一体いつになった

⁸⁰ — ゆでた野菜とマッシュポテトを混ぜソーセージなどを添えたオランダの家庭料理。

らルンパーのような何かうまいものをまた食べられるのだろうか？ お母さんが僕らの為にどんなに苦労したのかを今になって僕には分かる。毎日ウビ [サツマイモ] コロケ、ジャグン [とうもろこし] ミートボール等のような何か特別なものを食べた。[...] さて、あさって予定のナシィ ゴレン [香辛料のきいた焼き飯] はチャベ [唐辛子]、玉ねぎ又はながねぎがない為に作れない。ヨアンは2重に運がいい。第一に彼はいつも父親に会え、話しができ、第二に常にたくさんのお腹をもらえ、腹が空くことはない。彼のものと交換できたらいいのだが、それはできない。なぜなら僕のごはん或いはパップなど他に何もなくなってしまうからだ。

フックス

1944年8月31日

翌日の為にパンを少し残すように努めたい。そうすれば朝には余り腹が空かないのだ。なぜならパップ400ccで雑役するのは本当に快いものではなく、既に11時には死ぬほど腹が減ってくるのだ。

ドゥ・マイイアー

1944年9月2日

今日僕らはまたピサン [バナナ] を3本追加にもらった。運良く最近また果物がでるが、僕のバターはもうお終いだ。今日再びトーコーパンが出たのは、数日もらわなかったからだ。夕食のスープは又おいしかった。

ドゥ・マイイアー

1944年9月5日

今日はコーヒー、ピサン [バナナ] 3本そして晩のスープの代わりにまたコーヒーが出た。昼のスープはオンチョム [醗酵させた小さな黒豆料理] 入りでギンデイン スカリ [大変おいしい]、とても脂っこく 一丁度8月31日の時のように良い味で 一それに340ccのごはんを食べた。それで3つのルンパー [肉入りのもち米をバナナの葉で巻いたもの] をつくり、詰め物としてよくつぶしたスープを入れた。ドゥ・ブスさんの調理法がうまくいった。火をつけてはならないが、チマヒ出の少年たちはそれが許されているので、僕もそこで料理する。僕は確かにローナルトと知り合いなのだ。数人の連中は今日トーコーパンをもらわなかった。それで僕たちはくじ引きをしなくてはならなかったが、僕は良くくじを引いた。

フックス

1944年9月7日

今朝早くまた炊事場に行った。[...] この食事はもうそれほど多くはない：たいていご飯450グラムとスープ750ccだ。僕はもっとたくさん食べられる。ウビ [サツマイモ] は入って来なかったが、近頃は一日につき約100キログラムのピサン [バナナ] が来て、品も良いのだ。配給パンも毎日入手される。不平を言うことはないが、ただもう少し砂糖が使えたらよいのだが。

フックス

1944年9月12日

嫌になる：今日は炊事当番最後の日だ。良い食事の最終日だ。最近は全然スープを飲まないが、ただ昨日の午後だけはスープがでた。

フックス

1944年9月13日

僕たちはパンとロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] を注文することができた。(入手されたら) 僕は一日にパン半分、ロントン半分に注文する。ということは毎日12セントかかり、砂糖に3セント残すことができるからだ。

ドウ・マイヤー

1944年9月13日

今日また僕らの組から (ニップ [日本人] に) ペン削りナイフ4本を渡さなくてはならなかったが、僕はやらなかった。そのとおりに提出したヘンク・ティアリンクは、報償として砂糖を受け取ったが、彼はもうナイフを持っていない。僕のを貸してあげても構わないのだ。

ドウ・マイヤー

1944年9月14日

今日僕らはたくさん追加の食べ物をもらった：ロントン [バナナの葉で巻いて蒸した餅] (12

セント)、ピサン [バナナ]、バター6分の1とトーコーの丸パン。しかし今日の夕食はパンと紅茶だけで、昼はわずか180グラムのごはんだった。

僕は宝物を掘り出した。菜園で掘っていると、突然クニア [インド産、しょうが科の植物] の根が全部出てきた。さあ、これはたいしたものを見つけたぞ。僕と数人の人たちは今日おいしいごはんをロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] を食べ、クニアの根の蓄えはまだ十分にある。僕はその残りをまた増やす為にもう一度埋め直した。

ドゥ・マイイアー

1944年9月16日

今日またロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] を食べた。そして夕食は、ああ、単調になり始め、パンと紅茶の食事だ。

ドゥ・マイイアー

1944年9月18日

僕らは今日800グラムの砂糖をもらった。夕食は運良くまたパンとスープで、余分にマンガ [マンゴ] も貰った。

フックス

1944年9月18日

幸いにも砂糖をもらった。今日僕は紅茶1リットルとコーヒー500ccを飲んだ。各自小さな未熟なマンガ [マンゴ] も貰った。今日ロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] がでなかったのは、ひどい打撃だった。すばらしい驚きは夕飯に肉入りスープ450ccがでたことだ。これで全てがうまくおさまった。今晚僕たちはディック [デン・バーアス] とピット [ザイルマーカー] と一緒に失敗作のカラメルーフン・クープディング [カラメルとグリーンピースの粉プディング] を食べた。

ドウ・マイイアー

1944年9月22日

夕食は幸いにも又パンとスープで、昼にもたくさんのスープがでた。だが昨日の晩はパンだけであとは何もなかった。お腹が空いたので、砂糖を一杯食べたため歯が痛くなり、皆はとても悪いと言ったが生のコーヒー豆を食べた。その上にヨアン [デン・ブスタート] にひどくだまし取られたのだ。(彼は昼のスープを飲み切れなかった為まだ残してあった。なぜなら父親の所でロントン [バナナの葉で巻いて蒸した餅]、ペチオル [ピリッとするソースのかかった野菜料理] 一盛り、失敗した丸パンとストロップ [シロップ] 水一杯をもらったからだった)。さじ2杯の砂糖とグラ バトゥ [氷砂糖] をほぼ同量のスープと交換したのだ。

フックス

1944年9月22日

今日グラ バトゥ [氷砂糖] とすっぱいキャンデーの自由販売があった。僕はグラ バトゥ15袋とすっぱいキャンデー2袋を買った [...]。砂糖でパップ用のシロップを作った。今日も僕はまた砂糖を具合が悪くなるほど食べたが、そうすると10日間は働けなくなる。とはいっても他にどこに歯を使えばよいのだろう、砂糖は健康でうまいのだ。

フックス

1944年9月24日

小さな菜園を隅から隅まで掃除して、一部はへパチョルト [鋤作業した] [...]。僕たちは一つの苗床にサウイ [白菜] とサラダ菜の種を得る為に切り株を植えた。サウイの品種は良くないと人は言うが、とにかくやってみることにしよう。

ドウ・マイイアー

1944年9月24日

今日の献立：朝食パップ570cc・昼食普通のごはんとスープ・4時50分にはサゴ [ある種の椰子の木髓から作った食品] のパップ・夕食はパンとコーヒーだ。そのほか追加にマンガ [マンゴ] 2つとロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] 半分が出た。

フックス

1944年9月26日

最近雑役はきびしくなくなった。一日に6人の雑役人が尋ねられるだけだ。つまり金なし、ロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] なし、もっと空腹になるということだ。

フックス

1944年9月27日

今日僕は暇で、失業だ。これでは僕たちにとっては悪傾向となる。これを雑役不況と呼ぶ。ロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] を食べる量を減らさなくてはならない。働いた日のみ食べることだ。洗濯をさせてくれる人たちをより多く探すように努め、そうすれば少なくともパンがもっと手に入るだろう。今日僕たちは昼飯にパンを食べ、食糧係のヤップ [配給配分の責務をもつ日本人] はまだ米を配布しなかった。だから夕飯はご飯だ。僕たちは今晚、クティムン [きゅうり] の苗床一つ・バイエム [ほうれん草] の苗床二つに種をまいた。サウイ [白菜] の間にはテロン [ナス] の種をまいた。もし炊事場から根株を貰えたなら、苗床のまわりからサラダ菜も取れる。

フックス

1944年9月28日

働かざる者食うべからず。殆ど全員が金不足だ。金不足が長期になればなるほど、より多くの人たちが援助⁸¹を受けた。

ドゥ・マイヤー

1944年10月7日

僕らはマンガ [マンゴ] を貰い、ロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] の代わりにトーコーの丸パン3分の1を得た。というのはもうそれは手に入らないからだ。昨晚のスペリヒユとバイエム [ほうれん草] スープはおいしかった。午後になってもこのスープはとてもおいし

⁸¹ — 金銭的な面での抑留者間の不平等さは全収容所では決して廃止されなかった。けれど貧しい人たち、つまり「have-nots (無産者)」の人たちの為に即座に救助基金が設けられた。(Van Velden, 273)。パロス第6では、収容所の店のある一定の商品で得た利益は収容所基金に預金された。

かった。スープがブディス [ぴりっとする] したのは初めてだった。チャベ ラウイ [ミニ唐辛子] が入って来て、大きいものは100グラム60セントで買えた。約唐辛子2つで1セントするとは、高いだろう？

ドウ・マイイアー

1944年10月8日

今日再び大量の砂糖が入って来た。僕ら全員また1キログラム貰える。どこに置けば良いのか僕にはもうわからない。

ドウ・マイイアー

1944年10月10日

今日はトーコーの丸パンだけを追加に貰った。しかしスープにはたくさんのオンチョム [醃酵させた小さな黒豆料理] が入っていておいしかった。卵が入手され、くじが行われたが、僕らの組は残念ながらはずれた。

ドウ・マイイアー

1944年10月15日

なんとひどいことか、石鹼がお終いになってしまった。これは不快なことだ。

フックス

1944年10月16日

パロス第5から1000人の [追加] 抑留者たちが来た為、昼飯のスープは100ccだけだった。食事配分が新しくなり3時までかかった。つまり2時間も遅い訳だ。

ドウ・マイイアー

1944年10月16日

今日は20個のチェンゲエ [ミニ唐辛子] と100グラムのタウチヨ [醗酵させた大豆] を追加にもらえたのだが、僕らの家には (知らせが来るのが) 遅すぎた。本当に残念だ。明日も貰える
と良いのだが。最後にある家は不利なものだ。

フックス

1944年10月18日

今日僕たちはスープを100ccまた貰ったが、10分の1の丸パンは貰えなかった。もうパン
はでないと思う。今日、幸いにも賃金の支払いが手に入った。これで少なくとも砂糖が買える。
というのは僕は完全に『からっけつ』だったからだ。

ドウ・マイイアー

1944年10月18日

今朝アジアパップの代わりに又あら引きとうもろこしを食べたが、この方がずっとおいしい。

ドウ・マイイアー

1944年10月19日

うれしいことに今では朝食においしいパップ [あら引きとうもろこし] がでる。これがこの先ず
っと続くと良いのだが。今日もおいしいトーコーパンにバター10分の1箱を貰った。だいたい
一日おきにこれをもらえるのは有り難いことだ。僕らが初めのころ貰ったものは、それもまたお
いしいバターだ。少しの間クラッパー [ココナッツ] 油の嫌な味がした。残念なのは昔のように
たくさんスープを貰えないことだ。昼食のごはんの時に飲んだスープは本当に少なかったが、
これは確かに1000人の人たちが来たためだ。夕食にはもう絶対にスープは出ない。

フックス

1944年10月20日

最近再びマンガ [マンゴ] ができるが、バターはもう出ず、スープだけである。

メイムリンク

1944年10月20日

ここの食事は良いが、交換したりねだったりするものが何もない。朝食は450ccのとうもろこしパップ、昼食は250グラムの炊き上げご飯・およそ150ccのサユール [野菜] (中にはけっこうな脂肪とオンチョム [醗酵させた小さな黒豆料理] と肉が少々入っている)、夕食は丸パン5分の1と紅茶だった。たくさんの野菜が入って来たので、夕食には紅茶の代わりにスープがでた。食事の質はバロス [第5] より良く、米の量も多い。バロス [第5] では最後の頃にはおよそ180グラムだった。パップはだいぶ味が良いが、量が少ない。僕たちは2日間午後一人につきマンガ [マンゴ] 一個貰った。トーコーではパンを一個30セントで買える。クテラ [クテラ芋] 粉で作った小さなひどいものだけれど、僕は3分の1のものを2回買った。それに最近買える鶏の卵も一個30セントで売っていた。くよくよ考えないことだ。ものすごい噂が流れていて、それはパン5分の1の代わりに3分の1貰えるということだ。初めに目で確かめなければならぬ。僕は更に一日中砂糖を食うのだ。時々僕たちは秘密にもらった水を沸かし紅茶を飲む。

ドウ・マイイアー

1944年10月21日

今日は全ての食事が変更された：8時にはパップ450cc、またアジアパップだ [...], 1時にはパンと紅茶、そして夕食は6時でごはんサンバル⁸²とは！ ありがたいことだ！？

ドウ・マイイアー

1944年10月22日

本当ならもっとたくさん貰えるはずなのに、今では無料給食所からパンはもうでない。これはイ

⁸² — 細かく刻んだ唐辛子入りのぴりっとする味の添え料理。

ーストが足りないからだ。

フックス

1944年10月26日

午後には今でも[とうもろこし]パップがでる。この頃朝飯パップは非常にひどく、悪臭の亜鉛華軟膏の味がする。一日パップ2回には本当にあきあきしてしまう。夕飯は時間が経てば経つほど良くなる。普通は250ccのスープがでて、時々トマトが入り、いつも沢山の肉かオンチヨム[醗酵させた小さな黒豆料理]が入っている。

ファン・エングルンブルフ

1944年10月27日

昨日は兵補にシャツ2枚を売った。チャンスを掴んだのだ。その上ここでは何もかも非常に高いので10ギルダーが必要だった。ところで僕はまだシャツを4枚持っている。しかしお偉方の組長たちには気に入られなかった。全収容所に対する責任について、小さな少年たちへの手本などについて僕はひどい叱責にあった。だがチャンスを与えられたら[皆は]どうするだろうか？ まあ、起きてしまったことだが、悪いとは思っている。午後ヴィリィ・クア[ファン・エングルンブルフの親戚]の後に、若いリースカーが5ギルダーを持って家に来た。ああ、やらなければ良かった！あと一日待てばスサー[厄介事]も起こらず、シャツも持っていられたのに。

フックス

1944年10月31日

ルーウィガジャ[農園]から多くのウビ[キャッサバ]の挿し穂がここに運ばれた。まだ沢山の葉がついていた。ものすごく雨が降ったので、僕たちは既に4時に「雑役」から家へ戻った。僕はウビの葉を見た時、雨の中で帽子やポケットの中に葉っぱをいっぱい押し込んだ。今晚僕たちはここでウビの葉と塩を入れたバター缶2個を煮た。僕たちは腹一杯食べ、その後翌日のために少し取っておいた。

フックス

1944年11月4日

今晚も良い食事だった。ご飯320グラムとサンバル トマト200ccだった。残念ながら肉は全然入っていなかった。バロスの人たち [ルーウィガジャの農園で雑役を行なう者たち] の唯一の利点で、ルーウィガジャの野菜は全て僕たちの所に来る。トマトは全部そこから来たのだ。この頃、炊事場にはパイナップルも入手され、それもサンバルと混ぜるのだ。早く砂糖が手に入ると良いのだが。既に一週間ほど砂糖を食べていない。

ドゥ・マイヤー

1944年11月4日

今、僕は日記を真新しい鉛筆で書いている。きれいな赤色でとても書きやすい。

フックス

1944年11月6日

ヘンク [カルスホーヴン] はすばらしいオープンをつくり、僕は浸水電熱湯沸かしを分解してすっかり修繕した。バターのは8分で煮られるが、実験の後はワイヤーも赤熱する。夕方に一人ずつ熟していないパイナップル4分の1をもらった。明日煮てみるつもりだが、もしかしたら、味がよくなるかもしれない。僕たちは未だに賃金の支払いを受け取っていない。

ドゥ・マイヤー

1944年11月6日

数日前ベッドをもらったが、とても長かったので今日ピア [カサ] と一緒に短くした。切り残った木で下駄を作ろう。少なくともやってみるつもりだ。というのはどこから下駄のひもを手に入られるかわからないからだ。

ドゥ・マイイアー

1944年11月12日

ビア [カサ] と僕はバイエム [ほうれん草] の茎 (無料給食所の残飯) とラブトッペス [かぼちゃ] でスープをつくった。なぜならば7時まで料理が許されたからだ。それに砂糖菓子も作った。夜にベアとルディ [バッカー] は犬に罌をかけ、それを食べるつもりだ。エドゥガー [ラウレンス] は今日カエルを殺した。昨日トーコーの丸パン4分の1をもらう際、マンガ [マンゴ] も一つもらい、うれしことにそれは以前のように大変おいしい。今日もまたマンガ4分の1とサンバル [トウガラシが主の辛い味の添え料理] をもらったが、昨日はもらえなかった。

フックス

1944年11月13日

午後、僕のパンと配給パンでパン製プディングをつくった。パンと砂糖をこねり、それからロウソクの脂で焼いた。すばらしい味だった [...]。ヘンク [カルスホーヴン] はトーコーからチャベ [唐辛子] を少し持って来た。ハンス [ヌウマン] と僕は各自一つもらい、それで僕はチャベ水 [唐辛子水] をつくった。

僕は不快な発見をした。持参している5本のズボンのうち、2本のズボンだけが繕われてないか、又はやぶれてなかったのだ。

ドゥ・マイイアー

1944年11月13日

僕らは衣服修繕するために、人形の服などの布切りを探し出すことができた。僕は自分とビア [カサ] の分にきれいなボタン付きの結構丈夫な人形ドレスを探した。

フックス

1944年11月14日

僕たちは今日おいしいサンバルをつくった：それはネズミ一匹・カエル一匹・油少々・タウチョ [醗酵させた大豆]・たまねぎ・ダウン サラム [月桂樹の葉] とチャベ [唐辛子] だった。ネズミは雑役の際石を投げて殺し、カエルは少年たちが捕まえた。

フックス

1944年11月15日

今日〔雑役〕からバケツいっぱい野菜を持って来た。それらはクロコトウ〔スベリヒユ〕、バイエム〔ほうれん草〕とみずみずしいクテラ〔クテラ芋〕の葉っぱだった。僕たちはおいしいサユール〔野菜〕を料理した。僕は更に山ほどのパップをもらい、それをスープの中に入れ、バターの缶は一杯になった。ただ残念なのは余りにも水っぽかったことだ。

ドゥ・マイヤー

1944年11月16日

数日前より始まった献立変更を僕はまだ記帳しなかった。午後1時のパンと紅茶の代わりに今ではアジアパップも貰えるが、またすぐにパンになるだろう。昨日はおいしいテロン サンバル〔ナスとサンバル〕を食べ、スープにはテロン〔ナス〕とロバック〔大根の一種〕が入っていて、これも又うまみがあった。昨夜はおじさん〔マックス・フレーザー〕からトーコーパンとおいしいセルンデン〔おろして焼いたココナッツ〕をもらった。というのは年上の人たちはセルンデンを100グラム50セント、クウェイ チナ〔中国クッキー〕1個40セントで買えるからだ。病院からまた出て来た〔ハンス〕クリック、そしてヴィリィ〔バイラーアトウ〕と僕はおじさんを通してクウェイ チナ〔中国クッキー〕2個とカモの卵1個を注文する計画をしているが、(金がないので)僕は卵を注文しない。

フックス

1944年11月16日

マインコ〔トクソペイユス〕とヒィアトウ〔カルスホーヴン〕は多量のロバック〔大根の一種〕の葉と古いセロリを持って来た。それを一人につき600ccもらった(僕は料理をしたので、もっと貰え、それに沢山つまみ食いをした)。なぜならばヘンクとヒィアトウ〔カルスホーフェン〕は何もしないからだ。それなら僕がつくってみよう、しかし(味を見るよりも)たくさんつまみ食いをした。昨日と今日はテロン〔ナス〕入り肉のサンバル(150cc)を食べた。とてもうまかった。今日賃金の支払いもあった。―僕は一日分余分に貰ったと思う。―だが確かに僕はそのことを言うほど馬鹿ではない。もしかしたら〔11月18日〕土曜日に衣服のほころびを繕うために休みをとるかもしれない。というのはその必要があるからだ。

フックス

1944年11月17日

僕はポップで試してみた。殆どかたくなるまでもう一度ゆで、それから焼いた。それはまるでトーストしたパンのようだ。今日もまた最後に昼食用ポップを食べた。これからまたパンがでるのだ。

フックス

1944年11月19日

物の値段が少し下がった：チャベ [唐辛子] は 5,50 ギルダーだけで、初めのころの値段の3分の2にあたる。

フックス

1944年11月21日

今日の午後、また熟していないパイナップルをもらった。今回は何もつくりができなかった。僕たちは既に苗床にウビ [サツマイモ] を (33個) 植えた。引越ししなければ、4ヶ月後には満腹になるほど食べるだろう。

ドウ・マイイアー

1944年11月22日

パイナップルの皮を使い砂糖を混ぜ発酵させ、ワインをつくろう。誰もがやっているし、レモナードのようでおいしい。

フックス

1944年11月29日

僕はアッサム [インドネシアのタマリンドの実] を 200グラム注文した。一つは自分用、もう一つはマイニコ [トクソペイユス] 用だ。それから彼から砂糖をもらえるのだ [...]. 砂糖はひどく不足して、既に僕たちは一週間砂糖なしで、非常に不快である。ヤップは既に数日前、砂

糖が余り入手されないだろうと警告していた。

ドウ・マイイアー

1944年12月1日

午後ココナッツ砂糖菓子を作り、大変うまくできた [...]。どのように僕らがその砂糖菓子をつくったのかと思うだろうが、1時から4時までの間、また料理をして良かったからだ。

フックス

1944年12月1日

午後に暫くぶりにスープを飲んだ。とてもおいしいスープでペチャイ [白菜] とキャベツがまだ入っていた。

ドウ・マイイアー

1944年12月7日

今日僕はトランクを完全にからにした。中に入っていたものよりももっと多く詰み込めることがわかった。更にエドゥガー [ラウレンス] が所有した小箱を僕が持ち、彼は [ヴィリィ] バイラーアトゥのものを持っている。今バイラーアトゥの下駄も貰った。僕の所持品がまた多くなったことが分かる。更に、僕はポケットナイフを二重のティカール [寝台用むしろ] (まだ真新しい) と交換した。というのは僕の古いティカール [寝台用むしろ] は非常に薄いからだ。

フックス

1944年12月8日

豚肉150キログラムが入手された。それは僕たち自身の豚 (ルーウィガジャで飼育された) だが、ヤップに400ギルダ支払わなければならなかった。もちろんのことあのならず者はそれを自分のふところへ入れるのだ。

ドウ・マイイアー

1944年12月9日

僕らはマンガ [マンゴ] を食べ、豚肉入りのスープを飲んだ。その豚は50キログラム400ギルダーした。今日200グラムの砂糖をただでもらった。

フックス

1944年12月12日

午後はスープ、夕飯はご飯なしだが220グラムのうずら豆と100ccの肉なしビーフシチューを貰った。すばらしい味だが余りにもわずかだ。けれども量はいつも少ないのだ。

ドウ・マイイアー

1944年12月12日

午後おいしいビーフシチュー (たくさんの肉入り) とうずら豆とアチャール [野菜の酢漬け] を食べた。今日の米の割り当て分はクリスマス用に残される。僕たちは400グラム以上もらうのだ。今日もロバック [大根の一種] が手に入った。

フックス

1944年12月13日

この頃僕は特に午後になると非常に腹が減る。5分の1の丸パンなどは腹の足しにはならない。ただ紅茶で満腹になり、僕はだいたい800ccぐらいもらって来るが、小便をすれば又もとに戻るのだ。

フックス

1944年12月14日

パジャマのズボン直し、少しほぐれたズボンを縫った。まだ尻の部分全部を直さなくてはならない。

サロモンス

1944年12月15日

約束された10ギルダー [オランダ政府より、バタビヤから来た少年のみを対象] を受領した。この金は新紙幣10ギルダーで支払われた。[...]クリスマス用のトーコーへの注文が受けられた。

フックス

1944年12月15日

今日クリスマスの注文が取られた。僕は1ギルダー97セント分買う。僕は本当に楽しむつもりだ。一日むさぼり食えるのは最高なことだ。幸いなことに僕のスプーンをまた見つけた。奥の部屋にいる連中の一人がスプーンを使っていたのだ。僕のパイナップルをロバック [大根の一種] と交換した。それを細かく切り、ご飯の中に混ぜ、そうすると500グラムあるかのように見える。

フックス

1944年12月16日

今日は幸いにも砂糖を受領し、クリスマスプディング用に各自200グラム渡された。僕は今朝の休みの間、クロコットゥ [スベリヒユ] をもう少し摘み取った。わずか250ccの乾燥野菜なので僕は一人で食べた。

フックス

1944年12月17日

今日僕は再び一日中道路作業をした。午後には砂利のへババットゥ [雑草を取り除く] し、少しクロコットゥ [スベリヒユ] を集めたが、ヤップンの一人が常に監視していたので持って来られなかった。まあ、いいや、明日何かがあるということになる。今日の午後24個のきゅうりの種を植えた。つまり2ヶ月後にはロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] とサラダ菜になる訳だ。僕の砂糖の蓄えは調子良くいっている。僕は自制心を持っていたのでまだ一度も砂糖のつまみ食いをしていない。決して一度も起きたことがない。

サロモンス

1944年12月18日

10日間勤労の賃金を得た。87セント受け取った。

ドゥ・マイイアー

1944年12月21日

昨日は便宜上献立を変更した：朝食は7時でパンと紅茶、昼食ポップ、夕食はごはんとスープだった。ロンボック [唐辛子] もオンチョム [醗酵させた小さな黒豆料理] ももう手に入らないらしいが、この頃のスープはおいしい。[...] 僕らは3人で100グラム40セントするクタン [もち米] を買い、これで5日間おいしい食事ができる。

フックス

1944年12月21日

僕は今配給の4分の1パンを蓄えるのに忙しい。これでクリスマスにはパンが2倍になる[...]。クリスマスの注文のうち既に僕はチェンゲェ [ミニ唐辛子] を入手した。これでひとまず何かを手に入れた。ただ残念なのは最後の二日間はまだパンがないことだ。パン屋によると小麦粉は取り上げられたが、25日にはまた手に入ると約束した。もし来なかったならば、僕たちのクリスマスプディング作りは駄目になってしまうが、それなら新年のプディングをつくれればよいのだ。

ドゥ・マイイアー

1944年12月28日

僕は新しいクッションをつくり、古いクッションにヘテンベルトウ [布切れでつぎ当てをした]。なぜならクッションはもうひどくなっていたからだ。幸いにもエドゥガー [ラウレンス] の針と糸で繕えた。昨日僕は午後中ずっと実験に忙しかった。部屋はカポック [綿毛] だらけになり、取り除くことなどもう全くできない。まるで雪が降ったかのようなだった。とにかく少なくとも僕には気持ちよい枕が2つある。マックスおじさんは数日前クッションを詰め入れるように僕に頼んだ。更にやっとのことで下駄を作り上げた。というのは下駄を履かなくなってもうだいぶなるからだ (この結果汚れた足で中に入り、きれいな部屋も直に又汚くなった)。

ドウ・マイイアー

1944年12月29日

今日僕らはおいしいサユール [野菜] とサンバル (大部分の野菜は収容所で収穫した)、それに加え40グラムのジャグン [とうもろこし] も食べた (ハンス・クリックから借りた砂糖と混ぜるとうまい)。玉ねぎが手に入り、一個20グラムの重さで大変大きい。その上に一袋25セントのフン・キュー [グリーンピースの粉] も入って来た。これなら払える値段だ。マックスおじさんは2袋もらえるということを期待して40個注文したと言う。なぜなら最近ではいつも注文分のほんの一部が手に入るか、または何もない時もあるからだ。

フックス

1944年12月30日

この嫌な年の最終日を良くする為、僕は明日のためにかなりの注文 (2,70 ギルダー) をした。何が手に入るか興味津々だ。

メィムリンク

1945年1月1日

ヤン [ハーリング] と [グッツ] ナスウツは [闇取引を] やめ、かなり金を儲けた。それは彼らの部屋に100ワットのランプが下がっていることで明らかだ。

ドウ・マイイアー

1945年1月3日

今日僕たちはクドンドン [りんごのような果物] を貰ったが、非常に堅かった。僕はこれをしまっておこう。というのはまた貰えたらリンゴピューレを作るつもりだからだ。今晚僕らは又マックスおじさんの所でガドガド [インドネシア料理で暖かいピーナッツ・ソースをかけた野菜サラダ] を食べに行く。昨日も行ったのだ。菜園には未だ沢山のもものが収穫できる。僕たちは40セントで買えるカチャン タナ [落花生] でカチャンソース [ピーナッツソース] を作った。パン用には甘ロピーナッツバターも作り、たくさんの玉ねぎ入りのカチャン [ピーナッツ] のサンバラ [唐辛子が主の辛い味の添え料理] もつくった。全て本当においしかった。

フックス

1945年1月3日

今晚ものすごい事故が起こった：僕の棚の綱が急に切れ、棚板がイェリック [ヌウマン] の頭に落ちた。全てがごちゃごちゃになった。卵 [1月2日に彼がトーコーで買った] は割れ、チェンゲェ [ミニ唐辛子] 入りのビンは壊れ、紅茶の缶は蓋が開き、釘、ネジ、ボタン全てがごっちゃになってハンス [ヌウマン] のマットレスの上に散らばった。

ドウ・マイイアー

1945年1月4日

トーコーの商品を売り尽くすために、僕らは全員ロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] を買ってよかった。今度店は事実上完全に「ヘトゥトゥプトゥ [閉鎖した]」、そして僕らはもう何も買うことができないのだ [...]。ルディ [バッカー] が去った時、彼の殆ど新しいノート、紫色の紙の剥ぎ取り式帳面そして小箱を僕が蓄えたの5分の1のパンと交換した。なぜなら彼らは紙など持参してはならなかったからだ。小箱に対しては錠とスプーン数杯の砂糖と交換した。これで、小箱は2つになる。

ドウ・マイイアー

1945年1月5日

僕らはロバック [大根の一種] と塩しか手に入らず、毎日でるのはロバックで、これでは死んでしまうだろう。それでもおいしいものを作ることができるものだ。炒ることもでき、ちょうどよく焼いたらカリフラワーのような味がする。ロバックでサラダをこさえることができ、それはビア [カサ] が玉ねぎとロンボック [唐辛子] で作った。更にセルンデン [おろして焼いたココナッツ] をつくることができる。ロバック [大根の一種] の葉っぱも食べられ、それを長時間とろ火で煮れば、にがい後味を残すことは少しもない。それでは、また明日。

ヨーストゥン

1945年1月7日

僕らは今日全部の家用にバケツ1杯のサユール [野菜] を料理した。午後にはパンの際にこれが分けられた。各自マグカップ [大型コップ] 2杯のサユール [野菜] をもらう。午後に2杯のニ

ッポン砂糖⁸³も貰った。

ドウ・マイイアー

1945年1月7日

僕らは今日サウォ [汁の多い茶色の果物] を一人につき一個半もらった。それで毎日のようにこれもらったブルウムン収容所のことを思い出した。また今ここでサウォ [汁の多い茶色の果物] の時期が訪れば良いと思う。更に僕たちは200グラムの赤砂糖を貰い、それはすごくおいしかった。僕には丁度それが必要だったのだ。というのは今朝パップを食べる時、甘い糖蜜を食べ尽くしてしまったからだ。その上、今日は良い一日だった。確かに新年の第一日曜日で、昨日は公現日(1月6日は宗教上の祝日で、キリスト誕生に東方の三博士の来訪を記念する)だった。すなわちコーヒー付き 1/4のパンとひどくおいしいサンバル入りのごはんを300グラム貰ったのだ。

トーコーはまた一日だけ開店し、注文することができる: 250グラムのカチャン[豆]、玉ねぎ250グラムとロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み]。無料で棒状の細長い石鹼を貰った。今晚またサラダ菜のガドガド [インドネシア料理で暖かいピーナッツ・ソースをかけた野菜サラダ] を食べに行く。マックスおじさんは4ギルダーで2つのサウィ [白菜] の苗床を売った。おじさんは既にその半分の金で1キロのカチャン [豆] を買った。

フックス

1945年1月8日

僕の魚はもうお終いで、ただ骨が残っているだけだ。それでいつかスープを作るつもりだ。それに砂糖もなくなり、最後に残った少しはパップに入れた。午後ぐっすり眠れたのはかなり疲れていたからだ。僕はズボンの縫い物さえした。今晚はクテラ [クテラ芋] とたくさんの玉ねぎの入った400ccの濃いうずら豆スープを食べた。とても良い味で [トーコーで注文した] 3個のロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] に丁度良くあっていた。それが軽いマーカン ヘバットゥ [祝祭のごちそう] だったのは、トーコーがやはり閉店されるからだ [...]。本当にひどいことで、砂糖を手に入れる機会はもうなく、野菜も不足して、僕たちは既にたいへん痩せこけている。しかしなんとか切り抜けるのだ。1945年に終わらなければ1946年には終わるだろし、(もっとひどくならなければ) 僕たちはやっていけるのだ。

⁸³ — ニッポン砂糖 (「コンピィ砂糖」や「メナージュ砂糖」と同様) とは日本軍の配給から抑留者に与えられた砂糖を意味する。

ファン・エングルンブルフ

1945年1月9日

食事に関しては今のところ野菜が不足しているが、僕は自分のサウイ [白菜] とタマレタスを取り入れた [...]。カチャン [豆] とアッサム [インドネシアのタマリンドの実] の蓄えを買い入れ、それは2,37 ギルダールと半セントかかった。カチャン [豆] は1キロ4ギルダールもする！

フックス

1945年1月10日

午後ごみ箱の横にうずら豆を2つ見つけ、直ぐに植えた。6ヶ月後にはおいしいうずら豆スープを飲むのだ。ただその前に玉ねぎを買って植えなければならない。

ドウ・マイイアー

1945年1月10日

最近は余り野菜が入って来ない。サンバルはおいしいが、満腹にはならない。今晚ごはんはサンバルがついていなかった。

ドウ・マイイアー

1945年1月12日

[1944年] 10月13日に「浸水電熱湯沸かし」について書いた。それは厳しく禁止されている湯沸かし電気棒で、非常に調法だ。それは木や竹で作られ、半センチメートルからおよそ1センチメートルの間隔に溝を掘り、そこに2つの缶の板をずらす。各板にはコードワイヤーが付いていて、その全体が容器の水の中に入り、コードはコンセントに差し込まれる。だいたいこの様に見える。それは電気ポットとも呼ばれる。二つの缶を使い、木をその中に差し込んでも作ることもできる。

ドウ・マイイアー

1945年1月17日

1月13日僕らはちょうどポップを食べた。バターミルクのポップだ！僕らは何と喜んだことか。フン・キュー [グリーンピースの粉] はでなかった。だからその日はバターミルクと特別追加のごはん500グラムをもう一度暖めた。水を1リットル注ぎ足してもまだ濃く、なんておいしく食事をしたことか。幸いにもその日更に100グラムの砂糖を貰ったので、甘い味付けで食べることができた。

フックス

1945年1月17日

10時に元気よく洗濯に出かけ、布団は外に干した。もし良い天気ならば、それらも洗おうと思う。しかし今のところ天気の良い日はないので、夕方にもまだ湿っぽいかもしれない。そうなあると災難なことになる。洗濯をした後、バイエム [ほうれん草] の取り入れに行った。バターの缶に大きな葉全てとゆでたバイエム [ほうれん草] を殆ど一杯詰めることができた。僕はその他オートミール⁸⁴の缶に入っているロバック [大根の一種]、丸パン5分の1とスプーン2杯のフン・キュー [グリーンピースの粉] もバターの缶に入れた。午後腹が膨れるほど食べ、晩には炊事場よりたくさんのスープも貰った。ヘンク [カルスホーヴン] はウビ [サツマイモ] スープをつくり、僕たちはそれをまた300cc飲んだ。

ドウ・マイイアー

1945年1月18日

今日フン・キュー [グリーンピースの粉] でまたプディングをこしらえた。これからは蓄えがある限りプディングを毎日つくるのは、それがおいしいからだ。今日僕は又ロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] を買った。今日はほんの少しのスープで150ccだった。実においしく、ジャグン [とうもろこし] は入っていたがサンバルはなかった。僕はチェンゲエ [ミニ唐辛子] で自製のサンバルをつくった。ケイス [ブローズホーフトゥ] おじさんからニンニクを貰った。よかった！ [...]。午後パンに紅茶を飲むのは贅沢すぎるので、その代わりに今ではお湯を飲む。その上恐らくパンは全部もらえず、明日はその最後の日になるだろう。この後にとうもろこしポップがでるのだろう、たぶん栄養はあるかもしれないが、砂糖なしで食べらるもので

⁸⁴ — 皮をむき蒸し、ローラーでつぶして乾燥したオート麦。

はない。全てのポップは味なしなのだ。

フックス

1945年1月18日

今晚暗くなった時、パガ [柵] の方へはって進み、何か料理する為に野菜を3本取った。うまくいき、誰にも見られなかった。

フックス

1945年1月19日

僕たちはまもなく金が貰える。その金は既に届いており、オランダ政府からの8ギルダー28セント⁸⁵は、ただ両替されなくてはならないだけだ。この素晴らしい知らせを聞き、僕は直ぐ自分にロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] をごちそうした。僕たちはまた砂糖を100グラム貰った。僕はそれを又あつという間に食べてしまった。そうすれば味が良く分かり、一時間ほど味を楽しめるのだ。

ドゥ・マイヤー

1945年1月19日

この収容所にいるイギリス人たちは政府⁸⁶から78ギルダー受け取った。バタビア人たち [オランダ人たち] は10ギルダーだ。もしかしたら僕らは明日 8,28 オランダ・ギルダーをもらえるかもしれない。そうなればすばらしいのだが、というのは僕の金は殆どおしまいだからだ。それに今月の20日から30日の間に「クリスマスプレゼント」を貰えると誰かが言っている。それも楽しみなことだ。

⁸⁵ — ジャワにある数箇所の収容所にいた抑留者たちは1944年11月から1945年3月の間、一人につき8～10ギルダーを受け取った。オランダ政府は5万ポンドの送金を1回はスウェーデン政府、他の1回はバチカンを通し、2回実施することができた。(L. de Jong, *Het koninkrijk der Nederlanden in de Tweede Wereldoorlog*; 11b, tweede helft, [Leiden 1985] 822-824) .

⁸⁶ — チマヒ収容所のイギリス抑留者たちはバチカンの仲介で75ギルダーを受領した。イギリス政府からのこの金はオランダ領東インドのイギリス人抑留者当て3000ポンドの一部であった。(Van Velden, 152-153, 161)

フックス

1945年1月20日

今朝僕は10時までベッドにいた。なぜなら掛け布団にたくさんの穴があるのを見つけ、それを繕うとしたからだ。そのあと頭を洗い部屋を掃除した。僕のパジャマもそこらじゅう破けて、捨て鉢の勇気で繕い始めた。というのは一ヶ所を直すとまた他の場所が裂けて、また振り出しに戻ってしまうのだ。だがどうしても直さなくてはならないのは、それが僕の唯一のパジャマだからだ。他の衣服もとにかく余り良くなかった。僕はそれをかなり気をつけて扱わなければならない、さもないと終戦までもたないだろう。しかしきつとうまく行くだろう。既に去年何も持っていなかった人たちでさえ、今裸で歩いてはいないからだ [...]

菜園は良好に行っていて、クティムン [きゅうり] にはもう既に小さい4つの実がなり、苗は伸び出し始めている。2週間後にはまたバイエム [ほうれん草] スープをつくれると思う。バイエム [ほうれん草] がお終りになったならば、新しい苗を植えるのだ。しかしその間にまだサラダ菜が取れ、それは収容所でひどくラク [人気がある] で、一個25セントでも容易に売れる。それでかなりの利益が取れる。全てが将来の夢なのだ：僕はサラダ菜の種を持っているわけでもなく、恐らくその頃にはとっくにここから出ているかもしれない。

ドウ・マイイアー

1945年1月20日

僕たちは今 8,28 ギルダーを受けたが、現金は手に入っていない。

フックス

1945年1月21日

炊事班は今日パン4分の1、なかなかおいしくコーヒー、トーコーの売り物用砂糖125グラムを奢ってくれた。それは無料の砂糖が余りにも少量だったからだ。僕はまた僅かな砂糖以外は食べ尽くし、それをザウアークラウト⁸⁷を作るために少しロバック [大根の一種] に入れた。うずら豆スープと一緒に食べるようにロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] をまた3個買った。全ての御馳走は政府のおかげだ。

⁸⁷ — 塩漬けして発酵させたキャベツ。

フックス

1945年1月22日

5時に木を探しまわろうと向かい側へ行ったが、完全な失敗に終わった。木はどこにも見つけられない。絶望的だ。[...]午後僕の後ろに住んでいる誰かが炊き代と木代用に50パーセント取るという条件で僕はウビ[サツマイモ]スープをつくった。そういう訳で何もせず約300ccのスープをもらった。菜園を持っているというのは得なことだ：何もせずに食事ができ、植物は伸び続けるのだから。

ヨーストウン

1945年1月23日

今日ぼくたちはマットレスを貰った。各自一つずつもらえた。

フックス

1945年1月24日

僕はたくさんのカポック[綿]を手に入れた。明日それを僕のグリング[抱き枕]や携帯用マットレスに詰め込むのだ。両方とも今のところ半分ほどぺっちゃんこになっている。毎晩振ってふくらさせなければならず、一時間ぐらいするとまた僕は冷たい硬い地面の上に寝ているのだ。

ドゥ・マイイアー

1945年1月24日

バンドンの女性たちの大部分はバタビアへ移動されたと言う。そうならば僕らはその時そこに留まっていた方が良かったのだ。そうすればアルバムや教科書など僕らの重要な balan [荷物]のいくつかを持っていられたらに[...]。チハピット[バンドン郊外にある女性収容所]からの携帯用マットレスがここに到着した。[マックス]おじさんは今すばらしい携帯用マットレスの上に寝ている。僕はおじさんから見事な下駄を貰った。全く新しく、TD[技術班]でつくられたものだ。これより最高なものはありえない。ああ、なんて嬉しいことだろう！僕は紐を付けるためにおばあちゃんの古いスリッパをバラバラに切った。

ドウ・マイイアー

1945年1月25日

今日の献立：パンとおいしく暖かく甘いコーヒー、ごはんとジャグン [とうもろこし] 入りサユール [野菜]。僕らはまた幸いにもフン・キュー [グリーンピースの粉] を注文することができた。フン・キューは100グラム25セントで、明日はまたロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] だ。ロントンは一日おきに注文しても良い。今日はクドンドン [りんごのような果物] を一つだけ食べた。僕はまたロバック [大根の一種] を食べたい。塩のほか大根が唯一のパンの上に乗せて食べられるものだ。塩はいつも最初に食べられるように細かく砕かなくてはならない。塩はまるで丸い小石のようだ。

フックス

1945年1月26日

また昼飯がスープだったのは、夕飯にうずら豆スープがでるからだ。午後木を少し取るために風呂場の屋根の上に登った。というのは明日の午後にスープを作るつもりだからだ。そうすれば日曜日に砂糖入りのパンプディングを作るためのパンを取っておくことができる(もし砂糖が手に入れば、そうでなければ他の日につくるのだ。ハンス [ヌウマン]、イェリック [ハンスの弟] と僕でやるのだ)。[...] 今晚のスープ (400cc) はまたとてもおいしかった。残念ながら全然肉がなく、たくさんのクテラ [クテラ芋] が入っていた。ごはんも運悪く水気が多すぎ、ひどかった。

フックス

1945年1月28日

それからためておいたパンをさいの目切りにし、柔らかくするように水に浸けた。そして木をたたき切り、火を付け、3人一緒にプディングを作った。それは見事に成功して、丁度良い固めで出来上がり、甘さは十分だった。僕たちはそれぞれコーヒーを甘くするだけ十分な砂糖を持っていた。僕は最初に少し炒ったロバック [大根の一種] と一緒に5分の1のパンを食べた。その上ヘンク [カルスホーヴン] からピーナッツバターを貰ったが、一貰うのは3週間ぶりなのだ。彼は当然のこと僕のプディングをもらえなかった。イェリック [ヌウマン] はまた大量のロバック [大根の一種] を見つけ出し、僕たちはそれを料理した。各人およそ350ccのロバック丸ごとを貰った。僕たちはそれを夕飯に食べた。サンバルは申し分のないほどうまく、ご飯には十二分ほどだった。スープはたいしたことはなかった。今日僕はやっと一日中満腹感を持っていたが、

こんな事はよくあることではない。

フックス

1945年1月30日

午後ヌウマン [ハンスとイェリック] と僕はロバック [大根の一種] を再び煮た。各自およそ350ccのロバック丸ごと [大根の一種] を貰った。ご飯と一緒に食べると十分腹いっぱいになる。午後僕たちはカポックの種を初めに乾燥し、炒め、ひいてパンにのせて食べた。種には油がある。コーヒーを作ることできるが、僕たちはまだ試したことはなかった。更に僕たちはランブタン⁸⁸種をいる。その中にも油があるのだ。僕は既に6個目の種を食べた後、気持ちが悪くなった。だが味はかなり良く、特につぶしたカポックの種はうまい。おかしい物を食べるようになり、そのうちに僕たちは草を食べたり、糞を焼き始めることだろう。

ドゥ・マイヤー

1945年1月30日

昨日はにんじん入りのおいしいスープ430ccがでた。にんじんの時期がまた来たらしい。その上昨日はおいしいランブタン [果実] を4つ、150グラムの塩とロバック [大根の一種] を貰い、ロバックでザウアークラウトをつくった。最初におろしにかけ、塩漬けし、それから一晩ねかせておいた。今朝熱湯に入れ、湯を流しとった。その湯はちょうどスープのようでとてもおいしかった。ロバック [大根の一種] 自体は後で配給後のパップの残り物と一緒にもう一度煮た。よし、これでまた新しい料理法ができた。

フックス

1945年1月31日

まさにひどくぐったりしている時に、雑役をするのは決して快いことではない。午後ちょうど点呼の前にごった煮が届いた。空腹と時間をつぶすために、僕は草を少しむしり始めたが、ずうっと掴み取れなかったのはとても手が震えていたからだ。ウビラツツ [さつまいものスタムポット] もまたすばらしいかった。それにはごはん、ウビ [サツマイモ]、たくさんのジャグンメール [とうもろこし粉]、うずら豆、菜園班のガンドゥルン [きび] と100キログラムの肉が入ってい

⁸⁸ 一小さな、白い、さわやかな甘みのある核果。果実は赤い、毛の生えた皮がある。

た。一人当たり56グラムの肉だ。僕はまだロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] を3つ持っていたが、別々に食べた。それは700ccで750グラムになると思う。それでも決して十分ではなかった。 [...]

幸いにもトーコーが約一週間の内に開店する。もう少し多くの砂糖が手に入るようになると良いのだが。なぜなら今のままでは本当に絶望的だからだ。とにかくまたチャベ [唐辛子]、紅茶や石鹼が得られる。僕たちの紅茶もお終いになった。この10日間僕たちは指先ほどの非常にわずかな茶の入ったバターの缶を3回受け取った。僕は既に一週間ほど前からチャベ [唐辛子] なしだ。僕たちは再びごはん、パンと塩を食べ、腹が空いたら十分にある水を1リットルほど飲むのだ。

ドゥ・マイイアー

1945年1月31日

今日の献立：朝コーヒーとポップ。僕は丁度ほんの少しだけ砂糖を持っていたので、甘くおいしく食べた。午後はスープに1/5パンと配給後の残り物。これはピーナッツバターと一緒に食べた [...]。晩には700ccのスタムポット。その中に入っているものはウビ [サツマイモ]、豚肉とうずら豆にガンドゥルン [きび]、これはここの収容所で栽培されたインドネシアの穀物の一種、その上多量のパン粉だった。分配されるまでひどく時間がかかったが、味は良かった。においだけでも素晴らしい！味は本当に信じられないほどで、少量ではなく700ccもあったのだ。ちょっと考えてもごらんよ！炊事班はまたもたいへん骨を折ったのだ。少なくともまた良い気分ですぐベッドに入った。

フックス

1945年2月1日

僕は今のところ野菜を茹でられるように浸水電熱湯沸かしに精を出している。木は風呂場の屋根にまだ数日分用はあるが、永久に続く訳ではない。僕は午後木を少し取るために上に登った。ヘンク [カルスホーヴン] は僕たちのためにトーコーからタバコを盗み取った。なんていい奴だ。これでまた手製巻きタバコを吸うことができる。時々吸うのはうまいものだ。 [...] また砂糖が手に入った。今晚は最後の紅茶の残りを砂糖を入れて飲んだ！

ドウ・マイイアー

1945年2月2日

今朝初めて石鹼なしで服を洗ったのはもう既に1ヶ月石鹼がなく、僕の最後の石鹼は盗まれてしまったからだった。それにこれからはブラシだけで入浴しなくてはならない。ニップは全てが汚いとけちをつけたが、石鹼をくれはしなかった。

フククス

1945年2月4日

トーコー [商店] が開店され、僕はチャベ [唐辛子] と玉ねぎを注文した。更に100グラム1,50ギルダのうずら豆2000キログラムが入って来た。その額で20掛ける100グラムの煮豆が手に入る。炊事場ではそれらを料理している。僕もちろん貰うのだ。これは豪華な補充食だ。そうしてもう僕はロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] をゆでない [買わない]。

ドウ・マイイアー

1945年2月5日

トーコーがまた開店され、僕たちは注文することができた：カチャン [ピーナッツ] 50グラム = 20セント、玉ねぎ100グラム、未だ30セント、ロンボック [唐辛子] 50グラム、12,5セント、グラ ジャワ [赤シュロ糖] 100グラム、22セント。最後のものは200グラム注文したが、猛烈に高い。これは誕生日の時にうまく使える。うずら豆は1,50ギルダで注文でき、100グラム掛ける20回分を手に入れ、豆は既にゆで済みだ。ロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] より一回につき7,5セント得になる。炊事班は時間のある限りこれらを料理する。また昨夜はなんと実に満腹になったことか。うれしいことに今度またウビ [サツマイモ] が入って来る。今晚はごはん330グラムとウビ [サツマイモ] スープ320ccで、おいしかった！ それはまた格別な味がした。その上、今日はランブタン [果実] を4つもらった。

フククス

1945年2月5日

午後僕はまたロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] を3個買ったが、これで最後だ。

その後はどうすることもできないが、もう払えないのだ。

ドウ・マイイアー

1945年2月7日

昨日のウビ [サツマイモ] はまたなんと素晴らしものだったか。ウビは実になんとおいしいのだろうか。280グラムは本当に沢山であった。とてもおいしかったスープはフン・キュー [グリーンピースの粉] と一緒にもう一度暖めた。ウビ [サツマイモ] とトマトを一緒にしておいしいごった煮を作った。ものすごい量だぞ、皆！ 僕は沢山食べて腹がはるほどだった。それほど量が多かったのだ。そしてべらぼうにうまかった。今日もおいしいウビ [サツマイモ] スープだった。つまりテンペイ [発酵した大豆からできたクッキーの一種] が約2つ入っていたのだが、おいしかった。340グラムの沢山のごはんがあったが、果物はでなかった。

いま僕たちはグラ ジャワ [赤シュロ糖] 以外のものを注文した。更に石鹸も注文することができた。それは本当に必需品だ。棒状一本28セントで、5本注文した。あさって用にカチャン [ピーナッツ] でピーナッツバターをつくった。僕らの最後のサラダ菜で今晚カチャン、ロンボック [唐辛子] と玉ねぎで作ったカチャン [ピーナッツ] ソースのガドガド [インドネシア料理で暖かいピーナッツ・ソースをかけた野菜サラダ] を食べた。

フックス

1945年2月7日

午後は食べ物が余りなく、ただご飯だけはたくさんあった。もちろん食事の後僕たちは [トーコー注文からの] 玉ねぎとチャベ [唐辛子] をもらった。玉ねぎにはたくさんの葉がついていたので食べられる部分は少なく、もっとひどいのはチャベ [唐辛子] が半分以上腐っていたことだ。しかし明日はパンとご飯においしいサンバルがでる。

フックス

1945年2月8日

更に午後初めて豆がでた。僕が余分に買えた割り当て分の半分も一緒に食べた。それは腹に良くたまるのだ。食事の後、僕たちは突然一人につき300グラムの砂糖をもらった。これはものすごい驚きだ。僕は一ヶ月間にあれほど沢山の砂糖があるのを見たことがない。少なくとも日曜日のコーヒーまで続くだろう。十分長い期間だと思う。明日は3人で大きなパンのプディングを作

るつもりだ。きつとうまくできるだろう。

ドウ・マイイアー

1945年2月9日

クドンドン [りんごのような果物] 入りの有名なパンのプディング [...]。プディングの調理法：パン5分の4、フン・キュー [グリーンピースの粉] 100グラム、2人分の米と砂糖200グラム。ソース：クドンドン [りんごのような果物] 15個、砂糖200グラム、濃くするためにフン・キュー [グリーンピースの粉] 少々そして [マックス] おじさんのシナモンを入れる。

フックス

1945年2月11日

パップを食べた後直ぐに僕たちはバイエム [ほうれん草] を摘み、茎を集め、全部洗ってきれいにする。半分はハンスとイェリック [ヌウマン] が木を燃やしてゆで、他の半分は隣の浸水電熱湯沸かしでゆでた。浸水電熱湯沸かしのほうがより早くできあがる。僕たちはもったいないので、もう絶対に木で火をおこして野菜をゆでない。ただ浸水電熱湯沸かしでは作れないパンのプディングや他の料理だけに、これを使うことにしよう。僕たちは巨大な量をもらい、それは一人につき1リットルで、僕たちは皆全員で5人だった。僕は何も手伝わなかったヒェアトゥ [カルスホーヴン] にもあげた。彼は平なべを磨いただけで、今度も何もしなかった。[...] 今晚やっと7時に、ひどく冷えたウビラッツ [さつまいものスタムポット] を食べた。このようにたべるのはあまりおいしくない。味もたいしたことはなく、テンペイ [発酵した大豆からできたクッキーの一種] を入れ、ウビ [サツマイモ] とごはんをただ混ぜてすり潰しただけだ。近いうちにグヌン・ボホン⁸⁹で収穫が行われるが、どのくらいになるか見てみよう。もし自分たちで取り入れ、掘出しをしなくて済むならば全て最高だと思う。

フックス

1945年2月12日

点呼の後、更に菜園で熱心に働いた。僕はバイエム [ほうれん草] をすべて取り出し、150個

⁸⁹ — チマヒの近郊に位置するグヌン・ボホンでは農学的特徴を持つ雑役が実施された。中でもウビ (サツマイモ) の菜園をつくり、手入れをしなければならなかった。

以上の苗を植えた。今はまた不毛だ。若苗は後ろから引き抜いた。明日はまたとてもおいしい大きなパイエム [ほうれん草] のスープだ。これは既に6回目の収穫で、まだ家の前に少しだけ残っていると思う。裏はまだ一杯植えられているが、ただ今は全て若い苗だけだ。チャベ [唐辛子] はとても順調に伸び、3つの苗には全部で15個付いている。クティムン [きゅうり] は素晴らしく成長しているが、2つの実のあとはもう実はないだろう。3つのテロン [ナス] の苗にはナスが一つになっているだけで、不成功なのだが、もしかしたら良くなるかもしれない。いつでも苗を見るとひどく不確かになる。

メィムリンク

1945年2月12日

しかし人生は浮き沈んで続いて行くものだ。そして全てが食べ物を中心にして動いている：「何cccのサユール [野菜]？ 今日肉が入って来るか？ いつヒュッツポット⁹⁰がでるのか？」朝食と昼食は同じだが、昼食には紅茶がでない。お終いなのだ。だが夕食に関しては良くなって来た。沢山のウビ [サツマイモ] が入って来るようになると、例えば昨日のようにヒュッツポットが時々でる。それに人参、テンペイ [発酵した大豆からできたクッキーの一種] やタフウ [豆腐] も入って来る。一ヶ月閉店された後、トーコーが再び開店した。たくさんの物が入手された。ある種の品は炊事班が購入し、それを皆が受取るのだ。例えば一昨日カチャン イジウ [青えんどう] スープを貰った。[...] 1月僕たちはオランダ政府より一人につき 8,28 ギルダールを受取った。これはすごいものだ。チャールス [ドゥ・ヴィルトゥ] と僕二人で約23ギルダールになる。それに11月や12月に比べ、この頃は雑役がよくあり、けっこう稼ぐことができる。ただ商品の値段が非常に高いことだ。カチャン [ピーナッツ] は1キログラム4ギルダール、グラ ジャワ [赤シュロ糖] は1キログラム2,20ギルダール、塩水魚は100グラム約1ギルダールだ。それでも絶対に必要なため買うことになるのだ。

フククス

1945年2月16日

僕たちは今日4分の1のパンを食べたが、これはただ在庫を使い尽くす為だけである。パン屋はもうクラッパー [ココナッツ] 油を持っていない。明日からは2回パップがでる。たぶん午後はウビ [サツマイモ] の入っているパップになるだろう。僕は [抑留600日目である2月18日、日曜日にパンのプディングをつくるために] 取っておいたパン20分の1も食べた。日曜日まで

⁹⁰ - つぶしたジャガ芋・玉ねぎ・にんじんと牛肉の料理。

残して置く意味はない。僕は今日ものすごく大きいロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] を手に入れ、それは葉っぱなしで700グラムだ。僕はそれをあげてしまうのは残念なので、チャベ [唐辛子] サンバルと一緒に食べた。

[...]とにかく僕は目が覚めたので、パジャマの上着を繕い始める。袖がまた裂けて、背中の部分の生地はだいぶ弱くなっている。毎晩他の場所が破れ、僕はその度布切れをはった；パジャマはそこらじゅう修理され、もう破られなくなるようそうしなければならないのはそれは僕がまだ持っている唯一のものだからだ。トランクの中にはもう何も入っていない。

サロモンス

1945年2月20日

油不足のためパンの代わりにロールパン⁹¹をもらう。

ドゥ・マイヤー

1945年2月20日

今のところ昼食は非常に良いことを知っている。つまり以前と比べてみると良いということだ。だいたい僕らは定期購入券のうずら豆をもらい、それでおいしいスープを作るのだ。[...] 今またトーコーで1つ56セント、4分の1では14セントで丸パンを買うことができる。昨日はまた100グラムのメナージュ砂糖 [ニッポン砂糖] をもらった。[...] 更にカタツムリを探し、うずら豆と一緒に煮ると、結構食べられた。

フックス

1945年2月21日

午後僕たちは長い間待ち望んだ一人前用のパンを貰った。味はとても良いのだが、石のように固く殆どふくれなかった。直径はこのページの上の端から下に書かれた単語ミングウ [日曜日] までで、サブトゥー [土曜日] から上の端までの高さだ。だから大変小さいのだ。大きな長所はとても固いため、食べ終わるまでに時間がかかり、5分の1のパンよりも長くかかることだ。お年寄りたちは噛めないで、ものすごく不平を言う。もうそのパンは貰えないという噂が既に流

⁹¹ — 1945年2月20日より抑留者たちはパンを kadet (ロールパン) の形で受け取り、それを bol (ロールパン) と呼んだ。

れている。

午後肉がほんの少しと白豆の入ったおいしいカレーサンバルを食べた。510ccのサウイ [白菜]、バイエム [ほうれん草]・ウビ [サツマイモ]・人参・テンペイ [発酵した大豆からできたクッキーの一種] スープ、その上配給券も貰った。またもや良い晩飯であった。僕は人参を500グラム買うことができた。ハンス [ヌウマン] も500グラム買い、明日は菜園からのバイエム [ほうれん草] を少し入れスープを作ろう。僕にはまだバイエムが少し残っている。

フックス

1945年2月23日

僕は今日たくさんの人参を買った。ヘンク [カルスホーヴン] に1キログラム注文し、それからトーコー当番に500グラム注文し、その後1キログラムをくじ引きした。小さくみずみずしい人参を直ぐに食べてしまった。太い人参は明日ゆでるつもりだ。ハンス [ヌウマン] は1.5キログラムの生の人参を食べ尽くし、一晩中腹痛で苦しんでいた。ヘンクも同じだった。僕は少し腹痛を感じた時直ぐに食べるのをやめたので、何の問題もなかった。夕食のスープは80パーセント人参だった。ロバック [大根の一種] の時期は終わり、今、人参の時期にいるのだ。もう果物も手に入らず、全てのクドンドン [りんごのような果物] の木はすっかりむしり取られてしまった。僕たちの貴重なビタミンはどこにあるのだろうか？

フックス

1945年2月26日

僕たちは幸いにもまた砂糖100グラムを貰った。今晚直ぐに5セントで500ccのコーヒーを買った。それは残り物だったので、非常にたくさんだった。残りの砂糖は [以前の決心にもかかわらず] あっという間に食べてしまった。僕はどうしても食べたかったのだが、罰としてひどい歯痛にあった。

フックス

1945年3月1日

パップを食べた後、直ぐに下駄を作る為に立ち上った。2本の針金を引っ張り、それから周りや合間をしっかりと巻いた。見事な成功品となった。やっと片方ができあがったが、今度は又きちんと使うことができる。他の下駄にはまだ紐が付いているので、明日まで使おう。そうしてそれ

にも針金の紐を作ろう。午前中ずっと忙しかった。

ファン・エングルンブルフ

1945年3月2日

たいした事は起こらない。時間をできるだけ有意義につぶそうと心掛けるが常に食糧不足の問題に支配される。僕は腹も空かず、何もする気がない時もある。しかし何も食べないのは悪いので無理に何かを食べようとするが、余りにも少量なので、まさしく狂いそうな空腹感に襲われる。僕は何かを買う為に、金を稼ぐようにとまた働いている。なぜなら僕の金はなくなりそうだし、今はまさに栄養のある食べ物が買える時期なのだ。しかしこの頃金の価値が余りに下がっているのは、全てのものが実に高いからだ！例えばグラジャワ [赤シュロ糖] や玉ねぎは以前より10倍も高くなり、パンは72セント、ピーナッツバターは100グラム45セントする。普通の食事は非常に偏っている。

ドウ・マイイアー

1945年3月4日

午後僕らはパンとコーヒーにガドガド [インドネシア料理で暖かいピーナッツ・ソースをかけた野菜サラダ] を食べた。それはウビ [キャッサバ] の葉、サラダ菜とトーコーで100グラム45セントのピーナッツバターでつくったカチャン [ピーナッツ] ソースだ。これはまたおいしかった。昨日はサラダ菜だけのガドガドだった。更に炊事場の昨日の献立はごはん、スープ、たくさんの肉と野菜の入ったカレーソースだった。最後はとろ火で煮た人参だった。うずら豆入りの5種類の料理もあった。僕らは野菜、うずら豆とカレーソースで、配給後のパップの残り物と自分たちで買った人参と一緒においしい料理をつくった。今では毎晩このようにする。今晚も同じでパップ、人参、トマトとカレーで、とてもうまい。

昼食はごはん、スープとサンバラン [トウガラシが主の辛い味の添え料理] だった。このサンバランはまたとてもおいしいテンペイ [発酵した大豆からできたクッキーの一種] とグレービーから作られた。そして [マックス] おじさんからはごはん、セルンデン [おろして焼いたココナツ] を少しもらった。これは先月トーコーで買ったのだが、僕たちは残念ながらもうお金がなかった。

ドウ・マイイアー

1945年3月5日

エドゥガー [ラウレンス] は既にパンなどを売ったりして 1,70 ギルダー稼いだ。けれども僕は自分の食べ物を売りたいわけではないのだ。

ドウ・マイイアー

1945年3月6日

僕はハンス・クリックと一緒にやはりパン売買を始めた。昨日は既に直ぐにロールパン1個を65セントで売り、僕らのトーコーパン2個を36セントで買った。僕らは昨日ロールパン半分とトーコーパンを少し貰った。[ヨーブ]ヴィルムスから僕は少し魚パイを貰い、パンの上のにせ、おいしく食べた。更に僕らはエドゥガー [ラウレンス] に 1,10 ギルダー借り、それで100グラム90セントのピーナツバターを200グラムと100cc20セントのグラジャワ[赤シユロ糖]の糖蜜を注文した。僕らは毎日パンを半分残し、2日間でロールパン一つ売る。これならやって行けるし、かなりの儲けになる。

ドウ・マイイアー

1945年3月7日

更に今日僕らはやっとのことで果物を貰った。既に1週間ほど貰えなかった。一人につきおいしいサウォ [汁の多い、茶色の果物] 1個だった。

フックス

1945年3月7日

今晚ヘンク [カルスホーヴン] の所に訪ねた。彼の新しいトゥンパット [寝場所] を見たかった。良い場所だ。と言うのは光が入り、浸水電熱湯沸かしもあるからだ。直ぐにマグ カップ [大型コップ] で味の良い紅茶を飲み、エビンクの手製巻きタバコを数個巻いた。この様にして僕は既にタバコをせびっていた。10月より全然タバコを買わず、金のあった時期ですら買わなかった。これは大した功績だと自分自身にも言うのである。今晚ハンスとイェリック [ヌウマン] は5個の大きなきのこ [*....*] を見つけた。僕たちは水と塩で普通にゆでた。それは既に点呼の後だった。抑留生活の間このような味を試したことは決してない。それはまるで鶏肉ブイヨ

ンの肉のようだった。僕たちは薄暗がりの中でおいしく食べた。

ドウ・マイイアー

1945年3月8日

午後たくさんのカチャン [ピーナッツ] ソースをパンの上にかけて焼いた。僕ら少年たちは100ccのグラジャワ [赤シュロ糖] の糖蜜を無料でもらった。

ドウ・マイイアー

1945年3月9日

昨日90セントでロールパンを売ることができ、今日ももう一度試してみよう [...]。更にマグカップ [大型コップ] 一杯の塩を売った。ヘンク・スニッカーズは僕の為に14セントで売ろうとした。これはまた利益を生み出す。すごい！

ドウ・マイイアー

1945年3月10日

僕らは商売を差し当たり1週間中止した。なぜなら [ハンス] クリックは [マックス] おじさんが何か疑い始めていると考えるからだ。

フックス

1945年3月14日

今のところ砂糖が400グラムあるが、僕はすぐに食べ果たす。一日中砂糖を食べ尽くす。手を出さないでいるのは不可能なことだ。

ドウ・マイイアー

1945年3月15日

僕たちは今日塩をもらうが、何ができるというのだろうか！ 今日の午後は僕らの料理とパン、

つまりポップ、ピーナッツバターそしてグラ ジャワ [赤シュロ糖] を食べた。

フックス

1945年3月16日

今晚の食事はまたわずかだった。配給後の残り物がなかったならば、食事は栄養がなく少量だっただろう。このごろ野菜は少しもなく炊事班はトーコーから人参を取り、できる限りおいしいスープをつくる。それは良いのだが、困るのは僕たちが人参を注文できないことだ。また飢えの時期が来るかのように見える。ウビ [サツマイモ] に関してはたいして余り気付かない。ものすごく多量のウビが入って来なくてはならないはずなのだが。たぶん収容所外では全てが非常に高いからだろう。

フックス

1945年3月17日

午後の食事は少しも栄養がなく少量だった。僕は食後に、食事前よりもずっと空腹を感じた。本当に絶望的で、このひどい状況がまもなく終わりを迎えるようには見えない。誰かが6月の末には終わる、と言うが僕には全然信じられない。人参が欲しい：そうすれば僕は2キログラムほど直ぐにゆで、そうして少なくともこの酷い飢えは終わるだろう。水を多量に飲んだが、実際に何の効果もなく腹がゴロゴロするだけだ。僕たちは4日間コンピィ砂糖⁹²を貰うだろうと聞いたが、そうではないらしい。なぜなら明日も分配しないだろうし、もし月曜日に受け取れば、もう6日間でなかったことになる。僕は絶望して早く床に就いた。

ファン・エングルンブルフ

1945年3月18日

最近の食事はまずまずだ。これはグラ ジャワ [赤シュロ糖] やピーナッツバターなどを買えるおかげだ。幸いにも先週やっと500グラムの砂糖を貰えた。それは実に沢山であると僕らは思う！

⁹² 一脚注 83、ニッポン砂糖を参照。

フックス

1945年3月18日

パンを食べ終わった時、空腹感が倍になって戻って来た。それからまたロールパンを買い足した。――絶対にしないと誓ったことだった――しかし飢えというものは、厄介事がない時には思いもしないあらゆる事を、やらせるものだ。僕は少なくとも腹に溜まるパンのプディングを明日作るために、今200ccのグラジャワ〔赤シュロ糖〕の糖蜜を注文した。だが今日また1ギルダを使ったが、たくさん受け取ったという訳ではない。金があるうちは使い、なくなったらどうにかなるだろうと僕は考えるのだ。[...] 今日再びすばらしい噂が流れた。今朝チマヒ第4の雑役当番たち1000人がアメリカからのクリスマスプレゼントを貨車から下ろさなければならなかった。そして明日食糧係は僕たちの分を取りに行くだろう。もしかしたら今回は本当かもしれない。

フックス

1945年3月19日

噂は本当だった：小包が着き、山岳砲兵隊のところに置かれてある。噂によると、1キログラムの缶詰を貰えるというが、本当ではないようだ。衣類、靴や大量の薬が入っている。今のところ未だ手に入らず、あと一週間はかかるであろう。

フックス

1945年3月20日

今朝は5分間で雑役一日分の賃金以上を稼いだ。つまりロールパン3個を買い、また売り、パン一個につき5セントの利益で15セント儲かった。しかし毎日このようにすることはできない。残念ながら常にパンを欲しがる人を見つけられないからだ。先生〔ファン・ダー・スホートウ〕と僕は、明日僕がパンのポップを作ることを約束した。彼は一度試してみたかったのだ。彼が全て支払い、僕が作るという有利な取り決めだ。[...] 今晚の夕食は味良く、たくさんで濃いスープだったが、それはルーウィガジャのお陰で、ヤップは殆ど何の野菜も送ってこない。更にハンス〔ヌウマン〕と僕は幸いに大量の配給後の残り物を手に入れた。ご飯だけが残っていたので、僕たちはそれぞれ150ccのご飯を追加に貰った。僕たちのいつもの割り当てと一緒にすると約500グラムになり、暫くこれほど多く貰ったことはなかった。

ドウ・マイイアー

1945年3月20日

人参をもう注文できないため、午後パンと一緒にウビ [キャッサバ] の茎を食べた。にんじんが食べたくて仕方がなく、昨夜はまだ腹が空いていた！ 僕らはもう配給後のパップの残り物を貰えない。だが [マックス] おじさんが作ったサンバルはずっとおいしかった。タウチョ [醗酵させた大豆] 入りのピーナッツバターで、沢山の玉ねぎ、クルヴィック [パンの木] の実とロンボック [唐辛子] がほんの少しだったと思う。それをおじさんは煮込み、おいしく脂っこかった。それから今晚のごはんにはサンバルを食べた。[...]。サユール [野菜] は結構味がよく、サンバルはなかった。しかし昨日のスタムポットはまたこの上なくおいしかった。本当に残念なのは600ccだけでとても少なかったことだ。

フックス

1945年3月23日

午後炊事場によじ登り、椅子を持って行き、薪として使うために、それを便所でばらばらにした。屋根裏にあった僕たちの数個の椅子は今日使ってしまった。更に見事に蓄えた下駄のひもを切り取り、大きなロウソクを見つけた。それで非常に沢山のサンバル バジャック [炒めた唐辛子] を作ることができる。僕たちはロウソクを普通に燃やすことができ、それは少なくとも12時間ぐらい燃え続ける。

フックス

1945年3月24日

午後僕たちは石を持って山岳砲兵隊に行き、午後中ずっと忙しかった。そこで僕は800個の小包が入って来たことを耳にした。ということは5人で小包1個ということだ。前は8人で1個だった。いつ小包が渡されるか、さてそれが渡されるのか、あとはヤップ次第である。やはりあまり多くの衣類は入っていないらしいが、入っているものはすばらしいに違いない。

ドウ・マイイアー

1945年3月24日

ハンス・クリックは病気で、今はパップが好きではない。だから僕はハンスが病気の間、彼の分

をロールパン半分と毎日交換する。今日はピーナッツバター付きパップを食べた。[...] 今晚僕ら4人してどこかでロールパン2個を借りた。なぜなら未だ腹が空いていたからだ。もちろん明日払い戻さなければならないので、うずら豆を今水に浸けた。

フックス

1945年3月26日

僕は今日の昼食のために[トーカーで注文した]人参を切り始めた。その後部屋を片付け、それから火を起し始めた。僕たちは3個の小さな平なべが置ける大きなオーブンを持っていた。人参がよく煮えた時、お湯を沸かし、塩漬けきゅうりを作る為に僕の苗の最後のクティムン[きゅうり]を2本その中に入れた。午後に僕らの以前の家に住んでいた人たちと喧嘩をした。というのは僕は1本持って行くと言ったのに、両方ともちょろまかしたからだ。その人たちはその1本を戻して欲しかったが、僕は返さなかった。それは僕自身の野菜だからだ。

今日の食事はひどくわずかでまずく、もう野菜は全然入って来ない。絶望して炊事場から明日はまたごった煮がでる。この前のごった煮よりましなら良いのだが。そこらじゅうヒュツポットについて不平を言うのを耳にするが、ナウタ[炊事場長]はどうしてもゆでたウビ[サツマイモ]とご飯を出すのを拒む。彼はウビ[サツマイモ]のごった煮コンプレックスか何かにかかっているのだろうか。

フックス

1945年3月28日

今日僕はハンス[ヌウマン]に豆を返さなければならなかった。彼は2人分持っていて、それを翌日の午後用にとっておく。それから彼はパンを残して売ることができる。このようにして金を稼ぐのだ。ロールパンは今既に70セントの価値がある。それで非常に沢山、しかも質の良いものが買える。明日の為にジャグン[とうもろこし]を注文できる。僕たちはそれが粉なのか粒なのか知らないが、兎も角注文した。それは極めて価値があるのだ。更に僕は500グラムのグラジャワ[赤シュロ糖]を集めた。今度の日曜日のパンディング用に100グラム、お母さんの誕生日用に400グラム、というのは一少なくとも食事に関しては一忘れられない日にしなくてはいけないからだ。[...]パンディング用の粉と砂糖は用意できている。昨日のコンピィ砂糖はまだあり、今まで決して起らなかったことだが未だ砂糖が全て残っている。僕は全部の砂糖をトランクに押し込んだのだ。なぜならもし棚の上に置かれているのを一日中見ているとしたら、気が狂ってしまうか、急に自分を抑制できなくなり、全て一度にむさぼり食ってしまうからだ。

ドウ・マイイアー

1945年3月29日

とにかく今日は僕らにとって良い一日だった。炊事場からではないのだ。そこからは味はよかったがごはんとサユール [野菜] だけがでた。今朝割り当て分2倍のパップを食べたのだ。[マックス] おじさんは [ルーウィガジャで働く人からもらった] とうもろこし粉でもっとこしらえたのだ。ああ、うまいかった。1時に僕らは各自ロールパン半分を焼いた。ヨプ [バイスター] はそれに少しジェルック [ライム] とおじさんはとうもろこし粉を入れた。それはとても濃く、一度見ればよかったのに。一ヶ月前になるが、まるでお母さんの誕生日に食べたもののようであり、チハピットの朝食で食べたパップのようだった。今晚はおろし人参 [トーコーでまた注文ができる] で作った人参スープだった。ジャンブウ (ばんじろう⁹³ を貰い、ヴィム [スホット] おじさんからはサウォ [汁の多い、茶色の果物] とクドンドン [りんごのような果物] をもらった。

フククス

1945年3月31日

とうもろこしはすり潰さなければならない。今朝ポットを借りることができず、古い便器の中ですり潰した。そこにはジャッキのようなものがある。杵^{きね}として古いドアの差し錠を使い、それはパチョル [鍬] や斧としての役目をする。これでうまくいくだろう。

フククス

1945年4月2日

午後ジャグン [とうもろこし] パップを作った。先生 [ファン・ダアー・スホートゥ] はグラ ジャワ [赤シュロ糖] を少し分けてくれた。それはすばらしい味だった。350ccの割り当て分は薪を計算に入れず26セントになる。全てが不正なほど高いのだ。金の価値はおよそ10分の1ほどになった。病院では復活祭を適切に祝える為にと誰かが400ギルダー費やした。

⁹³ — 液果状の実で、ジャム・ゼリーなどを作る。

フックス

1945年4月3日

今日の食事は哀れであった。ちょうど死にはしないほどの量だ。スープの野菜は菜園班からで、豆は自分たちで支払う。

ドゥ・マイイアー

1945年4月3日

[マックス] おじさんは最近非常に気前がよい。それは衣類などを扱っているからだ。この間は指輪を売り、儲けは5ギルダーだったと思う。それは僕らにも有利だ。もうかった！ 今晚おじさんは一個80セントのロールパンを3個買った。それで僕らはサンバルを入れ、詰めパンを作りトーストにした。ものすごくうまい。

ドゥ・マイイアー

1945年4月5日

今朝僕らはジェルック [ライムジュース] 入りパップを食べた。それはとてもおいしかったが、パンには何も付いていなかった。だが味わって食べた。パンをちょっと水に浸し、外側を焼いた。そのためオーブンから出てきたような味だった。パンの皮はおいしくカリカリして、パンの中はとてもよく焼けていてまだ湯気がでていた。4分の3のロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] も塩だけを付けて食べた。それはトーコーには何も注文できないからである。しかし午後はまたスタムポットだった。

ドゥ・マイイアー

1945年4月9日

[マックス] おじさんは煉瓦、粘土、赤砂利、煙突として雨どいを使い「完全」なオーブンを作った。だが今それは余りにも強く風を通すので、熱がなべまで来ないが、おじさんは明日少し調整するだろう。今日果物としてジェルック [マンダリンみかん] とジャンブウ [ばんじろう] をもらった。僕らはジェルックを1½、ああ、うまい。そしてジャンブウを2個もらった。なんと長い間ジェルックを食べなかったことだろうか。

メィムリンク

1945年4月10日

ここ数日菜園班は全力を挙げて僕たちの側にあるウビ〔サツマイモ〕の畑を掘り出していたが、日曜日前には終わらなかった。掘り出されていない畑は土曜日の午後に開放された。それを僕たちは少々利用させてもらった！ 狂ったように僕たちは棒、パチョルス〔鍬〕または手でウビ〔サツマイモ〕を掘り出した。畑がくまなく探されると、ランボックカー〔略奪者〕の様に次の畑をぶんどった。フレットウ〔ドウ・ヴィルトウ〕と僕は一緒にやり、バケツ一杯のウビ〔サツマイモ〕が収穫物だった。家に戻ると直に洗い、ゆで始める。後ろ通路には人が群がっていた。そこらじゅうが火、泥、少年とまきだらけだった。晩にはウビとパンを食べた。数個の大きな芋が残っているが、多分明日食べるだろう。

ドウ・マイイアー

1945年4月14日

またトーコーパンが売りに出ているが、今度は1,20ギルダーだ。その値段にもかかわらず、おじさんは3個買い、そのうち一部は午後に食べ、僕たちのロールパンは残しておいた。しかしパンの上ののせるものは食べてしまった。おじさんは薬局でオーボーチョコ〔卵黄、ココアと砂糖の濃いシロップ〕のビンを2本手に入れることができた。それを上にかけて食べると、ケーキのような味がした。何と絶妙なことか。オーボーチョコとは5個の卵黄にカカオ、砂糖の入っている濃いシロップだ。どんなにおいしいか分かるだろう。晩には又オーボーチョコとパンを食べた。

ドウ・マイイアー

1945年4月16日

おとといサンバル クルヴィック〔パンの木とサンバル〕を作り、〔売った後〕1,33ギルダー儲けた。昨日は魚サンバルで1,88ギルダーの儲け。一人についての儲けで、それにごはんにはサンバルがもちろん無料だった。

フックス

1945年4月16日

明日から110人の代わりに90人だけがルーウィガジャへ行くことになるので、入ったばかり

のような僕が一緒に行けるチャンスなど決していない。ボスマンと僕はルーウィガジャでは腹一杯がつつと食べた。初めに僕たちはブンキル [ピーナッツやココナッツを圧搾した後のかす] とジェルック [ライム] を数個盗んだ。ブンキルは水を飲んだ後、ひどくお腹にたまるのだ。それから僕たちはパンを食べた後、すばらしい巨大なパイヤがぶら下がっているのを見た。それを取り袋の中に入れ、ひっそりした所へ持って行き、そこで皮をむいて小さく切った。皆4分の1個を食べた後、残りを食べることはもうできなかった。それから僕たちは静かな場所に黙って座っていた。とにかく皆は何もする気がしなかったのだ。

突然鈍い音が聞こえた：クラッパー [ココナッツ] が落ちたが、僕たち二人以外それが落ちるのを見たり、聞いたりした者は誰もいなかった。僕は直ぐにそこへ駆け出し、パチョルピック [鍬] で穴を開けた。水は僕のバターの缶に入れ、半分のクラッパー [ココナッツ] を飲み干すと、もう全く飲むことができなかった。忌々しいことにこんなことはめったにないのだが、僕はブンキル [ピーナッツやココナッツを圧搾した後のかす] で未だ満腹なのだろう。

フックス

1945年4月17日

今日僕は500グラムの豆をフン・キュー [グリーンピースの粉] と一緒に煮た。これで1リットルになった。僕は先生 [ファン・ダー・スホートウ] から犬の餌入れのような青色のおわんを無料で借り、おわんは一杯になった。僕のパンにはグラジャワ [赤シュロ糖] を入れ、暖めた。それも良い味だった。残りのグラジャワ [赤シュロ糖] は直ぐに食べてしまった。手を出さないのは不可能なことだ。昨日もまたそれを見た後、直ぐに平らげてしまった。今日の午後僕はまたクンジャン [満腹になる] なので、夕飯はもう暖めなかった。

[...] 午後僕はパジャマを少し直した。破れたカーキ色のズボンに布切れをはり始めたが、今晚までにまだ半分も終わっていなかった。僕たちは今日菜園を分けた。バイエム [ほうれん草] 用の場所が相当あり、トマトの苗と3つのテロン [ナス] の苗の土地も持っている。

ドウ・マイイアー

1945年4月18日

おととい僕らは高評判を得るために見事なサンバルを作った。ブンブ アチャール [香辛料入り酢漬け野菜] では1,50ギルダー儲けた。それにはひどく多くのカレー、酢、フン・キュー [グリーンピースの粉] と魚が入っていた。サンバルは完全に平らげられた。しかし今日は余り売れ行きが良くなく、まだ半分以上残っている。それでもうまいサンバルなのだ。人参を入れて今晚のごはんにスプーン2杯5セントで売ろう。

ドウ・マイイアー

1945年4月22日

今度またオーボーチョコの粉の箱が手に入る。僕らも 1,25 ギルダで3個買った。そして全部で6本のビンを空にしたと思う。その粉は10個の卵と一緒にしてもまだ味が良いらしい。それに保存ができるのは大きな利点だ。僕らは今5日ごとにロールパン半分を追加に貰える。今週一つ、今日一つだが、それは売ってしまった。僕らの金は段々なくなりかけている。サンバルではもう儲からないのだ。

フックス

1945年4月28日

今日僕はまたルーウィガジャへついて行った。今回も動けなくなるほど食べまくった。一日中クンジャン [満腹な] だった。[...] 午後にはまた豚肉入りのスタムポットを食べた。その上、バターの缶には (一人につき約20cc) ラードが入って、それは非常に脂ぎっていた。僕は知り合いの少年から、使いきれないというので400cc余分にもらった。食べ終わった時、満腹で僕は真っ直ぐになって座った。それでも僕は3時半の休憩の後、豚のとうもろこしパップを少し食べた。豚のパップは収容所で食べるパップよりも本当に質が良く、濃くておいしかった。

ドウ・マイイアー

1945年4月29日

昨晚のスタムポットはうまかった。ただ僕らがちょうど欲しがっていたウサギの肉は入っていなかった。15ひきのウサギがいたが、病人用に向かい側 [ヴィルム通り] に持っていかれた。

ファン・エングルンブルフ

1945年4月30日

ユリアナ [王女] の誕生日のため、今朝10時僕たちはコーヒーとパン半分をもらい、1時に再びコーヒー、そして晩にはうずら豆スープとご飯がでた。クセメ [柿]、サウォ [汁の多い、茶色の果物]、グラ ジャワ [赤シュロ糖] と砂糖でゼリーを作った。

フックス

1945年5月3日

パップを食べた後、僕は病院に行き、ルック [アーラァス] を訪ねた。そこで11時まで話をしていた。偶然にちょうど誰かが亡くなり、ルックはその人のパップを貰い、彼はそれをまた僕にくれた。もちろん嫌なことだが、パップの味はよかった。

ドゥ・マイイアー

1945年5月3日

僕らは昨日また詰めロールパンを食べた。詰め物はちょっと辛く、こしょうがきいていて、だからこそうまいのだ。ところで午後にもおいしく食べた。炊事場からはごはん、スープ、カレーソースがでた。この最後のものは味が良く、スープもまたおいしかった。少なくともそれは僕らがこしらえたのだ。とうもろこし粉、アッサム [インドネシアのタマリンドの実]、ペタイ [臭い匂いのある緑色の豆] とチェンゲェ [ミニ唐辛子] を使った。それはこの上もなくおいしく、味はいくらかフーヨンハイ [中国風オムレツ] のようだった。

それから [ハンス] クリックと僕はカタツムリをゆで、焼いた。それをサテイ⁹⁴ のようにして食べたが、うまかった。更にごはんにはベーコンの脂汁をかけた。おいしかった。

ドゥ・マイイアー

1945年5月4日

チマヒ第4の連中はここに到着し、本当に感謝している。ここの方がずっとましなのだ。毎日果物がでて、これには連中はびっくりしていた。チマヒでは米を約180から190グラムもらっていたが、ここでは270グラムだ。もちろんのこと彼らはこのことも、パップに関しても素晴らしいと思った。そのパップはいつも水っぽく400ccしかなく、その一方ここでは500ccのバイエム [ほうれん草] 入りの濃い、固めのパップがでるのだ。彼らは毎日ウビ [サツマイモ] を買うことができた。

⁹⁴ — インドネシア風串焼き肉。

ヨーストウン

1945年5月8日

今朝1時ごろ、アメリカ、イギリス、南アフリカの小包が届いた。小包は直ちに開けなければならなかった。紙で包まれているものはすぐ開かなければならず、中身は出さなくてはいけなかった。紙はニッポン人が受け取らなければならなかった。晩になって、日本人捕虜たち宛ての小包を乗せたヤップ船が魚雷に攻撃されたが、日本の天皇陛下は非常に慈悲深いので我々はこれらの小包を破損なく受領した⁹⁵と読み上げられた。しかし包装は日本に返却しなければならなかった。

フックス

1945年5月8日

小包は譲渡されたが、全ての缶詰は開けられ、ヤップにより点検された。僕たちは直ちに全て受け取るだろう。明日分配が始まる。

ファン・エングルンブルフ

1945年5月8日

4月29日に分配されるはずだったアメリカの小包がついに到着した。皆は9人の代わりに15人で分けなくてはならないという割り当て方法について激怒した。しかし僕たちは全てに関し喜ばなければならないのだ。

ドゥ・マイイアー

1945年5月9日

やっと待ちに待っていた小包が到着した。すばらしい！なんてすてきだ！本当にものすごくうれしい！もしかしたら僕の表現は少し女の子っぽいかもしれないが、やはり有り難いのだ。なんと僕はパンを味わって食べたことか。一方では全ての小包が開け出され炊事場に持って行か

⁹⁵— 収容所ではこれら小包の分配の際、日本兵たちにより言明が読み上げられた。それには小包を運ぶあわ丸船を魚雷した米軍の非人間性を非難されていた。あわ丸は安全通行証を持ち、帰途への航海中、(恐らく間違っ)米軍の潜水艦により沈没させられた。言明には、魚雷を受けたにもかかわらず、小包配布許可を与えた日本天皇の慈悲の深さが指摘された。(Van Velden, 579-580)

れたのは残念だが、もう一方ではこれでも良いのだと思う。ヤップは全ての缶と包装を戻して欲しかった。

バカバカしい話が全て読み上げられた。はっきりした白い十字架を備え、赤十字の荷物と共にこちらへ航海するために米軍の安全通行証を得た船を、米軍は魚雷で攻撃したのだった。恐ろしいことだ。これが文明化したアメリカのやることだ。むかむかする。それに神様の贈与があるというのに。もし日本がこれらの小包を戦争捕虜に配分しない場合、アメリカは抗議する権利などはないのだ。しかし善良で、正義感のある独特の日本国民は無力な捕虜たちに復讐しないことを望んだ。戦線にて、卑怯な行為に対する決定を下すのだった。日本は生意気なアメリカを破壊するだろう。

それらはアメリカとアフリカからの小包だった。大部分は1942年で、既に3年になる。いくつかのものは前回のものと同じだ。別のものもあり、それには完全な食事セットが入っていた。それらはカレーと鶏肉付きご飯、カレーと肉付きごはん、粉ミルクではない缶牛乳〔濃縮牛乳〕、紅茶やたくさんの飴だった。それはタフィー⁹⁶、チューインガム、バターキャンディーなどだった。きれいな石鹸もあり、それにすばらしい洋服や靴の入った包みもあった。僕たちは4人で小包一個をもらった。今朝9人で2袋のチーズを貰った。一人につき50グラムになるが、実においしかった！ 袋は長さ11,5cmで、一人約2,5cmもらえた。これは前回〔まだチハピットにいた時〕の2倍で、紅茶も貰った。

メィムリンク

1945年5月9日

昨日はアメリカ、イギリス、南アフリカ赤十字の小包も到着した。船が帰路に魚雷を受けたため、初め僕たちはそれらを貰えなかっただろうが、天皇はその種の低い策略をタワナンス〔抑留者たち〕に埋め合わせたくなかったので、僕たちはいずれにせよ今衣類や食糧を受け取ったのだ。全ての食糧は包みや包装からはぎ取られなければならない。というのは日本軍は手紙に恐れているからだ。衣類はくじで引かれる。今日チーズ50グラム（ $\frac{1}{4}$ のクラフトゥ〈商品名〉袋よりちょっと少ない）、干しぶどう95グラム、角砂糖65グラム、板チョコ3分の1（50グラム）をもらった。

⁹⁶ — 砂糖とバターを煮詰め、落花生などを混ぜて作った菓子。

ファン・エングルンブルフ

1945年5月10日

現在僕は少し「投機」をやっている。とうもろこし配給券（200グラム30セントのゆでとうもろこし20回分）のために金を少々借りた。パンと同様にちょうど良く売れ、今僕はパンを70セントで売るので、一回につき40セントの利益となる。目下のところまだ借金があるが、アメリカの巻きタバコをまたもらえ、それを良い値段で売ることができる。タオルも売ろうと思うが、今晚たぶん売れるだろう。

ドゥ・マイイアー

1945年5月11日

昨日16才以上の全青少年たちは巻きタバコ30本を受け取った。エドゥガー [ラウレンス] と僕は貰えなかった。本当に残念だ。ここでは一本10セントで売れるのだ。[...] その代わりに僕らはプラムを6個もらった。それで [マックス] おじさんは明日プディングを作る予定だ。というのも僕らは粉ミルクも今持っているからだ。更に昨日、浴用石鹼を半分もらい、今日はコーンビーフとジャムも貰った。[...] トーコーからは今日、白砂糖700グラムを受け取った。これもすばらしい財産なのだ。シンタクラスのようなだ！

フックス

1945年5月12日

家に戻って来た時、沢山のものが待っていた。初めにバターと塩でクッキーを食べた。肉はご飯の時食べたが、サケと残りのバターは明日まで残しておく。それから僕はまだ小ロールパンに入れるものを持っている。なぜならば雑役ロールパン足す今日の分は明日まで取っておくからだ。コーヒーには初めにミルクを入れ、オートミール缶半分になるミルク入りコーヒーを作った。それを味わって飲むと、この2年間欠けていたものについてやっと気が付くのだ。その後、残りのコーヒーで水コーヒー [ミルクなし] をオートミール缶に作り、その後自分のトゥンパット [寝場所] に座り、カメル (タバコの製品名) に火をつけた。まるでまた昔に帰ったようだ。今日は記録の日だと思う。僕は全部で4060ccの食物を食べ、砂糖入りコーヒー1500ccを飲んだ。このように続けば僕は確かに太るだろう。

ドウ・マイイアー

1945年5月13日

今朝日曜日なので石鹸を使い風呂に入った。なんて気持ちが良いのだろう。それはあぶらぎって、つるつるしていた。石鹸で入浴した後はまるっきり違う人になったように感じる。

フックス

1945年5月14日

[ルーウィガジャで] 10時ごろ僕はバイエム [ほうれん草] の間を這って、僕のパパイヤを掘り出し、皮をむき小さく切った。見事に熟して砂糖のように甘かった。それはスマンカ [すいか] だった。その日後になって僕はげっぷに悩まされ、時間が経てば経つほどもっとひどくなったが、腹が一杯になるまで普通に食事を続けた。食べ物あげてしまうのはもったいないと思うからだ。いつまた空腹の時期が始まるか分からない。もしかしたら大混乱 [連合軍の侵入] が開始すればヤップは食糧の補給など忘れるだろう。

ドウ・マイイアー

1945年5月14日

昨日収容所全員は食事を食べきれなかった。僕らは630ccのスタムポットを食べたが、それは胃にもたれた。ひどいバターが入っていて、途方もなく脂かった。残念なことに、考えもせず沢山のバターがそこに入れたのだ！ 灯油缶一杯にして家々に配りに来た。[...] たぶん一週間前だったら必要であったかもしれなかった。バター入りスタムポットを見たら、はしゃぎまわって喜んだだろう。本当に。僕らが何も交換しなかったのはそれを食べ尽くすことができなかったからだ。僕らはスタムポットの他に、脂肪の多い料理がまだあった。これにはとうもろこし粉、うずら豆、レバーペーストなどが入っている。それも極めてしつこく、その後にはコーヒを飲んだ。今朝もまたミルク入りのコーヒを飲んだ。今すぐブディングを食べるのだが、きっとおいしいだろう。

ちょうど食べ終わったところだ。ああ、おいしかった。それはロントソ [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み]、干しぶどう、シナモン、その上にはプラムが入っていた。更に [マックス] おじさんはミルクでこしらえたクリームを混ぜた。

ドウ・マイイアー

1945年5月15日

僕らはこの頃金を稼いでいる。ヨーブ [ヴィルムス] はジャグン [とうもろこし] クッキーを作る。それを僕は1個20セントで売り、儲けは分ける。クッキーは皆にとでもラク [人気がある] で、味も良い。クッキーの生地はただジャグン [とうもろこし]、グラ ジャワ [赤シュロ糖] とシナモンでできている。しかしヨーブ [ヴィルムス] はそれを油であげるのだが、それだけでもたいへんなものだ。僕らは一日50個以上、約55ないし56個売る。 [...]

ちなみに、最近僕たちはチュウインガム以外何も小包から出さなかった。ヤップは缶を開ける許可を与えていない。そうなんだ。ヤップの許可なしでは何もできないのだ。

ドウ・マイイアー

1945年5月16日

隣では今衣服のくじ引きをしている。それはこのように行われた。分類された衣服に3つのリストA, B, Cを作った。2つの品物を選べるが、一つのリストから一点のみで、2つの異なるリストから選ぶのだ。依頼した品物を自分自身で持っていない場合には、一点選んで良い。既に選択した場合には、それを手に入れる可能性は少ない。なぜならば衣服はほんの少しあるだけで、依頼したもののたちの間で、もう一度くじを引かなければならないからだ。

衣類だけではなく、Cリストには小ばさみ (収容所全員用)、かみそりの刃、と石、歯ブラシ、くし、ナイフ、ひげそり用石鹸、安全カミソリ、歯磨き粉、裁縫袋のような他の品物がある。裁縫袋には3つのポピン糸、3本の針と小ばさみが入っていると言う。これは大変調法らしく、僕はそれを選びたい。[マックス]おじさんは僕たちの為に選ぶというが、なんだろう？ 衣類は見事に光沢を出し、良いにおいがする。カーキ色のシャツ、パンツ、長ズボン、蚊帳 (緑色)、靴 (黒と茶色) 本当にすばらしい。その上くつ下、ハンカチ、タオルなどがあつた。全てがそろっていて、実にいかした品物だ。結果はくじでズボンを引いたが、僕はおじさんにあげる。ヨーブ・ヴィルムスはくじでシャツを引いた。

ひどいことに無料給食所にはもう木がない。だから僕らは今朝まきを提出しなければならなかった。もちろん惨事だ。炊事場にとってもスサー [厄介事] だ。もしかしたら暖かい食事をもらえる最後の日になるかもしれず、僕らは全て現物で受け取るだろう。当然のこと絶望的だ。木が入ってくれば良いのだが。

フックス

1945年5月16日

今日の午後小包からの衣服のくじ引きをした。僕は長ズボンとシャツを申し込んだが何も引かなかった。チャンスは非常に小さかった。いや、それならば古い物を身につけて家に戻ろう。

ファン・エングルンブルフ

1945年5月17日

巻きタバコとタオルは10ギルダーで売れ、また少し金が出た。アメリカの小包の分配は続き、今日はトマトとレバーペーストだった。僕はグリング [抱き枕] も貰った。

ドゥ・マイヤー

1945年5月17日

僕は運が良く、くじで2品当たった！ 裁縫袋もくじで引いた。僕はもうこれ以上運にはつけないと思う。裁縫袋。[...] ちょうど僕がひどく必要としていたものだ。先日、既に継ぎ当て枕になってしまった僕のグリング [抱き枕] から糸を取り出し、それからそれを投げ捨て、今は毎日のように火をつけている。そこからは未だ結構糸がでてくる。ただ当然のこと全てが短い、これはすごくて、白、茶色、緑色の糸巻きある。上等でその周りにはまだグレーのかがり縫い用の糸付き厚紙がある。3本の針もまたすばらしく、それに安全ピンが3本もある。更にまだ何かが入っている。ボタンの入った袋とはさみだ。このはさみは大した物ではなく、ただの鋳鉄で粗末だった。大量生産であることが分かるが、僕は今はさみを2つ持っていて曲がっているのと、真っ直ぐのものだ。さて、この袋をもらってうれしく思う。袋自体は平たく緑色の布ででき、素晴らしい。これは同じ布のリボンで縛られている。

ドンカースの点呼本

1945年5月17日

赤十字より受領した全食糧は分配された。

受け取った全食糧。

肉と魚

805 kg

バター、ミルクとチーズ	598 kg
果物とジャム	347 kg
チョコレート	124 kg
砂糖	112 kg
プディング	110 kg
クッキー	57 kg
コーヒー	40 kg
チューインガム	12 kg
計	2.211 kg

上記の品物は炊事場と組を通し収容所に配分された。平均量の分配方法を閲覧したい者は収容所の事務所で見るができる。

ドウ・マイイアー

1945年5月19日

今日はエドゥガー [ラウレンス] の誕生日だ。誕生日おめでとう。彼は16才になる。来年は家で祝うのだ。僕らは朝食をコーヒーとトーストした肉入りトーコーサンドイッチで始めた。肉は昨日最後の品物として小包から取り出した。マーガリンとプディングは両方とも少しだけ未だ持っていた。プディングはクリームと一緒に食べた。[...] 小包からのプディングもおおいかった。それにはあらゆるものが混ざっていた。クリームとごはん、干しぶどうの味がして、ケーキにプラムプディング、それは茶色のクッキーで、すりつぶした果実と水が入っていると誰かが言った。それらはなにしろおいしくて、クリーム付きだった！

しかし今朝も僕たちはうまいパンを食べた。肉付きパンは何と味が良いのだろうと思った。肉は色々な種類の混ぜ合わせだった。僕らは事務所で缶を開けるのを手伝った。缶詰はプラム・スパム・タング・モア [製品名] などだった。まだ軽い昼食のスパイス入り豚肉の缶詰もあった。とにかく全て豚肉でみんな殆ど同じようだった。だから良くあうのだ。缶詰をスプーンできれいにかき取った後、洗い流すためにお湯の中に入れた。この脂っぽい水は炊事場へ持って行った。これは昨日のスープに使われ、とてもおいしかった。缶詰が洗われた後、ときどき小さな皮がまだ残っている場合には、僕らはそれをなめてきれいにしても良かった。その後缶詰は煮詰めるためにもう一度炊事場に運ばれたらしかった。僕は内緒でコーヒーの缶を2個持ち帰った。

フックス

1945年5月21日

今晚僕は最後のアメリカの巻きタバコを吸った。これで本当に小包の全てのものを食べつくし、吸い尽くした。

ドゥ・マイヤー

1945年5月22日

僕らは今パンケーキを売り、それで稼いでいる。パンケーキはタピオカ粉ととうもろこし粉で作った。彼は「ヨープ・ヴィルムス」は油でそれらを焼き、キンチャ「シュロ糖蜜」も付いているのだ。キンチャとはグラジャワ「赤シュロ糖」の糖蜜である。パンケーキは1個20セントする。家からでるやいなや僕たちはあちらこちらから迫られるほど人気があった。人は争いあい、僕らはすごく儲けた。すばらしい。エドゥガー「ラウレンス」と僕は便利なので今一緒に売っている。なぜならパンケーキを渡し、蜜のをせ、金を受け取るのは結構厄介である。[...] 最後に僕らは儲け分で1個買った。おいしいものをずっと目の前にして、一つも自分たちでは食べないのかい？ それは本当にうまかった。

フックス

1945年5月23日

昨晚僕はまた菜園班の際、ウビ「サツマイモ」を盗み、そういう訳で今晚何か食べるものがあるのだ。なぜなら今日炊事場からでたものはひどくわずかで、本当に餓死の食事だった。[...] 昨晚15ギルダーで靴を売った。うれしいことに僕はまた金がある。シャツ2枚とパンツを売るのに忙しいが、まだ少し時間がかかるだろう。

ドゥ・マイヤー

1945年5月26日

そうなんだ。この頃の値段はおかしい。今10ギルダーで買えるものは昔1ギルダーで買えたものよりも少ないのだ。現地人は収容所外でどのように暮らしているのだろうか？ 敷布を兵補に200ギルダーで売った。それは少し前のことだったが、今では価格がまた著しく上がった。「ハンス」クリックと僕は誰かのための仲買人をしている。「マックス」おじさんも同じだ。だから

おじさんはたくさん稼いでいるのだ。彼は今100ギルダー以上持っている。巧みに物事を処理すれば、かなり儲けられる。彼はこの間は一回で350ギルダー稼いだが、それはもうとっくに使ってしまった。昨日またグラ ジャワ [赤シュロ糖] を注文した。おじさんは3キログラム購入し、とうもろこしは前回大量に買い上げ、そのうち大半は病院雑役の際、粉引きした。そこには大きな製粉機があり、そこに生のまま入れる。僕らも毎日とうもろこしを常に違う調理法で食べた。そのうちに蜜を入れポップにして食べるだろう。 そうだ。グラ ジャワ [赤シュロ糖] の糖蜜も毎日変わらず買っている。

フックス

1945年5月31日

昨夜は大成功だった。僕は700から800グラムのウビ [サツマイモ] を掘り起こした。もう少しで見つけられるところだったが、幸いにもちょうど逃げることができた。僕はスベリヒユ付きオートミールの缶も2個盗んだ。ウビ [サツマイモ] は浸水電熱湯沸かしで普通にゆでた。ヒューズは一度だけ切れただけだった。僕の持っている野菜はうまく煮上がり、初めにバターの缶にはいった水を沸かした。野菜はオートミールの缶に入れ、缶が一杯になるまでお湯を注いだ。その後お湯の入ったバター缶にオートミールの缶に入った野菜を押し込み、干し草保温箱 [干し草をつめて料理などを保温する] の役目をするようにバターの缶を数枚のタオルで包み、トランクに入れた。2時間後にはスベリヒユはすっかり良く煮えていた。野菜の半分はパンと一緒に食べ、他の半分はウビ [サツマイモ] と混ぜ、結構いけるスタムポットをこしらえた。

ドゥ・マイイアー

1945年5月31日

今コーヒーを作っているが、浸水電熱湯沸かしの使用はきびしく禁止されている。[...] これは一番良い方法だが、正しいことではない。もし捕まえられたら、一昨日 [一日全収容所食事なし] のような処置がまた取られ、そうすれば収容所は散々な目に会う。何人の病人や体の弱っている人たちがもしかしたらこの為に生き残れないであろう。まさにちょうどぎりぎりの食べ物を貰い、生き残れるか、残れないかという状態だ。もちろんある日食事を抜かされたら、それは僕らに責任があるのだ。そうではない。許されていない事がたくさんここでは起きている。残念ながら多すぎるほど起こっていると思う。

ドウ・マイイアー

1945年6月4日

僕らは今のところチマヒにある最悪の収容所にいる。昨日は220グラムのごはんしかでなかったが、サンバル付きはすごかった。チマヒ第4は200グラムのごはんだが、500グラムのウビ [サツマイモ] もついていた。それは少なくとも食べ物だ。100ccとはいったい何ということだろう！ このうずら豆定期配給券も既に停止された。しかしサンバルの味は申し分なく、クラッパー [ココナッツ] が入っていて実にうまかった。最近塩500グラム、グラ ジャワ [赤シュロ糖] 500グラムそして砂糖100グラムの補給があった。しかし回覧状に出ているように、僕らは砂糖にも気をつけなければならない。果物はこの頃ジャンブウ ビジ [ばんじろう] またはクルトゥック [ばんじろう] と呼ばれているものがでた。昨日は普通のジェルック [マンダリン] をもらったが、これはすごくおいしかった。トーコーが閉店 [闇取引問題のための日本兵による罰] される前、数日果物を買うことができた。これらはパパイヤやピサン [バナナ] だった。パパイヤが一番安く、1キログラム35セントだ。ピサン [バナナ] がいくらしたかはもう覚えていない。どんなにこれを味わって食べたことか。今はトーコーが閉店してしまい、金はまだなんの価値もない。ロールパンは最近かなり値段が上がった。初めは80から85セントだったが、1ギルダーに上がった。その後値段が大幅に飛び、1本3ギルダーとなり、それから5ギルダーとなった。誰もロールパンを売らなくなかった時、最終的には7,50ギルダーの値段になるだろう。そして僕は最高額を聞いたが、それは1つ15ギルダーで売れたという。

ドウ・マイイアー

1945年6月5日

僕らはまた菜園をパチョッレン [鍬で掘り起こす] した。側面は殆ど終わりで、たいへん深く掘り起こした。すばらしいスベリヒユの苗床になり、もし少しうまくいけば、既に今晚植えることができるだろう。[...] 幸いにも今日また食事がでた。なぜなら昨日僕はものすごくお腹が空いたのだ [闇取引の罰として収容所は一日食事抜き]。今朝はポップ680cc、午後はまたロールパンだった。[...] それから炊事場からごはん、ウビ [サツマイモ] そしてとうもろこしがでた。140グラムのとうもろこし、すごいだろう？ あとはサンバルがでなくてはならない。僕はまた空腹感、実は食欲がよせて来る。

フックス

1945年6月7日

最近またひどく腹が減る。一日中通して、特にロールパンを食べる前後に腹が空く。

ドゥ・マイイアー

1945年6月8日

裏庭の苗床も既にオムへパチョルトウ [掘り起こさせた]、すごいものだ。脇の苗床はもうすっかりスリナムのスペリヒユが植えられた。その間にヨーブ [ヴィルムス] の玉ねぎ、そしてジャへ [しょうが] も植えられた。[...] それからその中間にチャベ [唐辛子] も植えよう。このチャベ [唐辛子] は菜園のそこらじゅうに生えてくる。苗床の一部をトマト用苗床に使い、僕らが見つけたトマトの苗を植える。トマトが大きくなるや否や、又新しい実がなるのだ [...]

昨日グローバック [荷車] 2台にいっぱい、バンクゥアン [甘い白かぶらの根] とクテラ [クテラ芋] が入って来た。バンクゥアン [甘い白かぶらの根] は鍛冶場雑役係用だと言う。あそこではかなり厳しく働かなくてはならない、本当にそうなんだ。ヤップもごはん400グラムとペチオル [ピリットとするソースのかかった野菜料理] を手に入れるだろうと約束したらしく、僕は兵補パン半分、うまいパンも来ると聞いた。更にヤップだけがパンとロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] を買って良いのだ。グラ ジャワ [赤シュロ糖] が入って来たら、これもヤップのところに行くのだろう。

[マックス] おじさんからはもうそれほど食べ物を貰えない。彼はもう何も持っていないのだ。当然のこと節約しなければならず、おじさんにはどうすることもできない。僕らの蓄えのグラ ジャワ [赤シュロ糖] も今はなくなってしまった。僕らは予備品を使わなければならない。昨日おじさんはトマトとロンボック [唐辛子] 入りのクデレ [大豆] スープを作った。トマトとロンボック [唐辛子] は自分たちの菜園のものだ。味はまるでマッシュルームのようだった。それは非常にうまく、店から貰った食べ物もすごく良かった。僕らは130グラムの野菜、もちろんバイエム [ほうれん草] そしてサンバル120ccを貰った。しかしそのサンバルがセルンデン [おろして焼いたココナッツ] に混ぜていたのがみそなのだったのだ。それはジャグン [とうもろこし] と焼きクラッパー [ココナッツ] だった。実にうまい。

フックス

1945年6月11日

僕は今日非常蓄えを始めた。またいつか空腹の日々が来るような気がし、そうやって暮らす気は

全くないのだ。5つのロールパンが一束になるまで、毎日4分の1のロールパンを残し、干す計画をたてた。そして2、3回配給砂糖を混ぜ合わせる。これは2日分用として十分である。

ドウ・マイイアー

1945年6月12日

今晚 [マックス] おじさんはとうもろこしとブンキル [ピーナッツやココナッツを圧搾した後のかす] でまたおいしいパップをこしらえた。これを今朝たくさんさんのグラ ジャワ [赤シュロ糖] を入れて食べた。味は実に良く、かなり満腹になった。胃の中がぐっと重くなる。どんなにふくれたか見るべきだった。

僕はあとでロールパン半分と食べるようにまた朝食パップを取って置いた。他の半分はこの方法で節約し残しておいた。おじさんはロールパンを何の食べ物もない日のために取っておきたかった。[...] 僕は昨日炊事場から：ごはん240グラム、野菜110グラム、サンバルとウビ [サツマイモ] を貰った。

フックス

1945年6月12日

今日の食事はまた非常にわずかだった。[...] 僕は缶の水を飲み始めた。それからウビ [サツマイモ] とご飯をゆっくりと慎重に噛んだ。そうすれば食べ終わるのに時間がかかるからだ。大きじを使えば、2分で平らげてしまう。僕はだいぶ前からご飯を茶さじで食べている。パップは大きじで食べるのは、そうしないと直に冷めてしまうからだ。今日の午後昼寝をし、その後靴下のしつけ糸を抜き取った。僕は毛布を繕うために糸が必要だった。それは又そこらじゅう破れている。

フックス

1945年6月16日

僕は今日また外へ行くことができ、楽しくへパチョルトウ [鍬で掘り起した] し、のらくらと働いた。近頃僕たちは雑役で議論したり、講義をした。最終的には常に致命的な議題に持ち上がる：それは食糧で、家ではいつも何を食べたか、どのようにこしらえたか、又はペチョル [ピリッとするソースのかかった野菜料理] はどの店がいちばんおいしいのか、そしてどこに安い果物があるのかなどを話し合った。僕たちは現地の全てのデザートやクッキーなどを言いあげるまで止め

なかった。それは愉快だったが、本気になり過ぎてはいけない。そうでないと腹が減ってくるからだ。今日の食事は結構良かった。明日は10セントでとうもろこしを買える。

フックス

1945年6月17日

今日僕は強制労働をした。つまり肥料穴蔵を掘る作業をさせられたことだ。何も貰える訳でもないので、昨夜菜園班の僕のガジ〔賃金〕を前もって盗んだ。僕は今日雑役パンを余分に貰わなかったが、やはりロールパン半分を取っておきたかった。それができるようにするためにはスベリヒユが少し必要だった。僕はすでに11時に家にいて、それをちょっと蒸すのにたっぷりの時間があった。一般的に言って昼食は悪くはなかった。夕飯の料理も良かった。今追加に買ったとうもろこしは、腹を一杯に感じさせるのにたいへん助かった。明日ウビ〔サツマイモ〕がもらえるが、いくつ貰えるのか興味津々だ。[...] 収容所の値段はすばらしく高い！ タバコ50グラムは8ギルダー・紅茶50グラムが6ギルダー・一人前ウビ〔サツマイモ〕100グラム1ギルダー・パンはこの頃5ギルダーだ。金の価値はまるでなくなってしまった。数ヶ月前にこれを聞いたら、信じたくなかっただろう。

フックス

1945年6月22日

今日、実は僕の雑役日ではなかったが、ヤップが急に追加人員が必要だったので、直ぐに余分の雑役ロールパンを稼ぐために出席した。今回は兵補門のところで働いた。僕は小さなパン一個をもらい、〔兵補のごみ箱から〕大きなテロン〔ナス〕を数個とロバック〔大根の一種〕を取り、それらを今晚煮て、ハンス〔ヌウマン〕と一緒に食べた。こういう風に僕は色々な方法でウントウン〔運〕がついてるのだ。最近の食事はまた良くなった。昨日と今日、2000キログラムのウビ〔サツマイモ〕と、グロバック〔荷車〕いっぱいジャグン〔とうもろこし〕の穂軸が入って来た。明日用にトーコーのとうもろこしやウビ〔さつまいも〕を注文できない。炊事場から十分もらえることだろう。[...] 今日また日中ランプのスイッチが切られたが、6時半には既に灯がともったので容易に料理することができた。タバコがまた切れてしまった。しばらくタバコなしでいかねばならない。

ドウ・マイイアー

1945年6月24日

それは犬のミステリーだ。ここの隣で犬、シェパードが畜殺された。僕はかわいい犬が午前中歩き回るのを見たが、それはその犬が捕まえられていたからだった。僕は一口すら食べなかったのがわかるだろう。僕はそんなに卑しくはないんだ。[...] エドゥガー [ラウレンス] は決して不味いと思わなかった。当然のことにここは宴会となった。恥知らずだ。彼らはおいしいきれいな赤いトマトとチャベ ラウイ [ミニ唐辛子] を混ぜた。[マックス] おじさんもそれを良く思わないと正直に認めたが、僕はそういう人たちにはとても期待が外れた。前回参加したことに今でも実たいへんすまないと思っているが、僕の食べ物が既に全くなかったので本当にどうすることもできなかったのだ。でも僕はエドゥガーにトマトをくれるように頼んだ。僕は正直だが、狂ってはいない。

最近はどうもろこしは出ず、毎日10セントでウビ [サツマイモ] を貰える (これはいつもたっぷり200グラムで、今日は230グラムだったが、この頃280や290グラムだったごはんが、今日は240グラムだけだった)。

ドウ・マイイアー

1945年6月26日

午後はまたこの上なくおいしい食事だった。僕はよく味わって食べた。分かるだろう。それはベーコンの脂汁 (またマックスおじさんにビン半分もらった) とうずら豆だった。うずら豆はけっこうな量のスベリヒユと煮た。油とトマトはグレービーとして上からかける。味は最高だ。ヤンスンさんとクンチュはもちろんのこと仲間に入っていた。それに油と一緒に丸パン半分も平らげた。これもおいしかった。他の半分の丸パンは既に昨晚食べてしまった。つまり取っておいたパンだったのだ。だからもちろん今日も又ためなければならぬ。明日もこの食事を繰り返すのは、おじさんが今晚もう一度料理するからだ。だから僕らはまた残して置かれるのだ、もしかしたら沢山ためられるかもしれない。幸いにも僕らは食事なしの日はなく、最近は何事もない。[...] 今日はやっと僕らの毎日の ― 又は一週間おきになるのか ― ジャンブウ クルトウ [ばんじろう] がでて、100グラムの砂糖は幸運をもたらした。

フックス

1945年6月30日

夕飯もまたひどく悪かった。1600人に対し約6キログラムの腸が入って来て、それで200

リットルのソースを作る。どのくらいの量の肉か、味がどんなに濃いか分かるかい。運良く僕たちはウビ [サツマイモ] を買うことができる。そうでもなければ完全に腹が減った。今はまだ耐えられる。

フックス

1945年7月3日

ロールパンは蓄えられ乾燥された。僕のパンの蓄えは準備完了、つまりだいたいロールパン9個と400グラムの砂糖なのだ。

フックス

1945年7月12日

僕は茶さじ一杯の米と砂糖でイースト栽培を始めた。数日後にはペラグラ病皮膚炎⁹⁷ のために自分用のイーストをもらえる。

フックス

1945年7月14日

[7月1日に種を撒いた] バイエム [ほうれん草] はまだあまり大きくなっていなかった。あまり調子がよくない。イーストもあまりうまくいっていない。まだ何か起こるようには見えないが、いつかブクブクし始めるかもしれない。[...] 数ひきの蟻も入って来たが、その酸味のために失敗しないといいのだが。

今日の午後僕はまたこの上ない空腹を感じた。めまいがし、目の前が真っ暗になったりした。だんだん悪くなっていく。食事が良くならなければ、ある日倒れ落ちてしまうだろう。今晚はごはんをパンに換えるという良い交換をした。そのソースは(5個ほどの)腸入りの溝のたまり水に塩を少々入れたかのようなだった。それはひどかった。

⁹⁷ — 栄養の悪い、偏った食事のため、ペラグラ病皮膚炎、赤茶色の斑を伴う皮膚病のような多数のビタミン欠乏症に陥った。(Van Velden, 357)

フックス

1945年7月15日

今朝は非常に驚いた：それはグラ ジャワ [赤シュロ糖] 入りパップ500ccで濃いパップだった。とても沢山のアチ⁹⁸が入っていたが、ジャグン [とうもろこし] の粉も入っていた。12時にもまた驚きべく事があった。つまり僕たちの組の少年たちがトーコーパンの当番だったのだ。(14) のトーコーパンはほとんどロールパン一個に相当するので、昼食もよかった。僕はまだ砂糖を残しておいたので、コーヒーを甘くできた。今晚の食事はたいへん良く、「労働者たち」 [鉄道作業の雑役のため追加食糧を受けていた] の食事よりさらに良かった。スープは脂っこく、脂っこすぎたほどだった。

フックス

1945年7月16日

今朝僕は下駄を作りたかったが、ゴロ [斧] が手に入らなかった。木は既に取り来てあり、もしかしたら明日ゴロ [斧] を借りられるかもしれない。今日の午後、雑役ロールパンを安く手に入れた。それを買って、紅茶と砂糖のマーカン ヘバットウ [豪華な食事] だ。今日の午後また砂糖500グラムが貰える。僕は砂糖を測り、毎日さじ一杯で、20日間やっていける。この方が一日で全部平らげてしまうより良いと思う。砂糖が終わりになる頃には、また新しい砂糖が手に入るだろうし、僕たちはまだ収容所から出ていないだろう。

ドゥ・マイイアー

1945年7月16日

この頃たくさんのウビ [サツマイモ] が手に入り、それはいつも300cc以上だ。しかし今日はウビの値段が一人15セントなので、僕たちはもっと多くのウビがもらえるだろう。昨日は脂っこいスープを飲んだ。それは最高の味で、サンバルもうまかった。そのほかごはんは300グラムだった。日曜日には先週の日曜日のようにまた甘いパップを食べた。それにはグラ ジャワ [赤シュロ糖] が入っていて、味は本当にすばらしい。昨日は砂糖を全然使わなかったので、僕にはちょうどぴったりの砂糖があった。今朝 [マックス] おじさんがパップに入れる砂糖を奢ってくれ、それでとっても甘くなった。明日はトーコーより500グラム砂糖がもらえる。良かつ

⁹⁸ アチはタピオカ (キャッサバの根から採った澱粉) 生産の副産物で、安い綿をしっかりと見せるために使用される。品種の悪い一種の澱粉で、パップ (お粥) に加えられ抑留者たちに与えられた。

た。今週の果物はグレープフルーツだった。勿論味は最高で、おいしい水気のあるパパイヤも一切れ食べた。

フックス

1945年7月19日

今朝洋服を洗い、少し大まかな作業をして僕の下駄を仕上げた。後はただヤスリをかけるだけだ。僕のイーストは全く失敗した。完全に腐ってしまう前に、早く飲んでしまおう。しかし僕はまた新しい「栽培」を始めた。今回はアチ [でんぷん] パップで、もしかしたらうまくいくかもしれない。

フックス

1945年7月23日

午後にはパンと一緒にウビ [サツマイモ] 100グラムをもらった。食事は時間が経てば経つほど量が増えていくが、ガクガクするひざは治らないだろう。僕たちの菜園は見事なもので、2ヶ所の苗床をバイパチョットゥ [鍬で掘り起こす] し、ロバック [大根の一種] とサラダ菜を植えた。少なくともまだ引越していなければ、一ヶ月後にはたっぷりのサラダ菜が取れるだろう。

フックス

1945年7月24日

ハンス [ヌウマン] はコーヒーを奢ってくれた。かすはもう一度干し、すりつぶした。もしかしたら又コーヒーを入れられるかもしれない。試してみても悪いことではない。

ファン・エングルンブルフ

1945年5月29日

僕たちの食事は良くなってきている。ほんの少し多いパップ、パンの際には度々グラ ジャワ [赤シュロ糖] が付くか、又はタウチョ [醗酵させた大豆] 100グラムあるいはウビ [サツマイモ] 200グラムかとうもろこし150グラムがでる。しかし僕たちはだいたい一日20セント払わなければならない。明日はパンはない。粉は毎日のパップの数量を保持するために必要なのであ

る。パンの代わりに多分バイエム [ほうれん草] 付きのウビ [サツマイモ] が400グラムで
らる。

フックス

1945年7月30日

僕が秤を借りることができた時、自分のテンバン [秤] に数字を書き入れた。地獄のような仕事
だった。僕はできるだけ正確にやりたかったが、きちんと50グラムの重さを量るのは思う様に
はいかないものだ。とにかく出来上がり、これでいつでも騙されたかどうか調べることができる。

フックス

1945年8月4日

僕はご飯をウビ [サツマイモ] と交換しなかったし、もうしないことにした。少なくとも毎日
は交換しない。医者が蛋白質が少し不足していると言う。ただどうしてもお腹が空いている時のみ
交換し、そうして満腹感を満たすためにもっと水を飲まなければならない。

フックス

1945年8月5日

今朝は700ccのパップで始まり、配給後のパップの残り物もまだあった。残念なことに砂糖
は全然入ってなく、それはまた古いとうもろこしパップでアチ [でんぷん] パップではなかった。
今晚の食事は全て順調だった。僕は水を桶一杯にしたり、菜園に水まきしてあげた雑役係から
かなりのものを貰った。パンの時にはウビ [サツマイモ]、ロバック [大根の一種] とパップ用ソ
ースが沢山でた。目を閉じると、本当にカリフラワーの味がした。一番おいしいのは当然のこと
一番量の少ないものだ。それはいつものことだ。500グラムの砂糖は大きな驚きだった。砂糖
が貰えるだろうという噂はまだ流れていなかった。僕のコーヒーは実にとっても甘かった。

フックス

1945年8月9日

本日：

水担ぎで得たもの：

ウビ [サツマイモ] (7½セント)	ウビ [サツマイモ] 500グラム
200グラム	+ スープ一人前
米	280グラム
スープ	380cc
パパイヤ	100グラム

ロールパン f2,50 で売る
ロールパン 1 個借り、ロールパン½貰う

フックス

1945年8月10日

今日僕は食事取り係とパップ集め係だった。パップは640ccだったが、一人前足りなかった。それは僕に分だった。炊事場にパップを取りに行き、800ccもらった。更に缶から400cc取り出した。ウントゥン ブザ [思いがけない幸運]。

フックス

1945年8月11日

今朝僕の下駄を直すためにグダン [雑役を行なう用具置き場] にかなり長くいた。下駄は割れ、今針金で巻き付けた。もし紐が壊れたら、新しい下駄に取り掛かるのだ。僕が家に戻った時、家を掃除して、水担ぎをするつもりだった。その後シャツを直した。そこらじゅう継ぎあたりではほころびを繕った。もう長くは続かないだろうが、その必要がないことを願う。

フックス

1945年8月12日

昨日の晩バイエム [ほうれん草] の一部を収穫した。今朝風呂場で火をおこし、ほうれん草をゆでた。10時には用意ができた。明日用にももっとたくさんある。僕たちは全員で7人だ。今朝僕は本当にクンジャン [満腹] だった。

フックス

1945年8月13日

僕たちは魚サンバルを手に入れ、それは本当にうまいが、値段が高い。1ヶ月半ぐらいで僕の金

はお終いだが、どうにかなるだろう。僕はもう全然金のない人たちのためにも支払をしなければならず、それは僕がウビ [サツマイモ]、サンバル、ポップを既にもらったからだ。彼は無一文で、僕は喜んで払ってあげる。というのは彼は殆ど何にも食べないからだ。

ドウ・マイイアー

1945年8月18日

最近の食事は結構良いが、定期配給券は高くなってきた。僕らは今支払いと引き換えにパンと一緒にウビ [サツマイモ] 又はとうもろこしが手に入る。サンバルにはカチャン イジウ [青えんどう] と時々トゥリ [塩漬け干し魚] が入っている。それはおいしいが、値段は直に35セントになった。

ドウ・マイイアー

1945年8月19日

[マックス] おじさんは最近また商いに忙しかった。[...] しかし一番重要なものはやはり油だが、おじさんには沢山の蓄えがある。おじさんがそれに払った金額は、知らない方がいいよ、1キログラム70から80ギルダーだ。ものすごいと思わないかい? [...]

僕らチハピットとカレーの少年たち⁹⁹ はちょうど6ギルダー受け取った。これは女性収容所からの家具を売ったものだった。もうけものだ。これはまた平均20日分の定期配給券になる。[...] 売り払うために僕の長ズボンをおじさんにあげた。本当に残念なのはもちろんのことだが、こういう時代には食糧が優先するものだ。特にもうおじさんには多額な借りがあるからだ。

⁹⁹ — カレー少年たちとはバンドン郊外にある女性収容所から来た少年たちを示す。

作業

ドウ・マイイアー

1944年8月4日

今日は一日中、僕たち二人とも雑役、そして「疲労困憊^{こんぱい}」というところ。最初に、すべての棚と他の小物を山ほど投げ飛ばした。その次に、いくつかの戸棚を引きずって運んだ。ほとんど全部がひどく重かった！ なぜならば向こう側 [ヴィルム通り]、つまり僕たちが実際に出てきた所では、お年寄りのためにすっかり空^{から}にしなければならないからだ。彼らは、僕が思うには、チハピットから来る。一日の終わりには、さらに幾つかの小さなテーブルと椅子も渡した。

ドウ・マイイアー

1944年8月12日

今朝、小さな苗床雑役をした（それは野菜の苗床を手入れすること）。僕はそれをヨアン [デン・ブウスタアトゥ] と一緒に常勤の雑役としてやりたい、と申し込んだ。

フククス

1944年8月20日

今日、炊事場で盗まれた。そしてナウタは彼と顔馴染みでない人は誰も炊事場に入れたくなかった。それで僕には炊事場でのチャンスは無く、ただ普通に雑役に留まる。20キロのウビ [サツマイモ] がなくなった。

ドウ・マイイアー

1944年8月21日

昨日、僕は草刈りもした。それもユリアナパークで。¹⁰⁰ 抑留所の外を歩くと不思議な感じがする！ 今日、僕はいっしょに行かなかった。

¹⁰⁰ これはチマヒの鉄道の近くにあった公園。

フックス

1944年8月22日

今朝、再び^{つら}辛い雑役。僕は40キロある米袋を18も引きずって運んだ。これが終わると、戸棚雑役。炊事場の隣にあるグダン[倉庫]から搬出し、管理部の隣の倉庫へ運ばなければならない。今日の午後は^{はか}図らずも雑役をしなかった。僕には整列の号令が聞こえなかった。幸いに誰もそのことを報告しなかった。

フックス

1944年8月23日

今日、僕たちは終日、戸棚雑役があった。豪快にサボった。あまりにもひど過ぎたので、雑役リーダーのバーリンクは僕たちを呼び集め、ひどく^{とが}咎めた。午後は増しに進んだ。全体をまとめると、それでもかなりの作業をした。少なくとも僕は確かだ。

フックス

1944年8月26日

今朝、戸棚雑役があった。午後はグダン[倉庫]の前の通路を清掃。戸棚雑役は幸いにもこれで完了した。明日僕たちは何をやらされるのか、知りたい。休みを貰えるといいのだが。

ドゥ・マイイアー

1944年8月26日

今日は、また毎週ある洗濯。いつも土曜日。僕の睡眠用ズボン（ハウウェン氏からのパンツ）、グリング[丸枕]カバー（ヨアン[デン・ブウスタトゥ]から借りた）、シャツ、パンツ、タオルも週に一度洗う。

フックス

1944年8月28日

5時半まで、僕たちはベッドを苦勞して運ばされた。ベッドの部品もかなり大量にあった。それ

らから可能な限り、完全なベッドを組み立てなければならなかった。かなりサボっていた。でも僕は本当に働いた。今夜は意外なことに、誰もがカテス [パパイヤ] の大きく切った実をもらった。そして僕には、パン5分の2があった。僕が一日おきに [ディック・デン] バーアスの洗濯 [をすること] で、10分の1のパンを貰うからなのだ。

フックス

1944年9月2日

今朝早く、僕は洗濯物の一部をやり終えた。残りは午後、夕食前にする。今朝、僕たちはヴィルム通りの家々から、すべてのベッドを取り出さなければならなかった。午後、僕はもう一度、戸棚の記録をした。

フックス

1944年9月5日

明日から一週間、僕は炊事場へ働きに行く。最善を尽くすつもりだ。そうすれば多分、そこには常勤で来られる。

フックス

1944年9月11日

今日、炊事場では大してすることはなかった。相当数のパパイヤの皮を剥く^むだけだった。僕たちは途方もなくたくさん貰った。その全部の糖分で僕は腹が痛い。すっかり食べてしまった。[...] 午後、僕はドラムをきれいにするために、炊事場に居残らなければならなかった。[ドラムから] 更にかなりのスープを擦り取った。

フックス

1944年9月13日

今日、僕は再び雑役を始めた。つまり、パチョル雑役 [鍬で土を掘り起こす]。後でウビ [サツマイモ] と野菜を植えられるように、抑留所のほぼ全体をオムパチョレン [鍬で土を掘り起こす作業を] する必要がある。地面はものすごく固いので、殆どすべてのパチョルス [鍬] は壊れ

てしまうか、ばらばらになってしまう。炊事場に常勤で来られるように僕は雑役で今、十分に最善を尽くさなければならない。

フックス

1944年9月17日

今朝、ヘパチョルトウ [鍬で土を掘り起こ] した。そして兵補の庭をサープーエン [ほうきで掃除] させられた。午後は気持ちよく眠りたかった。半日だったからだ。それから突然、空襲警報演習 [のため] の鐘が鳴らされた。僕たちは直ちに整列し、炊事場の前で1時間半立っていた。

フックス

1944年9月19日

今日、僕は木材グダン雑役 [木材倉庫内での雑役] をした。ビリック [竹で編んだ仕切り] を張り巡らせ、補強しなければならなかった。僕は古い棚や椅子から釘を抜いて、自分のポケットにしまい、僕の釘の備えをかなり増やした。

フックス

1944年9月20日

今日もまた一日中ビリック [竹で編んだ仕切り] を張った。僕の手は竹の破片で傷だらけ。その上、^{まめ}肉刺がたくさん出来た。僕の足も傷ついてしまった。幸いに、作業は明日で完了する。

フックス

1944年9月23日

今日の午後、僕は畑仕事を始めた。三分の一はオムヘパチョルトウ [鍬で土を掘り起こ] し、部分的に掃除した。

フックス

1944年9月30日

昨夜、僕は火災監視をハンス [ヌウマン] と一緒に12時から2 [時まで] した。美しい月夜だった。

フックス

1944年10月1日

明日から僕は1週間、[雑役のため] 炊事場に入る。

フックス

1944年10月8日

今日、僕は実にもものすごく働いた。野菜を刻み、ポップ<お粥>のドラムを洗い、^{ざる} 箆を洗い、水を取りに行った。家に帰ってきたら、くたくただった。今日の午後急に通知を受け、僕たちは7日間ではなく10日間、炊事場で働く。それで更に3日間は十分むさぼり食う。

ドゥ・マイイアー

1944年10月21日

ルーウィガジャとかなんとか、その当たりの農園での仕事のために、申し込みすることができる。僕はそれを、まあ、やってみようと思うのだけど。いずれにしても、せいぜい2週間に1回だけのことなのだ。園芸はこの抑留所にはない。

フックス

1944年10月22日

今日、僕は一日中、家屋解体雑役をした。近ごろは8時半に整列し、12時半 [に] また家に [いる]。2時15分前 [に] は [改めて] 整列する。5時半に [再び] 家。それで何か他のことをする時間は殆どない。

フックス

1944年10月25日

今日、僕は再び家屋を崩した。僕は今、常勤の外部作業員。実に快適だ。なぜならば少なくともパンのための金が少しは手に入る。

フックス

1944年11月3日

今朝は雑役のために整列し、もう家に帰ってもよい、と知らされるまで午前中ずっと立っていた。ヤップの祝日だったからなのだ。¹⁰¹僕はそれから家でトイレの掃除をし、木靴とドンペラー<水につけて加熱する電熱器。項目「食糧」、日記の断片ドゥ・マイヤー、1945年1月12日参照>を修理した。ハンス [ヌウマン] と僕は看護人の仕事に応募した。ところが雑役係が必要であったこと、そして全く稼ぎはないだろう、ということが判った。したがって、それは早くも取り止め。

フックス

1944年11月5日

今日、僕は午前中だけ働いた。[なぜならば] 午後、ハンス [ヌウマン] と僕は整列の号令が聞こえなかったからだ。午後になって激しく雨が降り始めたので、僕が行かなかったことは、ものすごくラッキーだった。ハンスと僕は事務所に呼び出されたけれど、僕たちは言い逃れた。

ファン・エングルンブルフ

1944年11月11日

雑役が多く、長いこと書かなかった。

¹⁰¹ この祝日、明治節は明治天皇の誕生日を記念したものであった。(Jansen<ヤンスン>, XLVIII, 66)

フックス

1944年11月14日

今日、僕は終日、道路で働いた。幸いに僕はまた常勤として採用された。

フックス

1944年11月17日

今日もまた一日中、道路で作業をした。今日は退屈だった。知っている人は全くいなかった。作業は今から1週間もすれば完了するだろう。僕はまた道路に沿って、自生のクロコトウ [スベリヒユ<食用野菜>] を帽子いっぱい摘み取った。

ドウ・マイヤー

1944年11月19日

今日の午後、向こう側で劣等雑役をさせられた。ハンス・クリック、エドゥ [ガー・ラウレンス] と僕。雨が降っていたけれど、ぬかるみでベッドを引きずって運んだ。でも、褒美^{ほうび}として今日午後、おいしい豆サンバル [細かく刻んだ唐辛子入りサヤインゲンの添え料理] をもらった。

フックス

1944年11月23日

今日、僕はもう一人の少年と一緒に処罰雑役をした。僕たちは石の山を引きずって運ばなければならなかった。12時と2 [時] の間に、手押し車を使って少し作業をした。手押し車が無かったので、それを食事時間中にせざるを得なかったのだ。

ドウ・マイヤー

1944年11月25日

今朝、僕はエドゥガー [ラウレンス] と一緒に、また雑役をさせられた。まず向こう側 [バロス側] の中央炊事場前の敷地を、掃除させられた。なぜならば僕たちはここに炊事場が無いからだ。それから煉瓦造りの囲いを、レンガと砂で詰めなければならない。そして梁^{はり}を苦勞して中に運ば

なければならぬ。昨日もエドゥガーと僕は雑役をさせられた。それで僕は、今日の午後もう一度行く気はしなかった。そして僕は呼ばれた時、浴室の中に消えうせた。そこから出てきた時、僕はオルトゥホフ [組長] の前に行かされたけれど、それはうまい具合にいった。

フックス

1944年11月25日

今日はまた外へ行った。近頃、実にひどく仕事を怠けている。時々、僕は1時間ほど座って少し眺めたり日に当たったりする。

フックス

1944年11月28日

今日、僕は再び一日中、道路で働いた。少しへパチョルトゥ [鋤で土を掘り起こ] し平らに踏みならした。僕とほかにも数人の少年がサボっているところを「手袋」¹⁰² に見つけられた。ところが不思議にも、彼は叩かなかった。400人の新しい雑役係 [バタビアからの輸送] が追加で来たことにより、雑役では不況になることは絶対に確かだ。ヤップは何かしら「新しいこと」を考案しなければならない。僕たち200人が半年「作業」に当たれるような [何か] を。僕に関しては、彼らは僕たちにもう一ヶ所農園を追加してくれる。

フックス

1944年11月29日

今日は一日中、内部雑役だった。文字通り何もしなかった。午後、僕は出て行くことさえもしなかった。これは15セントを稼ぐためには、確かにすごく簡単は方法だ。

フックス

1944年12月2日

今日、僕は義務づけられたヤスミ [休み] だった。道路作業員たちの何人かが毎日、落後しなけ

¹⁰² 日本人の監視員または兵補の渾名。

ればならない。そして今日は僕の番だった。

フックス

1944年12月6日

今日は終日、また道路で働いた。一部は昨日仕上がり、今は道路の反対側を普通に続ける。それをすべて固くしなければならぬのであれば、僕たちは解放まで確かに仕事がある。人々は瓦礫^{がれき}くを置きながら、相当の距離を踏み歩かなければならない。今日は300人の雑役係が7回、板や梁^{はり}を受け取るために山岳砲兵隊へ行った。

ドゥ・マイヤー

1944年12月9日

さらにまた僕たちは2、3日前、山岳〔砲兵隊〕で板を受け取るために整列させられた。それはひどく重たい上かなり遠かった。まだ数回は行く必要があったけれど、僕はこっそりと抜け出した。

ドゥ・マイヤー

1944年12月11日

今日、僕は中央炊事場で「野菜摘み取り」のために働いた。パイエム〔ほうれん草〕をきれいにしなければならなかった。期待はずれで、くすねる物は何も無かった。しばらく前、エドゥガー〔ラウレンス〕はペタイ<さやに出来、臭い匂いのある、表面は緑色の豆>を持ち帰った。その仕事では、僕たちはいつもお砂糖つきのパンを十分の一もらうので、それは好都合だ。

ドゥ・マイヤー

1944年12月12日

今朝、僕はやっとのことで一度洗濯をした。ずいぶん長いこと後回しにしていたのだ。午前中いっぱい、そのためにいそがしかった。その上また大掃除があった。もちろん僕も手伝わされたので、一生懸命働いた。いわゆるお偉方が視察に来るはずであったけれど、僕はそのことでは何も気がつかなかった。

ドウ・マイイアー

1944年12月16日

今朝、僕ももう一度、掃除雑役をした。掃除雑役は道路を掃くことで、ここではザイルマーカー氏と [ヒューズ] サールティンクの指導で行われる。

ドウ・マイイアー

1944年12月21日

僕たちの食事グループは今また、すっかり変わってしまった。でも、そのことで僕はお節介をやかない。僕は食事受領係ではないのだ。僕たちには、雑役を免除された常勤の食事受領係たちがいる。そしてビーツ（配給後の余剰）は彼らの方へと消えうせる。炊事場は今、この向かいにあるので彼らにしてみれば今は楽だ。

ドウ・マイイアー

1944年12月22日

昨日、5時間の外部作業があった。その大部分を僕はもちろん怠けた。[...] エドゥガー [ラウレンス] は石を粉々に砕かなければならなかった。そして僕は、パチョレン [鍬で土を掘り返す作業] と抑留所裏手の汚い溝の傍にある道で、草刈りをさせられた。もちろん嫌な仕事だ。

フックス

1944年12月22日

今日、彼らは僕を再び雑役のために連れ出したかった。でも僕は何も聞こえなかったふりをして、便所で座っていた。少し畑で働いた。ウビ [サツマイモ] の草取りをし、僕たちの部屋の前にバイエム [ほうれん草] を植えた。再び消防団員が指名されたが、幸いに僕は今回くじ引きで振るい落とされた。ハンス [ヌウマン] はとんだ貧乏くじを引いた。彼らは直ちに訓練を実施した。昨夜は12時頃に空襲警報があった。

フックス

1944年12月26日

今日、僕はまた終日、雑役をさせられた。相変わらず強制される。しかし、僕たちはまた早めに家に帰るし、すべてがより良く手配されている。清掃班は抑留所の周囲全体と、道路に沿っても雑草を完全に除去した。僕たちの抑留所と近隣は現在、実際にチマヒで最もきれいに整頓されている場所なのだ。僕は今日、全然違った場所、つまり瓦礫の捨て場で働いた。そこではとても静かに働く。なぜならば、彼ら〔日本人たち〕は今でも一日に五回だけは巡回しているからだ。随分少ない。殆どの時間、僕たちが怠けて座っていても、そのことで兵補は何も言わない。彼は実のところ、それをするにはできない。

フックス

1944年12月28日

今朝、雑役係は7時にはもう整列させられた。常勤の外部作業員だけは、そうではなかった。8時半、つまり通常の時刻に、僕たちは開始しなければならなかった。抑留所の周囲に伸びているマリゴールド〔キンセンカ〕の生け垣を、刈り込む必要があった。骨の折れる仕事だった。ぬかるみに膝まで埋まって、籐〔の棒^{とう}〕でそれを叩き切る。その上、僕たちをひっきりなしに急き立てた意地の悪い兵補がいた。僕たちが、ランブウタンの木<ムクロジ科の落葉喬木。小さな、白い、さわやかな甘みのある核果がなり、果実は赤い毛の生えた皮がある。>の傍を通過してきた時、とにかく少し摘み取ることができた。明日から外部作業は当分の間中止される。

フックス

1944年12月29日

幸いにも本当だ。外部作業は最早ない。それで僕は雑役をしなかった。しかし、そのために僕は正に二倍、熱心に働いた。昨日の午後は洗濯し、その衣類を今朝すすぎ、また別の衣類をバケツに入れた。これは今日の午後洗った。明日の朝、それらをすすぎ、それから三番目で最後の分がそこに入る。常に急かされていた雑役のために、きれいなものがもう無かった。その後ズボンの修繕を終え、また別の繕いものをやり始めた。今日の午後は少し眠った。

ドウ・マイイアー

1944年12月29日

今日、僕はまたもう一度、野菜雑役をした。僕たちは果てしなく長く、テロン [ナス] を刻みつけなければならなかった。2時から午後いっぱい続き、僕はたった十分の一のパンを持ってビクン [食事をする] 時間にやっと家に帰ってきた。さて、明日僕たちがおいしいサンバル テロン [細かく刻んだ唐辛子入り、なすの添え料理] をもらわないとしたら、それはおかしい。

ドウ・マイイアー

1944年12月30日

今朝は僕一人でトイレ、<以前の>使用人のトイレ、浴室、溝全体、そして畑の汚れた場所を掃除しなければならなかった。なぜならば、何回も同じことを聞くように、もう一度、高官訪問が予期されていたから。僕は、彼らがそれを口実にしているのだ、と次第に思うようになる。

メィムリンク

1944年12月31日

ヤップはクリスマスの直前またはその後に、高官訪問を予期していた。今、大急ぎでいくつかの^{ざんごう}塹壕と小さな^{ようさい}要塞を掘らされた。その上すべてが清掃され、草は刈られ、溝をきれいにしなければならぬ。働ける少年たち全員がこれに協力させられた。午前と午後。それで、丸一日が台無しになった。労賃14セント。

二日間、金曜日と土曜日に僕はそのように働いた。そして月曜日は第一クリスマス。それで未だたくさんすることがあった。誰も家にはいなかった。なぜならばチャールスとフレットゥ [ドウ・ヴィルドゥ] ももちろん、外に出なければならなかったから。ヤン [ハーリング] とグッツ [ナスッツ] はもうテオ・ハーリングと一緒にグダン [物置] に寝ていたし、同じように仕事があった。日曜日には再び [仕事を] しなければならぬ。僕はもうほんのわずかしかやる気は無かった。それで夕方僕は医者 [A.P.G.] バーアトゥマンの所へ行き、足の腫れを見せた。彼は僕がそこに何をすべきか話した。そして僕に雑役から1週間の休みを与えた。

ドウ・マイイアー

1945年1月4日

今日、僕は伝達係として初めて仕事をした。とても気に入った。ただ、ずいぶん長い道のりを速足で歩かなくてはならなかった。

フックス

1945年1月5日

午後、僕は3時半まで眠った。その後、駅から受け取ってきた木材を、積み重ねる手伝いをさせられた。僕はそれが支払われる、とは思わない。その支払いは僕にとっては大して重要ではない。とりわけ、もし僕が値段の高い物または不必要な物を何も買わなければ、今のところ十分な所持金がある。それに僕は、そんなことをするつもりもない [...]。わずかな期間家に居残っていたとすると、どれほど雑役を嫌うものか、不思議なことだ。一体なぜ、僕がこれまでの間「道路作業」を耐え抜いたのか、よく分からない。

フックス

1945年1月6日

今朝、再び雑役係が不足した。しかし、僕は逃げ出したかのように隠れていた。ところが11時に点呼の鐘が鳴った。それで僕は正に姿を見せざるを得なかった。再び木材雑役だった。僕たちは正面に送られ、そこで12時半まで座っていた。それから家に帰ることが許されたけれど、僕たちは待機させられたまま残っていた。ずいぶん罰当たりなことを、僕たちは言ったものだ！

サロモンズ

1945年1月6日

僕がルーウィガジャに行ったのは、残念ながら多分これが最後の日になりそうだ。明日からは150人だけが行く。僕のように年少の少年たちは[一緒に]行ってはならない。ものすごく残念。なぜならば、あそこでは、ここの二倍のポップをもらえるからなのだ。お砂糖が入っていて[それは]だんぜんおいしい。なぜならアチ[タピオカ<キャッサバの根から採った澱粉>生産の副産物で悪い品種の澱粉]を加えていないからだ。午後はサユール[野菜]入りのトウモロコシポップ、[加えて]パン五分の一とお茶をもらう。そしてまだ5セントかせいだ。[注意！ 普通は

15セント支払われる]。今や楽しみは終わってしまったのさ！

フウクンス

1945年1月7日

今日、僕たちは木材雑役のため8時半に整列させられた。しかし、僕たちは午前中と午後、確実に呼び出されるだろう、という結構な知らせと共に早くも送り返された。僕が戻って来ると、その間にもう9時半になっていた。僕はマットレス、グリーング [丸枕] と毛布を外に放り出し、5時頃までたっぷり日に当てた。さらにパジャマ、ズボン、パンツを洗濯した。それから、ウビ [サツマイモ] 畑を除く僕たちの畑全体の草取りをした [...]。その間、12時半に僕たちは呼び集められた。僕は4時頃まで木材を積み上げた。それから、僕は十分にしたと思い、素早く逃げ出した。

フウクンス

1945年1月10日

今朝、僕は病人を陸軍病院へ運ぶ手伝いをした。ものすごく重かった。僕たち6人で重たいお年寄り一人だった。しかし、門の所でヤップの指図で、二人の担ぎ手が抜けなければならなかった。それで、それからは僕たち4人となった。僕と並んで歩いていた少年は少し背が低かったので、結局は殆ど僕一人で担いだ。両肩はひどく痛んだ。病院では何か買うチャンスは全く無かった。僕たちは即刻また整列させられた。ルウル [ファブリック] と [ルウク] アーラァスとは確かに話をした。彼らはそこで草刈をしている最中だった。

ドゥ・マイイアー

1945年1月20日

僕はまた簡単な雑役をした。病院の前と炊事場を掃くだけでよかった。それから僕たちは、それ以上は何もすることが無かったので家に帰った。

フックス

1945年1月21日

ところでヘンク [カルスホーヴン] と僕は昨夜、火災監視をした。雨が降っていた。そして僕たちは静かに、自分たちのトゥンパット [寝場所] に入っていた。

フックス

1945年1月26日

僕がちょうどグリング [丸枕] を [修繕] し始めたいと思ったところへ、警報と鐘が鳴った。最初は空襲予備警報、次に空襲警報。僕も所属する消防団は整列させられた。11時から12時 [まで] 防空壕の中で立っていた。

ドゥ・マイヤー

1945年1月27日

ささいな雑役は、向こう側 [バロス側] でカポックの種く綿毛状になった種はクッションやマットレスの詰め綿として利用される。パンヤ。>を探すことだった。僕はずいぶんたくさんの種を、ゴレンゲン [炒] ろうと思いい家に持ち帰った。それはカチャン [ピーナッツ] と同じような味がするに違いない、と言われている。その上まきも十分に備えがある。板一枚を完全に細かくして家に持ち帰った。あそこには板が山ほどあった。午後、僕たちはもう一度、雑役をする必要はなかった。

フックス

1945年1月27日

今朝、僕は雑役主任の [P.G.] オットウマに、今日は雑役がある、という全く不愉快な知らせで起こされた。畜生、何と腹がたったことか。スープ作り、衣類の洗濯、英語の授業、すべておじゃんだ。向こう側 [バロス側] では、僕は待機させられていたと聞いた。それは初耳も初耳。ここでも門戸待機が組まれた。9時から12時 [まで] と2時から5時半 [まで] 留まる。僕は直ぐ密かに逃げ出し、家で僕たちの組長のためにクッションを詰めた。それからスープ用に野菜を摘み取り、洗い、刻んで缶に詰めた。それから授業時間になった。ところが勉強仲間 [ロブ・メイクル] が12時15分過ぎにやっと姿を現わしたことで、授業は1時に終了した。僕はそれ

でも焚き火を作ろうと試みはしたけれど、残念ながら失敗だった。何一つ僕の思い通りにならなかった。12時半に整列。2時半に僕は再び家にいた。[...] そうこうしているうちに僕は今日、容易に12セント稼いだ。

フックス

1945年1月30日

僕たちは今日ブラカン [家の裏側] の [掃除当番] だった。それで僕はそれを実行した。ハンス [ヌウマン] は部屋を完全に掃除した。荷物は埃をかぶり、それは確かに必要だった。それから僕は表側の畑で長い時間、しゃがんで草取りをした。一方は今、すっかりむしり取られた。それからまだ英語をしたかったけれど、急に疲れが出たので、残念ながらそれをするのは止めた。この数日、僕は再びかなり衰弱している。特に膝などで、10 [時] から夕食までの間なのだ。

ドイツ語の授業は行なわれなかった。ロプ [マイクル] が来なかったためだ。彼は確かに雑役があった。向こう側 [バロス側] の抑留所では、かなりの雑役がある。僕はこちら側にいることを、幸いに思う。そのすべてが実際にはどのような雑役であるのか、僕は正確には知らない。いまだに道路作業員とパガ作業員 [垣根で働く人たち] がいる。

フックス

1945年2月2日

今朝、パップの直後に僕たちは草むしりをさせられた。しかし、僕は木材積み上げ雑役があったので、それをする必要はなかった。10時から11時半 [まで]、そして2時半から4時 [まで] のみ働いた。それは、またかなり速く終了した。年をとった人たちがそれほど厄介でなかったならば、さらに迅速に進めることが確かにできたものを。彼らは、ちょっとしたことで休憩が欲しいのだ。

ドゥ・マイイアー

1945年2月4日

今日、僕たちのブラカン [家の裏側] の週番 [掃除当番] が始まった。それを僕たちはいつも4人です。

ドウ・マイイアー

1945年2月6日

今日はもう一度、支払われる雑役があった。もちろん、全く何もしなかったさ。今朝はまず初めに待機させられ、僕たちのために仕事があるまで、事務所でじっとしていなければならなかった。けっきょく少し掃除をした。今日の午後は、石を少し引きずって運ばなければならない。そして大部分の時間は、ジェルック [マンダリンみかんのような果物] の木の下に座っていた。一人の青年がくその実を>いくつかもぎ取ったけれど、まだ熟していなかった。僕は試食させてもらったけれど、とてもいい味だった。雨が降り出したとき急いで家に帰った。これからは、僕には常勤の雑役日がある— 月曜日と木曜日。

ヨーストウン

1945年2月17日

午後、木材雑役があった。ヴィム [彼の兄] とぼくも加わった。木材雑役ではジャグン [トウモロコシ] をもらう。ヴィムは一本半、そしてぼくは二本半。ぼくたちはそれを家でいった。

フックス

1945年2月19日

僕が老人と病人たちの居るこちら側に住んでいることは、今でも極めて幸運で、雑役無し。

フックス

1945年2月27日

僕たちは朝、ウビ [キャッサバ] の葉を摘み取った。僕はそれを洗いもした。その次に表側の畑で働いた。早くも相当の草が伸びていた。ヘンク [カルスホーヴン] はブラカン [家の裏側] をし、ハンス [ヌウマン] は部屋の雑巾がけをした。そのように、やるべき事はうまい具合に配分されている。

フックス

1945年3月4日

ヴィルム通りにある家の取り壊しのために、1日14セントで有志が求められている。しかし、僕は申し込まなかった。

ドゥ・マイヤー

1945年3月5日

今朝は幸いにも雑役はなかった。それを僕は少なくとも2週間はしていない。なぜならば、その雑役を本当に不愉快だと思うからだ。それならば、野菜雑役をする方がずっとましにきまっている。そのお砂糖つきのパン半分で<それを売れば>45セントもらえる。そして少なくとも、それほど退屈ではないし、それほど長くもない。

フックス

1945年3月8日

今日の午後、僕たちは突然、雑役があった。家屋解体雑役。僕はいまだかつて、それほど怠けたことはなかった。監視する者は誰もいない。3時半はヤスミ〔休憩〕だった。[...] 雑役の後半に僕は静かに逃げ出した。

フックス

1945年3月13日

今日は〔常勤の〕雑役日だった。早く起きた。僕たちが出かける時、部屋はきれいだった。今回、僕は待機させられた。それで9時から12時15分過ぎ〔まで〕、もしかすると予期せずに雑役係が必要となるかも知れない、と班長事務所で待っている。何もすることが無ければ、簡単に7セントは貰えない。僕は今朝、小ぶりの米袋5つを10メートルほど引きずって運んだ。それで半日分(4セント)を稼いだ。それ以外は、英語をかなり勉強することで、時間を有効に費やした。

午後もまた待機させられた。それで2時から5時15分過ぎ〔まで〕、その場に居なければならぬ。しかし、3時ごろ僕たち10人は鉄を運ぶため、手押し車2台と共に山岳〔砲兵隊〕に送られた。僕はそこで知人には誰も会わなかった。山岳<砲兵隊>から第4〔チマヒ第4〕

へ木材を取りに行き、そこで僕は炊事場の近くに、本当にヴィム [ドゥ・ラウター・ドゥ・ヴィルトゥ] が立っているのを見た。それはものすごく意外なことだった。

ドゥ・マイイアー

1945年3月15日

今日もまた、その惨め^{みじ}でいやな雑役をさせられる。一日中、積み重なった木材の束を、<力尽きて>倒れるまで、苦勞して運ばなければならない。そして、そうなってもまだ休んではならないのだ。

フックス

1945年3月15日

今日は雑役日だった。それで僕はベッドに寝ていないで、早くからすっかり清掃をした。再び家屋解体雑役だった。10時に僕たちは手押し車を手に入れ、煉瓦と屋根瓦を山岳 [砲兵隊] へ運んだ。知人は誰も見かけなかった。11時半に僕たちは再び戻り、家に帰ることができた。それで半時間のウントゥーン [儲け]。

今日の午後、僕たちは再び山岳<砲兵隊>へ行かされた。もう一回だけ輸送しなければならない、と聞いていた。それで急ぐことはなかった。僕たちが3時半に戻ると、急に更にもう一度、運搬しなければならなかった。すべての不平も主張も無駄だった。それで仕方なくもう一回、大急ぎで運んだけれど、家に着いたのはそれでも5時過ぎだった。僕はそれから家でしばらく手製巻きタバコをふかし、それから直ぐニンジン^もを煮た。火を強くかき立て、食事を取りに行き、先生 [ファン・ダー・スホートゥ] の食事を暖めた。家に戻って来ると火は消え、ニンジンは煮えて [いた]。

フックス

1945年3月16日

今日、僕は嬉しいことに雑役が無かった。のんびり遅くなって起き上がった。今朝まず初めにパンツの修繕をした。脚の部分が長すぎるうえ、尻のところ^に穴があった。脚の部分から切り捨てたその布を、尻のところ^に継ぎ当てた。今また完全に使えるようになった。もう一枚破けたパンツがあるけれど、それは明日にでも繕う。

次にハンス [ヌウマン] と僕は掃除をした。すべての物を外に放り投げた。素晴ら

しい天気だったので、何もかも気持ちよく乾かすことができた。部屋は今、完全に清潔。それも確かに必要だった。[なぜならば] 相当の埃が積もっていたから。どこから来るものか分からない。

ドウ・マイイアー

1945年3月17日

今朝は雑役をした。でも愉快的な雑役。野菜雑役。そして支払いは丸パン半分ではなく、パップー皿もらった。それがこのごろの支払い方法。でもバンヤ [たくさん]、それはたくさんのお砂糖つき。そのために、もちろん (ナイフのほかに) もう一枚お皿か小型のカップとスプーンを持って来る必要があった。僕たちはニンジンをきざみ、タマネギをむいた。

フックス

1945年3月18日

ハンス [ヌウマン] と僕は今日再び、家屋解体雑役をした。つまりー 9時から12 [時まで] 残り50人の作業員と同様、何もせずに座っていた。ひどく腹が立つ、つまり雑役することを強制されるので、丸一日が台無しになるのだ。何をしようと構わない。ただ9時から12時 [まで] と2時から5 [時まで]、自分の持ち場に留まっていなければならないのだ。時間はべらぼうにゆっくりと過ぎた。

ドウ・マイイアー

1945年3月19日

今日、僕は年少の少年たちの所での雑役に遅刻したため、年長の人たちと一緒に、通りの下の方にあるその壊されていない家々の一軒で「解体」を手伝った。驚くことはないのだ。取るに足らないことだった。煉瓦を家の中から外に運び出すだけのことで、全然重くはない。欲しいだけヤスミ [休憩] することができた。そして今日の午後、それらの石を山岳砲兵隊へ運んだ。でも本当に楽しかった。

フックス

1945年3月23日

今朝は少年全員が家の前で雑役をした。家の周囲の道路に石を撒くため誰でも1時間、石を細かく砕かなければならなかった。まず、ハンス[ヌウマン]が石を叩いている間に僕がバイエム[ほうれん草]を洗って刻んだ。それから僕が叩きに行き、ハンスが火を起こした。

ドゥ・マイヤー

1945年3月26日

今朝は第一に、通りの下のこわされている家で、石を細かく割った。午後、僕は野菜雑役をすることができたので、そっちへ行った。ウビ[サツマイモ]をきれいにし、ニンジンをきざまなければならなかった。明日はまたスタムポット<マッシュポテトにゆでた野菜を混ぜ、ソーセージなどを添えた料理>に違いないぞ！　うれしい。

フックス

1945年3月29日

今日、僕たちは再びおとなしく雑役をした。今朝、僕は労働意欲があった。そんなことはいまだかつて無かった。パチョル[鋏]を手にし、壁を崩し始めた。幾つかの煉瓦を打ち崩したところで、僕は疲れた。一瞬、腕にもう筋力を全然感じなかった。重い物を持ち上げること、あるいは腕を使う負担のかかる仕事をするには、もうできない。これは、医者が言ったように、正にそうなのだ。蛋白質が欠乏すると、まず初めに最低限必要な筋肉が減退する。急激な散歩を無理して始めさせなければ、僕の脚の筋肉は確かに良くなっている。今日の午後はひどく暑かったので、作業は無かった。僕たちは3時間にわたり、作業場近くの日陰で腰をおろしていた。家に帰ってはならないのだ。なぜならば、もしヤップが来れば、作業員はそこに居なければならないからだ。

ドゥ・マイヤー

1945年4月1日

復活祭の日曜日に僕たちみんな、「戸棚雑役」をしに行くことができた。さて、そこではまた山ほどの戸棚がばらばらにくずされた。幸いに引きずって運ばなくてよかった。ただ記録の手伝い

をするだけだった。それは、アルファベットA、B、C、D、Eなどを戸棚に貼り付けることだった。Aは大きな衣料品戸棚、Bは小さな衣料品戸棚、Cは大きなスペン〔食糧貯蔵棚〕などという意味であったに違いない。そして当然すべてに番号が付けられた。フレーザー氏は僕がその好ましい仕事をもらえるように、準備してあった。ただ、それほど蒸し暑くなかったならばよかったのに。道路は足の下で焼けついていた。幸運にも僕は、この家の別の半分に住んでいるペッピンク〔H.C.A.〕氏の帽子を借りることができた。何もしないでいるということから、僕は午後すっかり疲れ果てた。

メィムリンク

1945年4月2日

日曜日〔4月1日〕、お母さんの誕生日に僕たちは再び忙しかった。多くの家の家具グダン〔倉庫〕を空にし、家具を通りの上の方に集めさせられた。つまり、変化がありそうだ。実際に何であるかはまだ判らない。噂だらけだ。もしかすると僕たちは本当に出て行くのかも知れない。今、僕たち自身の家とこの隣の家々から椅子、テーブル、戸棚、寝台を引きずって運び出しながら、まだ使える物を見つけ出している。そのようにして僕たちは、相当数の椅子の脚や背もたれをくすねた。焚きつけによい。フレットウ〔ドウ・ヴィルドウ〕は今、完全になった小さなテーブルさえも、自分のトゥンパット〔寝場所〕に置いている。

僕たちにも思いがけない幸運があった。或る物置の中で僕たちは戸棚の作業をしていた。その一つは引出しが閉まっていた。それは当然開くはずだった。針金でいじくりまわしたけれど大して役に立たず、閉まったままだった。ふと、僕は地面に錆びた鍵が落ちているのを見た。それを鍵穴に差し込んで一回試した。ああ、やっぱり。引出しは開いた。一瞬、僕たちは中味をじっと見つめた。それからチャールス〔ドウ・ヴィルドウ〕がさっと、前に引っ張り『その石盤をチュップ〔掴む〕！』そして素早く奪い取って逃げ去った。直ぐ僕は別の石盤を握った。今や野蛮な取り合いとなり、誰でももらえる物は何かしら取った。チャールスと僕はかなり前の方にいたので、相当うまい具合に行った。フレットウはずいぶん後の方にいたので、くずをもらった。石盤のほかにチャールスは、写真とネガが入った小さなタバコ箱を獲得した。その中にはペンの入った小さな箱、鉛筆、消しゴムもあった。僕は石盤、定規、編み棒、ペン軸と数ダースの安全ピンが入った小さな箱を見つけた。すべて有用な物ばかり。僕たちは昨日の朝、さらにしばらく熱心に働き続け、それから家に帰ることができた。

フックス

1945年4月3日

今日、僕の14セントをいとも簡単に稼いだ。僕は整列し、直ぐ密かに家へ逃げ[去っ]た。そして僕は雑役でする筈であったよりも、さらに有意義に午前中を過ごし[た]。僕の毛布は完全に修繕された。ほころび^{うま}ニヶ所に新しい布を当てた。今、15ヶ所につぎが当たっている。それから英語の勉強をし、美味いポップコーンを作った。その後、ジャグン[トウモロコシ]をすり潰^{つぶ}した。

フックス

1945年4月9日

[...]三日のうち二日、雑役をすることは全く不愉快だ。

フックス

1945年4月10日

今日、ハンス[ヌウマン]と僕は道路雑役をした。手押し車で瓦礫を、ヴィルム通りのはずれから僕たちの病院の paga [垣根]の外側まで、苦勞して運ばなければならなかった。この瓦礫から抑留所の周囲に道路が造られ、そこを兵補たちが見回らなければならない。[...]

今晚、僕はルーウィガジャのグループ[責任者]の所へ行った。一ヶ所空きが明日あり、僕は参加できる。ものすごく幸運なことだ。確かに厳しい仕事で、一日中外に出るけれどビツク[食事]は良い。

フックス

1945年4月11日

今朝、僕はお湯が運ばれてきた少し後で起床した。そして洗髪し、ル[ーウィガジャ]のための身支度をした。8時には、もう整列しなければならない。パップはここで食べるのではなく、農園にて。今朝は霧がかかり寒かった。9時15分前に僕たちはそこに着き、作業を開始した。僕は建設班に配属された。ところが、その班が建てなければならなかった幾つかの豚小屋は、既に出来上がっていた。僕たちはそれで何もすることがなかった。僕は竹を少しのこぎりで引き、鉄条網を巻かなければならなかった。11時に僕たちは500ccの砂糖つきパップ750ccを

貰った。砂糖は2セントする。11時まで僕はそれで何も食わずに働いた。それは確かにブラット [辛] かった。

1時に僕たちはパップ、野菜、豚の内臓、豚の血液とトウモロコシで作ったパップスープ700ccを貰った。それは14セントする。僕にはその上300ccのビーツ [配給後の余剰] もあった。そのスープとコーヒーを終えたら、丸パン1つ半はもう食べられなかった。それを家へ持ち帰った。10時にそのうちの一つを食べた。残りは明日の朝のために取っておく。僕は常勤のル [一ウィガジャ] 作業員を申し込んだ。当分は予備員。授業を逃がすけれど仕方がない。その補充の食物すべてのおかげで、僕は今既にかなり気分が良くなっている。一日中、空腹にはならなかった。そんなことは何ヶ月も経験しなかった。

フックス

1945年4月12日

野菜を積んだ手押し車を運ばされた。僕は200キロ搭載した手押し車を、バロス [第5] まで運んで行かなければならなかった。恐ろしく重く、そのうえ寒かった。雨は、風のため、完全に横なぐりだった。僕たちがバロスに着くと、炊事雑役係たちに積み荷を降ろさせた。僕たちは炊事場へ座り込んだ。火のそばで早くも少し回復した。僕たちはそこで、熱いお茶をマグカップに一杯もらった。お茶がその時ほど美味しかたことはない、と僕は思う。そのおかげで体の心まで本当に暖たまった。僕はファン・ドールン氏と話をした。ニュースは無かった。しかし、確かに本物の紙巻きタバコを10本持っていた。僕は直ぐ1本に火をつけた。それから僕たちの抑留所へ戻るため、再び雨の中に飛び出さなければならなかった。

フックス

1945年4月16日

明日からは110人ではなく、90人しか [ルーウィガジャへ] 行かないので、[雑役班では] まだ新人の僕と一緒にいくチャンスは殆どない。

フックス

1945年4月18日

実際に思ったとおり、今日ル [一ウィガジャ] へは行かれなかった。抽選で外れた。僕たち5人のうち一人だけは行くことができたけれど、もちろんそれは僕ではなかった。豚肉をもう一度味

わうために、明日は参加できることを願うだけだ。今は実のところ一緒に行くことは難しい。もう決して行かれない、と残念ながら思う。ともかく、僕はいずれにしても良い一週間を過ごした。

フックス

1945年4月19日

それでも僕はル [一ウィガジャ] へ一緒に行かれたとは、予想外に素晴らしい結果だった。今日は差し当たって最終日。残念。しかし、仕方がない。今日、僕は建設班ではなく畑で働いた。半日は葉っぱを掃き集め、ごみ焼却場へ運んだ。ものすごく快く、骨の折れる仕事ではなかった。

ドウ・マイイアー

1945年4月24日

僕は午後、雑役をさせられた。そのため雑役丸パンをさらに半分追加でもらえて、すばらしい。そうなのだ。雑役はこのごろパンも余分にもらう。[...]僕は文字どおり雑役では何もしなかった。それは外部雑役だった。そして兵補は僕たちが仕事を怠けていたことを許した。

ドウ・マイイアー

1945年5月2日

消防団と応急処置班が再び割り当てられた。僕たちの組は消防団を担当しなければならない。僕たち二人、エドゥガー [ラウレンス] と僕もその中に入れられた。空襲警報と同時に、僕たちは門に整列しなければならない。しかし、今は幸いまだする必要はない。僕は昨日、ヤップの塹壕^{ざんこう}で働いた。見れば、どんなにゆるく造ったかがわかる！ すべてを綱でたがいにしっかり縛りつけた。

仕上がった時、僕たちは山岳砲兵隊^{りょうまつ}へ、糧秣^{りょうまつ}を取りに行かされた。僕たちはそれで、パンを食べに一度家に帰ることはできなかった。長いことそこで待たされた。やっと僕たちが3時近くに帰って来ると、家に帰らせてもらえた。それで午後はさらに仕事をする必要はなかった。それでも僕は本当に疲れ果てて、家に着くなり、くたくたになり、そのままベッドに横になった。それは耐久力がもうないからなのだ。予備の力がなくても、さらに5時にはもう一度パンを取りに、炊事場へ行かなくてはならなかった。 [...]

僕は昨日の朝、夜警で6時から7時半まで巡回しなければならなかった。でも7時に僕たちはまた中に入った。なんとひどいことか、ちえっ。

フックス

1945年5月5日

昨日の午後、作業班の班長は僕がル [一ウィガジャ] に一緒に行かれる、と既に言っていて、現にそうだった。彼自身がヤスミ [休み] だった。僕は今日かなり本気で働いたけれど、見劣りしないように、そうしなければならないのだ。新人がひどく怠けて [いる] のでは、殆ど評価されない。もし長いこと班に所属しているか、または良く知られていて、少しコネのある人気者であればうまくいく。僕がこのグループ [6] の予備員となるチャンスは確かにある。朝はだいたい12時まで除草をした。それから5時までジェルック [ライムまたはマンダリンみかんのような果物] を摘み取った。そして枝を堆肥の山へ引きずって行った。[...] 僕はル [一ウィガジャ] では再び満腹になった。僕たちにはビーツ [配給後の余剰] があった。そして僕は更に、他の少年のビーツまで貰った。

ドウ・マイイアー

1945年5月6日

僕は昨日、ル [一ウィガジャ] に出かけて行き、今日はまたパガ [垣根] の清掃雑役をした。ル [一ウィガジャ] では愉快だった。それはチマヒの郊外にある大きな農園。そこには豚、フリースラント<オランダ北部の州>の乳牛2頭、でっかいやつがいる。たくさんの豚、ものすごく大きな雄豚。その上、いたる所に子を産んでいる豚の小屋。愉快だ、そのかわいらしい子豚たちは。農園の前にはすばらしい花畑がある。さらに広大な畑では、あらゆるものが栽培されている。ロバック [大根の一種]、テロン [ナス]、バイエム [ほうれん草]、スリナムのバイエム、ジェルック ニピス [ライム] の木、サラダ菜、サウィ [白菜] とそのほかたくさんの植物。僕はここでは雑草取りの手伝いをさせられた。すべてが良く手入れされているように見え、それで僕はそれほど多くのことをしなくてもよかった。雑草は豚たちの所に運ばなければならなかった。大きくて、食いしん坊な家畜で、ブーブー鳴いてわめく！

僕たちは午後、家で食べるのではなく、そこで味のいいスープを1杯もらった (でも、多くはなかった)。とってもおいしかった。ところが3時半にトウモロコシパップをもらった。そのパップはココナッツとシナモン入りの、何か素晴らしい味がした。とても甘くてしつこかった。ふう！ そして胃にもたれた。それを約1、5リットルもらった。ところで、それは本当においしかったけれど、僕には食べきれなかった。[...] ル [一ウィガジャ] でもう一度働いたら、ほんとうにいいのになあ。家に着いた時、僕たちは何と満足だったことか。その上、今日はそのために雑役丸パンをさらに半分もらう。

ドウ・マイイアー

1945年5月15日

[マックス] おじさんが、僕たちはこれ以上雑役をする必要はない、と言った。なぜならば僕たちは今、十分に稼いでいるからなのだ。彼は、トーコーバラン [売店の品物] などを取りに行くため、特に今忙しい毎日は僕たちが必要だ、ときっと言うだろう。

フックス

1945年5月18日

今日は90人ではなく120人が、ルーウィガジャへ行かされた。僕は自分のグループと一緒に行くことができた。これら30人の追加は、大量に収穫されたことで、それだけ多くへパチョルトゥ [鍬で土を掘り起こすこと] をしなければならないためだ。

ドウ・マイイアー

1945年5月22日

僕は向こう側で解体雑役があったけれど、逃げ出した。それはごく簡単なことだ。エドゥガー [ラウレンス] は今日も木材雑役から逃げ出した。エドゥガーはもちろん考えもする。『やる気など全然ないよ。雑役のことは自分でやるがいいさ』と、雑役リーダーのボスマ氏 [を彼は意味する]。

フックス

1945年5月25日

今朝、僕は未知のニッポン雑役のために不意に呼び出された。8時に整列させられた。そして10時15分過ぎに2台のトラックが来た。僕たちは「乗せられ」およそ4キロメートル離れた丘に乗り入れた。そこで僕たちは、足場を掘らなければならない。2つの班になって仕事をした。15分作業し、15分休憩。これは大きなウンツン [利点] だ。道具は傷み、パチョルス [鍬] は曲がり、直ぐに壊れてしまった。そして砂を入れて運搬しなければならない籠は、作業終了までかろうじて持ちこたえた。僕たちのパンをそこで受け取った。5時15分前に作業を止め、それから雑役丸パンを一つ追加で貰った。もし、500グラムのウビ [サツマイモ] または何かそのような物を追加で貰えるならば、確かに好ましい雑役だ。

フックス

1945年5月26日

僕は今朝、BDD [バトゥジャジャル] のために整列しなければならなかった。しかし、幸いにも僕の代わりに行きたい人を見つけることができた。そういう訳で僕は家に残ることができた。今日は一生懸命に働いた。僕の毛布、更にほかにも8枚洗濯した。その上、家の拭き掃除もしたし、水もハンス [ヌウマン] と僕の分を合わせて汲んだ。今日の午後は気持ちよく眠った。僕はファン・エスの班からは外れている。彼は他の班から別の年長を入れる必要があったからだ。そして僕は新人として名簿に載っているのだから、そこから除かれたのだ。月曜日の夜、僕は他の班に参加できるかどうか当って見なければならない。

今晚、ハンスと僕は十分濃いコーヒーをポットに用意した。僕たちは夜警のため、起きていなければならない。僕はいまだかつてそのような経験がない。一晩中、僕はウビ [サツマイモ]、ジャグン [トウモロコシ] とスベリヒユ畑で忙しくしていた。しかし、獲物もそれなりに大きい。僕は実に3キロのウビ [サツマイモ] を獲得。明日はそれで、むさぼり食うことになる。みごとな月夜で、天気は穏やかだった。

ドウ・マイイアー

1945年5月27日

今、新しい外部雑役がある。バトゥジャジャルまで半分の距離にあるので、バトゥジャジャル雑役と呼ばれる。その雑役の支払いは、雑役丸パンが完全に一つ。そこへはトラックで行く。楽しい。もし親切なヤップに当たれば、時々お米を買うことができる。昨日、彼ら<雑役係たち>はだいたい500グラムのお米を60セントで買った。原住民は身に付けている衣類を、買うようにせめ立てた。ありきたりの白いシャツに、彼ら<原住民>は40ギルダー払う。タンクの落とし穴を造らなければならないけれど、15分おきに休憩が [ある]。

それは、少なくともルーウィガジャよりはましなのだ。あそこでは連続して働かなくてはならない。焼け付くよう太陽の下でパチョレン [鍬で土を掘り起こす]。ルーウィガジャでは10時半に休みがあるだけ。そのヤスミ [休憩] は半時間で、すでにひどく疲れているとしても、再び続く。本当の奴隷だ。それから12時に食事の時間がある。[それで] 丸パンをもらう。2時に再び始め、3時半にまた休憩。5時に、殆どの場合遅くなるけれど、やっと家に帰る。それでも門の前に整列することなどで、半時間は歩くのだ。それから、ここ抑留所で雑役丸パンをもらう。14セントはそのまま支払われる訳ではないのだよ。そこからパンと一緒にもらうトウモロコシパップの分を払う。それからお砂糖をもらう。約半オンス<50グラム>。でも、これもいづれは払うことにもなり1セントする。お父さんのお誕生日に、僕たちは一度あそこへはうまい具合に行ったけれど、僕はもう行くつもりはないさ。あそこは全然気に入らないのだ。僕は

バトウジャジャルへ行く。

志願者が求められ、この組からは8人。エドゥガー [ラウレンス] と僕は聞いていた甘い話に引かれて、すぐに申し込んだ。今朝、それでとにかく整列した。ところがトラックは来なかった。それは最悪だった。11時頃まで無駄に待った。とうとう、ボ [スマ] 氏は僕たちを家に送り返した。

ドゥ・マイイアー

1945年5月28日

すごいぞ、バトウジャジャルでは。僕たちは今そこへ行ってきたのだ。つまり、もちろん半分の距離。そこへ車で出かけるのは、ものすごく楽しかった。8時15分過ぎに僕たちは今朝、整列させられた。ずいぶん長い時間、門の前で待たなければならなかった。またもや無駄に過ぎてしまった、と思っていたところ、11時少し前にトラックがやって来た。僕たちは門の外で二列横隊に整列させられた。それから、その二列は別々に並び、僕たちは数人の兵補にボディーチェックされた。見事に進んだ。彼らは列に沿って歩き、衣服の上からなでつけた。シャツは一枚だけしか着られなかった。重ね着していると、一枚は脱がされた。これは僕たちが戻って来るまで、事務所に保管された。僕は一枚しか着ていなかった。兵補には僕のポケットの中で、何かがかチャカチャするのが聞こえた。彼は、それは何か、とたずねた。『僕のセンドク [スプーン]』と答えた。彼は見もせずですぐ先へ進んで行った。感じのいい奴ら [なのだ]。すべての方向から十分に僕たちを観察した後、さて、それが本当のボディーチェックと言えるものやら、そのようなことが行なわれた。それから、誰が一番先 [に乗れる] か僕たちは一気にトラックへ向かって走った。僕たちはすばやく乗り込んだ。なぜならば全員が乗れたわけではなかったからだ。一部は歩かされた。[...] 丘の斜面で作業をする。眺めは素晴らしい。ずいぶん遠くの方まで見渡すことができる。僕はここでも楽しんだ。僕は周囲を注意深く眺めた。オランダ領東インドは、それにしても何とすばらしい土地だろう！ 買うためのお米は無いけれど、ピサン<バナナ>は確かにある。1人4本。これは30セントした。

フックス

1945年5月29日

今朝ヤップは急に60人、ル [一ウィガジャ] 作業員として追加が必要だった。無論、僕は即座に希望した。後になって、僕たち全員ル [一ウィガジャ] ではなく、チミンディのために草刈りに行くことが判った。第4 [チマヒ第4] からのチ [ミンディ] 作業員と第4の他の外部雑役係は、密輸事件により抑留所外部へ行ってはならなかった。チ [ミンディ] では、僕は豚がいる所

で働いた。かなりのトウモロコシを食べた。更に他の二人とココヤシの実をこっそり取って、小さく切った。

サロモンズ

1945年5月29日

8時半に突然、働ける<状態にあった>すべての少年は、整列させられた。60人の班と20人の班がつくられた。[...] 僕もいた第一〔班〕は、まず20台の手押し車を取りに、第4〔大〕隊へ行かされた。かみそりのように鋭いアーリットゥ〔先の鋭い三日月形の鎌〕を受け取った。それから第4大隊の先まで道路に沿ってババッテン〔草刈り〕をして、草を手押し車に積み込まなければならなかった。すべての手押し車がいっぱいになると、草をチミンディへ運んで行った。チミンディは農園で、ちょうどルーウィガジャと同じようなものだ。あそこには豚しかいなかったけれど、チミンディには乳牛57頭、雄牛2頭がいる。そのうえ豚がいる小屋もある。積まれた草は降ろされ、僕たちはその日の残りは、そこで続けて働かなければならなかった。他の5人と一緒に僕は、乳牛小屋の世話をする男の人の所に割り振られた。僕たちは小屋と溝を清掃し、肥料を手押し車にのせて堆肥たいひの山へ運ばなければならなかった。

ドウ・マイイアー

1945年5月30日

今、一体何ということなのか？ 昨日、バトゥジャジャルの連中は、木材雑役をしに行くために整列させられた。そして今朝は組の清掃とは。僕が本当に何かをしたとも思えば、それは大間違いだよ。とにかくそれは僕たちがする仕事ではないのだからね。ちくしょう！

フックス

1945年6月3日

昨晚、鍛冶工と大工が求められた。僕は申し込み、今朝、整列させられた。僕ですら採用され、それも第一打の役目だとは。つまり僕は<両手で使う>大型ハンマーで打たなければならない。当分、僕たちは雑役丸パンを一つ余分に貰えるし、トーコー<売店>で25セント注文することも認められる。今朝は未だ鑄造はしなかった。物を整え用意をしたにすぎない。今日の午後、作業を開始し予想外に気に入った。ハンマーで強く打つよりも休憩する方がずっと多い。それでも手に肉刺まめが出来た。

ドウ・マイイアー

1945年6月5日

ニッポン人からの命令で、僕たちの畑に沿って道が敷かれる。彼は毎日50人が門の所で待機することも望んでいる。彼が何かを造らせたりしたいなら、その雑役係にさせるのだ。分かるかい？ところが雑役丸パンを彼は取り止めた。今は鍛冶場のためにまだあるだけなのだ。

鍛冶場では作業の真っ最中。溶接され、あらゆる物が造られている。とても忙しく機械類などをすべて運び込んだ。電動の機械もある。[...]そこは今、完全に鉄条網が巡らされた。鍛冶場のために大勢、募集された。ヤップ自身は、おじさん[マックス・フラーザー]が話すように、専門のトゥカン[職人] — または、そう信じているのだ。

フックス

1945年6月5日

僕はまた鑄造に行った。ひどく重かった。時々、大型ハンマーで100回以上も打たなくてはならなかった！幸いにも、11時に雑役丸パンを2つ貰った。そうでなければ僕はそれ以上、絶対に耐え切れなかった。今日の午後、僕はひどく疲れていた — 特に脚が — なぜならば打つ必要がないとしても、一日中立っているからだ。今晚、鍛冶工は全員集まって住まなければならない、という通知が来た。もし鍛冶工として残りたいのであれば、僕は移転しなければならないし、不愉快な奴らと一緒にそこで住むようになる。僕は班長の所へ行き、そういうことならば鍛冶工にはならない、と言った。

ドウ・マイイアー

1945年6月12日

昨日、組み全体で働ける人は、整列させられた。僕たちは木材雑役をする必要があった。駅で木材を受け取る。木材を積んだ貨車3両が、僕たちの抑留所のために到着した。素晴らしい！

フックス

1945年6月14日

今日、僕は自発的に外部雑役をした。そのため雑役丸パンを貰う。仕事は随分楽だ。僕たち10人で塹壕を少し大きく、深くしなければならない。3グループで作業する。[...]一度位、一日

ぶらぶらせずに何か仕事をする事は、確かに気分の良いものだ。しかし、何と仕事があることか。一日は飛ぶように過ぎる。

ドゥ・マイイアー

1945年6月15日

エドゥガー [ラウレンス] も何としてもそこ [ルーウィガジャ] に行きたがっている。しかし、僕は全然興味がない。ヨープは、真面目に働かなければトウモロコシとウビ [サツマイモ] を食べきれない、と言う。それで自分の食べ物を食べることができるように、一生懸命働かなくてはならない。しかし、それでは熱心に働かず、食べ物を食べきれないとしても、とにかく同じことではないのかな？ 余分に食べた物はすべて、いずれにしろ体内で再び燃焼する。それによる利益は何かね？ ああ。その利益はヤップのためなのだよ。このやり方で、また儲けを取り上げるのだ。僕はヤップのためには働かないね。もし僕自身のためであったならば、きつとするさ！ そういうことで僕が最も喜んでほしいのは、ここ、家の畑で精を出して働くことなのだ。それは僕たちのためだから。

フックス

1945年6月18日

今日、再び塹壕雑役がある。今回はサボらなかった。朝早く軍曹が不平を言いに来た。昨日は怠けただけなので、作業は今日完成させなければならない、と彼は強調した。もちろん完全に不可能というものだった。班長は非常に恐れをなしていた。そして神経質になって、相変わらず僕たちが仕事をするように急ぎ立てた。兵補たちは格別に親切だった。僕たちの一人が<代表で>ピサン ゴレン [バナナの天ぷら] を一人に1本、買うことを許された。そして兵補から僕たちはピサンと紙巻きタバコを貰った。

フックス

1945年6月19日

今日、僕は米の糧秣雑役をした。9時半に整列し、手押し車10台と [山岳砲兵隊近くの] 大きな米グダン [貯蔵庫] へ行かなければならなかった。第4 [チマヒ第4] とバロス [第5] もそこにいた。[しかし] 知人は誰も見かけなかった。僕たちの抑留所に一回運転してから、バロス [第5] を手伝うためにもう一度、戻らなければならなかった。彼らは自分たちだけでは処理で

きなかった。それはべらぼうに重かった。[なぜならば] 手押し車の木のハンドルが、片方折れていたからなのだ。[...] 僕たちは丸パンさえ貰えなかった。

フックス

1945年6月24日

僕は今日また半日、塹壕雑役をした。また門の傍で。ヤップとひどく厄介な事があるのではないかと、僕たちは心配していた。鍛冶場が今日は休日のため、彼は僕たちに注意を払う時間が十分あるからなのだ。運よく彼は町へ出かけてしまい、それで僕たちは安心して怠けることができた。

フックス

1945年6月26日

今日、僕は気分転換に再び家屋解体雑役をした。小規模な要塞のような物を建てるために煉瓦が必要で、僕たちはその手配をしなければならない。ひどくガンパン [単純な] 仕事。何もする必要がない。一回の運搬で十分な石があったので、僕たちは作業を中止せざるを得なかった。

ドゥ・マイヤー

1945年6月30日

エドゥガー [ラウレンス] はまたルーウィガジャへ今日行く。まあ、行かせるしかないさ。今、僕はすべて一人でしなければならないけれど、大したことではない。

フックス

1945年7月1日

今日、僕は家に居なければならなかった。雑役は殆ど完了してしまった。10人のうち3人だけが仕事に出られた。ヤップが急きょ何か新しい雑役を考え出し、それで僕たちがパンを稼げることを願うのみだ。

フックス

1945年7月7日

今朝、僕はパガ〔垣根〕で働いた。他の数人の少年たちと、鉄条網の大きな山を崩さなければならなかった。本当に気持ちの良い仕事だった。朝日を浴びながら、しゃがんで針金を互いに少し取り外す。12時に終了し1時までヤスミ〔休憩〕を取ることが許され、〔それから〕家に帰った。今日の午後は垣根には行かずに、戸棚雑役をする。第4〔チマヒ第4〕から20台の手押し車が追加され、さらに僕たちの抑留所からも9台の手押し車があった。各々の車に戸棚を一つ載せ、それから出発。僕たちは山岳〔砲兵隊〕へ向かっているのだと思ったけれど、その方へは行かなかった。僕たちは殆どチマヒ全体の道のり約4キロメートルを歩き続けた。そして、それからヴダナ事務所〔チマヒ地区長の事務所〕に着き、そこで積み荷は降ろされた。パサール〔市場〕や中国人キャンプ〔中国人街〕の真中を通り抜けるのはものすごく愉快的な散歩だった。

フックス

1945年7月8日

移転に関する噂は益々ひどくなる。S.S.<国有鉄道>のために働くため、ヤップは3,000人の鉄道作業員が必要であり、僕たちの抑留所からは300名が行く、と言われている。それらの名前は既に書き上げられた。第4〔チマヒ第4〕の中からもすべての雑役係が去って行く。何が起こるものか、僕たちは未だ知らない。しかし、何かが起こる、ということは確かだ。僕は〔なぜ〕彼らは今、すべて殆どが終わってしまった一方で、S.S.<国有鉄道>のためにまだ雑役係が必要であるという、そのことだけは分からない。¹⁰³

ヨーストウン

1945年7月9日

今日、2人の医師、12人の看護婦、それに300人の作業員が外で働かなければならない、と知らされた。何をするのか、そしていつ仕事を始めなければならないのか、わかっていない。その人たちは300グラムのプラス〔精米〕、追加の野菜と肉をもらう。レオとヴィム〔彼の兄たち〕もそこにいる。

¹⁰³ 恐らく連合軍の進撃は知られていた。そのため抑留所責任者スホートルといくらかの消息通の自主行動により、抑留所内に密かに持ち込まれたインドネシアの新聞の翻訳に、臨時に組み立てたラジオから極秘で聴取した情報が補足された。バロス第6、序の「抑留所生活」参照。

ドウ・マイイアー

1945年7月9日

明日はたぶんルーウィガジャへ行くことを、意に反して強られる。もちろん授業のことは惜しい。[マックス] おじさんが僕をそこに配置した。彼がそうすることができたのは良いことなのだ。そうでないならば僕はおそらく S.S.<国有鉄道>の線路で、働いていなければならなかったに違いない。このためヤップは300人必要で、17歳以上の少年なのだ。それではまだ少な過ぎるため、14歳以上の大勢の少年が、このために割り振られるだろう。[それは] ひどく苦しい仕事だ。彼らがこの抑留所に留まれるのか、出て行かなければならないのか、[僕たちは] まだ知らない。

フックス

1945年7月9日

今日の午後、食事の少し前に312人の名前が発表された。それらの人たちは、S.S.<国有鉄道>の線路がもし爆撃で損害を蒙^{こうむ}っていたならば、ヤップのために修復しなければならない。僕もその中にいる。

フックス

1945年7月10日

12時に僕たちは不意に、ウビ[サツマイモ]200ccを雑役のために貰い、2時にまた整列させられた。4時に数人のヤップが、僕たちを<体格>検査するためにやって来た。120人、したがって僕も含めて殆ど半分、が不合格だった。[...] 不合格者に何が起こるのか誰も知らない。どうやら僕たちは肥育されるらしい。当分、僕たちは別の食事グループにいる。

ヨーストウン

1945年7月10日

きょう、300人の雑役係がニップ<日本人>に検査された。170[人]が合格だった。レオとヴィム[彼の兄たち]も落とされた。彼らはきょうで最後となる追加の食事をもらう。

メィムリンク

1945年7月11日

僕の「授業時間」は予期せずになくなる。この抑留所から300人が「どこかで」働くように指示された。そこにヤン [ハーリング]、グッツ [ナスツ] と僕が入っている。チャールスとフレットウ [ドゥ・ヴィルドゥ] もそうだ。昨日、僕たちは全員ヤップの前に出された。検査されたのだ。グッツとチャールスと僕は合格、そしてヤンとフレットウは不合格だった。ところが今ヤンは交換され、それで彼も合格となった。作業はまだしていないけれど、僕たちは確かに別の食事をもらっている。穀粉300グラム（丸パン1個とパップ900cc）、プラス [精米] 200グラム、砂糖20グラム、塩20グラム、コーヒー5グラム、ブンブ [香辛料] 10グラム、それにウビ [サツマイモ] 500グラムと野菜。僕たちはそこで、熱心に働かなければならないだろう。そして最初はきっと予想外に悪いだろう。[しかし] 時間が経てば、それでも体のためには得になるだろう。

作業の種類はまだ知らされていないけれど、きっと防衛作業だろう。それは大きな欠点だ。ヤップのために働く。それも『僕は強制されたのだ』という単なる言い訳であっても。僕たちは作業を開始するために毎日、呼び出しを待っている。まず間違いなく、僕たちはそこに留まるだけでなく寝ることにもなり、ある期間に一回「休暇」でここに戻って来る。この日記帳をそれで僕はヒルクウ [ファン・ダァー・ハエストゥ] に預ける。

フックス

1945年7月11日

僕たち不合格者は今日、最終回として作業員用の食事 [鉄道作業員のための追加の食物配給] を貰う。僕たちは、これを最後に名簿から外^{はず}された。[...] 作業員は近日中に出発し、1ヶ月は留守になる。そして彼らは再び戻って来る。ハンス [ヌウマン] もその中にいる。彼の弟 [イェリック] はここに残る。

フックス

1945年7月12日

僕は常勤の仕事もらった。つまり道具グダン [倉庫] 主任。それには一日2時間半、取り組んでいる。そして [僕は] 一日に14セント稼ぐ。その上、他の雑役は免除。僕はそういうことで、これ以上パンを稼ぐことはできない。しかし、それにしても僕は、パンのおかげで太ったことはない。そのことを最近の体重測定が示した。

フックス

1945年7月13日

グダン [倉庫] での初日は、予想よりずっと良かった。未だ素晴らしく好調、というほどには進んでいない。スコップが1本無くなってしまった。しかし、僕は1本多く持っていたので今はその数がまた符合する。

ドゥ・マイヤー

1945年7月16日

今、僕自身がトーコー係。そのために他の雑役は全くする必要がない。それは簡単な仕事で、ヨープ [ヴィルムスウ] がもうしたくない、というのは不思議なことだ。僕はただ取りに行くだけで、実際には [マックス] おじさんが分配する。彼が、それにもかかわらず僕を売店係に指名したのだ。僕はそうすることで雑役がなくなり、家に留まれるからなのだ。僕がたった一人で家事を、それも全部をしなければならない。なぜならばエドゥガー [ラウレンス] はルーウィガジャへ行くからだ。僕は本当に嬉しいし、雑役よりもずっと喜んで働ける。それなのに僕は、トーコー係であるということで毎日10セントもらう。

フックス

1945年7月20日

僕はそれにしても、グダン [倉庫] の仕事を嬉しく思う。退屈はするけれど、最近の雑役は厳しさが倍加している。軍曹はすごく急き立てる。彼らは骨折って働いている。有志は最早いない。昨日はパチョル [鋏] 3本とスコップ3本が紛失した。幸い、それぞれが早速1本ずつ見つかった。残りもきつと戻るだろう。

フックス

1945年7月23日

今日の午後、僕は心地よく眠った。それから道具を回収しなければならなかった時間まで読書をした。あまり順調には進まなかった。山ほどのパチョルス [鋏] とスコップが壊われたり、無くなったりした。しかし、僕はそのことは大して心配せず、外部作業員の班長たち [ここでは主任たち] のせいにした。

フックス

1945年7月24日

今晚、道具のことで騒ぎがあった。軍曹はグダン [倉庫] にあるべきであった [いくつかの] 道具を野原で見つけ、僕は呼ばれた。僕はそれが戻ってきていなかったことを、報告していなければならなかったからだ。幸運にもうまく言い逃れることができた。これからは、僕は実際に終日その倉庫に留まらなくてはならないだろう。しかし、その仕事で丸パンを貰えないとすれば、僕はきっと役目から逃げ出すように工夫する。なぜならば、それは苦勞する^{かい}甲斐がないから。

フックス

1945年7月25日

今朝、僕は早く起きた。なぜならばグダン [倉庫] を一度、掃いてきれいにしたかったからだ。ヤップが視察に来るかも知れない、ということが心配であったこと、そしてそこは混乱していたからなのだ。幸いにも彼は来なかった。

フックス

1945年7月26日

昨夜は殆ど眠れなかった。12時から2時 [まで] 夜警。それから再び4時から6 [時まで]。僕は4分の3の丸パンと夜食のスープ1杯のために、その時間帯を引き継いだ。

フックス

1945年7月29日

グダン [倉庫] での仕事は今、わずかながら良い方向に進んでいる。雑役係たちは道具を以前よりはきちんと返すようになった。雑役はそれにしても面白くない。ヤップはパンをもうくれない。彼はその必要はない、と思っている。『ティダ マウ ケルジャ ティダ ビサ [働きたくない、とは怪し^けからん。]』と彼は雑役主任に言った。不愉快なことは、それにしても彼は正当である、ということだ。僕たちは、自分たちが望むようには何もしてはならないのだ。

ヨーストウン

1945年7月30日

きょう、ヴィム [彼の兄] は陸軍病院の雑役に行った。この雑役はこの数日前から始まったばかり。雑役係はごはん、それに野菜と肉入りのスープをもらう。

フックス

1945年7月31日

常時、雑役があり家事ができない人のために、僕は昨日、拭き掃除をした。そのために半杯のトウモロコシと野菜を少しもらった。

フックス

1945年8月4日

雑役係は最近、^{いま}忌々しく思っている。彼らは今1時間長く働かされる。9時から1時 [まで] と2時から6 [時まで]。それは8時間の長さで14セントと雑役丸パン一つ。そうなる僕の仕事は、パンは貰えないとしても少しは増しだ、と僕は思う。

フックス

1945年8月6日

それから僕は図書館に行った。しかし、あまりにも大勢の人が立っていたので、もう一軒先のデッキ [バース・ベッキング] の所に立ち寄った。彼はちょうど退院したところだった。結構長い時間、座っておしゃべりをしていた。それから僕は水を苦勞して運ばなければならなかった。バケツ7杯。嫌な仕事 — 特に水が蛇口から細くちょろちょろ流れる時は — しかし、そのためにも僕は相当もらえる。それは確かに苦勞のし甲斐があるし、僕はいずれにしてもそれ以外には何もすることがない。今日の午後、まず眠ることにし、次に少し読書をしてから畑で水撒きをした。

フックス

1945年8月8日

食事受領係の一人は雑役があった。雑役係が非常に不足していたためだ。すべての大作業員と鍛冶作業員は殆どが病気。それは、彼らは週に一回しか休日がなく、追加の食物を貰っていないことによる。病欠の届けをすることが、ハリヤスミ〔休日〕をもらう唯一の方法なのだ。それで僕は今日、食事を取りに行った。ご飯のビイツ〔余剰〕は無かった。ウビ〔サツマイモ〕は確かにあった。とても残念なことに、僕はパップ受領係ではなかった。それは相変わらず最もウントゥーン〔有利な〕役目。

ヨーストゥン

1945年8月9日

けさ15歳以上のすべての少年は、ニッポンの〔所に〕整列しなければならなかった。働けた人たちは鍛冶場で仕事をさせられた。午後、13歳以上の〔少年たち〕全員がニッポン〔の所〕に整列しなければならなかった。それから50人の少年がニップに大工ベンケル〔作業場〕と鍛冶場へわりふられた。

フックス

1945年8月10日

今晚すべての雑役係は、再び整列させられた。ヤップはさらに多くの人々を、S.S.<鉄道>と鍛冶場に必要であった。菜園班は廃止された。誰でも、その後は少し時間があれば、そこで働かなければならない。班長たちも。雑役係がひどく不足している一方で、雑役はいかにも多すぎる。僕はグダン〔倉庫〕主任としてスナン〔満足〕している。

ドゥ・マイイアー

1945年8月16日

最近、また新しい雑役が追加された。病院雑役だ。これはとても有利な雑役。幸いなことに僕もそこに持ち場がある。僕たちは日本の病院（陸軍病院）で、避難用の穴を掘らなければならない。時々、彼らのために、汽車から積み荷を降ろすこともしなければならない。それはひどく重たいけれど、そのような日には大盛りをもらえるのだよ！ そう、相当なものさ！ 積み荷降ろしは、

木材を降ろすことからなっている。それは駅から — 時には徒歩で、時には手押し車で — 病院へ運ばなければならない。 [...]

それから彼らはそこに食糧の備えを補給した！ うわあ！ この前は60,000キロのお米が着いた。これは確かに今までのところ、最も辛い日だった。40キロの袋を持ち上げた。それは夕方遅くなるまで一日中続いた。僕たちは点呼がとっくに過ぎてから、やっと家にたどり着き、くたくたに疲れ果てた！ しかし、そのため僕たちには十分な食事もあった。 [...] 別の日には、僕たちは再びタウチョ [醗酵させた大豆]、ケチャップ、ブンキル [ピーナツやココナツを圧搾した後のかす]、砂糖、塩、干し魚、タピオカ粉、コーヒー、そして豆類を運搬した。さらに箱いっぱいジェンヌ [バタビアで有名な肉屋の名前] の缶詰、ピースープなど。僕たちは病院のそのグダン [貯蔵庫] の中に入った。在庫がここ <抑留所> にあったらいいのになあ。前にあげた全品目のものすごい量の在庫以外に、さらにオバマルチン、クウエイカー・オーツ、缶入りミルクなどもあった。その上マットレス、毛布、鉄製の寝台、道具、防暑帽、といったような物すべての積み荷が降ろされた。これまでの記録となったのは、米1キロ（それ以上なのだよ）と1リットルのスープで、ボレー [ばかにしたものではない] でしょ？ そこ <病院> には十分な蓄えがあることは確かだ。

ドウ・マイイアー

1945年8月18日

病院雑役は多分、完全に無くなるのだろう。ものすごく残念。

健康と医療状況

ドウ・マイイアー

1944年8月9日

今晚は気持ちが悪くはない。ずっと咳をして、一度は僕のおいしいオンチョム [発酵された黒豆料理] すら吐いてしまい、下痢になった。足の親指の包帯が取れてしまい、今朝医者に行った。(なぜなら破片が何かで切ったのだと思うが、数日前に親指は完全に太くなり、腫れていたからだ。それから医者は傷をピンセットで開いた)。

ドウ・マイイアー

1944年9月30日

収容所で細菌性赤痢(*¹⁰⁴)が発生した。病気の広まりを予防するために厳しい対策が取られた。とりわけ、火災延焼防止用の路地にはもう来てはならない。マンガ [マンゴ] は皮をむく前に洗わなくてはならず、衛生に対する規則は厳重に守らなければならない。

ドウ・マイイアー

1944年10月9日

僕らは全員また体重と身長を測定をしなくてはならない。

ドウ・マイイアー

1944年10月16日

今朝、僕は診療所へ行くため、また向かい側 [バロス側] に出かけた (傷は未だに治っていない)。

*¹⁰⁴ — 熱帯地方の国において、大腸の危険な感染性疾患 (血液の混じった下痢便、または血便) は細菌あるいはアメーバにより生じる。アメーバ赤痢の場合はしばしば慢性的疾患になる。病気が悪化すると、度々肝臓 膿瘍 や腹膜炎を引き起こす。(M.B. Coelho, *Zakwoordenboek der geneeskunde: bevattende de meeste in de geneeskunde voorkomende uitheemse en Nederlandse woorden, uitdrukkingen, afkortingen enz./Coelho-Kloosterhuis* [Arnhem 1989, 23^e druk], 209) .

フックス

1944年10月18日

僕はものすごい下痢になった。明日は何も食べないようにしよう。

メムリンク

1944年10月20日

ヒルクウ [ファン・ダアー・ハアストゥ] のためにパンを焼くのは、普通のパンでは消化できないからだ。ヒルクウは病気で、既に数日気分が悪く、それからかなりの熱を出した。医者が往診に来たが、何だか分からず、熱にアスピリンを与えた。多分インフルエンザだろう。更にヒルクウは足と下肢そして前腕もはれ上がっているのを見つけた。既にしばらくの間ヒルクウの頬は膨れていた。医者は今度イーストを処方した。僕たちが抑留されて以来、ヒルクウはかなり弱っていた。体重が12キログラム減ったのだ！ 以前は本当の「クマ」だったが、今では虚弱な、痩せこけた少年だ。軽い仕事をしてその度へとへとになる。彼の手足を見れば分かるのだ！ 精神的にも調子は良くなく、とても大儀そうだ。時々機嫌が悪く、大変くよくよしている。彼は家のことを余りにも多く考え過ぎるのだ。彼は時折ホームシックに悩まされいると僕は思う。彼は毎晩家の夢を見ているし、ニタのことを非常に好きに違いない。

メムリンク

1944年10月26日

ヒルクウ [ファン・ダアー・ハアストゥ] は病院に入れられた。ついに起こったのだ。彼は既にほぼ回復し、昨日はもう歩きまわっていた。だが今晚再び身震いを起こし、今朝は熱を出し、ひどい頭痛だった。医者は今度は入院しなけれならぬと言った。彼はそこで検査される。午後のポップを食べた後、僕たちは彼を連れて行った。彼は歩けるので担架を担ぐ必要はなかった。そこは結構よく、ベッド付きの部屋がある家なのだ。

ドゥ・マイイアー

1944年11月4日

僕が数日日記をつけなかったのは病気だったからで、本当はまだ具合は悪いが、殆ど回復しているといえる。腹の調子が悪く、下痢と熱があり、食欲はまるでなく、そうでなければ直にまた吐

いてしまうか、吹き出してしまった。なぜなら医者には僕にエプソム塩¹⁰⁵を飲ませたからだ。いずれにせよ、体重は300グラム増えた。というのは僕ら全員また体重を測らされたからだ。僕は今41キログラムで、身長はまだ測っていない。今僕はスープに入っている野菜を食べてはならず、ただ水分を取るだけで、パンは焼いて食べなくてはならない。ピア・カサがそれをやってくれ、彼は今、僕の面倒を少しみってくれる。

メィムリンク

1944年11月5日

ヒルクウ [ファン・ダー・ハストゥ] の具合は良い。彼は徹底的に検査される。..何であるかは未だはっきりわからない。色々の病気にかかっているからだ。血がとられ、検便され (アメーバが少々あった)、脊柱から注射器で脊髄液を取った。体重は今53キログラムで、彼はイースト、錠剤、牛乳をもらう。かなり食べることができるのは、そこではたいてい残り物があるからだ。幸いにも食欲が出てきている。彼は初めの頃のようにパンも既に消化できる。陽気でもあるが、かわいそうなほど痩せている。彼ができる唯一なことは読書だ。現在タイス・ドウ・ハースは麻疹病欄にいる。

ドウ・マイイアー

1944年11月22日

ハンス・クリックは今日入院した。つまり彼が初めに寝たのは僕らの昔の家の部屋だ。というのは医者にはハンスが麻疹にかかっていると診断 (気管支炎ではない) したからだ。この頃収容所では多くの麻疹が発生した。

フックス

1944年12月2日

最近僕の足には赤い発疹ができ、しばらくすると黒い皮がむけてくる。¹⁰⁶ 医者はビタミンCの欠乏だと言うが、それを補充するために何ももらえないのだ。その上僕は既に足の爪を失い、それも何かの欠乏で、腐るのだ。

¹⁰⁵ — エプソム塩 (硫酸マグネシウム、しゃり塩) は下剤として使用される。

¹⁰⁶ — 欠乏症 (脚注97参照)。

フックス

1944年12月5日

僕は最近ひどく傷に悩まされ、少しも治らずただ化膿するだけだ。僕の足は猛烈に腐り始めている。

ファン・エンゲルンブルフ

1944年12月5日

また体重測定で50.3キログラムに減り[1944年7月15日には52キログラム]、身長はもう伸びていなかった(179センチメートル)。

フックス

1944年12月12日

今日僕は勇猛果敢に雑役をうまくこなした。ここ数日またとても気力がなく、無関心だ。なるべくならただトゥンパット[寝場所]に寝てみつめていたかった。僕は実に何にもやる気分にならず、雑役をする気など全くなかった。ガラクタ運びをしなくてはならない時には、僕は本当に引きずって歩くのだ。これは完全に多量の糖分の欠乏によるものだ。今日も恐ろしく暑く、うだるようだ。雑役の後僕はベットに倒れ込み、9時頃まで寝た。

ドゥ・マイイアー

1944年12月15日

この裏の近くにある兵補キャンプでペストが発生し、それは僕らにも危険事態をもたらす。僕らは今絶対に排水溝へ行ってはならず、対策がうたれるであろう。

ドゥ・マイイアー

1944年12月22日

幸いなことにもペストについてまだ何も聞いていないが、今収容所では赤痢がはやっている。ルウィ・スヘッドウラーはそれにかかり、もっと向こうの家では11人が入院し、残りは僅か3人

だけが健康で、彼らは家の清潔を保らなくてはならない。

フックス

1944年12月23日

今日僕は半日だけ道路で働いた。なぜなら3時半にバーアトゥマン医師と約束をしたからだ。彼は僕の奥歯の穴を石灰で見事にうめ、もう今ではなんの痛みもない。

ファン・エングルンブルフ

1944年12月26日

僕らの部屋の全員が腹の調子が悪い。バウズウ親子は既に細菌病欄に行き、僕もかなり気分が悪い。

ファン・エングルンブルフ

1944年12月29日

病気に関する多くの不安の末、僕は細菌病欄に入れられた。とにかく僕は一日に一回だけ便所に行く。奇妙なことだ！ だから正月は病院にいることになる。僕らは去年のように一できればこれが収容所での最後の大晦日でありますように一と願うだろう。そして僕はそのとおりになるという気がするのだ！

メィムリンク

1944年12月31日

〔クリスマスの翌日〕僕たちは部屋でたっぷりのカレー粉とチャベ〔唐辛子〕を混ぜたごはんを400グラム食べた。それに炊事場からのサンバルと僕たちのロバック〔大根の一種〕を食べた。更に炊事場よりのカチャン イジウ〔青えんどう〕のスープもまた飲んだ。多量でべらぼうに辛く、僕たちはどうしたらよいのか分からなかった。牛乳入りフン・キュー〔グリーンピースの粉〕プディングと持っていたアッサム〔インドネシアのタマリンドの実〕を食べるのは少し待った。ところで僕が食べきれなかったのは、気持ちがとても悪かったからだ。寒くて身震いし、体の中は火が燃えるように熱い。僕はもちろん他の人たちに気付づかれたくなかったし、ただそばに座

っていた。カップも飲みきれなく、幸いにも僕たちは余り遅く床に就かなかった。僕は「下痢」にもなったのだ。

翌日直に細菌性赤痢だと気付いた。いずれにせよ、僕が入院するまでには全部で水曜日までかかった。未だに病院にいる。現在、回復過程に入り、近いうちには治るだろう。フレットゥ [ドゥ・ヴィルトゥ] も入院中だが、病気はかなり重い。

メィムリンク

1945年1月1日

今日は良い一日だった。僕は患者として退院した。しかしもう一週間ベッドの中になければならず、野菜を食べてはならなかった。(僕のほうがよく分かっているのだ！)。

フックス

1945年1月2日

僕は病気で、それもひどいのだ。下痢で、昨晚は5回、今朝は6、7回あった。一日中便所の合間に横になって本を読むか、寝るか又は洋服に継ぎ当てしている。今日はパップ以外何も食べていない。今晚はまるっきり腹が空かないが、ふらふらするのにもものすごく悩まされている。15分ほど便所に座ると、立ち上がりたいが、1分ほど何かをしっかりと握っていないと倒れてしまう。僕の骨はものすごく外側に突き出て、骨盤がどういう形をしているかはっきりと見えるのだ。目の下には大きなくぼんだ青黒いしみがある。

フックス

1945年1月3日

今日はもう昨日より少し具合が良かった。昨晚は5回も起きた。医者が来て、僕はオバットゥ [薬] を取りに行かなければならなかったが、取りに行かなかった。便を送らなければならないが、僕は必要だとは思わなかった。

ドウ・マイイアー

1945年1月5日

ケイス [ブロスホーフトゥ] おじさんは病気で、入院しており、僕はデンデン [乾燥肉] を彼のために焼かなくてはならない。[ハンス] クリックと話したが、未だに退院せず、既に2ヶ月以上入院している。

ドウ・マイイアー

1945年1月6日

僕は足の小指に傷ができ、今では足全体がむくれ上がり、殆ど歩けない。また ^{そけい}鼠径部もすっかり腫れている。マックス [フラーザー] おじさんがまもなく治療してくれるだろう。ケイス [ブロスホーフトゥ] おじさんは退院してきた。

ヨーストウン

1945年1月6日

昨日レオ [兄] は病気でルーウィガジャ [農園] から戻って来た。兄さんは今日一日中熱があり、午後には医者に来て、麻疹だと言った。直に病院に行かなくてはならず、僕らは食後連れて行っ

ファン・エングルンブルフ

1945年1月9日

〔1月〕3日に退院した後、未だに体が弱まり、めまいがしている。医者は強壯剤をくれたが、今度はまた咽頭炎になる。[...] 体重は今49.3キログラムに減り、まずまずだといえる。

フックス

1945年1月11日

体重を測定し、ズボン、パンツと下着を着たままで57キログラム、衣類は全部で1キログラムになる。本当にひどいものだ。昨日 [W.J.] ドウ・ラウター・ドウ・ヴィルトゥさんに会った。

僕が余りにも痩せてしまい、彼はもう僕が分からなかった。この3ヶ月、定期的に2キログラム減っている。このまま続いたら、間もなく僕は空に舞い上がってしまうだろう。

フックス

1945年1月17日

僕は昨日ペストの注射をしたことを書くのを完全に忘れていた。全く平気で、腕に最小限の痛みがあるだけだ。

ドゥ・マイイアー

1945年1月18日

16日にはこの収容所で2名亡くなった。

ドゥ・マイイアー

1945年1月19日

今日も一人死亡し、彼の息子はこの収容所にいたが、残念なことに来るのが遅すぎた。皆は最近砂糖なしでぐったりしている。

フックス

1945年1月20日

ハンス [ヌウマン] は相変わらず病気で何も食べたがらない。今彼は余りにも弱まり、殆どもう便所に行けない。幸いにも頭痛はなくなり、回復はしているのだ。

ドゥ・マイイアー

1945年1月20日

ケイス [ブ羅斯ホーフトゥ] おじさんも赤痢でまた入院した。[...]僕は数日前に全員ペスト注射をしに行かなくてはならないことを言うのをまだ忘れていた。一日中腕に嫌な感じがするの

だ。運良くここの隣の兵補たちはペストでいなくなった。

フックス

1945年1月21日

余り良くないことにはこの間「詰めた」奥歯と丁度同じ歯がまた痛いのだ！ その石灰は一週間で再びとれ、今また痛み始める。口を十分きれいにしておけば、それほどでもないが、何か入ると、ひどい痛みになる。

ドゥ・マイイアー

1945年1月25日

この数日また一人死亡した。

ファン・エングルンブルフ

1945年2月2日

また様々な捕虜たちが死亡し、時には突然雑役中に起こる。医者たちによると僕らは全く何もしなくても必要であるカロリーの半分しか得ていないのだ。

ドゥ・マイイアー

1945年2月2日

今日も再び2名が亡くなった。[A.H.] ドゥフゥと [G.] メリンハーは栄養不良性浮腫¹⁰⁷ だった。マックス [おじさん] は一人の葬式に出た。彼の組の人なので、出席しなくてはならなかった。

¹⁰⁷— 組織変化の一般的混乱により、特に複合ビタミン B や動物性蛋白質欠乏の結果として、栄養不良性浮腫が生じる。たいてい足や脚の下部がむくれ始め、その後顔（殊に夜の睡眠の後）や大腿部もむくれてくる。（Van Velden, 357.）脚注 97 も参照。

ヨーストウン

1945年2月2日

レオ [兄] が今日退院した。

フックス

1945年2月3日

今朝、雑役で誰かが心臓発作を起こした。彼はその場で急死した。これはチマヒで731人目だ。¹⁰⁸ [...] 僕たちは向かい側 [バロス側] へ注射をしに行かなくてはならなかった。帰り道僕は急にひどく気持ちが悪くなり、目の前が全て真っ暗になった。僕は直に座ろうとした。そうでないと気を失うからだった。今既に一日中膝がガクガクし、ひどく苦しむような空腹に悩まされた。それからパイヤの葉で2人前分のスープをつくり、ロントング [バナナの葉で巻いて蒸した餅] を買った。果物は腹を少し一杯にさせ、とにかく回復するのに役立った。

ドウ・マイイアー

1945年2月3日

今日2名が亡くなった。今では日常のことのようだ。非常にとても悲しいことだ。毎回点呼の際に僕らは追想する。一人は雑役中に倒れて死んだが、心臓は既に悪かったのだ。もう一人は [マックス] おじさんの以前の部屋にいた [L.F.H.] マウダーマンさんで、57才の親切な人だった。細菌性赤痢で彼は亡くなった。僕らの知り合いで最初に死亡した人で、この収容所では8人目だ。

薬局に50本のオーボーチョコ [卵黄、ココアと砂糖の濃いシロップ] と少し似たものが入り、両方とも大量の蛋白質が含まれていた。前者は、驚かずに、1本2ギルダーもする。ともかく僕は1本とても買いたいのだが、もちろんのこと身体の弱った人たちが第一で、医者が処方箋を出した人たちのためだ。急に多くの患者が医者のところに来たのだ！

ドウ・マイイアー

1945年2月8日

僕らは全員昨日また体重を測らされ、2ヶ月で1,5キログラム減ったと気付く。それは確かにこ

¹⁰⁸ 一 目下、全部のチマヒ収容所における全死亡者数。

の頃砂糖が不足しているためだ。

ドウ・マイイアー

1945年2月9日

ケイス [ブロスホーフトゥ] おじさんが亡くなった。後に残されたかわいそうなマリィおばさん [彼の妻] とリイトクク [娘]。恐ろしい事だ。おじさんが収容所に来た時には、太って、重くて、がっしりして大柄の人だった。こうなると誰が思っただろうか？ ものすごく痩せて、僕はおじさんだと分からなかった。僕へのおじさんの形見はテニスボールだった。あの優しいおじさんは僕のことまで考えてくれたのだ。僕の初めての形見だ。

メィムリンク

1945年2月12日

ヒルク [ファン・ダァー・ハアストゥ] は今でも入院している。彼はここには泊まらなかった。なぜなら彼がこうそうの一種¹⁰⁹ にかかり、それは悪血の徴候だったのだ。数本の肝臓の注射がよく効く。彼は現在トーコー責任者で、それなりに忙しい。彼はまた体重が減り、今では約49キログラムだ！ 収容所前は70キログラムだった。しかし彼が気持ちよく感じるのが肝心なのだ。

ドウ・マイイアー

1945年2月12日

僕は眠い、というのは未だ下痢が治っていないために、今晚もまた余り眠れなかったからだ。今朝便を検便に出さなくてはならない。

ドウ・マイイアー

1945年2月21日

[ハンス] クリックは18日に退院し、今は僕らの前の部屋にピア・カサと一緒に寝ている。彼

¹⁰⁹ — 複合ビタミンB 欠乏により生じる欠乏症である。(Coelho, 745.)

が大変退屈するので、僕はよく見舞いに行く。

ドウ・マイイアー

1945年2月25日

僕はちょうど入院したばかりだ。またひどい下痢と嘔吐だ。多分整髪油¹¹⁰のためだろう。だがこの病室はやけに静かだ。僕は3人でこの細菌病欄にいる。ここで一日中鳥のさえずり声を聞いていると、ブラヴァツキアー公園¹¹¹の僕の昔の部屋を思い出す。[...]ここでは午後と晩にナシィティム [お粥] と細かく引いたうずら豆がでて、豆はとても味がよい。更に晩にはお玉いっばいのゆでニンジンももらった。

ドウ・マイイアー

1945年2月27日

昨日はサヴォ [汁の多い、茶色の果物]、ランブウタン¹¹²、クドンドン [りんごのような果物]のピューレも食べた。僕のランブウタンは腐っていたが、ピューレはもらったばかりの砂糖が入っていておいしかった。その上、たくさんのうまい [配給後の] 残り物ももらったが、夜に全てまた吐いてしまった。一日中座っていて、後はほぼ何もやることのないのだ。[マックス] おじさんとエドゥガー [ラウレンス] はまた見舞いに来たところだ。しかし今晚医者は僕が早く家に戻れると言った。

フックス

1945年2月28日

今日歯医者に行った。早起きし、小さい平なべを早く洗った。歯医者は9時に始まり、僕は9時5分前にはもうそこにいた。はっきり覚えていないが13か14番目だった。1番目は点呼の直ぐ後に来たと言った。僕たち向かい側 [ヴィルム通り] はそれはできない。というのはポップを未だ食べていなかったからだ。そこで僕は9時から12時半まで待ち、それからやっと僕の番が来た。[...] 歯医者は幸いにも余りいじくりまわさず、全然穴を空けなかった。今は臨時の詰

¹¹⁰ — 2月22日少年たちは自分たちでナシ (焼き飯) をドウ・マイイアーの整髪油で炒めて作った。

¹¹¹ — 公園はバタビアにあるコーニング広場 (現在タマン マルデカ) の南部に位置する。(J.R. van Diessen, R.P.G.A. Voskuil, *Stedenatlas Nederlands-Indië* (Purmerend 1998), 70 C4]

¹¹² — さっぱりした甘みのある小さな白い果実で、外皮が赤い頭髪のようなもので覆われている。

め物が入り、来週また行かなければならない。

ヨーストウン

1945年3月1日

朝39度の熱が出て、お腹が痛かった。医者は便を送らなければならぬと言った。ヴィム[兄]は11時に缶を持って来た。医者はそれを見て、赤痢なので直ぐに入院しなければならぬと言った。3時に僕は病院に運ばれた。

ドウ・マイイアー

1945年3月3日

3月1日退院。

フックス

1945年3月3日

今朝ペーター・スタム[組長]は僕のところに、ピムとサンダー・ドゥフ[双子]を連れて来た。彼らはチデンに4ヶ月、その前はクドングバダック¹¹³に7ヶ月、その前はチャンジュルに7ヶ月抑留された。[...] 僕が非常に気付いたことは、この少年たちが少しも背が伸びていないことだった。どちらかという、前より低いように見える。

ヨーストウン

1945年3月9日

今朝体重が測られ、2キログラム減り、33.5キログラムしかなかった。

¹¹³ — クドングバダック (グドングバダックとも綴られる) はボイテンゾルグ郊外にある男性収容所だった。フックスはクドングバダック第一収容所が引き払われた時、ここに1943年7月7日より1944年2月まで抑留されていた。この収容所の抑留者たちはチマヒにあるチマヒ第4収容所に移動された。(Van Velden, 533)

ヨーストウン

1945年3月13日

1945年3月1日から13日：初めの数日は病院で、ひどく気持ちが悪かったが、直ぐによくなり、また家に戻る許しが出た。

フックス

1945年3月21日

今日の午後ハンス [ヌウマン] と僕は僕たちの旧同居人ヘンク [カルスホーヴン] の見舞いに行った。彼は細菌性赤痢で入院している。彼は比較的に加減が悪いが、回復するだろう。病院ではかなりの食事が得られる。特に食事ができない死にかけそうな患者が数人いる病室にいれば、その人たちの分も貰えるからだ。一人が死ねば、他の者が食糧を貰える訳だ。

ファン・エングルンブルフ

1945年3月31日

僕は暫く病気で、まだ良くならない。かなりおかしいことだ：胃が焼け付くようで、おならがたくさんでて、特に夜中に痛むのだ。炭素カルシウム¹¹⁴ 少しもらい、徐々に食欲が出てくる。

ファン・エングルンブルフ

1945年4月3日

僕は昨日入院した。バタビア出の11才のみなしご少年ヤン・ランダールの隣に寝ている。彼からチデンの女性たちのことをたくさん聞いた。

フックス

1945年4月10日

今日はものすごくぐったりした：大変めまいに悩まされ、目が黒ずみ、膝がガクガクした。歩く

¹¹⁴ — 一種の炭素で体内の有害物を吸収する。(Coelho, 107-108)

と、時々ふらふらする。

フックス

1945年4月13日

ハンス [ヌウマン] は今日もルーウィガジャへ行った。[...] 彼も L [ルーウィガジャ] に行くのに有頂天だ。そこへ行きたくない連中がまだいることが僕にも理解できない。自分の時間が取れず、衣類を洗ったり繕ったりすることが殆どできないことは確かだ。授業をとることは不可能だが、逆に僕は素晴らしく感じる。軟弱さは消え、心配なく早起きでき、目が黒ずむことはない。膝がガクガクするのも殆どなくなる。その上毎日便所に行き、よく便通がある。以前は3日、ときには4日おきだった。今はとても快調なのだ。

サロモンズ

1945年4月13日

左足のくるぶしが腫れているのを発見した。そこを押すと、へこみができる。医者に見せ、一週間安静になり、一週間塩ぬきの食事をしなければならない。僕は脚気だと思ったが、ディックは多分キャンプ足¹¹⁵ だろうと言う。

ファン・エングルンブルフ

1945年4月15日

もう2週間入院している。今までたくさんもらいものの食事をしたが、今では小さい男の子たちが他の病室に移り、ここはつまらなくなった。その上また愚痴深い神父が入院し、恐ろしい不平家なのだ。幸いにもここには製本された雑誌 *d'Oriënt*。[オリエント¹¹⁶] がある。

¹¹⁵ — 脚気は複合ビタミン B 欠乏により生じる欠乏症である。脚気は乾燥状態では、麻痺ややつれになり、湿った状態では栄養不良性浮腫と知られている症状に進展する。「キャンプ足」又は *burning feet* (焼けつようにひりひりする足) は同様にビタミン B 欠乏の結果であった。脚注 97 参照 (Van Velden, 357)

¹¹⁶ — 「*d'Oriënt*」はバタビアで発行された図版週刊誌であった。

ドウ・マイイアー

1945年4月18日

やったぞ！ 1.5キログラム太った。今日はまた体重と身長測定ができた。ベーコンとうずら豆が効くのだ。

ドウ・マイイアー

1945年4月22日

エドゥガー [ラウレンス] も今体重を測らせ、また完全に回復した。つまり彼は足がむくれ、脚気の初期だったのだ。そのためたっぷり一週間床に就いていた。今では運良くよくなり、これは確かにオーボーチョコとうずら豆のおかげだが、まだ塩分はとってはならず、彼は嫌がっている。ここで作る全ての食べ物はそのために塩ぬきで用意し、僕らは塩を足すだけだ。そのため彼の食欲は大部分なくなるが、またきっと食欲が出てくるだろう。しかし僕が言いたいのは彼の体重は3キログラム増えたことだ。[マックス] おじさんは仕事に成課をあげた。彼は補習をし、僕らにかなり磨きをかけ、相当な水準に引き上げた。

ヨーストゥン

1945年4月27日

空襲警報中、医者が来て、ヴィム [兄] の便を調べ、病院に行かなければならないと言った。ヴィムが向かい側に連れて行かれたのは、ここの病院が向かい側に移ったからだ。

ファン・エングルンブルフ

1945年4月28日

今日は病院全体が [ヴィルム通りの] 軍事病院へ行かなければならなかった。そこで皆見知らぬ人たちのいる病室に入った。この家は病院には見えず、例えば看護人は一人もいない。僕は担架に横になり、たくさん絵を描く。

ドウ・マイイアー

1945年4月29日

ここの病院全部も向かい側に移った。ここでは毎日平均1人が死亡している。昨日 [H.C.] カンパンイエさんが突然亡くなった。彼にはカレーズ収容所にまだ幼い息子がいたのだ。その子にとって恐ろしいことであるに違いない。ヨアン [デン・ブスタートゥ] のお父さんは今向かい側にいる。フォーニアさんもそこにいると聞いた。更に二人とも見事な動物で脂肪たっぷりのシェパード、またヤギが6頭、大ヤギ2頭に子ヤギ4頭を飼っている。おもしろいだろう？ それから3人の女性がいてハンセン病に苦しんでいる。ひどいことだ。

ファン・エングルンブルフ

1945年5月8日

ここでは多くの人々が亡くなっていく！ 殆ど毎日のように棺が通り、向かい側の脚気病欄の大体が死亡するのだ。アメリカ軍が来る時期だ！

ヨーストウン

1945年5月8日

午後体重を測り、31.75キログラムだった。

フックス

1945年5月9日

ルーウィガジャで体重を測定され、2キログラム増していた。これは良い始まりだ。

ファン・エングルンブルフ

1945年5月10日

向かい側 [バロス側] の医者 [M.H.] ヴィンス先生が僕らに良いことを考え出す：甘い牛乳を少しに、晩はパン又はごはんのルーウィガジャの残り物。僕はとても思いやりがあると思う。彼は今脚気の少年たち用に追加の食事表もこしらえた。シロップ200cc (毎日ないし一日おき

に)、トーコーパン半分と果物。最高！ このために今この病院以外の医者が来なくてはならないとは！ここでは多くのものが旧軍事病院を思い出させる：モノグラム付き石皿・白衣と看護人の制服・移動可能な担架・多量の包帯・綺麗な平なベ・包帯入れのブリキ箱・お盆・お湯のでる蛇口。バロス第5から来た僕の生物の先生、[J.] リスカルイエットウさんもここに入院している。

ドゥ・マイイアー

1945年5月14日

収容所はこの数日[赤十字小包の配布]本当に甘えさせてもらった。皆はもうウビ[サツマイモ]を見たくもないのに、ちょうどまた入ってきたばかりだ。しかし殆ど全員が下痢になり、皆が嘔吐と下痢をしたのはそれに弱く、全てがひどく脂ぼかったからだ。僕らはもう栄養のある物には慣れていないのだ。僕もやはり、また下痢になり、エドゥガー[ラウレンス]も腹を痛めている。

ファン・エングルンブルフ

1945年5月17日

とても調子が悪く、眠られず、ひどい痛みで、オバットウ[薬]も効かない。明日胃を空にさせる。僕は非常にしり込みしている。[...] 空にした後、良くなるといいのだが。今もう書くのをやめるのは、気分が余りにも悪いからだ。

ファン・エングルンブルフ

1945年5月19日

胃を空にする冗談事がとうとう今日起こった。もちろんひどかったが、殊に管を入れ紅茶を飲まなければいけなかった時だ。しかし幸いなことにこれも終わり、食欲も戻って来る。

ヨーストゥン

1945年5月23日

[1945年5月21から23日] 月曜日5月21日。昨晚既に気分が悪くなり、今日は床に就いていた。医者が来て『検便に送ろう』と言った。ヴィム[兄]が5時に結果を取りに行った時、医者は本当は僕が病院に行かなければならないが、便を検査するために明日まで待ちたいと

言った。

22日には医者に来て僕が家に居てもよいと言い、それから粉薬をもらい、6回飲まなければならなかった。

23日には昨日と同じ粉薬をもらったが、今日は3回、明日3回飲まなければならなかった。僕は医者について点呼に出られるかを尋ねた。医者は25日は少し散歩してもかまわず、26日は点呼に出られると話した。(僕は軽い赤痢にかかったのだ。)

ドゥ・マイヤー

1945年6月3日

明日うれしいことに僕らは雑役がなく、歯医者に行かなければならない。いいえ、歯痛があるからではないのだ。よかった。それはサジャ [単に] 青年検査だ。僕は歯列矯正器を更になんとかしてくれるかどうか聞くつもりだ。少年部では全員注射を受けなければならない。更に医者に検査もされ、あらゆることを質問された。彼は足のむくみ、ちくちくする足、皮膚のはがれなどについて尋ねた。僕は運良くそれには困っていないが、頭痛について文句を言った。日にあたるとひどくなり、坊主なので非常にしゃくにさわる¹¹⁷。

ヨーストウン

1945年6月7日

今日体重が測られ、僕は32.3キログラム、550グラム増えたのだ。

フックス

1945年6月7日

僕はひどく膝がガクガクし、くらくらする。100メートル歩くのにしり込みしている。本当によろよろ歩きで、この頃は一日を過ごすのに途方もなく骨が折れるのだ。どうすることもできない。空腹と退屈さのひどい組み合わせだ。終日読書をしていられないし、僕の目が持ちこたえなく、一時間後にはまた頭痛がおきる — 全てがビタミンの欠乏なのだ。僕の足もひどく皮がはげて、完全にむけてくる。退屈さと空腹により、僕は時々すごく絶望的だ。ただじっと睨みつけ、

¹¹⁷ — ドゥ・マイヤーの収容所でのおじさん、マックス・フラーサーは冗談で16才以下の子供たちは全員坊主にならなくてはいけないと言った。ドゥ・マイヤーはこれを信じ、頭を坊主に剃った。項目「収容所内の雰囲気」抜粋日記ドゥ・マイヤー、1945年6月3日参照。

食事を待っているのだ。早く終わりにならなければいけない。さもないと僕たち自身をむさぼり食べてしまう。

フックス

1945年6月8日

体重=53.35 キログラム。

ファン・エングルンブルフ

1945年6月10日

おとといバロス第5と第4大隊から10人の患者が[ヴィルム通りに]入って来た。そのため医者は場所をつくらなければならなかったのだ、ヒリンハーと僕は45番の家、一時保護収容所に移るという通知を受けた。さあ、何が起きるかわかるだろう:ということは追い出す計画なのだ。ほら、そうだろう。翌日の朝、僕らは既に収容所[バロス側]に戻らなくてはならなかったのだ!

ドゥ・マイイアー

1945年6月12日

昨日僕らはまた[結核予防]注射をうたなければならず、それは皮膜下予防接種だ。一度学校で受けたことがあった。肺検査で、3回行われなくてはならない。僕らは明日また注射を受けに行かなくてはならない。当然のこと全くナンセンスなのは、もし結核に注意しなければならないことがはっきりしたら、ここの収容所で一体何ができるのだろうか、けれども注射はそれほどひどくはない。

ドゥ・マイイアー

1945年6月19日

実にひどいことに、ちょうど昨日の雑役日に病気になった。皆はもちろん僕が雑役病[雑役をしなくてもよいように病気のふりをする事]だと思っていたが、そうではなかった。今朝愚かにも兎に角また起き上がった。床に就いたままにいるべきだったのだ。なぜなら今また大変気分が悪いからだ。[...] 熱が出ているにもかかわらず、昨日3回目の注射を受けなければならな

った。そこらじゅう赤い斑点になり、明日結果がもらえるだろう。幸いにも下痢はないが、寒くて身震いがする。

ドウ・マイイアー

1945年6月20日

医者に僕は水疱瘡だと判明された。39度の熱を出し、[マックス] おじさんは僕はまだ熱はないと言ったのに。アスピリンの粉薬を2つもらい、熱が下がった。後で他の粉薬を飲むのだ。

ドウ・マイイアー

1945年6月26日

僕はまだ少しあばたがあるが、他は既に全て治った。

ヨーストウン

1945年6月28日

今日はコレラ、チフス、赤痢に対する注射をうけた。

フックス

1945年7月3日

僕はスタムポットでひどく病気になった。それはよく煮えてなく、10分で700cc又は900グラムを平らげたのだ。というのは僕たちは雑役のために早く整列しなければならないと思ったからだ。その上、それは少々酸っぱかった。[昨晚の] 10時ごろ既にげっぷがでて、1時には全てを吐き出した。4時ごろに急に下痢が始まり、2回もズボンにってしまった。腸はあの酸っぱいののにやられ、ひどい疼きだった。僕は宿舍病[起き上がるには加減が悪すぎるが、入院するほどの病気でもないこと]と伝え、ゆっくり一日中床に就いていた。[...] 今朝14回も便所に行った。午後には7回で、また3回もズボンにってしまった。着れるズボンはあと一本だけで、本当はそれは提出しなければならなかったものだ。出さなくてよかった。今晚はひどく膝がガクガクした。

フックス

1945年7月4日

今朝僕はもうかなり調子がよく、食事をまた始めた。[...] ウビ [サツマイモ] があわなかったのは、一時間後またげっぷが出始めたからだった。[晩の] 10時ごろ、ひどくなり、ものすごく痛んだので、今晚また全てを吐き出してしまうだろうと恐ろしくなった。幸いなことに、何も起こらなかった。僕は数日ウビ [サツマイモ] を食べてはならないのだ。

フックス

1945年7月7日

チフス、コレラ、赤痢に対する注射。ビタミン不足のために僕の脚、足のところに赤い斑点が出る。

フックス

1945年7月9日

僕は赤斑点の足と体重測定のために医者に行くので休みをとった。医者は日に当たってはいけないと言う。ということは一週間雑役なしということだ。更に毎日100ccのイーストを受け取ることができる。僕がそこに着いた時ちょうど終了したので測定はできなかった。

フックス

1945年7月10日

体重=51.9 キログラム、2.4 キログラム減った。僕は栄養不良性浮腫だ。今朝また医者と呼ばれ、ニコチン酸注射¹¹⁸ の処方箋をもらったが、まだ明日でないと取りに行けない。

¹¹⁸ — 規定食内のビタミンB5（動物性器官、玄米、イーストに含まれる）欠乏による長期ニコチン酸欠乏は皮膚病のペラグラ病発生に対する重要な要因となる。脚注97も参照（Coelho, 851）

フックス

1945年7月11日

僕は赤斑点の足のために注射を受けた。それは注射器一杯で、50ccもあり、痛かった。

フックス

1945年7月15日

僕は機械油をグダング [倉庫] で見つけた。皮がむけるのを防ぐためにそれを足にぬりつけた。残念ながらその油は食べられないのだ。

フックス

1945年7月20日

僕は今朝馬鹿なことをした。注射の日だったことを忘れ、今回それをやりそこなった。それほどひどくはないが、とにかくもう起こらないようにしよう。僕はまた一週間分のイーストとビタミン剤ももらった。なぜなら膝をたたいた時の反射反応が完全ではないからだ。[...] 目下、まるで ^{かいせん} 疥癬 にかかった犬のように見え、そこらじゅう茶色の皮がぶら下がっている。赤斑点は既に殆ど消え、すり込みに使う油もとても非常によく効いている。

フックス

1945年7月27日

イーストを使い非常に調子がよい。今はアチ [でんぷん] パップとウビ [サツマイモ] を混ぜ、砂糖を入れる必要はない。今晚それを食べ、それからまた新しいウビ [サツマイモ] を付け足した。明日の朝はパップもまた混ぜてみよう。ウビ [サツマイモ] が手に入る限り、これを続けられる。

フックス

1945年7月29日

更に僕はとうとう [足の] 不治の傷を診てもらうのために診療所に出かけた。今は短すぎる包帯

にイチョル軟膏¹¹⁹ が付いているので、僕は1時間おきに置きかえる。

フックス

1945年8月2日

今朝僕はまた診療所に行った。傷はよくなっている。今の所3ヶ所にたくさんの包帯がされてある

メイムリンク

1945年8月4日

ヒルクウ [ファン・ダアー・ハアストウ] は退院し、チャールズとフレットウ [ドウ・ヴィルトウ] の所で寝る。彼はきびきびと活発に、炊事場で働いている。脚気はまだ治っていないが、この蛋白質なしの食事でなくなるかどうかは、後になってみたいと分からない。食事は非常に偏っている。たっぷりの炭水化物だが、蛋白質、脂肪はなく、ビタミンは少量だ。

ヨーストウン

1945年8月8日

今日測ったら、31.6 キログラムで、300グラムも減った！！

フックス

1945年8月12日

食事の受取りはとにかくひどく特である、だから食事の受取りをするのだ。体重を測らせたなら[55キログラム]、3キログラム増えていたが、これは正確ではない。なぜなら僕は食べたばかりだったからだ。だが、1.5キログラムは必ず増えている。

¹¹⁹ — この軟膏は魚油からつくられ、皮膚の炎症に使用される。(Coelho, 377)

フックス

1945年8月15日

9時半に僕はものすごいせん痛でトゥンパット [寝場所] に横になっていた。僕は絶えずおならをして、それをするたびに部屋の全員は心の底からののしった。家には8人住んでいて、ウビ [サツマイモ] の食べ過ぎで6人が腹痛。午後に僕は何も食べなかった。それが大嫌いだった。ローパンはトランクに入れ、とうもろこしは残しておいた。今晚もまた殆ど調子がよかった。僕は全部食べられたが、ウビ [サツマイモ] だけは一振りで外に捨てた。

ヨーストウン

1945年8月15日

今朝レオ [兄] が入院した。

ドウ・マイイアー

1945年8月19日

最近はまだかなり多くの病人が死んで行く。毎日毎日の連続だ。

養育・娯楽・宗教

ドウ・マイイアー

1944年8月12日

さらにチェスとチェッカーの試合があるだろう。昨日の晩、僕たちはここで第一回目の授業を受けた。ヘンクから英語。1時になるまでは音楽演奏をしてはいけない。ここにはヴァイオリンをとても上手に弾く少年たちがいる。明日の朝はカトリック教会、そして明日の午後4時 [に] プロテスタント教会で、たぶん僕はそこへ行く。

ドウ・マイイアー

1944年8月13日

教会へ、でも今日の午後は行かない。何のために<行くのか>？ 僕は信仰について、自分の小さな本をとにかく持っている。

ドウ・マイイアー

1944年8月14日

今日、代数学があった。明日は幾何学。

ドウ・マイイアー

1944年8月16日

フランス語の授業は今日、半時間だった。そのあと一般教養。それは戦争が終わった後のこと、政治などについて話しをすること。とても楽しい。

ドウ・マイイアー

1944年8月19日

近代建築工学、旅行記、そしてスカンディナヴィアなどについての講演が行われるだろう。昨日

の晩、ドゥ・ブウ氏が中国について話をした。彼はアトランティス島<プラトン（ギリシアの哲学者）の作品に現われる伝説上の楽土。神罰によって海底に沈没したといわれる。>と「他の惑星」、そして人類の起源についてもよく話をした。すべてとても興味深い話題だ。それについて彼は一度、講演をするに違いない。

ドゥ・マイイアー

1944年8月21日

チェスとガスティ [カスティのなまり。野球のようなスポーツ] の試合がたけなわ。

ガスティ、チハピット [グループ] 対カレーズ [グループ] — 9対8

チハピット対第4大 [隊]（それぞれ） — 11対12

チハピットはそれで殆んどチャンピオン！

フックス

1944年8月31日

少年たちのために、チェスの試合と徒競走があった。炊事 [班] も競走をした。

フックス

1944年9月1日

今日、僕はまる一日休みだった。朝ベッドに這って行き、終日寝そべって読書に耽^{ふけ}った。本当は洗濯をしなければならなかったけれど、それは明日の早朝、雑役の前まで延ばした。

ドゥ・マイイアー

1944年9月2日

今晚8時に、*De Vlaamse Leeuw*<（原義）フランドルのライオン（独立運動のこと）>について講演。今のところ僕はドゥ・ブウ氏から、英語の授業だけはまだ受けている。その他の授業は、くわしい通知があるまで延ばされた。僕はもうずいぶん長い間、数学もフランス語もしていなかった。

ドウ・マイイアー

1944年9月7日

さらに各組は、読むために借りられるかなり多くの書物を受け取った。

ドウ・マイイアー

1944年9月11日

入会希望者は誰かな？

風刺寸劇、演劇または歌唱クラブ

チェスクラブ『ドウ・マンクウ・ローパー』〈駒を上手に歩かせられない人〉

デッサンクラブ『ヘット・スティフェ』〈小さな消しゴム〉

電動機または電気工学の講習会

最後のものは、僕はいずれにしても素質がない。チェスはまだ少ししかできないし、デッサンは目も当てられない。それで僕はレインダアトゥ、そしてフランス [サヘタピィ] と一緒に演劇クラブに入会する。

フックス

1944年9月11日

今日、図書館が開いた。早速、*de Saint*〈ドウ・セイントウ、Leslie Charteris の冒険ものに登場する主人公〉から1冊手にした。

フックス

1944年9月14日

今日の午後、僕はプルトーとボクシングをした。¹²⁰ 結構うまい具合にいった。しかし、数回パ

¹²⁰ 多分、彼はここでは G.H. di Mello 〈ディ・メルロー〉を意味している。その人は、*Register van jongens op 1.1.45 in kamp Tjimahi 4 t/m 19 jaar, en later aangekomen* (NIOD, IC)の中の「1945年4月8日、バロス少年抑留所より到着の少年たち」の名簿に記載されている。Henk Kalshoven 〈ヘンク・カルスホーヴン〉は1944年10月18日に彼の日記の中で、抑留所の向こう側（バロス側）に抑留している或る Pluto de Mellov [?]<プルトー・ドウ・メルロフ [?]>とかいう人、と記している。(NIOD, Indische dagboekencollectie, dagboek H. Kalshoven<蘭領東インド日記収集、H. Kalshoven<カルスホーヴンの日記〉。

ンチをくらった。僕はもっとするつもりだ。明日、もしかしたら [ディック・デン] バーアスと。

フックス

1944年9月16日

今日、僕は気分転換のために再び休みをとった。10時半まで心地よくベッドの中で横になっていた。それから部屋の雑巾がけ、畑の清掃、読書、食事をし、また読書、そして再び眠ってから食事をした。本当によい一日だった。

フックス

1944年9月22日

僕には新しいニックネームがある。今、Willem Kèrè <ヴィルム・ケーレー>と呼ばれている。

¹²¹

ドウ・マイイアー

1944年9月25日

今晚、映画会！ まったく本当なのさ。映写機はパウル・ハアトゥが組み立てた。映画は物理学のテーマについて。

フウンス

1944年9月28日

僕は、第2と第3学年の少年たちのために、数学を教え始める。

¹²¹ 'Willem Kèrè' <「ヴィルム・ケーレー」>は多分「敬礼」(お辞儀!) からきていると思われる。フックスによると、殆んど誰でもニックネームをもっていた。彼のルームメートであるハンス・ヌウマンは「ヌウトウ」となった。そして彼自身は、ヘンク・カルスホーヴンの日記の中で「シィ ジャンクウン<のっぽ>」と呼ばれている。

ドウ・マイイアー

1944年10月1日

昨日の晩、スホートゥル氏のゴムについての講演があった。本当におもしろい。

ドウ・マイイアー

1944年10月3日

僕たちは、チハピットにある殆どすべての通りの名前が記されているモノポリイゲーム<双六に似たさいころ遊び>のようなものを作る。紙を、僕はヨーピィ・クゥホーンからもらった。日記をつけているあの少年で、親切でしょ？

ドウ・マイイアー

1944年10月4日

今日はヘアダ [リイツ]¹²² の誕生日。そしてヨアン [デン・ブウスタアトゥ] の妹、ヘイクゥもそうなのだ。その人たちのお誕生日をお祝いして、僕は蜂蜜のびんを開ける。(なぜならば、それを [8月] 31日には、やっぱりそうしなかったからだ)。そしてヨアンは、塩漬け豚肉の缶詰。彼はそれをお父さんからもらったのだ。

フウクンス

1944年10月5日

僕は今日、初めての授業を第一学年の中期にいる二人の少年にした。感じのいい少年たちで実に賢い。僕は全科目を教える。僕自身が習わなければならないフランス語も。

¹²² ヘアダ・リイツはドウ・マイイアーの母親の友人の娘であった。彼女は彼の母親と共に、彼の祖母宅に住んでおり、バンドンのチハピット女性抑留所に入った。

フックス

1944年10月7日

月曜日から、僕の生徒たちに第一学年の全科目と英語を教える。そうすることで僕自身も多少は学ぶ。僕は自分で英語のテキストも訳し始める。

フックス

1944年10月9日

僕は本当のところ、もう喫煙しないつもりだった。ところが、安いタバコが手に入ったので少し買ってしまった。

ドゥ・マイイアー

1944年10月19日

昨日の晩、フレーザー氏はローディ [フルヌンダイク] と僕を彼のところに呼ばせ、僕たちにごちそうしてくれた。『なぜならば』、『彼の奥さんの誕生日だから』と彼は話した。[...]それから彼は、今日から幾何学を僕に教え始めた。明日は代数学を手伝ってもらえる。ありがたい。

フックス

1944年10月21日

[彼の20歳の誕生日] 今日、僕はもちろん、雑役は何もしなかった。昨日のパンから、火であぶった砂糖とマンガ [マンゴ] で、特別に味のいいフンクエー [グリンピースの粉] のプディングを作った。午後、僕はトーコーパンを一つ完全に食べた。他のパンはハンス [ヌウマン] にあげた。そうすることで僕たちは共に、腹いっぱい食べた。近ごろ、午後はパンとお茶を、晩にはご飯とスープを貰う。この夕食のスープは、今日は本当にすごく美味^{うま}かった。僕はタバコさえ少し買った。吸う物は何も無かったからなのだ。今日は1ギルダー12セント半かかった。

メィムリンク

1944年10月23日

昨日の午後4時半 [に] もう一方の抑留所 [バロス側] での、年長のための礼拝へ行った。僕が思うには、[H.W.] ファン・デン・ベルフ牧師¹²³ 唯一人が話をした。[それは] かなり良かった。長椅子がある部屋で行なわれる。それで相当狭い。賛美歌集もある。オルガンだけがまだ欠けている。

フックス

1944年10月24日

今晚、マインコ [トクソペイユス] とイェリック [ヌウマン] がここに来ていた。ヘンク [カルスホーヴン] はマンドリンを弾き、僕たちは歌った。とても楽しかった。明かりが無いことだけが、ひどく残念だ。

ドウ・マイイヤー

1944年10月28日

今日は雑役のために授業はなかった。でも僕は対数を少しはした。「僕たち」というのは、今この家のティンチュ [ファン・ダウヌン]、ハンス・クリックと僕のことなのだ。

メィムリンク

1944年11月5日

僕たちは図書館から<借りて>、かなり多くの良い本を読む。

Begin, Diet Kramer<はじまり、ディイトゥ・クラマー著> (優良), *Fyr*, Johan de Groot <フィア、ヨハン・ドウ・フロートゥ著>(優良), *Als alle lichten branden*, Anne de Vries<すべての明かりが灯ったならば、アンヌ・ドウ・フリイス著> (まあまあ), *Duikelaartje*, Nes-Willekens<小さな起き上がりこぼし、ネス・ヴィルクンス著> (すばらしい), *Jeugd in nood*, Caecilia Arnolds<窮地の青春

¹²³ Dominee H.W. van den Berg<ファン・デン・ベルフ牧師>は以前、マランで教会区の牧師であった。彼は1945年6月3日に死去。元抑留者によると、或る抑留者のために手紙を密かに持ち込むことが誘因となって、彼を逮捕したと思われる憲兵隊により捕虜となった。宗教面での世話役として彼には、つまり時々他の抑留所を訪問することが許されていた (Van Engelenburg<ファン・エンゲルンブルフ>, 94-95)。

時代、スシリア・アルノルズ著> (不良), *Bartje, Anne de Vries*<バーアチュ、アンヌ・ドウ・フリイス著> (傑作！)

ファン・エングルンブルフ

1944年11月11日

僕自身が今、第1学年の生徒たちに教える。[...] 3冊のすばらしい本がある。*Album Bali* <アルバム バリ> [Droste<ドロステ>出版の写真集] <チョコレートのおまけについてくるバリ島に関する教育的な絵を集めると、アルバムになる>、*Niels Holgersons Wonderbare Reis*<ニールス・ホルヘルソンの不思議な旅>と *De Vlaschaard*<亜麻栽培園>。[...] 抑留所の独特の話題を作文するつもりだけれど、容易には始められない。

メィムリンク

1944年11月12日

僕はまた一連の美しい本を読んだ。*Leven en Werken*<生活と仕事> [ある女性と少女向き雑誌での連載ものを毎号集めて一冊にまとめる]、*Scharten-Antink*<スハルトウン-アンティンク>の *De nar uit de Marennen*<ドウ・マレンヌンの道化師>第2巻。美しいことは、そのお祖父さんとその幼い少年とのこと。(そのことがスハルトウン・アンティンクの作品にしばしば登場し、*Francesco Campana*<フランセスコ・カンパーナ>の中でもそれと同じような関係が見られる。) *Flavia*<フラヴィア>、*Sandro*<サンドロ>と *GianCarlo*<ジアンカルロ>といった登場人物の間で。僕は *Scharten-Antink*<スハルトウン・アンティンク>の *Francesco Campana*<フランシスコ・カンパーナ>の第2巻 *De duistere Waarheid*<闇の真実>も読んだ。素晴らしいのだ、それは。善、そして神は実際には一体何であるのか、そして神の正当性への彼の疑念を、本当に共感することができる。例えば、なぜ動物の世界では、時々残酷なことが起こるのか。いや、僕は主人公のその疑念を本当に実感できる。その疑念と、聖書や数多い他の神信仰に関するものからは実感できないこと、を僕は本当に理解できる。僕自身もそれを持っている。

僕が毎週日曜日に行く礼拝の例にしても、殆ど感銘はない。いくつかの良い考えを僕は取り入れる。しかし、それ以外は多くの決まりきった形式から成り、感情のないものでしかない、と僕は思う。その牧師にしても、違った方法ではできないのだ。日曜日毎に2回の礼拝。いや、神が必要となるような状況の時だけ、人は完全に神に捧げるのだ、と僕は信じる。僕にしてもそうなのだ。確かに僕は毎晩、神と会話するように試みている。しかし、何か答えとなるものは絶対に気が付かない。そして僕は自分でも、わずかな「信念」からしか祈っていないことを知っている。僕は眠り過ぎるか、他のことを考える。僕は多分、専念できるに違いない。しかし、

僕の心の深底にある神々しい感覚の存在を、僕は見るができない。確かに神を僕は信じる。その存在は、自然界の輝かしい事物だけでなく科学においても、例えば、物理学などで僕に示されている。それだから僕はこれから先も、数学、物理学と化学を学び続けたい。さらに多くのことを見、さらに多くを学ぶけれど、万物のなんとわずかなことしか僕たちは知らないのだろうか、ということ益々学ぶ。

ドゥ・マイイアー

1944年11月21日

僕たちは、今はもう全く火をたいてはならない。それで昨日、最終回としてウビ [カッサバ] の葉でスープを作った。そしてマンガ [マンゴ] の砂糖菓子<砂糖を練ってクリーム状にしたものから作る柔らかいキャンデー (飴) のようなもの>を作ってみた。ところが、何ともねばねばする物になってしまった。トッフィ、ローリィ、ターイターイ<硬いライ麦のもちもちするクッキー>、チューインガムかヌガーのようなものだ。ジャムにはこってりしすぎたけれど、クリスマスのために保存する。さらに、僕たちのご飯からも毎日スプーンに1杯節約し始め、日に当てて乾かす。そうすれば僕たちはクリスマスにも<ご飯が>たくさんある。

フックス

1944年11月26日

目下、僕は辞書を使って英語をかなり読んでいる。単語を書き上げて、それらを学ぶ。

ドゥ・マイイアー

1944年11月29日

ケイス [ブロスホーフトゥ] おじさんは一日おきに面白い本を僕たちに読んで聞かせる、と約束した。つまり、国王ヴィルム三世についての書物、*Voor God en voor de Koning* <神のために、そして国王のために>。それで毎週火曜日は夕方6時の点呼の後、木曜日と土曜日はパンの後、したがって午後2時にそれをする。そんな訳で楽しいし、偶然にも僕たちは今ちょうど歴史の授業でそこをしている。

ドウ・マイイアー

1944年11月30日

あさって
明後日、僕たちは第3学年の代数学の試験を受ける。そして来週の火曜日には幾何学。それでマックス [フラーザー] おじさんは今日、僕たちを彼の所に呼び寄せ、[彼は] いくつかの計算問題を出した。それを彼はこれから毎日、僕たちを手伝うためにするだろう。したがって通常の授業以外 [追加]。ハンス・クリックが未だ退院していないことは残念だ。なぜならば、これに彼が追いつくことはもう不可能だ、とマックスおじさんは言っているからだ。

ドウ・マイイアー

1944年12月2日

なんと辛い朝だったことか。ひどい代数学の計算問題に、なんと骨折ったことか。そしてすべての苦労が、きっと空しいことだったのだろう。なぜならば僕は絶対確実に失敗したからだ。僕は十分に果たせなかった。試験の [その] 結果はまだ知らされていない。それは、ここで教科目の指導をするパウズウ氏によって行われた。マックスおじさんは昨日の夜遅くまで、僕にさらにすべてを教えるために、あらゆる苦労をした。しかし、僕は明らかにひどい能無しなのだ。

最新のニュース— ちょうど結果が発表された。そして...僕は合格した！ どうしてそんなことがあるのか？ 不思議だ。

フックス

1944年12月3日

今晚、13匹は確かなほどの蛙を僕たちは捕まえた。それを使って明日、聖ニコラース祭の食事を作り始める。<訳注：子供の守護聖人とされる聖ニコラース司祭（シントまたはシントクラーズとも呼ばれる）が12月5日（命日は推定12月6日）に色の黒いお供ズワルテ・ピートを連れて家々を回り、子供たちに詩を添えたプレゼントを贈る、というオランダの行事。>一日早めに。なぜならばマインコ [トクソペイユス] は5日にアンバラワ¹²⁴ へ行くためだ。慢性疾患のある人たちは全員そこへ行く。

¹²⁴ 脚注17参照。

フックス

1944年12月4日

今日、僕たちはヤップ自身から、1日完全に休日を貰った。したがって僕たちは聖ニコラス祭のための食事と同時に、マインコ [トクソペイユス] の送別会の食事の仕度をする時間が十分にあった。ハンス・ヤンスン [組長] は彼の畑から、更にたくさんのバイエム [ほうれん草] を摘んだ。そして僕はロバック [大根の一種] の茎を中央炊事場のごみ箱からかなり拾い集めた。ハンスは少年たちとコドク [蛙] をつぶした。それをまず初めにゆでて、その肉汁をスープに加えた。その肉は、それも何処かでせびつて手に入れた油で揚げた。誰でも300ccの濃いスープをもらった。僕たちは8人だった。その蛙は実際、格別に美味かった。今晚、ヘンク [カルスホーヴン] とヴィリィ・アイスマはヴァイオリンを弾いた。

メィムリンク

1944年12月5日

聖ニコラス祭！ 僕の周囲は今、一年前のバロス [第5] よりも、確かにもっと雰囲気がある。僕は密かにミルクの砂糖菓子を作ることを試みた。まずオートミールの缶に4分の3砂糖を詰め、それから小さな缶入りミルクをそこに注ぐ。二日前に僕は木材を集めておき、その備えで [僕は] 今日の午後、火を起こし [た]。かなり速く煮え、相当濃かったので、きつとうまく出来るに違いない、と思った。そしてバターの缶の蓋に — もちろんこぼしながら — 流し入れた。そして皿の中にも。ところが、それから惨めなことが始まった。うまく冷えはしたけれど、固くならない。僕は独りでぶつぶつ言いながら、その計画は失敗と見てとった。おまけに、それは知られてしまった。なぜならばチャールスとフレットウ [ドゥ・ヴィルドゥ] が通りかかり、僕がしくじっているのを見てしまったからなのだ。

砂糖菓子が冷えた時、十分に固くならなかったので、混ぜたものをもう一度缶に投げ入れて煮立てた。楽しいどころではない。煮ることはできたけれど、休みなくキパスン [火をかき立て] そして息を吹いた。こうして取り掛かっている間、僕は足を滑らせ、煉瓦造りの小さなかまどを蹴飛ばしてしまった。缶は火の中に滑り落ちたけれど、運よく中味は全然こぼれなかった。それを外に取り出すと、幸いに固くなっていた。きれいに出来上がらず、茶色く焦げてしまった。小さなふたから取り出した丸い形のを赤い紙に包んで、ヒルクウ [ファン・ダー・ハアストウ] の所へ持って行った。彼は部屋にはいなかったけれど、隣で聖ニコラスのお祝いをしていた。

ドウ・マイイアー

1944年12月6日

聖ニコラス祭に、僕たちの所ではもちろん、何もく祝いごとは>しなかった。しかし、マックスおじさんの所ではやはりした。僕はプディングのプウントウン [残り] をもらった。そして昨日の晩、彼は僕たちを彼の所によび手品をした。スヘンク氏はヴァイオリンを弾いた。そしてマックスおじさんは、砂糖菓子が入った器をたえず順繰りに回させた。ココナッツの砂糖菓子は、僕たち自身が彼のために（もちろん彼独特の材料で）作ったものだった。

ファン・エングルンブルフ

1944年12月6日

何か非常に深刻なこと — すべての書物を届けなければならない！ 残念。ある人たちは、最も優れた書物を隠しておくどころか、渡してしまった。手押し車には、例えばオランダ語の文献、百科事典や教科書などのようなものがあった。さて、僕は英語とフランス語の文献、そして自分のアルダースの本 [物理学のため] を秘密にしておいた。それにしても、隠れて読まなければならないその貴重な作品を、一瞬にして失うとは全くひどいことだ。しかし、それはヤップの抑留所長からの罰則にすぎないのだ、と聞く。雑役係が直ちに作業にかかれる状態ではなかった、というため — 2日後にはそれらを再び返してもらえる！

ドウ・マイイアー

1944年12月7日

ケイス [ブロスホーフトゥ] おじさんは、今晚は朗読のためには来ない。なぜならば、彼の本を仕方なく渡してしまったからだ。僕たちはみんな、読物と教科書を届けなければならなかった。でも僕はもちろんしなかった。 [...]

僕は火曜日の試験 [幾何学] を自分のせいで落とした。僕は [アンバラワへ向けて出発した] ヴィリィ [バイラーアトゥ] を見送りに行ったことでまず遅刻し、そのため計算問題1つはもう出来なかった。今、僕は当然、幾何学が取れるまで、代数学も待たなければならない。なぜならば幾何学を、僕は今すべてやり直さなければならないからなのだ。まずいことだ。僕はマックスおじさんから、今はもう教えてもらえない。なぜならば彼は今なお、第3と第4学年にだけは授業をしているからなのだ。すべてがひどく残念！ おまけに全部の書物を手渡してしまった（殆んど誰も届けてはいないけれど）というように言っているので<実際には使えず>、授業を受けることはできないのだ。そういう訳で授業は少し延期された。

フックス

1944年12月11日

今晚、僕たちはモノポリーゲームをした。誰も勝たなかった。なぜならばゲームの真っ最中に、ドンペラー<水につけて加熱する電熱器。項目「食糧」、日記の断片ドウ・マイイアー、1945年1月12日参照>のせいで、ランプが発火してしまったからだ。ものすごい破裂と火事だった。[ハンス] ヤンスンと僕が消火した。誰にも怪我はなかった。

ドウ・マイイアー

1944年12月13日

僕は今日、ロントン[<バナナの葉に>巻かれた蒸しご飯の包み]を買った。[...]なぜならば、そうすることで少なくとも今日の午後、僕のご飯をクリスマスのために節約して取っておけるからだ。と言うのは、24日はマックスおじさんの所で食べ、それから25日には彼が僕たちの所で食事をする。それで僕たちも何かしら<用意>しなければならない。多分、ライスプディングを作ることになるからだ。僕は5分の1のパンのその半分も、もう節約して残した。

フックス

1944年12月16日

今晚、ハンス [ヌウマン]、ハンス [ヤンスン]、トニイ・ヘンスと僕は一晩中ブリッジをした。とても楽しかった。僕はそのゲームをもう1年はしていなかった。僕たちは砂糖があったので、無論またかなりのお茶を注いだ。

フックス

1944年12月17日

今晚、僕たち8人でラミー<トランプ遊びの一つ>をした。1ゲームに1時間以上かかった。お茶も出した。

ヨーストウン

1944年12月21日

ここでは、一週間をとおしてふだんの日には聖ミサはない。日曜日にだけ聖ミサがある。

ドウ・マイイアー

1944年12月23日

クリスマスのお祝いのために、ここではたくさんの方が行われている。このところ毎日、一番奥の空き家から歌声が聞こえる。それを教会として今は利用している。壁にはいろいろ美しいクリスマスの絵を描いた。1人当たり2メートルはなつなの花綱を作る必要があった。

フックス

1944年12月24日

今日、僕は再び終日、道路で働くことを強^いられ、8時半から1〔時〕まで、そして1時半から6〔時〕まで忙しかった。最近、非常に辛い。以前、これは年間を通して最も素敵な日であった。そして今や、全く忌々いましくも炎天下で石を叩いているとは。しかし、それでも僕たちにはクリスマスツリーと、すばらしくも美しいかなり多くの飾り、そして本物のローソク(10本)を腐葉土ふようどから作った。それらは抜群に良く燃える。僕たちはそれらを既に一度試した。さらに豆ランプのある美しい飾り小屋<キリストが降誕したうまやの模型>がある。クリスマスツリーの上には綿と石灰も、そしてみつららの球果と氷柱、すべて自分たちで作ったものばかり。ペンキで塗られた古いランプも幾つか掛かっている。一言では成功。

フックス

1944年12月25日

今日、ヤップは僕たち全員を、雑役から免除してくれた。彼は僕たちの風習と習慣に従って取り扱いたいと望んだからなのだ。僕たちは朝、教会へ行った後、バイエム〔ほうれん草〕とプディングの準備をし始めた。プディングは約6リットル、そして8キロの重さがあった。僕は5分の1のパンを節約して取っておいた。そして炊事場からは、さらに4分の1追加で貰った。僕はそのパン全部を美味しいチャベ〔唐辛子〕、ペタイ〔さやに出来、臭い匂いのある、表面は緑色の豆〕、それにタマネギもいっしょに食べた。

ドウ・マイイアー

1944年12月25日

僕たちは昨日、マックスおじさんの所で食事をした。そしてどんなふうにも！ 最初にパンをトーストにした。[そして] サラダ菜とマヨネーズで食べた。とてもおいしい。おじさんは畑から6株のとびきり上等で大きなサラダ菜を収穫し、僕たち8人(おじさんの部屋の5人、ピットウ・スヘンクと僕たち2人)はそのおいしい新鮮なサラダ菜を楽しんだ！ それから(おじさんが前回僕たちの所で、玉子1つ使ってこしらえた[それと]同じ調理法に従った)マヨネーズも、もちろん僕たちをととても満足させた。バレ バレ[寝台]にテーブルクロスを掛けて、きちんと用意されたテーブルで食事をした。お皿や小鉢の間に、もみの木の小枝を飾り、それは楽しい光景をかもし出した。[...] 1時半に僕たちは、クリスマスの劇のために整列しなければならなかった。それは向こう側の鍛冶場の中で演じられた。抑留所長のクニモト氏は自らそこに出席していた。それは素晴らしかった。初めに或る人[H. ハルムス氏](昔の『それは誰でしょう、何でしょう』<担当>のその人)¹²⁵ が演説をした。僕はそれを本当に素晴らしいと思った。それから2つのヴァイオリン(その1人はヴィリィ・アイスマ)とギターの伴奏による聖歌隊の歌。この後、三人の博士[三人の賢人]についての寸劇。彼らは突然、東方に星を見、それから第四番目[の賢人]、おそらくバルタザーに付き添ってその子供を探しに行く。

[それは]すべてがとても魅力的だった。それから僕たちは、その広間の奥に立っている立派に飾られたクリスマスツリーを眺めるために、振り返らなければならなかった。本当にととても楽しい。実際には<材料など>何も無かったというのに、たくさんの物を作った！ それから僕たちは、ゆっくりと広間から出なければならなかった。そして出口で僕たちはもらったのだ。そうなのだよ。まあちょっと当ててごらん。クリスマスの鐘の形をした(その型は技術部で組み立てられたもの)大きなコーヒー砂糖菓子で、とてもおいしかった。その上セルンデン[おろして焼いたココナッツ]が入った袋、さらにもう一つ小さな袋。その中にはあらゆる物が入っていた。カチャン ゴレン[焼き南京豆]、ロンボック[唐辛子]、チェンゲエ[小さな唐辛子]4つ、小さなタマネギ4つ、アッスム[タマリンド]少し、クッキー4つ、そしてドドルス[もち米のクッキー]2つ。まあ、それにしても、ものすごく意外なことだった、とは思わないかい？

¹²⁵ H. Harms<ハルムス>氏は de Nederlands Indische Radio Omroep (Nirom) <蘭領東インドラジオ放送>の戦前にあったクイズ番組 *Wie of wat is dat?* <それは誰でしょう、何でしょう?>を担当。(H.A.M. Liesker 他の編纂、<皇紀>2603年<西暦1943年>-1945年, *Jongens in de mannenkampen te Tjimahi ; Baros 5 en 4^e / 9^e Bat.* (発行: 1993年 Ridderkerk) 360)。

ファン・エンゲルンブルフ

1944年12月26日

人々はクリスマスの祝いを、二つの余興で実に愉快にやった。聖歌隊と演劇、そして誰でもクリスマスの鐘の形をした砂糖菓子とおいしいもの、例えばセルンデン[おろして焼いたココナッツ]、カチャン [ピーナッツ]、ドドル [もち米のクッキー]、チャベ [唐辛子]、タマネギ、アッスム [タマリンド] などが入った袋をもらった。ヴィリィ・アイスマもいてヴァイオリンを弾いた。 [...] [目下] [僕は] 前世紀のオランユ家について少し書いているところだ。

ヨーストウン

1944年12月26日

ぼくたちは午後、400グラムのごはんと、とてもおいしいサンバル イカン トゥリ [細かく刻んだ唐辛子入り、小さな干し塩魚の添え料理] をもらった。クリスマスの日<2日間>はとても楽しかった。

ドウ・マイイアー

1944年12月26日

愉快だった昨日の晩につづいて、再びこの楽しい日が来た。僕たちはまたマーカン ヘバットゥ [豪華な食事] をした。『毎日がクリスマスであったならばなあー』と僕は言いたい。もちろん、この日は授業がなかった。僕たちはこの2日間は、点呼から点呼までの間は、火をたくことが認められた。そして今日は、それで再びそのことを大いに利用した。まず初めに、節約しておいたごはんを蒸かしたら、僕たち3人のためにはかなりの分量になり、これは炊事場からの、それもたっぷりした盛り付けだった400グラムのご飯とは別なのだ。そのうえにセルンデン[おろして焼いたココナッツ]を食べた。そして細かにつぶしたカチャン [ピーナッツ]、小粒タマネギ、ロンボック [唐辛子]、アッスム [タマリンド] 少量が入ったサンバルでサテイ デンデン [香料を入れて乾かした肉のサテイ] をまた作った。次に、昨日もらった袋にあったすべての物から少しずつ。それらは本当においしかった。それから、もちろん良い味だった他のサンバル、ハンク [フラインスウ] のケチャップ少量と、最後にさらに炊事場からのサンバル イカン トゥリ [唐辛子入りの小さな干し塩魚の添え料理] で、すばらしい味だった。 [...] そして今晚は、<テーブルに飾られた>もみの枝葉の間に置かれた楽し気なローソクの明かりのもとで、トーストしたパンと砂糖菓子で熱いお茶を1杯！ それでは、おやすみなさい！

メィムリンク

1944年12月31日

クリスマスは、早くも殆んど1週間前に過ぎ去った。何日も前から僕はその日のことを楽しみにしていた。とりわけ、たぶん食事をする。でもクリスマスであるというその雰囲気も。僕は少し工作をした。セイヨウヒイラギの枝、いくつかのコップの下敷き<コースター>、クリスマスのランプ2つ（大型1つと小型1つ）、それから更に飾り小屋<キリストが降誕したうまやの模型>一つ。その中には焚き火、赤いランプのついた数本の薪がある。ランプと薪を、電気のコードに水の抵抗による中間スイッチをつないで、点火させた。[...] 毎週日曜日、僕は忙しかった。部屋全体を掃除し、テオ・ハーリングと一緒に、ミルクと少量のコーヒーで砂糖菓子を作った。一回目は、型から出すことが完全に失敗だった。固くなってくれなかった。それからもう一度それを煮直してみた。僕は或る少年からターバン形<プディングを作る型>を借りていて、その目的は底の部分にだけ注ぎ入れることによって、<クリスマスの>花輪の感じを出すためだった。その砂糖菓子は見事に成功した。ところがその型から完全には出てくれなかった。そのプディングの型はそれで実際には無駄になってしまった。

いよいよ25日が到来した。外部作業員たちは、幸いにも休日をもらえた。どういうことか「まあ、そんなふうな」成りゆきになった。¹²⁶ 朝は炊事場から、砂糖ぬきのコーヒーと普通盛りのパップをもらった。9時にチャールス [ドゥ・ヴィルドゥ] と僕は教会へ [礼拝に] 行った。それは通りのはずれにある家々の一軒で行われた。幾つかある部屋の一つの壁には、飾り小屋<キリストが降誕したうまやの模型>内部の情景が描かれていた。クリスマスツリーもあった。僕はそれに飾りを付けなければならなかった。ところが時間はわずかしかなかったため、それにカポック<カポックの木の綿毛状になった種は、クッションやマットレスの詰め綿として利用される。パンヤ。>を少し投げかけたただけだった。[博士、A.J.C.] クラフトゥ氏は訓話をしたが、それは何となく奇妙だった。彼自身がちょっと変わっているように。その合間に少年聖歌隊が、ヴィリィ・アイスマともう一人の少年 [ヘンク・カルスホーヴン] が弾くヴァイオリンの伴奏に合わせて歌った。確かに感銘を受けたけれど、それほど多くはなかった。もともと印象的に出来たはずなのに。僕たちが家に着くと、ヒルクゥ [ファン・ダァー・ハアストゥ] もそこにいた。彼はこの頃とても元気がよく歩きまわる。僕は再び工作を、そして他の人たちは炊事を始めた。ヒルクゥは12時にまた出て行ってしまったけれど、食事には家に居なければならなかった。

僕たち6人はそれからヤン [ハーリング]、グッツ [ナスウツ] とテオ [ハーリング] の小部屋で、本当にテーブルに向かって昼食をした。素晴らしかったのだよ、それは。自分たちで炊いたご飯。それは僕たちが節約して乾燥させたものと、茶色い隠元豆サンバル<細かく刻んだ唐辛子入り調味料の添え料理>。それから炊事場からのサユール [野菜]。4つ目のパンを僕

¹²⁶ 前記1944年12月25日の日記断片に記されたフックスの所見参照。

たちは午後4時までとっておいた。午後3時に17歳以下のすべての少年は鍛冶場へ行った。ここでは寸劇が上演され、ハルムス氏による演説があった。退場のとき砂糖菓子一つと、キャンデーが入った袋をおまけにもらった。

グダン〔物置〕の中では、それから再び少人数で食事をした。パンと、細かくした茶色い隠元豆サンバル<細かに刻んだ唐辛子入り調味料の添え料理>。それから、その日のクライマックスである、その夜、のために用意をした。僕たちの部屋に大きなクリスマスのランプをパッサングン〔吊るし〕、その下には豆ランプと小さな飾り小屋<キリストが降誕したうまの模型>が置かれた小テーブル。大きいランプは明かりがたういたけれど、他の2つはだめだった。残念。

ドゥ・マイイアー

1945年1月1日

〔マックス〕おじさんは今朝、ずいぶん陽気だった。お互いに、新年おめでとう、と祝福し、ここ抑留所での幸福を祈り合った！そして昨夜は1時半から2時半まで、文字通り抑留所全体、そして通りでも人々は動き回っていた。そして大騒ぎ！僕は初め目を覚したくなかった。ところが結局は起こされてしまった。誰もが互いに、もちろん同じこと、つまり戦争がもう、とにかく近いうちに終わるといいということ、そして僕たちが再び我が家に帰れること（それ以外ではあり得ない）、を祈り合った。

サロモンズ

1945年1月5日

おおみそか
大晦日と元旦は休み。大晦日には僕たち5人で十分に食べた。午後、オートミールの缶でお米を炊き、それでナシィーゴレン<香辛料のきいた焼き飯>をこしらえた。誰にでも大盛りだった。五つ目のパンを夜のために残しておいた。6時にいつものご飯とサユール〔野菜〕を食べた。夕食のためにティカール〔ござ〕を敷き、その中央にはパイナップル酒の瓶を置いた。左側にパンを。誰にでも五分の一に加えて十分の一おまけ。そして右側には大きなフンキュー〔グリーンピースの粉で作った〕プディング。僕たちはみんな機嫌がよかった。9時半に食べ始め、誰でも<パンを>一切れ12時<新年>のためにとっておいた。それから歌い始め、12時になる頃までおしゃべりしていた。僕たちはお互いに、新年おめでとう、と言い合った。そしてパンを一切れ食べてから床に入った。

フックス

1945年1月5日

ハンス [ヌウマン] と僕は今晚、[ハンス] ヤンスンの新しいトゥンパット [寝場所] をちょっと見に行った。僕たちはそこで一晩中、昔<戦争前>のことを愉快におしゃべりしていた。ピエトウ・ザイルマーカァーもそこに居た。僕たちはかなりタバコを吸い、お茶を飲んだ。

ドゥ・マイイアー

1945年1月6日

今日、再び第一回目として [マックス] おじさんの代数学と、ザイルストウラ氏の歴 [史] の授業があった。エルンバース氏はずっと病氣なので、僕は幾何学をまだ受けていない。

ファン・エングルンブルフ

1945年1月9日

デンマーク人、Niels Hald <ニールス・ハルトウ>の三部作を、ちょうど読んでいるところ。

フックス

1945年1月10日

今日の午後、アムスンス<アムスン兄弟> [彼の以前のルームメートたち] から [英蘭] 辞書を借りて、知らなかった約200の単語を調べて書き取った。今、僕はそれらを覚えなければならぬだけなのだ。

フックス

1945年1月18日

ドゥ・ラウター [ドゥ・ヴィルトウ] 氏は、僕がファン・ダァー・スホートウ氏から英語を教わるように世話をしてくださった。明日、僕は彼のところへ初対面の挨拶に行く。

ドウ・マイイアー

1945年1月19日

エルンバース氏は幸いなことに、また元気になった。今日それで彼の授業をまた受けた。その上、僕が神智学について一緒に語り合う誰かは、彼その人自身であることを見い出すことができた。素晴らしい。彼自身が神智学者でもある、と彼は話した。

フックス

1945年1月22日

11時半に、再び初めて授業に出かけて行った。僕は *Graded English II* <という教科書で勉強中>の他の少年と一緒に授業を受ける。僕は彼の程度よりもずっと先に進んでいると思うけれど、文法を少し繰り返すことは、いずれにしても全く支障はない。単語に関しては、英語の書物を自分で読めるし、翻訳することも確かに習う。僕は一日おきに、同じ時間に授業を受ける。あまり嬉しいことではない。なぜならば、ちょうどパンとお湯が来る時間となり、家に戻ると他の人たちは、もうだいぶ前から食事をしている。しかし、僕たちにとってはやり甲斐があるに違いない。

フックス

1945年1月23日

今日の午後、ファン・ダァー・スホートゥ氏が僕の名前を呼んだ。 *Graded English* が手に入ったことを知らせるためだった。僕はものすごく嬉しかった。そして早速、勉強し始めることにした。ところが、それは行われなかった。僕はその<目的とする>章をどこにも見つけることができなかった。完全に改訂された版であることが判り、それは使えない。それで一緒に授業を受けているロプ [マイクル] と僕は、1冊の本で勉強する。彼が向こう側 [バロス側] に住んでいることだけが面倒なのだ。明日の朝、僕は勉強するため、ちょっとその本を取りに行く。

フックス

1945年1月24日

それから僕は勉強仲間のロプ [マイクル] を訪ねるため、数件の家で聞いてみたが、彼は家にいなかった。僕たちはそれで授業の後で約束をし、今のところ、僕は一日おきにまる一日使える。僕はパンの後、直ぐに勉強し始め夕食までした。そして、もう一度すっかり復習し、さらに明日

までの宿題も既に終わらせた。それから明日、今まで習ったもの全部を理解するまで復習する。しかし、そこまでするには、まだ確実に数週間はかかるだろう。

ドゥ・マイイアー

1945年1月26日

今この瞬間、空襲警報だ。[...] ちょうど英語のテストが終わり、全速力で家に向かって走らなければならなかった。僕はそれで何点取れるか、知りたくてたまらない。本当に一生懸命勉強した。前回は8点取った。

フックス

1945年1月29日

僕はファン・ダー・スホートゥ氏から、随分良く勉強したね、とお世辞を言われた。殆んど暗記もしていたのだ。明日、もし僕がとにかく出席できるのであれば、ドイツ語の授業に参加してもよい。確かにやる気はある。常に何かしら学ぶものだ。

フックス

1945年1月31日

今日、英語の授業は再び行われぬ。僕はロブ [メイクル] が病気なのだと思う。パンの後、さらに長時間、英語を勉強した。今日はずいぶん学んだ。それから3時ごろまで眠った。図書館から面白い英語の書物を受け取った。知らない単語は書き取る。もし、何処からか辞書を一晚借りられるならば、それらを調べる。今、僕の小さな本には、既に500語以上も書き上げられている。未だそれらすべてを十分には理解していない。しかし、徐々にきっと解るようになる。僕の学習仲間ロブの様子を知るために、向こう側 [バロス側] へ今日の午後行った。彼は細菌性 [赤痢] のために入院したことが判った。[...] [フ] ァン・[ダ] ァー・スホートゥ氏は、僕が英語のために参加できる小人数のクラブを、苦心して見つけ出してくださった。その少年たちは、少し先へ進んでいる。それで僕は更に最善を尽くさなければならない。それは週に2回、休日の1時半にある。それなら雑役との問題もない。戦争が終わったならば、僕は徐々に英国人 < 英語を流暢に話すよう > になるのだ。

ヨーストウン

1945年2月5日

きょうの朝9時に、急に特別点呼があつた。少したつと、だれかが抑留所からいなくなった、という知らせがくる。すべての家の代表は彼がいないかどうか、さがしに行かされた。とつぜん、ぼくたちのトーコー係 [G.G.] ファン・ヘック氏がわら人形を持って家から出てきてさげんだ。『見つけた。見つけた。』みんなは笑いこぼれた。

フックス

1945年2月5日

食後、僕は午後いっぱい勉強した。新しい本から5課分を学んだ。それは一 *De Engelse handelstaal* <英語貿易用語> という題名。それは随分難しい本だ。 *Graded English* はもうそれほど長くはかからないので、終わり次第それを始める。明日、ロブ・メイクルは再び加わる。そうすると僕は、また一日おきに授業を受ける。

ヨーストウン

1945年2月7日

きょう、ぼくたちはマヨン<マージャンに似ている>ゲームを、カードで作った。このゲームはじょうずにできあがった。

ドゥ・マイイアー

1945年2月9日

今日はエドゥガー [ラウレンス] の弟のお誕生日！ お祝いをする！ 今朝、僕たちは一日を調子よく始めた。たっぷりお砂糖が入ったコーヒーを1杯、僕たち自身のためにこしらえた。コーヒーは [マックス] おじさんからのもの。それから僕たちのパップに<お祝いなので>またお砂糖をかけて食べた。それもちょうどだった。今日の午後、ソーセージと、とてもおいしいサンバル トマト<細かく刻んだ唐辛子入り、トマトの添え料理>にパン1個半。今晚は炊事場から500ccのスープと、茶色い隠元豆が盛られたご飯をもらった。それだけではないのだ。なぜならばスープはとても美味しかったけれど、僕たち自身でも茶色い隠元豆のスープを作った。それもほんのわずか、というのではないのだ。3オンス<300グラム>の茶色い隠元豆、ロントン

[＜バナナの葉に＞巻かれた蒸しご飯の包み] 6つ、タマネギ、デンデン [薬味のきいた乾燥肉] といった物からして、おいしかったと分るでしょ。僕たちは殆んど食べきれなかった。それで夕方も！ 名高いクドンドン [アップルムース風の] ソース付きパンプディング。それは僕のおなべにいっぱい、僕たち3人前。

サロモンズ

1945年2月11日

ディックの誕生日！ 僕たちは10人で、パン丸ごととポップ5杯でパンプディングを作った。

ドゥ・マイイアー

1945年2月11日

それから、[マックス] おじさんの隣に住んでいるエルツハウズン氏が、セレベスについて講演をした。本当におもしろい。

メィムリンク

1945年2月12日

僕たちは相変わらず、たくさん本を読む。僕はもう一度、何冊か本の題名をあげて、それらを僕がどう思うか言っておこう。*De splinter uit de toverspiegel*＜魔法の鏡のかけら＞（低級な本）、*Vigdis Gunnars dochter*＜フィグデイス・グンナーアの娘＞（実に美しい。独特な文体。とてもやさしいけれど、奥深い。）*Jenny*＜イエニイ＞（Sigrid Undset＜シグリットウ・ウンセットウ＞のこれら3つの作品中では最高だと僕は思う）。さらに僕は近代オランダの社会小説からも数冊読んだ。それらには文学的な意味はわずかしかない。しかし、＜一般社会＞問題への良い見解を示している。例えば、*Meesters*＜メースターズ＞の *Beumer en Co*＜ビュウマーとコンパニオン＞、*Hielko van Oaltje*＜オアルチュの息子ヒルコ＞、Jo Ypma＜ヨー・イプマ＞の *Boven de polder de hemel*＜干拓地の上は天国＞、そして Karel Norel＜カーレル・ノーレル＞の *Het getij verloopt*＜引き潮＞。たいへん傑出した著作は *Carnaval*＜カーナヴァル＞、そして同じように確かに優れているけれど、やや長すぎたのは *De grote Zorzi*＜偉大なゾルジイ＞で、両方とも Scharten-Antink＜シャルトゥン-アンチンク＞。僕は Gervais＜ジュルベ＞の短編も1冊読んで気に入った。*Aesculaap in China*＜中国のエスキュラップ（医者）＞。[さらに] Ammers-Kühler＜アムマアスキュラー＞の *Het inzicht*＜洞察＞（平凡）。Dola de Jong＜ドラ・ドゥ・ヨング＞の *Dans om het*

hart<心の舞> (同様に大したものではない)。Felix Timmermans <フェリックス・ティーマーマンス>の *Het keersken in de lantaarn*<ランタンの中の小さなローソク>は独創的で良く描写されていた。今、僕は Fabricius<ファブリカス>の *Eiland der Demonen*<悪霊の島>を読んでいる最中。実に優れている。それから僕は、英語をもっと読むようにする。ちょうど読み終えたのは、*Babylon Hotel*<バビロン ホテル> 探偵小説、そして僕は Washington Irving<ワシントン・アルヴィング>の *The Sketchbook*<スケッチブック>を読み始めるところ。

フククス

1945年2月13日

僕たちは幸いにも再び砂糖を貰った。僕は殆んどそれに手を出さないではいられない。砂糖飢餓は深刻だ。僕は日曜日のコーヒーのために、確かに少しは取っておくことにする。それから直ぐに、マーカン ヘバットゥ [豪華な食事] に行く。僕はそれまでに、600日抑留しているからだ。ハンスとイェリック [ヌウマン] も、それで加わる。彼らは [彼らの母親の] 誕生日を祝い直す。ハンスはその当日、病気だったからだ。¹²⁷ 僕たちはそれでパンプディングを作り始める。

ファン・エングルンブルフ

1945年2月13日

第3学年最終のオランダ語の試験を受けたー 8 [点]。目下、フランス語を猛勉強中。読書ー *Eeuwig zingen de bossen*<永遠に歌う森>、*Lourdes*<南仏ピレネー山中にある巡礼の地>についての本、そして *All this and heaven too*<この世そして天国でも>。

フククス

1945年2月14日

英語の授業は好調に進んでいる。僕は殆んど間違わない。先生 [ファン・ダァー・スホートゥ] が質問する大部分の単語を僕は知っているし、文法でも誤りが無い。ドイツ語の読みは、第一回

¹²⁷ Henk Kalshoven<ヘンク・カルスホーヴン>は、1945年1月16日の日記に、次のように綴っている。『ハンスは今夜、嘔吐し、今は気分が良くない。非常に残念。なぜならば今日は彼のお母さんの誕生日で、43歳になる。彼らは、ちょうどそのために、かなりのパンを節約して取ってあった。ところが彼は食欲が全然ないので、計画された祝いの食事は行なわれない。』(NIOD, Indische dagboekencollectie, dagboek H. Kalshoven)。

目はひどく難しかった。しかし、今朝はもう随分楽だった。単語は未だそれほど良く知らないけれど、それも確実にうまくいく。多分、さらに僕たちは文法を始める。きっととても楽しいことに違いない。残念なことに、先生は大してやる気はない。彼自身がそれを完全に「消化」しなければならない筈だ。僕はそのことがとても良く分る。[なぜならば] 彼は既にかなり多くの授業と生徒も担当しているからなのだ。

フックス

1945年2月15日

今日はドイツ語があった。ところが、ヤップが至る所で家々に侵入し邪魔された。それで授業を中断するより仕方がなかった。彼は授業のことが気に入らなかったに違いない。

フックス

1945年2月18日

今日 [日曜日、2月13日の日記断片参照] は最良の食事をした日の一つであった。8時半には既にバイエム [ほうれん草] を摘み取り、洗い、刻み始めた。その直後に火を起こし、[パン] プディングを作った。それはうまい具合にいったけれど、ずいぶん固かった。僕は両手でかき回さなければならなかった。僕たちは大鍋を借りられず、細長いオーブンを組み立てた。その上ではバターの缶を2つ<載せて>同時に炊くことができた。1時にすべて出来上がった。僕は見知らぬバタビア人のために、残り火で小さな魚の切り身を煮てあげた。その代わりにお茶を少しと5セント貰った。そのお茶は上質で、本当のゴアルパラだった。スープは素晴らしい味だった。その1200ccにチャベ [唐辛子] 20個とタマネギ20個 (は半オンス<50グラム>) を混ぜた。残りのタマネギは、ご飯や豆と一緒に食べた。その豆は米よりも断然うまかった。酸っぱくなかった。結構な盛り付けで、300グラムあった。もし僕が一年ほど後に我が家に帰っているならば、週に一度は豆を食べたいものだ。

ナウタは今日400 [グラム] のご飯と、とても美味いサンバル^{うま}を^{おご}奢ってくれた。僕はそれを、いずれはいつか食べることになる手持ち最後のロントン [バナナの葉に>巻かれた蒸しご飯の包み] に混ぜた。さて、もしお金が少しあれば、4月8日 [彼の母親の誕生日] にもまたロントンを買う。しかし、それ以前にはしない。プディングを僕たちは8時の点呼後に食べた。それは手でつまんで食べられるほど固かった。イェリック [ヌウマン] はもう食べられなかった。彼は胃^{いけいれん}痙攣を起こした。そのすべてのラウイ [小さい唐辛子] やタマネギのせいで僕は明日、完全に快調ではないかも知れない、と僕も確かに思う。バイエム [ほうれん草] はドゥ・[ラ] ウター・ドゥ・ヴ [イルトゥ] 氏にも少し分けてあげた。彼はそれをとても喜んで、僕に手製巻

きたバコ6本ほど、タマネギ2個とロンボック メラハ [赤い唐辛子] をくれた。それも僕はもう残さず食べてしまった。

フックス

1945年2月19日

英語の授業の直前に、グローゴル¹²⁸ から来た或る人が、僕に父さんからの伝言を届けに来た。彼は元気になっている。そして、僕は精一杯勉強して受験しなければならない、そうしたら後で僕のために仕事がある、と言った。僕はもちろん、ものすごく嬉しかった。しかし、それらの試験に関しては困難になる。ここは教師が非常に不足していて、第4学年のための書物は無い。僕がこれから受けなければならない試験は、幾何学とフランス語と英語、それに物理学と化学。英語は多分、近いうちに試験が受けられる。もし誰か手伝ってくれる人が見つければ、恐らく幾何学も。しかし、そのほかはまだ教科書も無ければ教師もいない。絶望的だ。僕が第15 [大隊]¹²⁹ へ移転できたならばよいのだが。あそこにはバタビアから来たすべての教師も抑留している。学習はそこではきっと順調に進むだろう。多分僕の友だちは皆、第5学年にいるか、あるいは卒業試験を受けているかも知れない。絶望的だ。やがて僕たちが抑留所から出る時、彼らはそれなりに仕事に就き、僕はさらに通学しなければならない。

ヨーストゥン

1945年2月19日

きのう [ぼくたち] はぼくたちのためのミサを受けた。ヨープ [彼の弟でバタビアのチデン女性抑留所に母親と共に抑留中] があしたお誕生日だから。

ヨーストゥン

1945年2月21日

ぼくたちは、きょうレオとヨーピィ [彼の兄と弟の両方] のお誕生日をお祝いした。それをきのうすることができなかった。ぼくたちは一日中、木材雑役のためにいそがしかったこと、そして第二に、午後スタンポット<マッシュポテトにゆでた野菜を混ぜた料理>があったからだ。今日、

¹²⁸ グローゴルで抑留されていた或る人。脚注14参照。

¹²⁹ 脚注9参照。フックスの父親もこの抑留所に入れられた。

ぼくたちは朝、シナモン、お砂糖、細かくくだいたカチャン [ピーナッツ] にサンバルをまぜて、こったりしたフン クューパップ [グリーンピースの粉を使ったパップ] をこしらえた。午後はぼくたちのお昼のごはんにお砂糖とシナモンを入れて、濃い味のライスプディングをこしらえた。ずっと前に作ったのと同じように。ぼくたちのサユール [野菜] はゆでた。ぼくたち特せいのカレーソースをこしらえた。とってもおいしかった。

フックンス

1945年2月22日

僕は再び英語の「スリラー小説」を借りられ、読んでいる最中。英語の先生は僕が読み終わった後に「自分も読みたいと」予約をした。図書 [館] から英語の書物を出して貰うことは非常難しい。それらは極めて人気がある。今晚、僕はそれほど早くは眠らなかった。確かに食後直ぐに「ベッドに」這っていった。ところが明かりが点いた時、鍋を洗い、ランプの下で更に10時頃まで少し読書をしていた。ドイツ語では、僕たちはかなり進歩している。次回は幾らか文法を始めなければならない。(多くはないとしても) とにかく役には立つと思う。

ドウ・マイイヤー

1945年2月22日

今日、2月22日はお母さんのお誕生日。[...] 僕たちはこの日を再び僕たちのやり方でお祝いをした。[...]

献立 1945年2月22日

朝食8時—	しょうがとグラ ジャワ [赤シュロ糖] 入りパップ
昼食12時30分—	パンとピーナッツバターつき丸パン、パンで作ったパップ
夕食6時—	バイエム (野菜) [ほうれん草] つきご飯、ニンジンとトマトのスープ
夜食8時—	ピーナッツバター付き丸パン半分、お砂糖入りのお茶、クリプイク [パリパリ音のするキャッサバまたはテンペイなど小さく切った菓子] 数切れ添えられた香辛料のきいた焼き飯、赤シュロ糖のソース付き濃厚なパンパップ。果物— クドンドン [りんごのような果物]

完全な献立だとは思わないかい？ そして美味しかったかどうか？ まあ、僕たちはその全部は食べきれなかったのさ。

フックス

1945年2月23日

今朝は雨が降っていて点呼は無かった。素晴らしかったのは、ハンス [ヌウマン] と僕自身のパップを取りに行くためにだけ、部屋から出ればよかったということだ。しかし、その後、僕は長い間、横になって読書や勉強をしていた。[...] とても楽しい授業が今日あった。先生 [ファン・ダー・スホートウ] はあらゆることを話してくださった。僕は本から未だ知らなかった多くの単語を質問した。ロブ [マイクル] が僕と比べて非常に遅れていることは、本当に厄介なことだ。彼がもしいなかったら、

僕たちはずっと速く進めるのだが。彼は実にのろく、時々ひどく愚かなのだ。しかし、彼を追い出すことはできない。なぜならば、すべてを良く考え合わせると、僕の方が後に来たのだから。

フックス

1945年3月3日

僕たちの授業は少し変更されるだろう。先生は誰か病気になった人から、若干の生徒を引き受けるためだ。僕は何が起こるものか、正確には未だ知らないけれど、いずれきっと気が付くだろう。

ドゥ・マイイアー

1945年3月7日

[マックス] おじさんは僕たちのためにこのところ毎晩、本を読んで聞かせてくれる。Karl May <カールル・マイ>の *De kaperkapitein* <私掠船の船長>はすでに読み終わり、今、*De katjangs* <落花生>を読んでいる最中だ。

ドウ・マイイアー

1945年3月9日

今朝、英語の再試験で良い結果が出た。8点。前回よりも良い。あの時は6点しかもらえなかったけれど、あまり勉強もしていなかったのだ。ラウス氏はフランス語の授業はもうしない。授業をすることで神経質になる、と彼は言い張る。彼はそれでも別のフランス語担当者を世話するだろう。数学については、僕は当分やめる。

フックス

1945年3月9日

今日、新規第一回目の英語の授業があったけれど、僕はきつとついて行かれる、と思う。英語の表現がぎっしり書かれた小さな本がある。確かに難しいけれど、うまく行くだらう。

フックス

1945年3月11日

肖像画 [教師が描いた]¹³⁰ が出来上がり、僕はそれを頂いた。

ドウ・マイイアー

1945年3月14日

僕たちは今、ピントー氏からフランス語を習っている。

ドウ・マイイアー

1945年3月20日

今晚、僕たちがモノポリイ<ゲーム>をしていた間 — [マックス] おじさんは加わらなかった — 彼 [おじさん] は僕たちのために、おいしいお茶菓子を作ってくれた。テン テン [赤

¹³⁰ フックスの英語教師、ファン・ダアー・スホートウ氏は2月28日にフックスの肖像画を描き始めた。

シュロ糖つきピーナツのクッキー] か、カチャン [ピーナツ] で作ったそんな風な甘いものをつまむために。それはちょうど良いタイミングに出た。ゲームは再び熱狂的に進んだ。そしてエドゥガー [ラウレンス] は彼の生涯初めて、このゲームで勝った。

フックス

1945年3月20日

今晚、もう暫く先生 [ファン・ダー・スホートゥ] の所で、楽しくおしゃべりをしていた。それから、まあ寝ることにした。電灯がつかなければ、ほかに仕様がなし、いずれにしても僕はいつものようにひどく疲れていた。

フックス

1945年3月21日

[自分で手がけた] バイエム [ほうれん草] も見事だった。僕は容易に僕の丸パンを節約し、乾燥させることができた。これは、母さんの誕生日に作るはずのプディングの基^{もと}なのだ。今、僕はさらに丸パン1個半を節約して取っておかなければならない。そうすれば立派なプディング2個分には十分だ。それから普通に食べる分として、更に幾つかの丸パンも節約して残しておく必要がある。

フックス

1945年3月27日

僕たちが帰宅した時、砂糖があったので僕はポットにお茶を用意した。しかし、僕は砂糖を瓶に入れトランクにしまった。それは母さんの誕生日のために取っておく。ピムとサンダー [ドゥフ] は彼らの砂糖を僕の所に持って来た。それは日曜日まで必ず取っておく。そうすることで、パンプディングを作り、砂糖入りコーヒーを飲む。僕たちは初め僕のタウンパット [寝場所] で話をしてきた。それから彼らと一緒に家に行き、そこで少しおしゃべりした。その年下の少年たち皆と一緒にいることは、大いに愉快だった。そこへはもっと頻繁に行くだろう。それはピムとサンダーにとっても確かに嬉しいことなのだ。彼らはここ、この抑留所には誰もく知り合いがいないのだ。僕はそこに9時頃までいた。それから先生 [ファン・ダー・スホートゥ] の所へちょっと様子を見に行くと、既にベッドに横になっていた。それで中には入って行かなかったので、僕の夜の一夜を逃がした。仕方なく家に帰り、僕も寝ることにした。

ヨーストウン

1945年3月30日

[復活祭前の金曜日] けさ8時に、キリストの受難記がさいしょに読みあげられた。それから十字架の道<キリストが立ち寄られた14の場所を写真で見ながら、それぞれで祈禱を唱えること>をした。教会には、あふれるほどの人たちがいた。

フックス

1945年3月31日

点呼後、ピムとサンダー [ドゥフ] が訪ねて来ていた。彼らは明日<復活祭>のことで頭がいっぱいだー それで僕たちはパン、グラ ジャワ[赤シュロ糖]と白砂糖でパンプディングを作る。そして明日の晩、彼らも食事に来る。それで僕たちは点呼の後で直ぐ始める。というのは、僕はいつもかなり遅刻するからだ。きっと楽しくなるだろう。そのような食事の機会は、単調さを幾らかは晴らす。何かしらすることがあり、満腹になる。

ファン・エングルンブルフ

1945年4月3日

チデンからのその少年たちは、絶望的に無知だ。彼らは第5学年に在籍している、と言い張る。ところが僕がパリの地図を見せたところ、一人が『それはドイツにあるのでしょ?』と聞いた。他の一人は、大海は川に流れ込むのではなく、その逆であるということが解らなかつた。[...] その少年たちは、母親無しでは身のこなしも知る由がなかつた。僕がここで意味することは、年少のヘアリツンはここで、いまだかつて足を洗ったことがなかつた。彼が半オンス<50グラム>のお茶をもらうと、そのまま砂糖と混ぜて食べたがる。そして塩の分配を、とにかくたいへん必要であるにもかかわらず、彼は断る。不思議な、そして実際には確かに悲しいことでもある。

フックス

1945年4月17日

今朝、欠方振りにまた授業に出席した。再び、実に気分のいいものだった。[...] 今晚、長いこと先生 [ファン・ダー・スホートゥ] の所に居た。なぜならば近ごろ僕は殆ど、あるいは全然行っていなかったからだ。ものすごく愉快だった。僕たちには、次の日曜日にももう一度、ささ

やかなマーカン ヘバットゥ [豪華な食事] のようなものを計画する、という約束が既にある。
今回は一度、トウモロコシと砂糖でこしらえる。

フウクンス

1945年4月22日

今朝も先生 [ファン・ダアー・スホートゥ] の所へ行った。僕たちは英語の幾つかの課を勉強した。

ドウ・マイイアー

1945年4月24日

昨日の晩、スホットゥ氏は鉄道についての講演をした。彼はS.S.<国有鉄道>の職員。彼はニールス [ダウエス・デッカー] 叔父さん¹³¹ を良く知っている、と言った。それはおもしろかった。僕は上出来の講演だと思ったさ。

ドウ・マイイアー

1945年5月24日

俘虜^{ふりよ}たちは [赤十字社の] 完全な小包を1人に1つもらった、ということだ。それでお父さんもそうだ。昨日はお父さんのお誕生日だった。彼はお誕生日のために、その小包から何か取っておいたことだろう。それはちょうど良い時に来た。もし彼がそれほど空腹ではなく、直ぐにそれを残らず食べてしまっていなければ。

ヨーストゥン

1945年5月29日

きょうバンドンの司教さまの賛成で、[A.J.C.]アイルストゥ神父さまによってマリア修道会がつくられた。

¹³¹ N.A. Douwes Dekker <ダウエス・デッカー>は *Tanah air kita: sebuah kitab tentang negeri dan rakyat Indonesia* <我が祖国ー インドネシアの国と国民についての叙述>を執筆した。[発行：1950年 Bandung] .

フックス

1945年6月1日

さらに僕は新しい図書リストを作った。最初に僕が手にした本はひどく俗悪だったので、今晚また取替えた。その時受け取ったものも、これといって特別ではなかった。全体的に、劣等な読み物ばかりだ。すべての良書はどこにあったのだろうか、誰にも分らない。

フックス

1945年6月3日

今日はペーター [彼の弟] の誕生日。彼は今15歳で自由の身。僕は<抑留されていないのは>彼が唯一人だ、と思う。彼の誕生日を、グラ ジャワ [赤シュロ糖] 入りポップとマグカップのコーヒーで朝早く祝った。午後は一皿ポップを作り、丸パンを1個買った。それは4ギルダーした。お金はもう価値がない。それ以上は何もへバットウン [祝] わなかった。彼らがプンチャクで、誕生日をもっとまじに祝えることを願うだけだ。

ファン・エンゲルンブルフ

1945年6月4日

再び良い書物がある — *Strijders voor het leven* (Paul de Kruif) <生きぬく闘士 (パウル・ドゥ・クライフ) >、アメリカの映画制作版 *Gone with the wind* <風と共に去りぬ>。[博士 D.K.] ヴィルウンハー牧師から¹³² *Viris Illustribus* <名高い男たち> を使ってラテン語の授業を受ける。

フックス

1945年6月6日

今日、僕はハリ ヤスミ [休日] をとった。今朝はひどく寒かった。11時頃までベッドで横になって読書をしていた。それから図書館から新しい本を取って来た。午前中の残りの時間は少し日光浴をし、家の他の少年たちとお喋りしゃべりをした。

¹³² Dominee Wielenga <ヴィルウンハー牧師>は戦後、彼の抑留所体験について *Mijn sponde in het dodenrijk* と題する書物を執筆した (発行: 1968年 Kampen)。

フックス

1945年6月13日

パンの後、まず初めにしばらく寝そべて本を読んだ。僕は英語の空想物語を借りられた。*Capt. Marvel Wit ranch*¹³³ <元キャプテン、牧畜業のマルヴェル・ヴィットウ>といったようなもの。それから更にひと眠りした。一日を切り抜けるための唯一の手段。

ドゥ・マイヤー

1945年6月15日

僕には分らないのだけれど、夜、読書をしたいと思うと全力を注がなければならない。そうすると目が直ぐに疲れ、[それから]赤くなって涙が出る。僕はまたメガネを掛けるようにするしかない、と思う。[マックス]おじさんが、そうするようにすすめる。僕は<メガネを掛けると>完全にヤップのように見える、というだけのことでそうしたくないのだ。もう一度 *Lotgevallen van een Indisch stuivertje*<蘭印少年の冒険>を読んだ。それにしても、何とものすごく愉快な話なのだろう。

この頃わずかな雑役しかないので、[僕は]また授業に申し込んだ。畑も今は完成したし、英語の授業も楽しそうだ。

ヨーストゥン

1945年6月26日

点呼のあと [博士候補W.N.] フラーミング氏のところへ、今まで<抑留前>どの学年にいたか、そして今はどの学年にいるのか、を知らせに行くように言われた。¹³⁴

¹³³ フックス自身によると、これは漫画本の類であった — 読むというよりもむしろ挿絵を眺めるだけで —、それを彼が読んだのは、彼の悪化した健康状態により、本当の小説にはもはや集中できなかったためである。

¹³⁴ 抑留所に在籍していた資格のある教師たちは、解放後の教育を再び軌道に乗せ得る方法について、熟考し始めた。これは、少年たちの無秩序な教育期間を考慮したものであった。その理由から、少年たちの教育の概観が作成された。その結果は *Rapport betreffende de stand van het onderwijs per juli 1945 met betrekking tot de nog voor schoolbezoek in aanmerking komende jeugd van het Jongenskamp te Tjimahi*<さらに通学しなければならないと考慮されたチマヒの少年抑留所における青少年についての、1945年7月現在の教育情況に関する報告>に示された。その文書は1945年7月31日付で、抑留所責任者 G.A. Schotel<スホートゥル>、調査委員会の3名の委員 (W.N. Vlaming<フラーミング>、H. Saaltink<サールティンク>と J.B. Möllenkamp<ムーレンキャンプ>)によって署名されていた。(Van Engelenburg<ファン・エンゲルンブルフ>、81)。

ヨーストウン

1945年7月2日

ぼくたちは第7学年の組に入れられた。ぼくは毎日10時から11時半まで[授業が]ある。レオ[彼の兄]は2時半から4時まで。

フククス

1945年7月4日

今日僕は家の掃除当番で、10時までには忙しかった。それからハンス[ヌウマン]と僕、それと僕たちの家にいる他の少年たち数人と、トゥンパット[寝場所]で話をしていた。話の最後にはもちろん、美味しい物のことだけしか出なかった。タルト<果物入りパイ>とアイスクリームの種類、そしてチョコレート。順番に、<抑留前>家では何をどんな風に食べていたか、そして好物の料理は何だったのか、お互いに話した。丸パンを食べた後、僕は更にもう少し読書をしてからちょっと眠ることにした。

メィムリンク

1945年7月4日

近ごろ「向学心」というようなものが出てきた。これは僕がいくつかの科目(例えば、電気学と化学)を習えるという嬉しさや、正確には言えないけれども、良いニュース、エンジニアの[A. C.]インフネィフルン氏との話し合い、あるいは講演やら、そういったことからの刺激による影響から来ている。ところで、ヤン[ハーリング]とグッツ[ナスウツ]も同じように熱心だ。グッツは特に、常に真面目で止めることを知らない。ヤンはそれほど専念していないし、いい加減にするときもある。彼は自分でも結構多くの授業を受け持っているということで、<自分が授業を>受ける時間はさらに少ししか残らない。夕方、家の裏手のベンチに座って、将来のこと、そしてあらゆる可能な話題、特に信仰について話し合いをする。

僕たちは既に2回、日曜日の午後、向こう側で入院中のインフネィフルン氏の所へお見舞いに行った。彼は抑留前にエンジニア事務所を経営していた。そして、それで多くの助言を与え、デルフト<工科大学>について、そしてエンジニアのことについて話すことができる。彼はもうそれほど若くはなく、相当のことを体験しているので、エンジニアの「人生経験」も十分話すことができる。何とも実に面白いのだ。特にグッツは夢中だ。彼の計画もその方面(建築エンジニア)に向かっているからなのだ。

ヨーストウン

1945年7月8日

きょう、ぼくたちにマリア修道会のメダルが[恐らくアイルストゥ神父により]与えられた。そして今[僕たちは]候補^{こうほ}会員。

ドゥ・マイイアー

1945年7月9日

おととい幾何学の試験をまた受けた。[でも僕は]完全に失敗した。2週間後にもう一度[試験]を受けられる。それで、うまくやっているといいのだけれど。

ファン・エングルンブルフ

1945年7月13日

僕はもう殆ど1ヶ月、書かなかった。なぜそうなったか直ぐ話そう。ごく最近まで僕はここで快適に、そして静かに過ごしていたけれど、再び勉強に専念することに決めたのだ。それで今、ラテン語、代数学と簿記を習っている。一昨日、僕はフランス語の最終筆記試験を受けなければならなかった。他の科目のこともあり、僕はひどく忙しかったので、さらに日記をつける時間は無かった。ところで、次の水曜日は口頭<試験>。僕は本を苦勞して暗記している。そしてその慣用句。...とにかく、これは有意義な忙しさ。しかし、今！ [...] 今、日中僕たちは家の中に留まっていたはならないのだ。[僕たちは]すべての扉と窓を開け放し[て]、仕事についていなければ[ならない]。[...] そんなやり方では、読書などできないことははっきりしていて、ましてや(勉強と日記をつけることは完全に不可能)、それも僕の試験の直前に...

フックス

1945年7月17日

図書館は明日、再び開館し始める。書物を改めて登録するために数日、閉館していた。

フックス

1945年7月23日

僕は素晴らしい本を手にした。*Jamaica Inn*〈ジャマイカ酒樓〉。[...]今日の午後、僕は気持ち良く眠った。それから道具類を受け取らなければならなかった時間まで、また読書をした。

ファン・エングルンブルフ

1945年7月24日

土曜日、[7月]21日にフランス語の口頭〈試験〉を受けた。ラウス氏のおかげで、最終成績として8点。それもまた修了。

ファン・エングルンブルフ

1945年7月29日

マウチュ [彼の妹] の誕生日を一日早く祝った。僕たちは多分、翌日はお湯をもらえないはずだったからだ。水は乾燥させたご飯をふやかすために必要だった。[...]図書館から *Nibelungenlied* 〈ニーベルンゲンの歌〉のオランダ語訳詩と *B. Mussolini* 〈ムッソリーニ〉の小説を手にした。日曜日のために [*Hildebrand* 〈ヒルドゥブラントゥ〉] の *Camera Obscura* 〈(原義) 暗箱。心の中を的確に描写すること。〉を借りた。

メイムリンク

1945年8月4日

最近、3科目の試験を受けた。機械工学、代数学と *BM* [図形幾何学] でそれぞれ8点、9点、9点。機械工学の試験だけはひどかった。なぜならばファニョッティ [教師] は、どの問題を出すつもりであるか、僕たちに前もって言ったのだ。彼は、僕たちが悪い結果をもたらすかも知れず、それでばかばかしい責任を負わされるかも知れないこと、を恐れていたのだ！ それで彼はヤン [ハーリング] に計算問題を教え、彼は更に僕に話してよかったのだ。さて、僕はそれを殆んど使わなかった。僕はいずれにしても試験準備はわずかしかただけだし、言われた問題をもう一度、入念に見直すようなこともしなかった。僕自身はそのことを知らなくても十分できるだろう、という感じがしていた。

それにしても、もし終了後ファニョッティがもっともらしい顔つきでやって来て『お

めでとう』と言って握手をしたならば、劣悪なことだ。それからおまけに、君は良くやった、[博士 H.R.] ヴォルチャー教授が誉められるに値することを認めた、と話したならば。チャールス [ドゥ・ヴィルドゥ] は、すべての試験を拒否しなかった僕を奇妙に思った。多分その方がよかったかも知れないけれど、今となっては何れにしても遅すぎる。他の2科目の試験は[R.K.] カンプス氏によって実施され順調に進んだ。

フックス

1945年8月7日

毎日午前中、僕はグダン [彼が雑役をする倉庫] の中で英語の単語を勉強する。毎日、数頁新しいものと、数頁は復習をする。そうすることで、その時間も有効に費やす。つまり僕の知らない単語がまだ数多くある。そして、書くばかりで学ばない、というのはマッチャム [為すべき方法] ではないのだ。

ヨーストウン

1945年8月11日

けさ、ぼくは一人だけで、神父さま [アイルストゥ] のところで聖ミサに出席することができた。

フックス

1945年8月12日

僕はここ数日、快調。そして退屈することももう全然ない。終日、忙しくしている。何かを読み始める時間が残らない。今日の午後は、眠ることさえもしなかった。

ファン・エングルンベルフ

1945年8月14日

僕は勉強に励んでいる。英語、商業算術、簿記、代数学。[N.C.] Flammarions <フラマリオンズ> の *Hemel en aarde* <天と地> と *Zijn de hemellichamen bewoond?* <天体では住まれたか?> を詳しく勉強する。Henr [iëtte] van Eyk <ヘンリエットウ・ファン・アイク> の *De kleine parade* <小さな閱兵式> も。

ドウ・マイイアー

1945年8月19日

昨日もう一度、へバットゥ [お祝い] をした。ハンク [フラインスウ] の妹のお誕生日 [だった]。

[...] きこの晩は、やっとな僕たちのとても楽しいパーティとなり、プディング！ ハンクはコンデンスミルクの缶を開けた。[マックス]おじさんはトウモロコシの粉を苦心して見つけ出し、ヤンスン氏からはサゴくある種の椰子の木髓から作った食品。それを混ぜてプディングにすと、とろけるような味がした。その上にはさらに純粋で濃厚なミルクのソースを掛け、おいしかった。

僕たちはまた10人だった。僕たち6人、この隣のヤンスン氏、それからハンク、さらに彼の知り合いの2人、男の人と少年を招いていた。それで本当に楽しい晩だった。

ドウ・マイイアー

1945年8月20日

僕は2、3日前、3回目の幾何学の試験を受けた。またしても大失敗した。僕は完全に恥ずかしいと思っていることを、明かさなければならなかった。エルンバース氏が、僕には無理だ、と言っていたのは正しかった。ああ、そうなのだよ。エルンバース氏はいずれにしても思いやりのある人なのさ。

ヨーストウン

1945年8月23日

きのこの午後とけさ、レオ [彼の兄] とぼくは試験を受けた。きのこの午後、ぼくたちは国語 [オランダ語] をした。レオは国語の試験に合格した。ぼくはだめだった。レオはきょう計算問題を受けてうまくいった。彼は、HBS <高等市民学校> の第一学年に在籍する、という通知を受け取った。

抑留者の精神状態

ドゥ・マイイアー

1944年8月7日

僕はここに [バロス] いる年上のお兄さんから「タイ第6」抑留者たちがここにいたと聞いた。ということはお父さん [継父] もいたことになる。お父さんがもうここにはいないのは残念だ。本当に会いたいなあ。テオ [実父] はたぶん WN¹³⁵ にいるのだろう。テオにも会いたいなあ。

ドゥ・マイイアー

1944年8月23日

今日は8月23日だ！ 僕の誕生日！ 今日はたくさんの人たち、お母さん、テオ、お父さん、エルシュ [妹]、おばあちゃんが僕のことを思い、もちろんオランダにいる人たちも僕を思い出してくれるんだ。今日、この収容所に来て初めての誕生日を祝うのだが、これがここで最後の誕生日であればよいのだが。お父さんはもう収容所で3回も誕生日を迎え、テオは来週3度目の誕生日を祝う。当然二人とも僕が家で誕生日を迎えると思っているだろう。

今日ヘンク [ヴァイフンバッハ] と ドゥ・ブスさんが僕にお祝いを言いに来て、来年はもうここではなくて、お父さんとお母さんと一緒にお祝いしなくてはと言った。もしまたここで誕生日を迎えなければならしたらぞっとする。僕が去る時、お母さんが僕の誕生日のために持たせてくれた手紙に、もしかしたら今度の誕生日を家でまた祝えるだろうと書いてあるのを読んだ時、やはりちょっと感情を抑えられなかった。今日最後の板チョコを開けたが、少し残しておいた。それは本当においしかった。昨夜ローナルトを通してお母さんからの便りを受け取った。それはちょうど僕の誕生日の前の晩だった。よかったな！

昨夜、バンドンへのわき道に接する郊外にある農場で、草刈りをしながら気持ち良い自然美を味わった。僕はあの道を覚えている。たしか車でバタビアからバンドンへ又はその逆方向に行ったとき休憩した所だ。その時僕は数年後、同じ場所で護衛の下に捕虜として草刈りをするとはい思いもしなかった。

¹³⁵ — 「タイ第6収容所」はドゥ・マイイアーがチハピットにいる継父 J.G.ヤンセン氏から受けた葉書に書かれてあった差出し住所であった。抑留者たちはこれをペンネームだと思い、これが実際タイを意味すると知らなかった。「タイ第6収容所」は従ってチマヒにはなかった。W.N.は収容所を指した。日本軍は収容所を示すために2文字のコードを使用した。(ハン・ドゥ・マイイアー、日の丸下の収容所、(Menaldum 1986; NIOD 2)。

ドウ・マイイアー

1944年8月25日

今日はヒルおばさんのお誕生日だ！ 遠いオランダでどのようにおばさんは誕生日を祝っているんだろう？ ディックおじさんと一緒にいるのだろうか？ おばあちゃんは今日おばさんについて何を考えているだろう？ この頃、本当にたいへんつらい。自分の感情を抑えるのはむずかしい。今日も自制心を失い、ここ数日気のすむまで泣いた。それに明日はエルシュの誕生日だ！ ああ、家に帰りたい、誕生日を一緒に過ごしたい。

ドウ・マイイアー

1944年8月26日

今日はエルシュの誕生日だ、あのかわいい妹！ 最後の日々に見せたびくびくしたような深刻な顔つきが僕の目の前にいつも見えるんだ。かわいらしい、長いおさげ髪をしたあの誠実な愛しいエルシュはもう9才になる！ 僕は妹に板チョコをたった少ししか残さず、それもやっとのことであげたことを後悔している。もし今妹の誕生日と一緒にいられるならば、僕の持っているものを全部あげるのだ。

メイムリンク

1944年11月5日

エリオ [妹] の誕生日だ。こんな日には昔のことを思い出し、また家に帰りたくなる。『皆はどうしているかな？ 元気でやっているかな？』と考える。

今は夜の9時半。皆は家で腰をかけて、ちょっと手を休め、父と僕のことを思い出しているだろう。ああ、平和であるならば、僕は皆にまた会いたい！ だがもう少し辛抱しなくてはならない。おやすみなさい。さようなら。

ドウ・マイイアー

1944年12月8日

今日は12月8日だ！ ニッポンの祭日¹³⁶だ。それは飛び行く飛行機を見ればわかる。今日で戦

¹³⁶ — 1941年12月8日パールハーバー奇襲記念日のための祭日。

争はもう3年になる。丸3年間だ！ 数日すれば、お父さんは家から離れてもう3年になるんだ！
ああ、いったいつになったら戦争は終わるんだろう？ 4年続くのだろうか？ 嫌だ、そうなら
ないように心から望む。以前よりもっと、もっと終戦になることを願うんだ。

フックス

1944年12月18日

最近、僕はまたひどく腹が立っている。それは僕たち皆一緒にいないクリスマスが来るからだ。
戦争はもう十分長く続いたと思うし、未だに終戦の兆しが見えないことに不愉快になる。

ファン・エンゲルンブルフ

1944年12月24日

かなり落ち込んでいる。7日間外勤で、ひどく殴られる。新しい日々が怖い。クリスマスには宿
舎病になるだろう。

フックス

1944年12月31日

今晚僕は父、母、イングやペーター [妹と弟] がどこにいて、何をして、何を思っているのか座
り込んで考えた。恐らくペーターもどこか別の所にいるのだろう。家族と離れ離れになり、どこ
にいるのか、生きているのかさえ知らないことへの不快さをこんな日には二重に感じるものだ。
しかし次の大晦日にはきっと一緒にいられること、それに関して僕には確信がある。情報がたい
へん良いからだ。

メイムリンク

1945年1月1日

さあ、1945年だ。今年は戦争の終結を経験するだろうと思う。約束の年となることだろう！
新しい世界と豊富な仕事の年だ。

フックス

1945年1月12日

気落ちしてしまう。戦争は余りにも長く続き、進行せず、全くうんざりする。何も買えず、もうたらふく食う物は何ももらえない。腹立たしい状態だ。8時からは電気もなく、闇の中をじっと見つめるだけだ。昨日はもう10時前に寝た。眠りにつくのも一苦勞で、痩せて骨がそこらじゅうに突き出て来る。朝はそこらじゅうが痛く、へとへとに疲れている。そうだ、そうなんだ。オランダ領東インドでは色々な目に逢うものだ。僕はここから離れたら、二度ともう戻らず、絶対にチマヒには帰らない。

ドゥ・マイイアー

1945年1月17日

ほんの3日間日記をつけなかった。時間が全くなかったし、実はその気にもならなかったのだ。

ファン・エングルンブルフ

1945年1月19日

この頃ひどく孤独を感じるが、幸いにもバウズウさんがとてもやさしくしてくれる。ああ、戦争が終わりになって欲しい！

ヨーストウン

1945年1月19日

ここではたいしたことが起こらない。もし特別な体験もせず、何ももらえない場合にはその日は日記を書き飛ばすんだ。

フックス

1945年1月25日

夕方僕たちが紅茶をたくさん飲んでいる時、クドングバダックやチマヒ第4の比較的はまだ良かった頃のおぼろげな思い出をよみがえした。今晚も早く床に就いた。忙しい一日だった。

フックス

1945年2月10日

一年前の今日はクドングバダックでの最後の日だった。一晩中僕たちは汽車に座り、翌日の朝4時になるとこの実に嫌なひどい町に一年もいることになった。時間が経つのはなんと速いのだろう。あと一年続くのだろうか？

ドウ・マイイアー

1945年2月16日

数日すればまた実際に毎日のようにマーカン ヘバットゥ [豪華な食事] になるだろう。確かにより良い時期へと向かっている。本当に終戦までもう長くはかからないことを僕は知っているんだ。そうしてこの恐ろしく汚れたひどい収容所から解放され、家にお父さん、お母さん、たぶんチデンにいるだろうおばあちゃん、そしてテオ、エルシュのところに行けるんだ。やっと一緒になれるだろう。ここにて僕は日記をつけることを止めるんだ。僕らは新しい時代へと向かう。もう長くはかからない、別なもっと素晴らしい時代に！

ドウ・マイイアー

1945年2月20日

駄目だ、計画したことを続行できない。僕は日記なしではやって行けない。一度始めたことだから、やはりやり続けなくてはいけない。この頃、だいが紙不足だけれども。

ドウ・マイイアー

1945年2月22日

今日は2月22日、お母さんの誕生日で、もう8ヶ月ほど離れ離れになっている！ 4度目のお父さんのいない誕生日だ。元気だろうか？ そしてお母さんはどこでお祝いするのだろうか？ これが戦争中の最後のお母さんの誕生日であることを心から願います。

ファン・エングルンブルフ

1945年3月2日

幼い男の子たちはまだ十分に活気がある。晩には収容所で男の子たちとゲームをしたり、歓声を上げて楽しく過ごした。

ドゥ・マイイアー

1945年4月2日

午後僕はひどく悲しんだ。エドガー [ラウレンス] が片づけをしている時、共同の棚から小箱をほおり投げた。それは塩を保存するために愛しいエルシュが人形の家からとって僕にくれた箱だった。本当はもうこわれていたが、エルシュの忘れ形見だった。僕がかごの中にそれを見つけた時、どんなにひどいと思ったか分かるだろう。だけどおじさん [マックス・フラザー] がなだめてくれて、僕はそれに距離を置いた。小箱は役目を果たしたのだ。それがなくてもエルシュのことを思い出せるんだ。そう思わないかい？

フックス

1945年4月29日

今日 [天長節、天皇誕生日の称] は祝いが全くなかった。僕は歌さえ耳にしなかった。それに行進も観兵式もなかった。天皇は爆撃により多くの犠牲者がでたため、祝典を中止した。これでいいのだ。戦争とはどんなものか感じればいいのだ。僕としては、あいつらが全員空中で爆発したって構わない。収容所の外に出たい。本当に長すぎるし、僕の服も大分なくなり始めてきた。

ドゥ・マイイアー

1945年5月13日

昨夜は楽しかった。ところで収容所全員は上機嫌、それはもちろんおいしい食事のためなのだ。

フックス

1945年6月27日

10時、雑役にうんざりして黄疸で入院している知り合いの見舞いに行った。彼は実はもう良くなっているが、本当はテンパロッター [病床にとどまり雑役を避けること] なのだ。彼は一日中愚痴をこぼし、信じられないほど衰弱しふさぎ込んでいる。彼は働かなくてはならない、そうすれば良くなるだろう。この時代にテンパロッターになると徐々に消滅し、朽ち果ててしまう。雑役して食べ物のことを考えないのが一番だ。そうすれば空腹を全く忘れてしまうからだ。今のところ僕は骨皮筋衛門のようにみえるが調子は最高だ。

ドゥ・マイイアー

1945年7月1日

そうだ、ちょうど一年前にぞっとするような知らせを受けた。それはつまり移動しなくてはならないという通知だった。僕は今でもそのことをはっきりと覚えている。それがもう一年前にもなるなんて！ ああ、家 [母と一緒にいたチハピット女性収容所] はなんて居心地が良かったのだろう。

フックス

1945年7月22日

今日イング [妹] は19才になる。イングがどのくらい成長したか、だいぶ変わったかどうか知りたい。妹は今日プンチャクでどう過ごしたのだろうか？

フックス

1945年8月16日

明日また家にいるとしたら、僕の新しい木靴にひもをつけて完成させよう。木靴をはいて絶対に自由への道を歩くのだ。新しい日記帳を作る時期だ、あと3日でいっぱいになる。こんなに長くなくてはならないことを幸いにも一年前にはまだ知らなかった；もし知っていたらひどく癪に障ったことだろう。

フックス

1945年8月19日

ここ数日また気力なく不快な気分だ。それはどっちみち真実ではないが、ひどい噂のためにちがいない。S.S. [国家鉄道] 労働者が戻って来て、全てのヤップ将校たちは兵舎より離れてはならないと言われている。

食後床に就き、その後また食事を取りに行く。毎日が同じくり返しで最後には大変うんざりしてしまう。この日記をいっぱい書くとは思いつかなかった。その時にはもうとっくに自由になっていると思っていた。ともかく、日記をつけることで少しは違いができたと思う。とにかく次の日記帳は少なくとも2ヶ月分はあるのだ。

抑留者相互の人間関係

ドゥ マイイアー

1944年8月15日

僕はこれからフランス語と英語をドゥ・ブスさんから受けるだろう。彼はとてもやさしく、僕の為に何でもやってくれる。園芸班長もやっている。時々晩に僕らの部屋へ話をしに来て、いつもたいへん楽しい晩を費やす。彼はオランダ領東インドの全地域に行ったことがあるのだ。

ドゥ マイイアー

1944年8月22日

この頃ひどく盗難が起こり、今朝僕らは道に整列しなければならず、その間に（紳士方自身により）家宅捜査が行われた。彼らはナシィ ゴレン [香辛料のきいた焼き飯] の缶詰と診療所から盗まれた多量のオバットゥ [薬] を探しているのだと人は言う。このような処置を取らなければならないとは本当に悲しいことだ！ 幸いに僕はこれに関しては常に善悪の観念を持っていられるのだ。

フックス

1944年8月23日

米が盗まれた。今回は雑役係たちが積み上げをしなければならなかった。もしかしたら明日は僕が注意を払わなければならないかもしれないし、又はまた誰かに盗み取られるかもしれない。

フックス

1944年8月28日

ひどく多くのスサー [困難] の末、やっと僕たちは引越した。その為に明日は特別に休暇ができた。初めに最大の敵たちと住むはずだったが、彼らは賛成しないと大口をたたいたので、僕たちは他の人たちと今一緒に住んでいる。とても感じのよい連中だ。

フックス

1944年8月30日

午後は500ccのヒュツポットを食べた。僕は食事では少年組に入れられ、ヒュツポット300ccのおかわりを直ぐに貰った。

ドゥ マイイアー

1944年9月5日

しかし友だちのせいで僕が見つけたトランクをまたなくしてしまった。彼は本当に悪党で陰険だ（それにいつも汚い髪を目の前にたらしめている）。あの自転車の時とまるで同じだ。僕はあいつと手を組んでいたことに後悔している。ヘンク・ティアリンクはとても親切だ。僕はレインと向こう見ずのフランス [サヘタピィ] [チハピット収容所出の隣に住む少年たちで、ブルムン収容所で付き合い始めた] たちと一緒にいれば良かった。僕にとってあの友だちは今では死んでしまったのだ。つまり僕にはもう存在しないのだ。あんな奴、ふん！

ドゥ マイイアー

1944年10月9日

パンがまた収容所の仲間から盗まれた。彼らは探そうと努め、僕らのバラン [荷物] を検査したが、犯人は見つけられなかった。先日肉の缶詰から又その仲間のスプーンが盗まれた。

ドゥ マイイアー

1944年10月15日

今日バロス [第5] から1000人もの抑留者たちがここに来た。たくさんの兄弟、父親、いとこやおじさんたちがいた。僕には誰もいなかったので、非常に孤独を感じ、見捨てられたような気持ちになった。少なくとも一人の知人に会えた。それはフラーザーさんだ [...]。他の数人の人たちとも友だちになった。

ドゥ マイイアー

1944年10月17日

今朝向かい側 [バロス側] にもう一度行った。本当は両収容所の間は通れないが、ハウウェンさんとジユムレットゥさんがそこにいると耳にしたからだ。確かに僕はそこで彼らと会った。

[...] 二人とも家の消息をまた聞いてもちろん大喜びだった。とはいってもそれは既に3ヶ月前のことなのだ。[...] 昼食にはまた僅かなスープと肉が少々でただけだった。それを僕はヘンキィ・ティアリンクに少しあげた。彼も一度、好きではないと彼のバターを僕にくれたのだ。

ドゥ マイイアー

1944年10月22日

今日は気持ちの良い日曜日だった。フラーザーさんは僕らに午後モノポリゲームをしに彼の所に来ないかと聞いた。レインダート、フランス [サヘタピィ] と僕を誘った。それはもちろんのこと楽しい招待だった。彼はトーコー [収容所内の商店] でパンを3個 (合計90セント) 買い、そのうち僕らは半分、従って1個半のパンを、初めに一緒に焼いた後、砂糖をかけて分けた。君たちも気付くように、彼は本当に親切そのものだ。[...] ハルラアートゥさんも僕のパンを彼の所へ持って来いと言い、そこでバラス [第5] で買えたパイナップルのジャムを少し付けた。また何と味わって食べたことか。

ハルラアートゥさんは先週の日曜日に知り合いになり、その時はバロス [第5] から来たばかりで、バターと砂糖付きパンをごちそうしてくれた、優しい、太った、欧印混血のおじさんだ。

ドゥ マイイアー

1944年10月24日

フラーザーさんと一緒に過ごす晩はいつも楽しく、これからは [マックス] おじさんと呼ぶことにしよう。

フックス

1944年10月25日

マインコ [トクソペイユス] とイアリック [ヌウマン] は炊事場の野菜の残り物でスープをこし

らえた。僕は300ccほどもらい、マインコは食事が食べ切れず、僕がそれを平らげた。

フックス

1944年10月26日

今晚また僕たちは横になって歌い、ヘンク [カルスホーヴン] はマンドリンを弾いた。ここでは3人の幼い少年たちと一緒にいつも愉快だ。僕たちは一番気が合うのだ。

ドゥ マイイアー

1944年11月9日

今日3時半後ヴィリィ・バイラーアトゥは砂糖菓子をつくっているところを見つけられた。その上、彼は補充食としてもらっている牛乳を使ったのだ。とにかく『先生』は（ごくありふれた年上の青年で、一週間前 [ヘンク] ヴァイフンバッハの代わりに子守り役としてここに来て、「先生」と呼ばせるのだ）全くひどいことだと思った。そしてあいつは [レインダート] ステイハーブック [組長] に告げ口し、僕らの家全部は2日間料理をしてはならないのだ。もし僕らが見つけたら、組全部はもう料理をしてはならなかつたらう。

フックス

1944年11月20日

今日僕たちは伝染病課へ鉄製のベッドを運んだ。朝僕はずらかって、気分よく家に残った。一緒に行きたがっていた年少者たちが十分にいたからだ。午後にはウビ [キャッサバ] の葉を料理する為に最後の空き家へ行って棚板を取って来た。カイザー [?] はそれを発見し、僕をひどく罵った。朝の9時半に向かい側 [バラス側] へ行き、刑事裁判官の前に出頭しなければならない。どんな罰を受けるか気になる。それにもかかわらず僕たちはやはりウビの葉っぱを料理した。

フックス

1944年11月21日

今日僕は9時半に裁判官の所へ行かねばならず、雑役をすることができなかった。スホートウルさんは4日間の雑役刑罰を下した。僕は火をおこすことを禁じられ、もし見つけられたら、重刑

に処されるのだ。

フックス

1944年11月25日

ハンス・ヌウマンと僕はここの炊事場には入れない。ナウタは5人の新しい人たちが必要で、その為に彼は勿論のことまたもや仲間を選んだ、あのろくでなし。僕たちはまた雑役をするのだ。

フックス

1944年11月30日

数日前あるタワナン [抑留者] からヤップ [日本兵] の所に匿名の手紙が届き、そこには闇取引をしたタワナンス [抑留者たち] と兵補たちの名前が書かれていた。ヤップは誰が手紙を送ったのか知りたかった。多くの捜査をした後、確かに B さんである事がはっきりした。彼はヘアマン・メウスンから最近100ギルダーを盗んだことも白状し、その為に僕たちは全員整列しなければならなかった。ヤップは彼を結び目のある濡れたロープでぶち、それから密告された人たちに引き渡され、その結果、彼は殴られて脳出血をおこし（ヤップと収容所リーダーの許可を得て）病院へ連れて行かれた。

フックス

1944年12月10日

僕は結構の金額を貯めた。最後のタワナンークリスマス [抑留者として過ごすクリスマス] はうまく祝えられるだろう。僕たちは腹が破裂するまで食べるつもりだ。少々金を使う計画をたてているが、それは少なくとも注文したものが全て手に入ればのことだ。しかし、まあ、トーコーにはヘンク [カルスホーヴン] がいるので僕たちの為に融通をつけてくれるだろう。

フックス

1944年12月31日

とにかくするうちに、僕たちの部屋では一人の同居人と残りのものたちの間で緊張した関係が支配されている。彼は既に弟の所で食事をし始めているが、それは彼自身のせいで、余りにもひどい

エゴイストなのだ。彼はフン・キュー [グリーンピースの粉] と水でプディングを作り、グラ ジャワ [赤シュロ糖] の糖蜜と一緒に食べたかったのだ。プディングは失敗作 (固まらず、ひどい味) だった。その一方、僕らの素晴らしい成功作だったため、これで僕らは彼にかなり意地悪した。

メィムリンク

1945年1月1日

今日は良い一日だった。僕は患者として退院した。しかしもう一週間ベッドの中になければならず、野菜を食べてはならなかった。(僕のほうがよく分かっているのだ!)。またここ [家] にいられることは快いものだ。チャールス [ドゥ・ヴィルトゥ] は僕が戻って来て喜んでいる。彼は一人で非常に退屈し、その上彼自身も病気だった。彼は今全てのことを、トーコーなどについても一緒にやりたいのだ。実は僕は殆ど金がないが、彼は未だ少し持っているのだ。

フックス

1945年1月6日

今晚僕たちは会合を開いた。今回は [ハンス] ヤンスンのトゥンパット [寝場所] の所だった。会合は順調にいったが、ヘンク [カルスホーヴン] だけ会合に出る気がなかった。彼は時たま悪ふざけをし、急に約束を破るのだ。

ドゥ マイイアー

1945年1月10日

昨晩もまたおいしい夕飯を食べた。[...] ただロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] も何の追加もなく、そのためご飯を一皿食べた後もまだ腹が空いていた。[...] 僕たちが家にいった時、マックスおじさんはかなりのピーナッツバターを僕たちの口に入れた。

サロモンス

1945年1月21日

今日砂糖を150グラムもらった[...]。6人一緒に祭日用として、全部の砂糖とクドンドン[り

んごのような果物]を蓄えるのだ：24日はマックスの母親、28日はフランキィ、31日はベアトリックス王女そして2月11日はディックの誕生日だ。それから僕らはプディング、サユール [野菜] とたくさんパンでマーカン ヘバットゥ [豪華な食事] をするのだ。

フックス

1945年1月23日

食事のちょっと前に、事務所の伝達係は午後ファン・Eさん¹³⁷の所に行かなければならないと僕に知らせに来た。1時半にそこへ行ったが、事務所は未だ閉まっていた。それから僕は2時にまた戻るとファン・Eさんは僕に明日贈り物 [金] を受け取る為にS.v.L.さんの所に行かなければならないと言った。彼らは僕のことを少し気にしてくれて、忘れてはいないのだと知ることはうれしいものだ！

フックス

1945年1月24日

[今朝]僕はS.v.L.さんに会い、英語の本 [本の名は Graded English で、ロブ・メイクルと一緒に使わなければならない] を取りに行くため向かい側 [バラス側] へ出かけた。そうすれば11時半前にまだ学課を習うことができるだろう。僕は最初にS.v.L.さんの家を見つけられず、彼が窓の前に座っているのを見るまで、5軒の家を尋ねた。以前の見覚えがあり、彼も僕を思い出し、僕が父に似ていると今まで誰も言ったことのないことを口にした。いつも人は「お母さんにそっくりですね」と言う。僕はたいへん感謝し、何か手伝うことができるか否か尋ねた — なんでも構わなかった — しかし残念ながら何もすることがなかった。多分彼は後で僕を必要になるかもしれない。

ドゥ マイイアー

1945年1月25日

この頃ここでは家の中でちよくちよくセロリや石鹸のようなものが盗まれた。最近僕の最後の石

¹³⁷ — フックスはオランダ貿易会社 (NHM) の勤務者家族用基金から金を受領した。この援助団体はNHMの社長夫人により設けられた。フックスがここでファン・Eさんの名前を消したのは、多分信用できない人物や日本人に読まれることを考慮したからであろう。ファン・EさんはH.J.E.ファン・エンター氏で、NHMのスタッフである。S.v.L氏はjhr.J.C.W.ストウリック・ファン・リンスホートウン氏で、NHMでは国内銀行業務部に勤務していた。

餓半分、－ [マックス] おじさんからもらったのもの－も盗まれた。なぜなら僕はそれを蛇口のそばに置いていたからだ。それに手ぬぐいもなくなった。

この間はラウティング [婦人] さんからもらった長い、まだ使ったことのない鉛筆が見あたらなかった。それを釘の入った小箱に入れエドゥガー [ラウレンス] の棚の上に置いたのだが、全く馬鹿なことをした！僕は戻って来ると、非常にびっくりした。鉛筆はもうなくなっていたのだ！そこらじゅう探して、ついに [レインダートゥ] ステイハーフック [組長] に報告した。翌朝の点呼の際、－収容所監視が既に家宅捜査をしようとして立っていた－ステイハーフックが僕のなくしたものを発表した。一人の少年がその時、僕の鉛筆を溝で見つけたと主張した（非常に奇妙だ）。もちろん僕はうれしかった。班の事務所で僕たちはもう一度取り調べられた。その少年は鉛筆を見つけたのではなく、持ち去ったことが今はっきりした。いわゆるそれで僕をからかおうとしたのだ。くだらないからかい方というものだ。僕は何を信じるべきなのか分からない。とにかく彼はこの家ではもう信頼されないだろう。ともかく重要な点は鉛筆が戻ってきたことだ。そしてこの事を大変ありがたく思っている。さもなければ日記をつけることも諦めなければならなかった。

フックス

1945年1月26日

入浴後僕はディック [バース・ベッキング] のきれいな洗濯物を返すため向かい側 [バロス側] へ行き、バターミルクも持って行った。僕はとてもまずいと思うが、ディックはこれをもらうためなら何でもするのだ。

フックス

1945年2月2日

パンと一緒に塩漬けきゅうりを食べた。ものすごい大成功だった。一番小さいものはヘンク [カルスホーヴン] とハンス [ヌウマン] に分け、大きいのは一人で平らげた。[...] 夕飯後、僕は点呼30分前まで働き続けた。それから僕はドゥ・ラウター [ドゥ・ヴィルトゥ] の所に寄り、楽しく話し合い、タバコを吸った。彼は本物のタバコを奢ってくれた。手製巻きタバコではなく紙で巻かれてあった。[...] イアリック [ヌウマン] が用意してくれた紅茶をまだ飲む。彼は紅茶が残っていたので、ここに持って来てくれた。

フックス

1945年2月4日

今朝9時半まで床に就いて本を読んでいた。その後ハンス [ヌウマン] と一緒にブラカン [家の裏側] を掃除し、ウビ [キャッサバ] の葉を摘んで洗った。ヘンク [カルスホーヴン] は部屋を片付け、葉っぱを刻んだ。

フックス

1945年2月8日

今日僕はまたヴィムの父親 [ドゥ・ラウター・ドゥ・ヴィルトゥ] を訪ね、そこでタバコを吸った。明日彼は山岳砲兵隊へ行き、もしかしたらそこでヴィムと会えるかもしれない。彼 [ドゥ・ラウター・ドゥ・ヴィルトゥ] は明日誕生日だ。僕は日曜日にプレゼントとして僕たちのスープをあげようと思う。

メィムリンク

1945年2月12日

僕はこの頃ヤン [ハーリング] と [グッツ] ナスツツをあまり見ない。彼らは二人でいるだけで十分で、そのドゥ・ヴィルトゥ兄弟を徐々にひどく反感を持ちはじめた。初めのころ、僕たちは夕方、時々彼らの所に行って本を読んだのは、ここにはランプがなかったからだ。今はそうせずに早く床に就くか、新しいお隣さんに行って本を読む：彼らはヨアリツマさん、トニィ・ベアクマン、ヴィーブルン・クウホーン、ヴィム・ホーフンハウスとフレディ・スタウトゥだ。

しかしヨアリツマさんは結構若く、30才ぐらいで話し好きな人だ。1937年にオランダからエジプトへ行き、その後イギリス領インドへ送られた。彼はシェルに勤務していた。そういう訳で、結局オランダ領東インドに至ることとなったが、なるべく早くオランダに戻りたかった。しかしそうならず、彼はタワナン [抑留者] となった。今では組のトーコー責任者として、そして将来勉強したい英語の先生として時を費やしている。彼は朗らかで、快活で、騒々しかった。時々ほんの少しありきたりであるかもしれない。時には僕たちの所へ来て「ボーム クラス [激しい討論]」をし、中断なくオランダのことについて話す。しばしば表面的にはなるが、こういう人とあらゆる話題を話し合えることは楽しいことだ。 [...]

ヒルクウ [ファン・ダー・ハーストゥ] は未だ入院している。[...] もう長い間彼は家に戻っていなかった。彼は家の中の雰囲気が非常に悪いのでしり込みしているようだ。まあ、雰囲気はしばしば良くはないのだ。ある種の少年たちは同居するものではない。彼らは非常に違

うのだ。その内の一人は本物のエゴイストで、時々ものすごく不機嫌になる。しかし量があり、質の良い食事を貰える見通しがあると、とても親切でうんざりする歌を歌うのだ。もし彼が消え去ったら、ほんとにほっとすることだろう。他の若者たちの一人もエゴイストだが、それほどひどくない。だが彼もよく機嫌が悪く、そっけなくがさつだ。両者とも非常に冷淡で、団欒とは何であるかを知らないのだ。そして彼らの人間関係も良くない。一人は本当に自分の兄をひどく嫌い、いなくなれば良いと思っていた。これはまだ表面的なことだけだ。外面からでは気が付かないが内面的なこともある。だが僕はある種のこととは話す必要がないと心の底から感じる。なぜなら彼らには分かるわけがないし、精神的にだいぶかけ離れているからだ。

ヒルクウ [ファン・ダアー・ハアストゥ] は退院した時、彼と僕と一緒に部屋の住むことを最も望んだ。しかしそれは厄介だ。僕はそう簡単にここから立ち去れないし、チャールスと僕は今でも親友だ。僕たちは小さな菜園を持っているのだ！ 既にカチャン [ピーナッツ]、トマトそしてサラダ菜を植えた。サウイ [白菜] とロンボック [唐辛子] は僕が種をまいた。草木や土をいじるのは確かに楽しい。お母さんがこれを聞いたらくすくすと笑うことだろう。

フックス

1945年2月24日

今日は食事の分配の際、ものすごい騒ぎが起きた。それは誰かがごはんの量を取り過ぎたことで始まり、調べが行われたが張本人は見つけられなかった。その後僕たちは炊事場から余りにも少ない量の豆をもらい、スープは足りなくなかった。僕たちの食事は他の人たちより30分も遅れた。今では厳しく注意され、各自自分で食事を取りに行かなければならない。

フックス

1945年2月26日

今朝、既に早くから喧嘩が起きた。バタビアから来た人たちが到着し、11才と12才の少年たち150人だと分かった。[...]いつものようにヤップは彼らの為に食糧を集めなかったので、僕たち全員は一人前分の10分の1を彼らに譲らなければならなかった — 年配の人たちの間でかなり不平が出る原因となった。なんてひどいやつらなのだろう。

今日は授業がなかった。僕たちはスープを売る人が通りかかるまで話し続け、先生 [ヴァン・ダアー・スホートゥ] は僕に一人前分奢ってくれ、彼はスープの汁、僕はスープの実をとった。僕たちは直ぐに取引を始めた。彼はいつも僕のスープの汁をとり、僕は彼のスープの実の野菜を取った。これは僕には非常に有利な交換なのだ。こうして今晚僕は2人前の野菜とテンペイ [発酵した大豆からできたクッキーの一種] を食べた。僕は20本分のタバコの残りくずと

カウン [ヤシ葉のタバコ用手巻き紙] をもらい、とてもうれしい。彼は本当にとっても感じのよい人だ。僕はできる限りお返しをするのだ。特に現在彼は病気なので、なべを洗ったり、本を取りに行くなど僕は何でもやってあげることができる。このように互いに助け合うのだ。

フックス

1945年2月28日

午後の授業が中止になったのは、少年たちが雑役をしていたからだ。先生 [ヴァン・ダー・スホート] はその時僕を描いた。つまり彼は描き始めたのだ。先生が描いている間、僕はとても気持ち良くタバコを吸った。時間が経てば経つほど、もっと親しい友だちになっていく。僕は彼の本を借り、今度彼は僕の本を2冊借りた。今日から、彼のために料理もする。以前は他の人がやっていたが、その人は余りにも高くなったからだ。今、どこかにスープ売り人の火があり、僕はその上へのせ、煮えるまで少しかき回した。それから干し草保温箱の中に入れ、こうして食べ物ちょうどよくやわらかくなる。そうすれば彼にとって消化しやすくなり、少しも胃に負担がかからない。

フックス

1945年3月8日

その後僕は便所の隣の土に生えたバイエム [ほうれん草] を全て取り入れた。それからゆっくりとほうれん草を少し取った V.d. L. と喧嘩をしたが、僕は口答えして、全部くすめた。

ドゥ マイイアー

1945年3月11日

今僕らのトーコー責任者が病気で、彼の代わりに [ヨープ] ヴィルムスはその役目をする。それが有利だというのは、手伝いに対して、僕は昨日まだ結構残っていたグラ ジャワ [赤シュロ糖] のかごをなめることができた。100グラム以上は残っていたと思う。そして今日は彼から3本の太いにんじんを貰った。

フックス

1945年3月12日

ハンス [ヌウマン] はバイエム [ほうれん草] を摘み、僕はこの部屋と廊下をきれいにした。それからイアリック [ヌウマン] も来て3人でバイエムを刻み、ハンスが料理した。僕は先生 [ヴァン・ダー・スホートウ] のために少し人参を料理し、先生用にグラ ジャワ [赤シュロ糖] 1キログラムを溶かし、料理し、ふるいにもかけた。

ドゥ マイイアー

1945年3月17日

全てのウビ [さつまいも] 畑は点呼の後、菜園班のものとなるだろう。つまりお互いに余りにもたくさん盗むからだ。わかるかい？ そういう訳で僕たちは点呼の前にできるだけウビを掘り出し、それをにんじんと混ぜてスタムポットをつくった。

ドゥ マイイアー

1945年3月20日

彼 [エドゥガー・ラウレンス] は数日前質のよいまき糸を売らせ、それで [マックス] おじさんはヤップのところで10ギルダーもうけた。エドゥ [ガー] はこの金を共同貯金箱に入れた。いい奴だろう？

フックス

1945年3月24日

僕はここにもトマトを数本植えるつもりだ。苗木は菜園班から盗む。どっちみちそこには沢山あるのだから。しかし彼らに見られない様に気を付けなければならない。さもないと僕は牢屋に一週間入れられてしまい、そのような気には少しもならないからだ。

メイムリンク

1945年3月29日

昨日僕たちはヒルクウ [ファン・ダァー・ハアストゥ] の誕生日を祝い、昼食に彼は僕たちの所に居残った。隣の人からは棚板を借り、タオルを数枚置き、ジャムの瓶に花をさし、さあ、僕たちの昼食のテーブルだ。初めに自製のうずら豆スープ、こしょうが入り過ぎ、豆が少なすぎるが、結構いける味だ。ヒルクウは熱くなり、頭を蛇口の下に置かなければならなかった。彼の舌は辛い香料に弱いのだ。その後スリナムのスベリヒユとカチャン [ピーナッツ] ソースで煮たサラダ菜、さらに僕たちのロールパンを食べた。

これには説明があるのだ。サラダ菜は僕たちの菜園から取った。サラダ菜の結球は最近ものすごく成長し、昨日僕たちは6個取って来られた。スベリヒユはヒルクウの生野菜で、毎日取れるのだ。カチャンソースは未だ困難な問題だった。僕たちはトーコーに200グラムのピーナッツバターを注文することを決めたが、残念ながら最近はまだピーナッツを注文できなかった。僕はヤン [ハーリング] と [グアツ] ナスツツのところに行き、手助けを頼んだ。僕がヒルクウの誕生日のために必要なのだと話した時、彼らはとてもよく助け、残っていた最後のカチャン [ピーナッツ] をくれ、返礼すら受け入れなかった。それから僕たちは色々なものと少量の水を入れおいしい濃いソースをつくった：ロンボック [唐辛子]・玉ねぎ・こしょう・塩・アッスム [インドネシアのタマリンドの実]・砂糖・ジェルック [柑橘類]。ヤンとグアツにはサラダ菜2個にソースをかけ、ヒルクウに届けさせた。

Revenons à nos moutons. [本題に戻ろう] (このフランス語は昨晚ピントー先生に習ったばかりだなのだ)。ヒルクウは余りたくさん食わず、大部分のロールパンを残した。僕たちはマグカップで甘いコーヒーを飲み、プディングも少し使った。最後にジェルック マラン [大きなマンダラインみかんの一種] を一部使った。[...] Jさんはバタビアから移ってきた少年たちと一緒に家に行き、彼は今ではその家の責任者だ。今は彼らには指導者が必要で、そうでなければ何かおかしいことになるだろう。Jさんに関しては、僕の尊敬の念は少し衰えた。彼は視野が狭く、理解が少なく、知識が非常に浅く、うわべだけのよう人に見える。ある種のこと、例えば食事について彼は全く心が狭い。僕たちは数回彼の授業を受けたが、信じられないほどつまらなく、中身のない話だ。大部分は既に知っていることで、彼はもったいぶって晩までずっと話し続けるのだ。

フックス

1945年3月29日

近頃僕がいつも点呼の後に食事をするのは、先生 [ヴァン・ダァー・スホート] の食事を暖めるのに時間がかかるからだ。火の加減は以前ほどもう良くない。[...] 僕は未だ毎晩先生の所で話

をしたり、手製巻きタバコを吸ったりする。すっかり習慣になり、僕はこれを絶対に見逃すことはない。

フックス

1945年3月30日

今日ハンス [ヌウマン] と僕は休みをとった。長く床につかず、ポップを食べた後部屋を清掃した。それから僕は炊事場に押し入り、たくさんの木が未だついていた腰掛けを持って来た。これでまた一週間火をおこせる。いすの座部からサンダー [ドゥフ] は下駄を作るつもりだ。これは丁度良く軽い履き物になるだろう。今僕が履いているのは重過ぎ、一足で1800グラムになる。僕以外は誰も履いて歩けないので、盗まれる心配をする必要もない。

[...] Van E. さんに呼ばれた時、僕は既に [とうもろこし粉用の袋づくり] 終わっていた。S.v.L.さんはまた僕のために何か持っていたので、楽しい復活祭になることだろう。¹³⁸

フックス

1945年4月1日

僕は午後スープをまた買い、ハンス [ヌウマン] にも少し分けてあげた。彼は十分の金がないし、僕一人だけで食べることは気分の良いものではない。

ドゥ マイイアー

1945年4月5日

今晚最初の人たちに移動の召集があった。[...] ハリィ・オッスンドウライヴァーとディック・ロークゥは一緒に行く。ディック・ロークゥは文字どおり、そして比喩的にもヨブ・バイスターの親友で、ヨブは別れなければならないのを非常に残念に思っている。彼は少し涙を流した。ディックと一緒にいられるようにおじさん [マックス] は全力を尽くしている。

¹³⁸ — フックスはこの抜粋日記の上部に S.v.L.f 5 [5 ギルダール] と記した。(脚注 (135 参照))。

フックス

1945年4月6日

先生〔ヴァン・ダー・スホートウ〕はまだどこに移動されるか知らない。僕は残ってくれるように願う、そうでなければ僕の唯一の年上の友だちをなくすことになり、ひどく不快に思う。彼も嫌だと思っている。この頃僕たちは毎晩、これが最後になるかもしれないと話している。

フックス

1945年4月9日

この家の同居人はそれほど悪いとは思わない。ところで僕らは皆同様、極貧の雑役係りで、ボスマ雑役長の奴隷なのだ。

サロモンズ

1945年4月13日

僕らはマーカン ヘバットウ〔豪華な食事〕用に貯金をするため、6人で一日中食べ物を売った。僕らは15個のロールパンで作ったパンのプディングとグラ ジャワ〔赤シュロ糖〕・ショウガ・シナモン・コーヒーとマーマレードが入ったパップ6人前分を作りたいのだ。

ドウ マイイアー

1945年4月23日

ハンス・クリックが夕方にたいていここに来るのはここには紅茶があるからだ（もちろん浸水電熱湯沸かしがある）。そして僕らは彼の紅茶にも砂糖を入れ、朝はパップにグラ ジャワ〔赤シュロ糖〕を入れる。

ファン エングルンブルフ

1945年4月30日

ラウディ先生は僕に25セントをくれ、うずら豆の定期購入券を払った。

フックス

1945年5月7日

僕は今日ひどい不運に遭った。バターの缶を窓に置き、お皿を数枚取った時、それが外に落ちたのだ。僕は立って、取りに行こうと外に出たが既に消えてしまった。それはもう古い缶で殆ど壊れていたが、とにかく大損害なのだ。それでたくさんのスープやブディングを作ったものだ。代わりのものを既に注文したが、2ギルダーもかかる。

フックス

1945年5月8日

僕はこの頃運が悪い。タバコの入った缶が盗まれ、一日中吸うものが何もなかった。なぜタバコの缶を盗むのか僕には分からない；もし僕に聞けば、十分手巻きタバコをもらえるものを。

ファン エングルンブルフ

1945年5月10日

今朝看護人が来て、ラウディ先生にあいさつを届けにきた。その人はバロス [第5] の病室にいた僕のことを覚えていた。僕が一文もないと聞くと、理由もなしに1ギルダーをくれた。看護人たちは懐も食事も良く、かなり親切なのだ。[...]僕は [J.M.] バイエンス先生と知り合いになり、彼はラウディ先生の知人で、もと教師だった。言われるごとき愉快的な男の人だ。

ドゥ マイイアー

1945年5月11日

[マックス] おじさんは油を買い、それは殆どバターの缶いっぱいになり18ギルダーした。おじさんは10ギルダーを昨日ヤンスン先生から受け取っていた。彼の奥さんが誕生日だったのだ。思いやりがあるね？ いやそれだけではないのだ。エドゥガー [ラウレンス] と僕は各自ヤンスン先生から詰めロールパンも貰った。もちろんのことこれは4人で分け合った。うまかった。

フックス

1945年5月17日

不快なことが起きた。僕はロントン [バナナの葉に巻かれた蒸しご飯の包み] を注文し、受け取り、ハンス [ヌウマン] がそれを棚の上に置いた。僕が家に戻った時には、盗まれていた。この間は家の中で1ギルダも盗まれた。誰がやったのか知らないが、今や問題はきちんと片付けることだ。僕が犯人を捕まえられたならば！

フックス

1945年5月21日

僕は腹を立てている。パパイヤを盗んだことでファン・ベルクラア [ルーウィガジャの雑役長] に捕まえられた。本当は直ちに首にさせられるのだが、僕はたいへん痩せているので、多分そうならないだろう。彼はどの罰を与えるかまだ考え込んでいるが、今日の午後僕に何も言わなかった。明日彼に聞かなくてはならない。

フックス

1945年5月22日

今日の午後少し静かだった時、菜園班のウビ [さつまいも] 畑に行き、ウビを500グラム盗んだ。明日の昼用に今晚もまた行こう。

フックス

1945年5月31日

全く何の通報もないので、うまく行っているのだろう。チマヒ第4ではヤップは人々の持参する食糧、チャベ [唐辛子] や塩さえ全て奪い取った。やつらはこういうことにかけては僕たちよりずっと卑劣で、僕は先生 [ヴァン・ダー・スホート] を気の毒に思う。今は料理を許されていないので先生はさぞ胃に負担をかけているだろう。浸水電熱湯沸かしも使えない。僕たちは少なくともここでは引ったくったバラ [品物] を浸水電熱湯沸かしでよく煮ることができる。

ドウ マイイアー

1945年6月2日

僕はいつも『お年寄りの紳士たち』を見て笑ってしまう。すいませんが、老齡に対する尊敬心はここではもう持っていない。少なくとも老人たちに対して何の尊敬もない、やることが時々幼稚なのだ。

ドウ マイイアー

1945年6月3日

おじさんが16才以下の子供たちは全員坊主にならなくてはならないと言って、僕はそれを信じた。彼は僕に直にやるように忠告し、「今、自発的にやる方が明日無理矢理にやらされるより良いぞ」と言った。僕は彼の冗談にまんまと一杯食わされた。おもしろい冗談だと思わないが、僕は今自分を青二才¹³⁹ として見なすことができる。これはマックスおじさんがするようにいつも物笑いの種にされるものだ。

ドウ マイイアー

1945年6月5日

近頃僕たちの菜園からかなり盗難があるのは残念だ。既に相当多くのトマトがなくなり、ロンボック [唐辛子] も奪われた。そこで僕たちは余儀なく直に摘み取らなければならない。

ドウ マイイアー

1945年6月14日

幸いにも僕らの分配分を7人で分ける必要がなくなった。もっと多くの量が食べられるのは、KさんとAさんが去ったからだ。ヨープ [ヴィルムス] は今はルーウィガジャ [農園] で働いているので、一日中いない。しかし最初にした二人は自分たちの分が貰えるよう取り計らった。今晚ここでトマトが8つ盗まれた。この盗難は余りにも良く考察した連中の仕業にちがいない。これは故意にやられたことだとはっきり分かる。というのはまさに見事につやつやしたトマトが全部なくなっているからだ。[...] その上その二人はまさにも収容所監視人なので、夜警の際、

¹³⁹ — 昔オランダでは大学の新生を坊主頭にし、その学生たちは青二才と呼ばれた。

このようなことを簡単に気付かれずにやることができるのだ。悪党め！

だが彼らがやったという証拠は後で来るさ。エドゥガー [ラウレンス] は蛇口のところで黒い布のあるバッジを見つけた。これはAさんの夜警バッジで、それが僕らの蛇口で何をしているのだろうか？ この蛇口はちょうどトマトの近くにあるのだ。僕らはこの件について全ておじさん [マックス] に説明し、おじさんはこのことを彼らと話をするだろう。彼は卑劣なはずらだと思うと言った。だが話し合いの後、彼は僕らには黙っていた。[...] 彼らはトマトを7ついっぺんに盗めただろうに、今はもう、ここには住んでいないのだから。ヨーブは彼らと喧嘩をし、彼らは自主的に引越した。

ドゥ マイイアー

1945年6月15日

ゆでたうずら豆の分配がトーコーで始まった。知ってるだろう、もちろんうずら豆を渡した人たち用だ。毎日その人たちは100グラムの生豆を受け取り、つまりゆでると約175グラムになる。ここでは渡した蓄えがある限り参加できる。しかし僕らは何も渡さなかったので、参加してはいけなかった。だが、[マックス] おじさんはいつも僕たち2人前貰えるよう試みるのだ。リチク [ずる賢い] ね？ というのはおじさん自身が分配人で、トーコーでは時々余計にあげるのだ。昨日もそうで、一人がもらう分は195グラムだった。しかしこのはかりと合わず、それは170グラムを指すだけだった。こういう訳で彼にはもちろん何も残らなかった。僕らのはかりは壊れていたのだ。僕はほっとしている。盗みものには不運が付き物だ。考えなくてはならない、そうじゃないかい？ しかし彼によるとトーコーや事務所では全てが墮落しているというが、それは言い訳にはならないと僕は思う。むしろヨーブ [ヴィルムス] がトーコー責任者のままでいれば良かった。彼はあまり墮落してない。

ドゥ マイイアー

1945年6月16日

昨日パップが2人分足りなかった。[マックス] おじさんは2人前分追加を炊事場に取りに行かせ、その子はうまく貰えた。今日おじさんは新しい分配係りに警告した。「十分かどうか初めに今物差しではかりなさい。なぜなら炊事場で少なく配ることもあるからだ」。分配係りはいや、その必要はないのだ！ 僕らは今日520cc配れる分量があるのに、一杯500ccの杓子を使い、そして昨日は一人540cc分あるのに500ccの杓子を使ったのに、既に足りなくなった。というのは沢山くっついていてからだ。おじさんははっきりと警告して言った。『もし足りなくても、もう一度誰かを炊事場へ行かせることはできない。あまりにも馬鹿げている。』お

一、いや、できる。できるだろうとあるその人は言い、杓子を平らにすることさえ拒絶した。『君の責任だぞ』とおじさんは言った。最初に彼は杓子いっぱい配り、それから普通に、最後には少なく、もっと少なく配り、ついには足りなくなった。さあ、どうすれば良いのか？ 各自一さじ分戻せば良いが、大多数は受けつけなかった。それは余りにも少なすぎ、おじさんは残りをその男性のポップで埋め合わせたかったが、その時のけちん坊さを聞くべきだった！ ちがう、間に合う、ちょうど十分にある。足りるから、その必要はないんだ。嘆くようなわめき声を出し、もちろん最後の二人がもらったのは余りにも少量だった。

ドゥ マイイアー

1945年6月17日

[マックス] おじさんは今日不正行為をしてうずら豆5人分を貰った。これらに質の良いサンバルを入れて食べた。味は良かった。『盗みものには不運が付き物』とは言われているが、こういう時代には仕方がないのだ。[...] 僕もこの蛇口のそばに立っていた少年と喧嘩をした。その子は他の組なのでここに水を汲みに来る必要はなかった。その上おじさんは入浴をたく、僕に水を運ばせたのだ。その子は退かず、そこで僕は押しやった。その子は泥の中に転んで落ち、立ち上がり、汲み取った水を放って、僕はずぶ濡れになった。その結果洋服は濡れたが、その子はもう何の水もなかった。その時おじさんが来て、その子は足をがくがくさせ、しっぽを巻いて逃げて行った。その子の服は汚れ、僕の服は濡れただけだった。その間に、大勢の人が集まってきた。そこらじゅうから人が押し寄せ僕らを見に来たが、殴り合いまでにはならなかった。しかしそれはもう少しのところだった。なぜならば僕はかっとなっていたからだった。

フックス

1945年6月18日

今晚、僕たちの家の少年たち数人と収容所菜園をクルブットウン[荒らし奪う]していた。9時半ごろ外に出て、もしかしたら誰か信用できない者がぶらついていないかどうか見るためにスベリヒユの苗床のそばを歩く。まだ明るかった数時間前に、良い苗床を選んでおいた。誰もいなかったら、直ぐに草木の中に飛び込み、両手でできるだけ多く、素早く掴み取るのだ。2つ数えるだけでたいい十分で、時には植物全部を引っこ抜くこともある。さあ、明日は少なくともビタミンを得られる。

ドウ マイイアー

1945年6月24日

20才以下の少年たちと20才の者たち全員は甘い雑役ロールパンを追加に貰った。その生地はとうもろこし粉と砂糖でできていて、味は最高だった。上にはつや付けがされ、本当に味覚をそらされた。ヨーブ・ヴィルムスは突然20才以下になった（ヨーブはいつも得になるなら、20才以下になったと思うと、また20才以上にもなる）。[マックス]おじさんもSさんも同じことをした。Sさんはもうおじさんとは呼びたくないが、彼らはタバコも貰ったというのに、呆れたことに子供じみている。おじさんに関してはかまわないと思うのは、彼は一度もタバコを吸ったことがなく、もらったタバコをくれるのだが、Sさんは常に利益を得ようとしてあらゆる方法を試す。本当にしみつたれた人で、ヨーブにほんの少しのタバコさえあげたくないのだ。

ドウ マイイアー

1945年7月3日

エドゥガー [ラウレンス] と猛げんか。

フックス

1945年7月7日

最初に乗った後 [ダンス運びの雑役]、僕たちが雑役ロールパンを貰えるだろうと耳にして、大勢の少年たちが入り込んだ。このようにして僕は押し出され、あの嫌な奴、[L.J.] ワーフナー [雑役長] に僕が雑役からずらかりたかったのだという罪を負わされた。彼は僕を事務所に連れて行ったが、スホートウルさんは罰を与えたくなかった。ワーフナーは覚えておけ、また来るからなと言った。

フックス

1945年7月12日

今日僕たちの家でまた盗みが起こり、それは僕のトランクから取られた雑役ロールパンとパン粉だった。ロールパンは僕のではないが、パン粉は僕のものでおおよそ4分の3個分のパンに値した。それから僕は全部のパン粉でパップをつくり、食べてしまった。他の人のために残しておく気持ちなど全くなく、それなら非常蓄えなど無しだ。

ドウ マイイアー

1945年7月16日

昨日16才から20才までの男子たちに又トーコーパンの番が来た。[マックス] おじさんはフリッツ [彼の息子] の誕生日のためにトーコーパンを3つ隠しておいた。

フウクンス

1945年8月5日

[食糧増加の影響で] 雰囲気も良くなっている。これが悪かったのは、僕たちはお互いに羨んでいたのだ。

抑留所外部とのコンタクト

ドウ マイイアー

1944年8月1日

それからヨアン [デン・ブスタートゥ] は軍病院で彼のお父さんを見た。— そのために彼は兵補と一緒にニッポン軍のウサギのために草刈りに行ったのだ。しかし彼のお父さんには何もあげられなかった。僕はシャックおじさん、そしてここチマヒ男性収容所 [チマヒ第4] に居るヨーブ・ランヌフトゥおじさんからもよろしくと言われ、ケイス・ファン・ズウェットゥとは直接話をした。他の知り合いたちはもちろんバロス収容所 [バロス第5] にいるのだ。というのは僕らはそことは全く連絡がないからだ。

ドウ マイイアー

1944年8月6日

ヨアン [デン・ブスタートゥ] はまた今日も彼の父親の所に訪ね、ひげそり用石鹸を手渡すことかできた。彼自身はバターと砂糖つきサンドイッチの入っている小さな包み、クッキーの入った袋をもらい、このクッキーを殆ど家の全員に御馳走してくれた。そしてフン・キュー [グリーンピースの粉] 2箱と小さなハーモニカをもらい、僕はこれで既に『*Ik kom van Zuid* (南から来た)』の曲を吹けるが、ものすごく下手なのだ。

ドウ マイイアー

1944年8月9日

昨日ヨアン [デン・ブスタートゥ] は父親とは会えなかった。なぜなら病院では直に追い払われ、どこか違う場所で草刈りをしなくてはならなかったからだ。途中で、太った欧印混血の女性 (多分ボスさんだろう? それとも既に収容所に抑留されているだろうか?) がアッスム [インドネシアのタマリンドの実] のクッキーの缶を放り投げた。やさしいだろう?

フックス

1944年8月20日

僕は今日父に手紙を書いたのは、母がどこに居るのか知らなかったからだ。僕たちは20語で書き、その他ニッポンにより指示された3つの文章を書くことが許された。僕たちは12の文章から3つ選んでよかった。初めのうちは英語で書いても良かったが、後にはマレー語¹⁴⁰ に変わった。

フックス

1944年9月6日

今日の午後、兵補の兵舎から食糧を集めさせられた。僕たちはグラ バトゥ [氷砂糖] を525キログラム持って来て、僕は雑役中だったチマヒ第4からの多くの知り合いと話をした。もちろんのこと沢山つまみ食いをした。

ドウ マイイアー

1944年10月3日

今日はがきが届き、その中には僕宛てのものもあった。ああ、なんてうれしかったことか、理解できるだろう。はがきは既に一ヶ月以上も前になるが、お母さんからまた便りがあるのは本当に素晴らしいことだ。多分僕らのはがきも今日着いたかもしれない。

フックス

1944年10月18日

僕たちはここで第15キャンプ [第15大隊] がバロス第5とチマヒ第4に行くという通知を受けた。そこには父もいるのだ。もしかしたら僕がここにいるという知らせを送ることができるか

¹⁴⁰ 一 軍隊の管理下で抑留者たちは、抑留されていない者、他の収容所の抑留者および戦争捕虜宛てに手紙を書くことを制限付きで認められていた。1944年7月から1945年8月の間、バロス第6の抑留者は4回葉書を送る機会を得た。しかし手紙の内容は様々な規則で縛られていた。10個の規制文章から、3つの文を文字通り使用しなくてはならなかった。規制なしの単語を10字から20字ほど書くことが許されたか、これも検閲された。ジャワ宛てには、更に他の規則が適用され、ジャワにある他の収容所宛ての葉書の場合はマレー語で文を書かれなければならなかった。ジャワ以外の収容所へは英語の使用が許された。(Van Velden, 326-327)

もしれない。

メィムリンク

1944年10月20日

昨日で僕がここ（チマヒ）に来てから一年になった。僕は前の晩しばらく外でヴィリィ・アイスマ¹⁴¹ と話をしていた。彼は家のことは余り知らなかった。彼は母、エリィ [妹] とハンシュ [弟] とまた時より会ったのだ。皆は今でも[E.J.] ブッフリー [ドゥ・ブラウン] さんのところに住んでいる。ハンシュはいたずら坊主で、喧嘩をする以外は何の野心もなく、エリィは今でもメガネをかけ、丸顔になった。

チャールスとフレットウ [ドゥ・ヴィルトウ] は家から金と薬ももらった。ヒルクウ [ファン・ダァー・ハアストウ] は缶詰をもらうのだったが、その少年は誤まって違う人にあげてしまった。しかし少年は彼の家のことを話すことができる。僕らは少年たちにチハピットについて尋ね、そこで起こったあらゆる出来事をすべて話させた。

メィムリンク

1944年10月26日

ヤン・ハウジンハーも [収容所の病室に] 寝ている。彼は胸に炎症があり、お母さんからよろしくとのことを僕に伝えた。彼は出来事を話してくれたが、僕は本当はもう少し知っていたのだ。エリィはもっと太り、ハンシュはたくましい腕を持ち、頑丈で、丈夫ないたずら坊主だ！ 彼は朝いつも炭の火を取りに行った。両方ともまだ授業を受けているらしかった。

ドゥ マイイアー

1944年11月16日

昨日収容所委員会は女性収容所から手紙を受け取った。ここの収容所責任者のスホートウルさんの手紙に対する答えだった。当り前の事だが、とりわけ僕らのお母さんたちから、よろしくという伝言があった。更に、今では僕らが去った時よりもその人たちの食事は良くなり、特にトーコーの商品に関しては良い。そして僕らには優れた医者たちがいて、教会もあると聞いて喜んでいた。それは全てたいへんすばらしいことだが、移動については書かれていない。従って彼女た

¹⁴¹ — バンカ出の年下の友だちで、最近チハピットの女性収容所から来た。

ちが既に立ち去っただろうとは考えられない。ステイハーブックさんもそれに対し取り消し通知があったと言った。しかしこの件に関し何が確かなのかまだ分からない。

フックス

1944年11月27日

僕は知人がいるかどうかを見るために向こう側に行き、一番若いヘンニクと話した。[バタビアには] 女の人たちもいるが、たいていは欧印混血で、母親はいなかった。バンドンの女性たちはアデックとストラウスヴァイク¹⁴² に収容されている。その位置はひどいが、食事はうまくいっている。これらの男の子たちはバタビア郊外の少年収容所 [グロゴール] では実にひどい目に会った。

サロモンズ

1944年12月18日

昨日、17日ヤン・ヴィアソンは父親が第4大隊で死亡したと言う通知を受けた。同じことが2週間前にロバトウ・スホルにも起きた。彼は父親が第4大隊にいたことを知っていた。彼は食糧を集めに行った。彼が中に入って来た時、棺を見て、父親の死を聞いたのだ。

ドゥ マイイアー

1945年1月1日

どのような状態においても、お母さんとお父さんはこの日を祝うだろうかどうかと僕は考える。お父さんに関してはもちろん何も知らないが、噂によると、カレーズ収容所全体が立ち退かされ、チハピットは4000人、主に高官の婦人たちが引き払われたにちがいないということだ。

他の人たちはスマラン、アンバラワ又はサラティガのどこかにいるに違いなく、従って11月15日の噂は残念ながら一部正しかったのだ¹⁴³。お母さん、おばあちゃんとエリィも遠くに連れ去られたのだろうか？

¹⁴² — アデとストラウスヴァイクはバタビアにある収容所で、それぞれ市外と市内に位置した。

¹⁴³ — 項目「戦争経過の情報と噂」の抜粋日記ドゥ マイイアー、1944年11月15日参照。

フックス

1945年1月4日

僕たちはヤップのところで家族について問い合わせ、家族のところへの移動を申請することができた。バタビアへさえ移動することもできる。僕は直に父とペーター [弟] について尋ねた。いつ返事がもらえるのだろうか？

サロモンズ

1945年1月11日

家族にはがきを書いてもよかった。多分母親たち宛てになるだろう。

フックス

1945年1月11日

また手紙を書くことが許された。僕は第15大隊にいる父に書こう。そうすれば僕がそこに行かれるかもしれないことを少なくとも知らせることができる。

フックス

1945年1月19日

僕はファン・ダァー・スホートゥ先生を探した。彼は僕をまだ覚えていた。彼が僕に話せる最近の便りで、唯一の知らせは [1944年] 4月母がまだプンチャク¹⁴⁴ にいることだった。

フックス

1945年1月21日

今朝僕は向かい側の Van E. さん¹⁴⁵ の所に行きたかったが、門が12時まで閉まっていたので、

¹⁴⁴ — フックスの母親が抑留されるのを防ぎ、日本国市民権法で彼女のデンマークの国籍を再所得するために、彼の両親は離婚した。これはフックスの妹イングゥボァフと弟のペーターにも適用した。日本はデンマークとは戦争をしていないと考慮しているため、3人は収容所外に住み続けることができた。

¹⁴⁵ — H.J.E ファン・エンターさん。脚注 #137 参照

午後を訪ねた。彼は何も伝えることがなく、ちょうど僕から全てを聞こうと思っていた。僕が今知っている全てとは、母が1944年5月まで抑留されずプウンチャクにいたこと、そして父が第15大隊にいて、かなり多額の金を都合できたことだ。彼は僕からのよろしくの伝言を告げるように努めるつもりだろう。

その他、向こう側のディック・バース・ベッキングと話した。彼には数ヶ月会っていなかった。とても楽観的で、だいたい3月頃になる「戦争が終わるだろう」と彼は考えていた。事務所ではそれが分かるはずだ。更に、憲兵隊が検査にくる恐れがある。このことを全て日記につけるのは本当は実に馬鹿なことなのだ。

フックス

1945年2月2日

かなり信頼できる情報では、第15大隊の民間人抑留者たちは一市の警備員は別一 バタビアに移動された。第15大隊には現在軍隊がいる。更にカレーズの女性たちは小型トランクだけを持参することが許された。チデン収容所では大きな家に70人が重なるようになって横になる。あいつら「日本人」はそういうことをするのだ。卑劣な奴等だ！

ドゥ マイイアー

1945年2月10日

更に僕らは家に手紙を出すことが許され、3行は選択し、20語は自由に書いてよかった。うれしい！直にこれが着けば、また家から早く便りが届くだろう。だが、できたら手紙をもらうよりもっとはやく家に帰れるとよいのだが。

フックス

1945年2月10日

今朝、僕は母に20語で葉書を書き、普通にプウンチャク宛てとした。それが受領されるかどうか本当に知りたいものだ。父に書いてはいけないのはヤップにより禁止されているからだ。男性抑留者たちは互いに便りをしてはならなかった。ドゥ・ラウター・ドゥ・ヴィルトゥさんはヴィム「彼の息子」と話した。彼は僕の父の知らせを未だ持っていた。父はバンドンに抑留されている。戦争が終わったら、僕は直にバンドンのパークホテルまたは「*... *」へ行かなければならない。父はこの前の8月にまた母に便りを出すことができたが、返事は未だもらっていなかった。

母は9月ごろにはまだプウンチャクにいたのだ。もちろんのこと僕はこれについてたいへんうれしく思う。父も僕がチマヒのどこかに収容されていることを知っていた。僕が父から受けた初めての知らせだ。

ヨーストウン

1945年2月11日

僕らは昨日はがきを書いた。今朝ヴィム [弟] がそれを持って行った。事務所では葉書は1枚のみ書いてよいと言った。僕らは1枚だけ送り、他の2枚はトランクの中に保存した。

メィムリンク

1945年2月12日

僕たちは再び葉書を家に書いた。3つの強制文章と僕自身のことばが20語だ。文章を選択するという嫌な仕事だ。今度は何か返事があればよいのだが。

フックス

1945年2月20日

ヘンク [カルスホーヴン] は山岳砲兵隊にいき、食糧を集め、彼の父親と話した。チマヒ第4でも飢えの時期だ。グヌン ボホンで自分たちが植えたウビ [サツマイモ] を1キログラム15セント支払わなければならない。クラッパー [ココナッツ] の油は一瓶10ギルダーする。僕たちのヤップは僕たちに1月に関して4000ギルダー借りがあるが、400ギルダーだけ払い戻した。2月についても同様であるが、ヤップはまだ一銭も返してない。こういう風にあいつらは僕たちのものを盗むのだ。そこでヘンクは全て聞いた。僕たちの食事に関してはひどいものだ。収容所外は途方もなく混乱しているに違いなく、もっと長く続くことはできない。

フックス

1945年3月2日

僕は新しく来た人たちから少し聞き出した¹⁴⁶。外の状態は現在のところひどいものだ。肉、牛乳や卵は手に入らず、闇米は1キログラム 2,50 ギルダーで、油は手に入らない。砂糖からアルコールをつくり、それで車に乗っている。だから僕たちは何ももらえないのだ。

外には砂糖もない。誰もが外でヤップから100グラムの米とさじ一杯の砂糖と塩をもらい、その他は自分自身で面倒をみなければならない。クーリーは一日 1,50 ギルダーする。大都市ではカリ [川] 沿いにねずみが死ぬように貧しい人たちが死んでいる。朝には霊柩車が死体を取り集めに来る。インドネシアの人たちはいったい何に喝采を送ったのか今痛感しているのだ。もし近くに空襲警報が鳴り、電気は消されていないくても、カンボン [村] は持ち場からそのまま機関銃で撃たれるのだ。

フックス

1945年3月3日

今朝ペーター・スタムは僕のところに、ピムとサンダー・ドゥフを連れて来た。彼らはチデンに4ヶ月、その前はクドンバダックに7ヶ月、その前はチャンジュルに7ヶ月抑留された。母は7から8ヶ月以前にバタビアへ引っ越し、未だに収容されていない。僕は母が未だ自由であると推定する。母はクラマットの外国人収容所にいる可能性もある。いつか外国人は抑留されるにちがいない。¹⁴⁷ この知らせを父に送るよう試してみよう。

フックス

1945年3月6日

パンを食べた後直に僕は向かい側のファン・Eさんのところへ行った。それは母からの知らせを伝えるため、そしてこれを父に転送できないかどうかを試すためだった。残念ながら、これは不可能だった。

¹⁴⁶ — 彼らはバトゥの出身。項目「輸送と収容」の抜粋日記ドゥ マイヤー 1945年3月3日参照。

¹⁴⁷ — 1943年9月から1944年9月までの間、外国人の女性たち及び子供たちはクラマット [バタビア] に抑留された。フックスも明らかにデンマーク人という『中立国』になると考えていたが、結果的に抑留から避けられなかった。脚注# 144 も参照。

フックス

1945年3月8日

午後、レインダート [ステイハーフック] が僕に通知を持って来た。僕は土曜日に軍事病院へ行くよう努めなくてはならない。そこで父から僕への知らせを持ち、手紙を持ち帰ってくれる人を見つけるのだ。病院へ行くのは可能であろうが、そうでなければ誰か他の人にそれを渡すのだ。同行できるように明日医者と話してみなければならぬ。これはすごい幸運になる。そうすれば僕は父に全てのことを書け、お金のことをきくことができる。

フックス

1945年3月9日

パップを食べた後、ハンス [ヌウマン] と僕はブラカン [家の裏側] を掃除した。今日は僕たちの番だった。その後きれいな紙を探し、線を引いて、とにかく父への手紙を書き始めた。これはものすごく長い手紙になるが、すばらしい機会でもある。10時半頃、僕は向かい側 [パロス側] へ行き、手紙を送るために病院へ一緒に行けるかどうか医者のヴィンス先生にお願いしに行った。彼はどこにも見つからなかった。それからバーアトウマン医師を尋ねたが、彼はルーウィガジャ [農園] へ行っていた。[...] [英語の] 授業の後、僕は初め手紙に少し書き足した。それから4時に病院の管理者に行き、病院輸送に乗車できるという約束をした。それができなければ、僕は歯科の患者たちと一緒に行く。いずれにしろ、僕は行くのだ。

フックス

1945年3月10日

今朝僕は8時半に病院の前に立っていた。幸いなことにも志願者は少なかった。殆ど苦勞もせず、僕は荷車のところに場所を得た。出発するまで時間がかかった。患者の一人は出かけなければならぬことを時間どおりに注意されなかった。[軍事] 病院では運が悪かった。ヤップは非常に忙しく、僕は第二門を通り、病院の中にそっと入るチャンスをつかめなかった。病院雑役をしている知り合いで、手紙を渡せる人を見つけられなかった。すんでのところでは第15大隊でよく知っていた人に渡すことが出来た。その人と自分で話すことができなかったのはやはり残念だが、幸いにも手紙は渡せられた。それが最も重要なのだ。

そこで僕は [オランダ貿易会社の] 在外商館の人たち : [M.J.] ヴァウタァースさんと [J.J.] ヴィルウさんにも会った。彼らはパロク第5から去り、最初の人には10月に第15大隊から来たのだが、彼は新しいニュースを何も知らなかった。僕はここにいる在外商館の人たち

に挨拶を持って行かなければならなかった。W [ヴァウタース] さんの息子、11才ぐらいの男の子もここに抑留されている。僕が君のお父さんと話したよと言った時、その子はわっと泣き出した。

ドウ マイイアー

1945年3月13日

今朝はがきが届いたが、僕らには何もなかった。ハンス・クリックには一通あり、はがきは消しゴムでたくさん消されていた。ハンスのはがきには『チハピットーバンドン』と書かれていたのが消され（それでもまだ読める）、その上にジャワのC.Q¹⁴⁸と書かれていた。これで全員が未だ去っていないことがはっきりわかる。

フックス

1945年3月13日

[日記のページ上部] 砂糖菓子一個（100グラム）・オートミール缶一個・砂糖入りの濃いジャグン [とうもろこし] パップ（700cc）・白砂糖500グラム。

山岳砲兵隊から僕らはチマヒ第4へ木を取りに行き、炊事場に正真正銘のヴィム [ドウ・ラウター・ドウ・ヴィルトウ] が立っているのを見た。それはものすごい驚きだった。彼がまだ第15大隊にいた時、僕の父やリントウさん[父親の親友]の所にしばしば行ったと語った。父はキャンプや魚釣りについて、いつも色々な計画をたてた。更に父はものすごいサンバラン [トウガラシが主の辛い味の添え料理] の愛好者になった。ヴィムは父のために全て料理しなければならなかった。ヴィムは父とリントウさんと一緒によく楽しい晩を過ごし、彼らは夕方テンポドルウ [古き良き時代] について話した。僕はこの良い知らせを非常にうれしく思う。僕たちはずっと立ち話をした。仕事は他の人たちに処理させたが、皆は嫌だとは思わなかった。これは慣例なのだ。僕は（ページ上部、参照）種々様々なおいしい御馳走をもらった。特にパップはとてもうまく甘かった。

¹⁴⁸ ジャワ C.Q とはチマヒ／バンドン地方にある収容所に対する日本軍管理上の別称であり、略語 C.P. は中部ジャワの収容所を示した。この項目の抜粋日記ドウ マイイアー1945年6月30日と1945年7月5日を参照。脚注#135も参照。

フックス

1945年3月19日

今日の午後、僕は父のために手紙を持って行ったレインダート [ステイハーフック] から母がまだブンチャクウにいると言うことを聞いた。僕には何も分からない。双子のドゥフが言うことと完全にあっていない。とにかく抑留されてはいないのだ。

フックス

1945年4月3日

今晚、僕は明日軍事病院へ行かなければならないという通知を受けたが、何故なのか分からない。軍事病院で何をやるのだろうか？ 父からの知らせだろうか？ そうだと良いのだが。

ファン エングルンブルフ

1945年4月3日

今日の午後はがきが届いた。多分バタバアから来たのだろう。とってもうれしい。

フックス

1945年4月4日

今朝僕は点呼の前にもう着替えをした。というのは病院出発組みは8時半には班長の事務所に待っていないからだ。[...] 僕は第15大隊の誰かが父からの通知を持ち、もしかしたら金も持っているだろうと願った。どうなるかわからないが。しかしそれは僕が調べなくてはならないことがはっきりした。[...] 病院の雰囲気は楽観的だという。月末には自由になるだろうと言われている。

ヨーストウン

1945年4月4日

今朝ヴィム [兄] が事務所にいると、家からはがきを持った伝達係が来た。僕らはうれしくて、夕飯にはうずら豆スープとライスプディングを作った。

ドゥ マイイアー

1945年4月4日

今日ジャワ C.R. [バタビアおよびその近郊にある収容所の別称] からはがきが来た。それはバタビアからのようだ。僕らには一通もなく、実に残念だ。その一方、便りが無い事はよいことだし、もしかしたら家族はまだチハピットにいるのかもしれない。

ドゥ マイイアー

1945年4月9日

僕らはまた便りを書ける。もちろんすばらしいことだ。僕は C.Q.¹⁴⁹ へ、お母さんの旧住所宛てに書こう。戦争捕虜にも書けるが、男性民間抑留所へは書けない。

フックス

1945年5月1日

今日の午後、誰かが収容所外からの葉書を持って歩いているのを見た。僕宛てのものがあるかどうか尋ねると、母宛ての手紙の返事が本当にあったのだ。正直言ってとっくに諦めていた。母たちは今チチャレンカ通りのチパナスにいる。僕はその通りがどこに位置するのかひどく思い悩んだ。この葉書を受け取り、何と喜んだことか。僕は急に泣き出してしまった。ペーター [弟] もまだそこにいる。こんなに運のついてる奴はまだ一度も見たことがない。殆ど15才で、未だに抑留されないとは、有り得ることだろうか！僕は直に先生 [ファン・ダー・スホートウ] の所に行くと、先生もたいへん喜んでくれた。なぜ母たちはチパナスに行ったのか気になる。そこには大勢の人たちがいるし、全てが家から近いからだろうと思うが、そこは山の上の方にあるのだ。

ドゥ マイイアー

1945年5月3日

向こう側 [ヴィルム通り側にあるハンセン病施設] の婦人たちの一人はチハピットから来てからそれほど長くない。彼女は男の子、ピアチュ・ナイダッハに言った（そのことを彼は僕にまた

¹⁴⁹ — 脚注 #148 参照。

話した)。それは、年少者たちはベンガワン通り [この通りはチハピット収容所にある坂道にある] の下の方にクンプウルン [集まって] 座わり、エイザーアマン婦人は彼らの班リーダーであることだった。そして、彼はあと数人の名前をあげた (全員がそこにとどまった少年たちの母親だった)。これで残留者の大部分が少年たちの母親たちであることが分かる。

更に彼女は老人たちはバタビアへ、体の弱い者たちはボイテンゾルグへ、残りの人たちは (もちろん残留者たち以外) スマランへ移ったと言った。残留者たちは現在そこ [チハピット] で元気にやっており、彼女はスマランの連中も無事であることを知っていた。どうして知っているのか、僕には分からない。これで少なくとも僕らはこの件に関し、全て正確に知っているのだ。僕はお母さんがスマランにいるのだと殆ど思う。なぜならそこからはまだ一枚のはがきも来てなく、いるならばお母さんはやはり便りを書いたであろう。それとも今おばあちゃんとは別々なのだろう。

フックス

1945年5月14日

ヨーロッパでは本当にひどい飢えであったに違いない。人工の4分の1が亡くなったという。通りには今しばしば栄養不良性浮腫の現地人を目にする。

フックス

1945年5月17日

今日の午後僕たちのグループはバイエム [ほうれん草] をバロス第5に持って行かなければならなかった。僕はファン・D [ドーン] さんとまた話をした。彼は既に巻済みされた手製巻きタバコの入っている箱をくれた。

ドゥ マイイアー

1945年5月21日

彼は [マックス・フラーザーおじさん] くじで引いたアメリカ製のハンカチを持っていて、それを兵補のところで卵3個と換えた。彼は昨日チミンディ [ルーウィ・ガジャと同じような農園] に行った。彼はまだ卵をもらえる。更に兵補は2隻の兵補を乗せた輸送船がバタビアの停泊地の前で魚雷で攻撃されたと話した。それにより彼らはジャワからもう離れられないことがはっきりした。これは本当なのだ。『なぜな』と彼は言った。『その船で出港した兵補たちがこの近くの兵

舎に戻って来たからだ。』

フックス

1945年5月24日

今日僕は軍事病院〔バロス側〕で家の解体をした。僕は何の雑役もせず、一日中ルック・アーラスのところでのしゃべり、タバコを吸っていた。彼はそこでうまくやっているが、多分近いうちにこちら側に引越ししなければならない。[...] 僕たちはまた葉書を書くことが許され、今回は50語と強制文章なしだった。連合軍が近くにいることが確かに分かる。全てが良くなっているが、食事だけはそうではない。彼らは野菜を全然送ってこない。

ドゥ マイイアー

1945年5月24日

僕らはやっと今手紙が書けるが、4月9日は取り消された。手紙を書くことについては良くなっている。今は50語を自由に書け、規定規則はなかった。その上事務所では日付がはんこうで押され、これは今までに一度も起きたことがなかった。黄色と白の2種類のはがきがあり、黄色は収容所外の家族用で、白は戦争捕虜収容所、女性収容所 又はジャワとマドゥーラ郊外の収容所用である。黄色のはがきには返信用はがきがついている。僕はお母さんに小包を受け取ったこと、そして全員が元気であることを願い、41才になるお父さんも元気であると書いた。残念なことにお母さんからの返信は受け取らなかったことも書いた。僕は元気で、坊主頭〔1945年6月3日参照〕で、未だに太っていて、更に早く家に帰りたいと、何しろ沢山のことを書いた。返事が来ると良いのだが。

フックス

1945年5月25日

葉書は明日点呼までに提出しなければならない。だから僕はまだ暗くなる前に書かなければならなかった。

フックス

1945年6月20日

今日の午後 [ディック・デン] バーアスがチマヒ第4からトゥボス [?] のタバコを一束たっぷり持って来た。うれしい驚きだった。僕は直に葉巻を巻いたが、タバコが強く、暫くタバコを吸っていなかったなので直ぐに気持ちが悪くなった。

フックス

1945年6月21日

今日はまた ^{ざんごう} 塹壕 をつくった；今回はヴィルム通りの後ろ側だった。そこには今チマヒ第4からの(200人)人たちが働く農園もあり、毎日1キログラムのウビ [サツマイモ] がとれる。チマヒ第4では大量の塩が不足しているので、僕たちのウビ500グラムに対しオートミール缶に入った塩と交換する。僕はまだ沢山の塩を持っているので、それも交換した。特定の知り合いには会わなかった。

フックス

1945年6月26日

僕はほぼ一日中 [雑役中] ルック・アーアスの所に訪ねた。彼も何も伝えることがなかった。彼はすっかり回復したが、食事分配係と掃除係りとしてやはり病院に留まるのだ。

フックス

1945年6月29日

今日はまた他の場所で働いた。僕たちは収容所の裏でカンポン [村] の中心部にレンガと泥で胸壁のようなものを造らなければならない。[...] 午後には大変なウントゥン [思いがけない幸運] があった。僕たち全員は現地人からテンペイ [発酵した大豆からできたクッキーの一種] の入ったナシ [ご飯] とその上にセルンデン [おろして 焼いたココナツ] がかかった包みを貰った。僕は他の青年たちとカウン [ヤシ葉のタバコ用巻き紙] 2箱付きのタバコの束ももらった。その後、僕はバブーチュ [女中] を通し米を2袋買わせることができた。僕は全部で600グラムの米を食べた。やはり見つかったことを想像して見ると、僕はスナン [気持ちが良い] ではない。そうすれば少なくとも20間は牢屋に入れられ、収容所にも絶対にスサー [厄介事] が起こ

る。もうやらないことにしよう、もし貰えるのなら、それはOKなのだ。

ドウ マイイアー

1945年6月30日

すごいことなのだ。[マックス] おじさんがはがきを受け取った。彼の奥さんは彼の姉とスマラン C.P.にいるが、マックスとフリッツ [息子たち] と一緒ではない。

フックス

1945年6月30日

僕はもちろんまた直ぐに昨日のグループのところに整列し、現地人は僕たちかわいそうなタワナンス [抑留者たち] のためにと、米袋とタバコの束を本当にまた苦勞して運んで来た。彼は大通りに食糧の入った屋台を持っている。僕はかなり大きな包み、少なくとも300グラムの米、それに焼きタフウ [豆腐] とテンペイ [発酵した大豆からできたクッキーの一種] を貰った。その上、肉ブイヨンをかけたご飯そしてチェンゲェ [ミニ唐辛子] が混ざったご飯が入っていた。その味は最高だった。そこには不安定な便所があり、バブーチュス [女中たち] が絶えず包みを中心に持ち込み、その後タワナンス [抑留者たち] が順番にいわゆる用を足すのだ。兵補は全て気付いているが、了解している。今回僕は何も買わなかったが、やはりこれは余りにも危険が大過ぎる。

フックス

1945年7月2日

[外勤雑役] 僕はやはりまた米を買った。僕がここで働くのは殆ど最後であろう。僕は現地人に水をたのむと、マグ カップに甘い質の良い紅茶を貰った。雑役の全員はまたご馳走になった。

[...] すばらしい兵補たちだった。朝に僕は靴下一足を交換する約束をした。初めに先払いでパン3分の1、午後にはまたパン3分の1とウビ [サツマイモ] をもらった。

ドウ マイイアー

1945年7月5日

今晚のように気持ちよく眠れることは長い間なかった。なぜなら全くおとぎばなしのようで、信じられない。お母さんから知らせを受け取ったのだ！ 今までにこれよりももっと大きな贈り物を貰ったことがあるだろうか？ 僕はこれ以上さらに幸せになれるだろうか？ 僕はとにかく上機嫌、とうとう連絡があったのだ。どんな連絡だろう？ あらゆることについてだ。僕は少なくとも今お母さんが C.P. [中央ジャワ] にいることを知っている。もちろんとても遠いが、やっと知ることができた。これは数百ギルダの価値がある。

フックス

1945年8月19日

たくさんの葉書が来たが、僕はまだ一切受け取っていなかった。多分少し後で来るかもしれない、先回もそうだった。

メィムリンク

1945年8月20日

昨日また葉書を受け取った。大変意外なことだった。しかし不思議だ。葉書はお母さんによって書かれたのではなく、すなわち他の筆跡なのだ。僕はドウ・ヴィルトゥさんが書き取り、それからお母さんが署名したのだと思う。

ドウ マイイアー

1945年8月20日

昨日何を貰ったか当てられるかい？ はがきなのだ。僕が2月の初めに書いたはがきの返事だ。お母さんは僕が『マックス』に会ったことを喜んでいと書いた。『マックス』とはマックス・フラーザーおじさんのことを意味しているのだろうが、どうしてお母さんはそれを知っているのだろう？ お母さんは生活はきびしいが、辛抱できると書いた。もちろんのことお母さんは早く僕と再会したかった（多分、可能だろう）。僕は心配してはならず、なんとか困難を切り抜けなくてはならなかった。おばあちゃんは最近病が重いが、エルス[妹]はよい手助け役なのだった。その元気なエルスは今もう殆ど10才になる。また便りが来てよかった！ 僕がもちろん非常に

うれしかったのが分かるかい? 「C.P.」とあり、英語で『 June 24th 2605 [2605年6月24日]』と記され、その他の文は普通にマレー語で書かれてあった。従って最近なのだ。山積みのはがきが収容所に届き、収容所外からのものもあった。

戦争の経過についての報知と流言

ドゥ・マイイアー

1944年8月5日

今日はイレーヌ王女のお誕生日だ！このことについてヘンク・ヴァイフンバッハ（僕らの班リーダーで、ヨーブ [ランヌフトゥ] おじさんと一緒にマラン海軍収容所¹⁵⁰ に抑留された年上の青年、とても感じの良い人）は朝の点呼の時に短いが上手なスピーチをした。中でも彼は、王族が誕生日を既に自国で祝っているかもしれないと言った。さて本当だと良いのだが。なぜならここではニュースなどもちろんないからだ。

ドゥ・マイイアー

1944年8月30日

僕の誕生日は既に一週間前になる。とにかく本当に時間は飛ぶように過ぎるものだ！毎日家へ戻れる日に近づいて行く。僕はアメリカが十分な資金を持っていることを願う。とういのはそれにより確実に左右されるからだ。

ドゥ・マイイアー

1944年9月4日

ここでは決してニュースを耳にしないが、便りのないのは良い証拠なのだろうか？

フックス

1944年9月14日

戦争は直に終わるだろうと言われるが、僕は余りたいて信じていない。また家に帰れるだろうか？ 帰れるものか！！

¹⁵⁰— この収容所はマラン郊外に位置する旧兵舎に設けられた。

ドウ・マイイアー

1944年9月24日

目下、また空襲警報中で、今はおよそ朝の9時半になる。緊張する！これは絶対に確実に本物なのだ。なぜなら初めにサイレン、続いて鐘が鳴り、絶えず重戦闘機が空に飛んでいたからだ。数人はブーンという音と高射砲が聞こえると思うと言い、他の人たちは気圧が濃いのだと言った。それに気づくのは耳鳴りがするからで、そのため唾をぐっと飲み込まなければならなかった。しかし彼らは架空のことを考え出すこともできるんだ。そこでまた警報解除、10打の鐘が鳴った。

フックス

1944年11月9日

また全タワナンス [抑留者たち] がサラティガ [中部ジャワ] へ移動するという噂が流れた。絶えず家からより遠くへと離れていくことになるが、僕は何も信じないのだ。女性収容所から更に約450人の新しい年少者たちがここにやって来るのはありうることだ。

ドウ・マイイアー

1944年11月11日

僕らは砂糖菓子をもう食べてしまったが、昨日もう一度、砂糖を200グラムもらった。またそれを作るために砂糖を集め、次はもちろんもっとおいしく作るのだ。だがここでの楽しみがどのくらい続くかを誰が知っているのだろうか？ 僕らはサラティガかスカブミ [西部ジャワ] に移るだろうと誰かが言っている。

ドウ・マイイアー

1944年11月15日

昨日新しい少年がカレーズから到着して、向こうの女性たちは明日汽車で見知らぬ場所へ出発し、わずか20キログラムの balan [荷物] のみの持参が許されたというぎょっとするような知らせを持って来た。更にチハピットからの女性たちは既に立ち去った。恐ろしいことだ！この最後の情報のつじつまがあうのは、食糧を集めていた連中は汽車に乗った女性たちが通り過ぎるのを見たからだ。従って西へ出発したのだ、そうでなければここを通ることはないからだ。女性たちはスカブミへ向かっていると思う。[...] 更に11、12そして13才の少年たち300人が後

に残された。それ自体とてもひどいことだ。[...] 僕らがそこへ行くという可能性もある（そうすると僕が思っていたより早く家に帰ることになる）。それに今日出発することさえ不可能だとは言えない、それで今皆は荷造りをしているのだ。こういう風に全てが考えたことと違うように進展する。

フックス

1944年11月18日

また僕たちが移動するという噂がある。年少者たちの班リーダーであるクティンヨーさんでさえ確信している。しかしヤップは新しい炊事場の建築を普通に続行しているとは、とにかくおかしいなものだ。こういう奴らのことをどう考えればよいのか分かりはしない。

フックス

1944年11月20日

『日本の声』がまた入って来た。それはフォルモサ [台湾] での海戦、ハルマヘラ¹⁵¹ での陸戦が行われたことに関してであった。うまくいっている。もしかしたら一年後には僕たちは自由になるかもしれない。その間にここでの時間は過ぎ去る；全て無意味なのだ。

ファン・エングルンブルフ

1944年12月5日

アメリカ軍はレイテ [フィリピン、ミンダナオ北部の島] に上陸し、南東、従ってオランダ領東インドを攻撃する準備をしていると言われている。とっくにそれをすべき時期だったのだ。

¹⁵¹ — 1944年9月15日、米軍はフィリピンに対する攻撃準備としてモロタイ島 [ハルマヘラの近辺] を占領し、11月12日には連合軍はフォルモサに空中攻撃を開始した。(F.N.J. van Dijk e.a. (red.) ; *Noord Sumatra in oorlogstijd, oorspronkelijke dagboeken uit de interneringskampen chronologisch samengevoegd.* (Makkum 1997) APII: 1943-1945,463)

ファン・エンゲルンブルフ

1944年12月7日

僕らは戦争の最終後半期にいると一般的に言われている。ヨーロッパでは既に戦争は終わっているだろう。ここでは明日で戦争になってから3年になるのだと考えさせられる。

フックス

1944年12月8日

情報によると既にサバン [北部スマトラ、アチェ沿岸の島々] とシンガポール¹⁵² で戦いが行なわれたという。僕はやはりそれを信じる勇気がない。

ドゥ・マイイアー

1944年12月11日

僕らのクリスマスプレゼントはここに来る途中だという。ここで流れるこのようなうわさはひどく楽天的だ。

フックス

1944年12月28日

隣にある日本軍収容所の殆ど全ての兵補たちは完全武装でカモフラージュされた車、銃！ 弾薬筒！ 手榴弾！！を持って立ち去った。彼らは何とおびえていることであろう。ムス ダタン [敵が接近している]！

フックス

1944年12月30日

今日僕は気持ち良く家に残った。[...] 雑役にはひどくうんざりしてきた。終戦まで金が十分

¹⁵² — 1944年4月19日連合軍の戦艦はサバンとアチェ空港ルホンガで驚くべき戦闘を実施した。1944年11月5日には連合軍はシンガポールに空中攻撃を行なった。(Van Dijk e.a. (red.) 460, 464)

あることだけを願う。終戦まで余り長くはかからないだろう。フィリピンは占領され、ヤップンがそこですることは妨害するだけだと新聞には書かれている。ヨーロッパではイギリスが既にルール地方 [ドイツ] に、ロシアはウイーンの近くにいる。ドイツ軍はどこから勢力を出すのだろうか分からないのかい？ さて、ヤップはできないがドイツは戦い続けられるのだ。

フックス

1945年1月4日

ヤップンは午前中ずっと鉄砲と照明弾で訓練をしていた。何か意図があるのだ。

ドゥ・マイイアー

1945年1月9日

ちょうど2回目のサイレンが鳴り、鐘が3回、3回、3回等続いた。よし、これでいい。空襲警報が終わった。また訓練だったのだろう。再び多くの戦闘機が空中に飛んでいた。

フックス

1945年1月10日

僕たちが [オランダの] 政府から¹⁵³ 8,28 ギルダーをさらに3回もらえるという噂が流されている。現在次の支払いに取り掛かっている。さて、僕は当分十分の金がある。

ファン・エングルンブルフ

1945年1月13日

僕らは起こりうる空中攻撃や運搬困難に備え、1ヶ月分の米と小麦粉の蓄えを受け取った。外国ではうまくいっている：それはヒトラーが一種の弔辞 [ドイツの敗北を認める演説] を述べたことだ。ひょっとするとドイツが分裂されることすら話されている。[...] 一方、一彼らは、つまり新聞では今まで殆どのことを認めなかったため— こういうことを全て耳にすると、既にドイツが降伏したのだと言える。ロシアは既にブダペストとウイーンの間にいる。

¹⁵³ — 項目「食糧状態と物資状況」、脚注（51参照）。

日本の海軍大將は演説で、アメリカ軍の空中での^{はけん}覇権、その上中国との接続、ルゾン [フィリピンの北部の島] における4個所の軍地を承認したそうだ。食糧や医療品¹⁵⁴ を大東へ送るアメリカ軍の約束について既に話している。この前の空襲警報でバンドン上空に35機のアメリカ軍の飛行機が見つけれられたらしい。ヤップンも非常蓄えの米や小麦粉のことを考え、かなりいらいらしていた。

フックス

1945年1月15日

僕たちの収容所の隣にある兵補の兵舎には人けがなく、彼らは全員去り、監視団が時々見回りをする。兵舎の大部屋は封をされた；彼らは一昨日の夜に立ち去った。致命的な兆候だ。

フックス

1945年1月18日

僕たちの収容所では1ヶ月分の食糧が蓄えられている。いつか食糧の収集ができない時期が来るだろうとヤップは言う。更にバロス第6全部が第15大隊へ移動するという噂が広まわっている。本当なら良いと思う。

サロモンズ

1945年1月21日

今朝、パチョッレン [鋏で掘り起こす] のため外に整列しなければならなかった。それからK [クニモト] と警備指揮長が完全武装で到着して、僕らを家に帰らせた。彼らは機嫌が悪かった。全兵補はヘルメットをかぶった。昨日、彼らはガス管を質のよい銃と交換し、弾薬筒をもらった。

¹⁵⁴ — 1945年1月の末、RAPWI (連合軍戦争捕虜及び抑留者の救済) が開始され、これは南西太平洋地域の最高司令部による戦争捕虜と民間抑留者たちへの救助を意味した。(Van Dijk e.a. (red.), 465)

ドウ・マイイアー

1945年1月26日

目下、空襲警報中で、最初に「空中に危険あり」のサイレンが鳴り、その後警報は収容所の鐘に続いた。そこらじゅう『窓と戸をしめろ!』という叫び声。消防係の青年や男の人たち、それに応急手当て団が整列しなければならなかった。

ドウ・マイイアー

1945年1月31日

今日はまたベアトゥリックス王女様の誕生日だ。7才の誕生日だと思う。王女様がこの誕生日を自国でお祝いすることを願うが、僕はそうなると思う。ニュースは良く、オランダは今自由であるらしい。太平洋に関してもやっと順調にいつている。フィリピンですら既に自由であるらしい。— まあ、うわさだけど。そして最近の空襲警報でバタビアとスラバヤは爆撃を受けたに違いない。従って気力をまだ捨ててはいけない。今日はステイハーフック先生にとってはひどい日だった。去年彼は今日自由になるであろうと賭けをして、今25ギルダー負けた。

ファン・エングルンブルフ

1945年2月2日

パレンバン¹⁵⁵ [南部スマトラ]、東部ジャワの水力発電所に爆弾攻撃があったと言われている。最近あった空襲警報ではボイテンゾルグの上空で偵察機が見つけれられたらしい。終戦はより接近しているが、未だ延びることもある。

フックス

1945年2月8日

情報によると、日米は停戦を取り決めたという。困ったことだ：人は色々な噂をでっちあげるものだ。ベルリンが引き払われたとも主張された。なぜならばロシアが近くにいるからだ。本当なら良いと思うが、それだけだ。

¹⁵⁵ — 1945年1月末、連合軍の航空母艦からパレンバンとスマトラ地方に爆撃が行なわれた。(Van Dijk e.a. (red.), 465)

フックス

1945年2月12日

最近、ニュースがなく、収容所全体がまたかなり悲観的になっている。3月4日が転換の日になるだろうと言う連中の無駄話を信じるものは誰もいない。それならば1953年まで続くかもしれない。しかしもしそうであるならば、僕はブンチャクウにずらかるのだ。僕は母、インゲとペーター [妹と弟] が今もなお自由であるという気がする。ペーターは長い間この混乱を避けられ非常に困っている。僕はブンチャクウにいる家族が飢えとはどういうものか知っているとは信じない。ああ、よかった。それでいいのだ。

フックス

1945年2月13日

雑役で大量のガンドゥルン [きび] の種と小さなガンドゥルン [きび] の苗木を見つけた。僕は家の前に層にして植えた。なんて僕たちは楽観的なのだろう。収穫できるまでにはまだ4ヶ月かかるだろうに。とにかく僕はガンドゥルン [きび] をまだ取り入れられると思う。— もちろん移動をしなくてもよければのことだが。いや、僕たちが早く自由になるとは思わない。もしかしたら年末になるかもしれない。それならば僕は金を節約して使わなくてはならない、さもないと豆を得るためにまた雑役をしなくてはならない。しかし僕たちは政府から 8,28 ギルダーをまだ3回支払われるかもしれないし、そうすれば年末まで十分の金がある。それとも友だち又は第15大隊にいる父から少し貰えるかもしれない。もしかしたら僕自身でそこに行くかもしれない。どうなるかは誰にも分からない !!

ドゥ・マイイアー

1945年2月28日

明日で今月もおしまい、僕たちは『De stenen spreker [石の予言]¹⁵⁶』で有名な月「1945年3月」に入るのだ。

¹⁵⁶ — D. Davidson の「*De steenen spreken : de goddelijke boodschap der Groote Pyramide* [石の予言 : 大ピラミッドの神の伝言]」についての説明。この本は最初に英語で出たが、1936年オランダ語での翻訳がデン・ハーグの Van Stockum 社で出版された。人気のある本で、その中にはアングロサクソン民族が互いに絡み合う将来の責務における聖書、数霊術や強固な信仰の見解がなされていた。その本により人々は将来について、従って戦争推移についての予言を推論した。

フックス

1945年3月4日

「stenen spreker [石の予言]」によると、今日戦争が終わらなければならないが、今朝起きた時、まだその気配は何もなかった。その日も何も気付くことがなかった。多くの人がそれを確信していたが、僕は少しも信じていなかった。

ドゥ・マイヤー

1945年3月5日

僕は今晚、3月の4日から5日にかかる夜に何が起こるか興味がある。

ドゥ・マイヤー

1945年3月14日

今移動についておかしな噂が広まっている。

26日、1人目は僕らはカレーズに行くという。

26日、2人目は僕らがチハピットに行くという（少年たちのみ）。

26日、3人目は18才以上はチマヒ第4に行くといい、第4大隊から800人の青年たちがここに来るといふ。そしてハンス・クリックはバンドンにある第1補給廠[第15大隊]へ行くのだという。このうわさを聞く前に、僕は第15大隊へ行く夢を見た。お好きなようにお選び下さい！

フックス

1945年3月14日

僕たちがバンドンにある旧女性収容所に移動するという執ような噂がまた流れている。一方では良いことかもしれない。もちろん僕は父とずっと楽に連絡することができる。他方では、また半分の所持品を置いて行かなければならず、少なくとも1ヶ月は混乱状態にいることになる。ともかく、どうなるか待ってみよう。どっちにしても何もすることができないのだから。

ファン・エングルンブルフ

1945年3月18日

報道は今かなり詳細になってきている：日本はアメリカ軍の日本上陸を予期できるが、妨げることとはできない。ポーニン島（小笠原諸島）の占領、日本での飢饉¹⁵⁷。[...] 貨車3両分のアメリカ軍の小包が到着し、そのため第4大隊から1000人の雑役人が投入された（うわさ！）。

フックス

1945年3月18日

バンドンへの移動の噂は今もなお流れている。皆がそこへ行くという可能性が実際にあるかもしれない。もし何かが起きるなら、どうなるか分かるだろう。

フックス

1945年3月25日

収容所はまた急に噂でいっぱいになり、雰囲気は楽観的だ。九州が占領され、少なくとも上陸したとさえ言われている。それが本当であれば、戦争は直に終わり、すぐに家に戻れる可能性はかなりある。

ドゥ・マイイアー

1945年5月1日

今日、日本旗が半旗掲げられたらしい。数日前また警報があった。これが訓練であったのは空中に風船があがっていったからだ。しかし日本の天皇の誕生日4月29日の場合には、観兵式は行われぬ（それで良く分かるというものだ）。何も気付くことがなく、日本兵たちは数時間自由時間をもらっただけらしい。

¹⁵⁷ — 2月19日、アメリカ軍は岩島（小笠原諸島、日本南西にある諸島）に上陸、これにより日本の内部防衛包囲が破られた。（Van Dijk e.a. (red), 465）。

ドウ・マイイアー

1945年5月2日

またもや同じ、再び空襲警報。外では車の行き来でたいへん混んでいる。空中にはかなりの飛行機が飛び、窓と戸を閉める。

ドウ・マイイアー

1945年5月7日

今日はおばあちゃんのお誕生日だ、愛しいおばあちゃん。[...] これが収容所での絶対に確かに最後の誕生日に違いない。おばあちゃんも良いニュースを聞いたことを願う。そのニュースとはタラカン¹⁵⁸とバリクパパン [東部ボルネオ] への上陸だ。

ファン・エングルンブルフ

1945年5月8日

ドイツが降伏し、オランダは解放されたので、僕らはコーヒーを飲んだ(!) とにかく人々は状況をまた素晴らしくし過ぎるものだ。新聞でタラカンが占領され、モウルメイン [ビルマ] とラングーン [ビルマ] が連合軍の手に落ちたのが分かった。[...] しかし今、朗報が絶えず突然に入ってくる。バリクパパン・バンジャマシム [南部ボルネオ]・ポンティアナク [西部ボルネオ] そしてパレンバンさえも既に占領された。王族はオランダに居られ、スラバヤとジャワの東部地域は爆撃され、マカッサルは占領された。これは余りにも急で、素晴らしすぎて僕には信じられない。

フックス

1945年5月8日

今日僕たちはバイエム [ほうれん草] をバロス第5に持って行かなければならなかった。そこでドイツが降伏したことが公式に発表され、ヨーロッパでは平和条約が署名された。これは僕たちが近いうちにここから自由になることを意味しているのだ。だいたい数ヶ月後、多分もっと早く

¹⁵⁸ — 1945年5月1日連合軍は石油の島タラカン (ボルネオ北東海岸諸島) に上陸した。(Van Dijk e.a. (red.), 466) .

家に帰れることなど僕にはうまく想像できない。僕はこの知らせを注文したグラ ジャワ [赤シユロ糖] 400グラムで祝ったが、雑役ロールパンと一緒に全て食べ尽くした。

メイムリンク

1945年5月9日

昨日5月8日に僕はバロス第5日本人収容所指揮官アラキがその収容所リーダーにドイツの降伏を発表したと聞いた。僕は今やっと本当なのだと認められる！ 5月5日に女王はデン・ハーグに到着したに違いない。皆はとても楽観的で1ヶ月以内には解放されると期待している。

フックス

1945年5月15日

今日は缶詰 [赤十字の小包み] を一つも開けていない。なぜならヤップがいなかったからだ。ヤップは終日山岳砲兵隊にいき、全班長 (ヤップン) は立ち去った。兵補たちが非常におじけついているのは、ヤップが彼らに4万人の兵補たちがバリクパパン [東部ボルネオ] でアメリカ軍に銃殺されたと話したからだ。

フックス

1945年5月16日

僕は味方 [連合軍] から何か聞くべきだと本当は思う。彼らは6週間で戦争の終結をつけるだろう。

フックス

1945年5月20日

最近はもうまるっきり通知がない。誰もどうなっているのか、外では何が起きているのか知らない。楽観的な雰囲気は弱まっている。

フックス

1945年6月9日

食事に関し多くの噂が広がっている。[第一に] 朝飯はポップ800cc、昼飯ロールパン1個半、夕飯米150グラム。ポップとパンの量が増え、米が少なくなるということだ。他の者は、小麦粉を2杯もらえ、米は今まで通りだろうと言う。またウビ[サツマイモ]をもっと貰い、米が減ると言う人もいる。色々なことを耳にする。これは明日から実施されるはずだ。チマヒ第4では既に今日貰ったと言うが、僕は興味津々だ！

フックス

1945年6月10日

今朝ポップ800ccとパン1個半はでなかった。相変わらず、いつもの通りだった。噂はまた偽りで、とにかく今もおぶつぶつ言っているのを耳にする。いつかまたでるかもしれない。

ドゥ・マイヤー

1945年6月10日

昨日さらに続いて空襲があった。窓や戸を閉め、消防団や応急手当団が整列し、僕らは家に留まっていなければならなかった。班長や組長は外にいなければならず、そこらじゅう鐘が鳴った。全兵補の持ち場では、急に気が狂ったように鐘が鳴り始めた。

フックス

1945年6月14日

ここで再度すばらしい、多くの移動に関する噂が広がっている。

1. 200ないし300人がチマヒ第4へ移動。
2. 僕たち全員（鍛冶場や農園作業に従事するもの以外）がバンドンへ移動。

何かが起こるであろうことはとにかく確かである。僕に関してはチマヒ第4に戻ればよいと思う。この収容所は長くいればいるほど、つまらなくひどくなっていく。チマヒ第4では雑役の支払いが良い：雑役一回分ウビ[サツマイモ]1250グラムと雑役ロールパン1個がもらえ、十分な志願者がいないとは、考えられないことだ。

ドウ・マイイアー

1945年6月18日

300人が収容所から移動するといううわさがまた広まる。もしその人たちが第15大隊へ移動すれば、僕らはフリッツとマックス [マックス・フラーザーの息子たちで、おじさんは第15大隊に彼らがいると考えていた] のために同行するように努めよう。チハピットは現在完全に空で、兵隊たちがいるらしい。だからお父さん又はテオがそこにいるというチャンスはあるだろうし、もし僕らがそこに移動するならば、僕は連絡を取ることができるだろう。いずれにしろ、僕はまた変化があることに気に入っているのだ。

フックス

1945年6月21日

今日20才までの少年たちは全員、ヤップから砂糖がぬられた雑役ロールパンをもらった。何に感謝すれば良いのか誰も知らない。そのロールパンは違った、とても質の良い小麦粉で作られていた。それはお腹を十分に満たし、味は最高だった。僕には仕事で貰った雑役ロールパンがまだあり、非常蓄えのために一回もらえるといううわさが直に流れる。他の人たちは6月27日からこの追加パンを毎日貰え、—これは単なる前だめしだと言っている。少しは本当であることを願う。

フックス

1945年6月23日

再度多くの噂。

1. 29日にはトーコーが再度開店。
2. 29日に砂糖 1.5 キログラムを受領。
3. 明日再び少年たちに砂糖パン分配。

フックス

1945年6月26日

暗い日々 [ジャワの戦い] 用の在庫はうまくいっている。あと数個のロールパンで十分である。雑役が終わっても、僕は十分パンを蓄えたことになる。僕に関しては暗い移行期 [戦争から平和

への困難な日々]は直ぐに来ればよいと思う。一般的な意見ではこの戦いは1ないし2ヶ月かかるとのことだ。

フックス

1945年6月28日

髪を切ってもらった時、およそ1.5cmとたいへん短くさせてしまった。ここから出て行く頃には、また丁度良く伸びているだろう。

フックス

1945年7月1日

鍛冶場と木工店が1000人まで拡大されるという噂が広がっている。また新しい技術者がこの収容所に来て、最後の年老いた技術者たちはいなくなる。僕には余り良く分からない。とにかく日本兵にとって数ヶ月後には終わってしまうことなのだ。いったいあの馬鹿なやつらは何をしたいのだろうか？

フックス

1945年7月18日

僕たちの収容所は更に130人の鉄道作業員を都合し、彼らの体重は60キログラム以上で、雑役に適してはならないという噂が絶えず広まっている。ということはL[ルーウィガジャ農園]勤務者だけになる。従って彼らが行けば、その仕事場が空くはずだ。僕はこの噂が本当だと良いと思う。

ファン・エングルンブルフ

1945年7月24日

メンタヴェイ諸島[スマトラ西海岸]は占領され、バリクパパンも同様ということだ。マカッサルは爆撃され、女性収容所¹⁵⁹に当たった。7月16日にポツダムにてトゥルーマンを議長とし

¹⁵⁹ — 1945年7月17日マカッサル(セレベス)の近辺に位置する女性収容所カンピリは、確かに連

3 大国会議が行われた。これを書いている今は、空襲警報中だ。

フックス

1945年7月30日

今日の午後ちょうど食事を配っている時、急に大きな音をたてサイレンが鳴り、僕たちは全員直ちに家に入らなければならなかった。スープは丁度、早く、素早く分けることが出来た。終了したのは7時だった。1週間前にも警報があった。L [ルーウィガジャ] のヤップによると、スマランは重爆されたということだ。僕は目下何が爆撃されているのかに興味がある。数日後にはそれについて知らされるだろう。僕は連合軍がここに来て欲しいのだ。そうすれば、僕たちはだいぶ元気を取り戻せるだろう。僕たちはただ我慢しなければならないのだ。

フックス

1945年7月31日

また大きな噂:既に本当に勤務した鉄道作業員たちのうち、100人がチマヒ第4に戻って来た。彼らは全員病気で、疲れ果てていた。近いうちにこの収容所から労働者及びL [ルーウィガジャ] 勤務者50名がそこへ行かなければならない。なぜならこの連中はとても良く太り、しっかり仕事ができるからだ。L [ルーウィガジャ] は収容所からの弱いものたちにより補充された。僕に関してはこれが続けば、もしかしたら僕もL [ルーウィガジャ] へ行かれるかもしれない。

ファン・エングルンブルフ

1945年8月1日

今日は既に3度目の空襲警報があり、今は継続的な音だけでなく、高低をつけて鳴っていた。

ヨーストゥン

1945年8月1日

1時半に空中警報があった。2時半は深刻だった: 野菜雑役係り全員が戻り、3時15分にこ

合軍より爆撃された。

れは終わった。

フックス

1945年8月6日

情報は全くなく、空襲警報ももう起きなかった。僕たちは規則的にあるだろうと願っていたのだ。

フックス

1945年8月10日

病院雑役係りたちはあらゆる保存用食料品、蜂蜜、グラス [精米]、牛乳等々の食糧を収集しなければならぬ。明らかに非常蓄え用だ。もちろんのこと彼らは直に汽車が走らなくなることを恐れているのだ。

フックス

1945年8月12日

良い情報だ：ロシアは宣戦布告なしに日本を攻撃した¹⁶⁰。楽観家たちによれば月末には自由であろう。人は大量の米があるということは、炊事場が非常蓄えを使い尽すからだと言う。もし明日もまた300グラム以上もらえたら、僕はそれを信じるだろう。

フックス

1945年8月14日

僕たちのグダン [倉庫] に、今日数量の追加の米、砂糖と塩が蓄えられた。僕たちは今3ヶ月以上の蓄えがある。一日中彼らは食糧を収集していた。僕は構わない。一般的意見では終戦はまだ1ヶ月か、せいぜい2ヶ月だろう。ヤップンですらそう言っている。

¹⁶⁰ — ロシアは1945年8月8日に日本に宣戦布告し、14日以内に満州を占領した。(Van Dijk e.a. (red.), 468) .

ファン・エンゲルンブルフ

1945年8月14日

すばらしいニュースだ：皆ばかばかしいほど楽観的だ。『3ヶ月以内にブトゥル[本当に]自由』。その理由はロシアが満州を急襲し、一週間後には既にムクデンを襲撃したことだが、特に「原子爆弾¹⁶¹」のニュースから来るのだ。

フックス

1945年8月15日

病院雑役はインドネシアの独立宣言¹⁶²の祝日のため行われなかった。

フックス

1945年8月16日

噂によると、戦争は終わったのだ。なぜなら日本が降伏したからだ。DMA [兵役機動砲兵隊]では大きなエコノムン会議¹⁶³があった。僕はこれは偶然だと思う。もし終戦であれば、僕たちはまだ外にいる人たちから何か気が付いたであろう。

¹⁶¹ — 1945年8月6日、最初に広島に原子爆弾、そして8月9日長崎に原子爆弾が落とされた。

¹⁶² — 雑役が実施されなかった理由についての不明瞭さは大きかった。同日にヘンク・カルスホーヴンは彼の日記に『ヤップの祝日のため病院雑役がなかった。』と記していた。(NIOD オランダ領東インド日記収集、H・カルスホーヴンの日記)

¹⁶³ — 原義は経済学者。脚注36参照。

抑留所での戦争終結の発表

ヨーストウン

1945年8月20日

きのうの夜11時半に35人のS.S.<鉄道>作業員がもどってきた。彼らが最後に働いたのは、[8月]14日だった、と話した。15日、ヤップは彼らのいるところで旗をおろしてふみつけた。15日は平和が調印されたらしい。モリが[その]戦争は終わった、と表向きではないけれど言ったということが、こんばん点呼で知らされた。¹⁶⁴ 午後はまだブタと、ふつうのあしの肉2本<牛肉>が運ばれてきた。

フックス

1945年8月20日

昨夜11時半に、鉄道作業員たちの一部が、素晴らしい知らせを持って帰ってきた。[8月]15日にヤップが、ハビス ブラン [戦争は終わった]、そして彼らはもはや働く必要はない、と言った。僕たちは、そのことをなおかつ信じるができなかった。僕たちは、敢えてそうしなかった。今朝はすべて通常どおりに進んだ。雑役も普通に外へ出かけて行った。僕は午前中ずっとトウンパット [寝場所] で横になっていた。体が少し弱っているように感じ、吐き気がした。さらにそれら全ての奇妙な噂で、誰もが落ち着かなかった。

今日の午後、僕がちょうど心地よく眠っていたところ、突然ものすごい喝采と歓声で起こされた。ヤップは抑留所指導管理に対し、日本は降伏した、と発表した。二日もすれば、運営はアメリカまたはイギリスの将校たちに引き継がれるだろう。僕たちは冷静に、成り行きを見守らなければならない。ル [一ウィガジャ] から今日の午後、豚1頭、ココナッツ100個と野菜が運ばれ、僕たちは今では毎日、豚肉を貰う。妙だ。急に今それができるとは。ご飯やパンも、もっと多く貰えるものか、僕は興味津津。今のところ僕たちは自由。そしてそれが最も重要なことだ。病院のために大量の医薬品も入荷した。その上、炊事場にはさらに牛肉も。

¹⁶⁴ 日本の天皇は1945年8月15日にラジオ放送で、日本の降伏を知らせた。

ファン・エンゲルンブルフ

1945年8月20日

今、(抑留所の様子からすると) やっぱりブトゥル [本当に] 戦争は終わったのだ。ここで何が起きているのか、描写することはとてもできない。人々の大部分は、混乱状態だ！ 僕は、今広まっている最も奇妙な情報のことを普通に話すことで、その印象を表わしてみよう。まず初めに、送り出されていたS.S.<鉄道>作業班の一部が昨日帰ってきた。夜も遅く。彼らは、あそこではヤップ自身が『プラン スダ ハビス』[戦争は既に終結した] と言い、将校たちは国旗を踏みつけた、と話した。降伏が[8月]15日に実現したのだ、とここで断言していた楽天主義者たちの予期どおりだった。

昨日、兵補たちは休暇で家に帰った。日本人への強制労働は廃止されたことが、公式に抑留所運営管理へ通知されたらしい。それでルーウィガジャ、鍛冶場などでのものだ。志願者だけが働ける。(しかし、僕は何も気が付かない) [...]僕はそれに反し、かなり深く疑っている。僕は、この途方もない悲観主義にふけることは危険なのだ、と分っているけれど、周囲の誰からも知らずにそのような考えにさせられてしまう。ああ。もし、失望に終わるならば、多くの人たちはどんなにか意気消沈することだろう。

同じ日、午後一 日記の追加！ ちょうど今、2番目の鉄道作業の分遣隊が到着した。モリが『プラン スダ ハビス』と言ったことで、抑留所中が喜びで熱狂した。誰もが歓声を上げ互いに握手を交し、みんなは叫び跳び上がる。先生は授業をしない。もはや必要はない。僕は相変わらず、モリを信用できない。それがいまだにごまかしのようを感じる。僕はそれを信じることができない。やがて、それが失望となることを、僕は心配しているのだ。

メイムリンク

1945年8月20日

戦争は終わった！ それは非公式に知らされた。僕たちの抑留所長の一人、モリはそのことをたった今、鍛冶場で言った。

ファン・エンゲルンブルフ

1945年8月21日

それはやはり実際に本当らしい。とにかく抑留所運営管理が、僕たちは平静を保ち、既に存在する規則に今までどおり従うように、という補足と共に記念すべき事実を正式に発表したのだ。ああ、それは殆んど想像できない。再び普通の家庭生活、もはや空腹はなく、ヤップと原住民によ

る屈辱はない。

ヨーストウン

1945年8月22日

午後の点呼のあと、ぼくたちはスホートウル氏の家の前（あたり）に、クンプウルン [集合] しなければならなかった。ぼくたちはスホートウル氏のお話をきいた。彼は総括抑留所長から通達を受け取っていた。それには、日本軍は連合軍から何度も強いられ、戦争を終わらせた、と書いてあった。連合軍は日本軍に対し、(元) 抑留者を保護するように命じていた。¹⁶⁵ それだからぼくたちのヤップの抑留所長は、すべて今まで通り続けなければならない、と言ったのだ。

スホートウル氏はそれに加え、ぼくたちは日本人には普通にあいさつをしなければならぬ、と言った。ここの衛兵所では、兵補たちはヤップン<日本人>と代わった。スホートウル氏はさらに、戦争で亡くなったすべての方々、そして平和のために子供たちを犠牲にしたすべての母親たちのことを、思い出さなければならない、と言った。それから1分間の黙禱^{もくとう}があった。そこでヘット ヴィルヘルムス<オランダ国歌>が歌われ、『女王万歳』と力強く叫ばれた^{さけ}。

今日の献立は— 朝は丸パンとコーヒー、午後は400グラムのご飯と150ccのソース、晩は540グラムのご飯と220ccのスープだった。

フックス

1945年8月22日

今晚、スホートウルは抑留所全体に訓話をした。彼は、僕たちは平静を保たなければならない、と言った。ヤップは、万事がより良くなるように手配するに違いない。トーコー<売店>も可能な限り速やかに開店し始める。話し終わると、彼は亡くなった方々を思い出すために、1分間の黙禱を求めた。突然、数人の男性がヘット ヴィルヘルムスを歌い始め、直ぐ誰もがそれに加わった。それから女王のために万歳三唱、そして抑留所の運営管理のために万歳三唱をした。それは厳粛な一瞬だった。

¹⁶⁵ 副総督ファン・モークは、蘭領東インド向けのオーストラリアのラジオ放送で、連合軍の到着まで当分の間、抑留者は抑留所内に留まるように伝えた。これは、あるインドネシア人グループが大騒動を起こしていたからである。東南アジア軍総司令官マウントバッテン提督は、日本軍に対し責任をもって抑留者の安全に当るよう要求した。(Van Dijk<ファン・ダイク> その他 (編纂), 467-468)

ドゥ・マイイアー

1945年8月23日

今日、この不愉快な抑留所での二回目のお誕生日。二回目、そうなのだよ。でも今ではもう、そして完全にそのように嫌な抑留所ではないのだ。あと数日もすれば、僕たちはここにはもういないのだ。それならば、僕はお誕生日をもう一度祝い直すけれど、そのときは我が家で。僕はもっと素晴らしいお誕生日を祝えるのだろうか？ やっと僕たちが3年間見つづけた夢が実現する。戦争は終わった。ブトゥル [本当に] 真実なのだ！ 僕は何と言ったらよいのか分らない。それほど嬉しい！ 昨日の晩、点呼の後で僕たちは歓声を上げて通りの向こう側<バロス側>へ行った。そしてスホートウル氏は抑留所のために演説をした。これは大よそ次のようなことだった。

『連合軍側からの繰り返しの強要により、日本の天皇は敵対行為を停止する旨、発令した。これにより、俘虜はもはや俘虜ではない。それにも拘わらず、彼らは以前の抑留所規則を厳守しなければならない。彼らは、日本軍がイギリスの派遣員と交代するまでは、抑留所内に留まらなければならない。我々には、従って平静になることが義務づけられた。音楽演奏は、嘲笑^{ちょうしょう}するような歌でない場合には許される』。

僕たちは、それでヤップからの命令や号令に、まだ従わなければならない。それは確かにしなければならない。なぜならば、いずれにしても秩序は保たなければならないからだ。その上、彼は僕たちに1分間の黙祷をさせた。僕たちはこの瞬間を体験できなかった人たちを思い出し、僕たちのために戦ったアメリカ人に感謝しなければならなかった。その次に、年とった男の人たちが歌うヘット ヴィルヘルムスをあらためて再び聴いた厳粛な瞬間が訪れた。しかし、僕はこの瞬間を、そのようには想像していなかったし、実のところ誰もがそうだった。それは確かに最も素晴らしい瞬間の一つだった。

今、ようやくそのことが初めて公に発表された。僕たちは、すでに長い間そのことを知っていた。まず、[8月]14日からすでに噂が流れ始めた。ところが、その話など僕は信じなかった。しかし、それがいつかは本当であるに違いなかった。次にそれらの葉書が届き、ますます信用できるようになった。ついに鉄道作業員たちが、ヤップが戦争は終結したと言って国旗を踏みつけた、という知らせを持って帰ってきた。けれども、旗がここではまだ揚げられて、それは殆ど信じられないことだった。夕方、[マックス]おじさんは僕たちを呼び寄せて、それを本当に信じることができるのだ、ラマイ [お祝い] と言った。ずいぶん遅くまで僕たちは寝ずに起きて、解放のことしか話さなかった。翌朝、マウリ [モリ]、エコノーム< (原義) 経済学者。脚注36参照>は、そのことを鍛冶場でも言った。誰もが家々から飛び出し、通りの向こう側<バロス側>へ駆け出した。同時に、抑留所内は歓喜で湧きたった！

ファン・エングルンブルフ

1945年8月23日

昨日、記念すべき「知らせ」が、最終的にチマヒにある全抑留所の統括抑留所長から、スホートウル氏につづき僕たちに発表された。訓話の後、ヘット ヴィルヘルムスが歌われた。状況はさらに改善されている。ご飯には2回、肉がつく。ラジオが約束された。僕たちは中国の業者からすべて付けで注文ができる。モリは去った。今朝、僕たちは丸パンに加え雑役パンさえももらった。

メイムリンク

1945年8月25日

僕たちは相変わらず抑留所において、いまだにイギリス人もアメリカ人も見かけていない。しかし、それでもわずかなことから戦争は終わり、僕たちは直に抑留所を出るのだ、ということが分る。兵補の監視は日本人の監視に代わった。親切な奴らだ。[彼ら]は年少の少年たちと冗談を言い合い、抑留所外の婦人たちと連絡することを普通に許している。22日の晩、点呼の後、抑留所全体は整列しなければならなかった。そしてスホートウル氏は、チマヒ全部の抑留所を代表する[日本人の]統括抑留所長からの公式な発表を読み上げた。このあと彼は、亡くなったタワナンス[抑留者たち]を思い、とても厳粛な「1分間の黙祷」だった。次に彼は[ラジオ]の発表の前には、ドンペラー<水につけて加熱する電熱器。項目「食糧」、日記の断片ドゥ・マイイヤー、1945年1月12日参照>を[電流障害の危険との関係で]使わないように僕たちに依頼した。

それが終了すると、人々はその場を離れ始めた。ところが一人の男の人がヘット ヴィルヘルムスを歌い始めた。もちろん僕はどうすべきか分らなかった。しかし、スホートウル氏も歌っているのを見た時、僕は^{たたず}佇んで一緒に歌った。僕たちが最初の節をちょうど歌い終わり、他の半分が厳粛に次の節を歌い始めていたにもかかわらず、半数の人たちは『女王万歳!』と叫び、通りを駆け出していった。このすべての混乱から、実際には全く感銘を受けなかった。僕は<戦争が終わって>初めて歌うヘット ヴィルヘルムスを全然違うように想像していた。

人名リスト

このリストは本文に見いだされる人名から成っている。これらの名前は、日記の中で常に正確に書かれていた訳ではない。従って我々が、本文の可能な個所は訂正した。名前は訂正され、NIOD <オランダ戦争資料研究所>が所蔵する若干の日記、ならびに次に挙げる資料に基づき標準化された。Kleian's Adresboek van geheel Nederlandsch-Indië (1941) <クレイアン編纂、蘭領東インド全域の住所録 (1941年発行)>、naamlijsten van het Rode Kruis betreffende de Tjimahikampen <チマヒ抑留所に関する赤十字社の名簿>、naamlijst van het kamp Tjihapit <チハピット抑留所の名簿>、H. van der Bloms 'Namenlijst van overledenen in het Militair Hospitaal Tjimahi in de periode van maart 44 tot september 1945' <ファン・ダァー・ブロムス編纂「1944年3月から1945年9月までの期間における軍病院での死亡者名簿」>、'Appèlboek van J.W. Donkers, kumicho sectie I, blok II, Baros 6' <バロス第6、II班、I組の組長、ドンカースの点呼記録>、de memoires van G.A. Schotel <スホートウルの回想録>、'Jongens 8/4/45 uit Jongenskamp Baros gearriveerd' (in: Register van jongens op 1.1.45 in kamp Tjimahi 4 t/m 19 jaar, en later aangekomen) <「1945年4月8日、バロス少年抑留所より到着の少年たち」(1945年1月1日およびそれ以降にチマヒ第4抑留所に到着の19歳までの少年たちの登録に記載)>、そして Jongenskamp Baros 6, Tjimahi 1944-1945 van D. van Engelenburg <ファン・エンゲルンブルフ著、チマヒ1944年-1945年、バロス第6少年抑留所>。さらに蘭領東インドの電話帳、そして日記の筆者からの口頭、または書面で提供された情報が利用された。我々が実際に見つけることができなかつた人名において、誤りがあつた場合にはお赦しを願う。

人名

カタカナ表記と特記事項

A., de heer	アー氏
Abkoude, P. van	P. ファン・アプカウドゥ
Akkersdijk, G.G. (Gerry)	G.G. (ヘアリィ) アッカーアスダイク
Alers, L.J.Th. (Louk)	L.J.Th. (ルウク) アーラァス
Amsen (2 x)	アムスン (2名)
Araki	アラキ、バロス第5の日本人抑留所長
Arps, B.F.H. (Brownny)	B.F.H. (ブラウニィ) アルプス
B.	ベー
Baars, D.P. (Dick) den	D.P. (ディック) デン・バーアス
Baartman, dokter A.P.G.	A.P.G. バーアトゥマン医師
Baas Becking, (H.G.) Dick	(H.G.) ディック・バース・ベッキング
Bakker, Rudie	ルディ・バッカー

Bange, Koos	コース・バングウ
Barink, S.J.H.G.	S.J.H.G. バーリンク、雑役リーダー、教師
Bayens, J.M.	J.M. バイエンス
Beatrix, prinses	ベアトウリックス王女
Bening, Rudie	ルディ・ベーニング
Berckelaer, Van	ファン・ベルクラア、 ルーウィガジャの雑役リーダー
Berg, Chris v. d.	クリス v.d. ベルフ
Berg, dominee H.W. van den	H.W. ファン・デン・ベルフ、牧師
Berkman, A.J. (Tonnie)	A.J. (トニイ)・ベアクマン
Bijlaard, Willie	ヴィリイ・バイラーアトゥ
Bijster, Job	ヨブ・バイスター
Boesterd, Geeke den	ヘイクウ・デン・ブウスタアトゥ
Boesterd, Joan den	ヨアン・デン・ブウスタアトゥ
Bongers, Ardo	アルド・ボンガアス
Bos, mevrouw	ボス夫人
Bosma	ボスマ、雑役リーダー
Bosman	ボスマン
Bottemanne, J.	J. ボットウマンヌ
[?], Boy	ボーイ
Brooshooft, C.M. (oom Kees)	C.M. ブロースホーフトゥ、(ケイスおじさん)
Brooshooft, Rieteke	リイトウクウ・ブロースホーフトゥ
Brooshooft-van Acker, M.V. (tante Marie)M.V.	ブロースホーフトゥー ファン・アッカー (マリイおばさん)
Büchli-de Bruyne, mevrouw E.J.	E.J. ブッフリイー (ドゥ・ブラウン)
Bus, de heer M. du	M. ドゥ・ブウ氏、抑留所で講演をし、英語、 フランス語を教え、そして菜園主任。
Buyze, de heer A.J. + zoon	A.J. バウズウ氏と息子、全教科の主任、 試験を実施し、数学を教える。
Campagne, de heer H.C.	H.C. カンパンイエ氏
Cassa, Th. W. (Beer)	Th.W. カサ (ビィア)、(「ボーア」)
Coehoorn, Joop (Jopie)	ヨーブ (ヨーピイ)・クウホーン
Coehoorn, Wijnb /Wybren	ヴィブ / ヴィブルン・クウホーン
Constant	コンスタントウ、Vogelsang, Constant 参照
Coutinho, D.	D. クウティンヨー、年少少年たちの班長
Crevels, de heer	クレイヴウルス氏、 グローゴル抑留所責任者としてカーター 牧師の後任者。

Croqué	クロケイ、日本人付の当番 [伝達係]
Dick	ディック、Baars, D.P. (Dick) den 参照
[?], Dick	[?] ディック
Doeff, Pim	ピム・ドゥフ
Doeff, Sander	サンダー・ドゥフ
Doeve, A.H.	A.H. ドゥフウ
Donkers, J.W. [Joh.]	J.W. [ヨハン] ドンカース、組長
Doorn, de heer Van	ファン・ドールン氏
Douwes Dekker, Niels Alexander	ニールス・アレクサンダー・ダウウエス・デッカー、(ニールス叔父さん)
Duinen, Tientje van + broer	ティンチュ・ファン・ダウヌンと兄 ティンチュはドウ・マイイヤーがいる家の住宅主任。
E., de heer Van = H.J.E. van Enter	ファン・エー氏 H.J.E. ファン・エンター 氏
Ebbink	エビンク、配給係
Edgar	エドゥガー、Laurens, Edgar 参照
[?], Eduard	[?] エドゥワアトゥ
Egami Minoru	エガミ ミノル、曹長、総務部長 1944年2月8日から1945年9月30日まで、チマヒ第8抑留所事務局。
Eisma, W.L. (Willy)	W.L. (ヴィリィ) アイスマ
Elenbaas, B.	B. エルンバース、数学と幾何学を教える。
Elly (2x)	エリィ (2人) 1. メィムリンクの妹 2. メィムリンクのガールフレンド
Els(je)	エルス (エルシュ)、Janssen 参照
Emanuels, Eddy	エディ・エマヌエルス
Engelbrecht, de heer + zoons	エンゲルブルフトゥ氏と息子たち エンゲルブルフトゥ氏は英語を教える
Engelenburg, Dick van	ディック・ファン・エンゲルンブルフ
Engelenburg, Maud van	マウトゥ・ファン・エンゲルンブルフ
Erik	イアリック、Neuman, Erik 参照
Erthuizen, de heer	エルツハウズン氏
Es, de heer Van	ファン・エス氏
Ezerman, mevrouw	エイザーアマン夫人、チハピットの班長
Fabriek, R.J.P. (Roel)	R.J.P. (ルウル) ファブリック
Fagnotti, de heer	ファニョッティ氏 抑留所では力学を教える Leendert Stegerhoek が 病気の際は、組長として

Foekens, Frederik	交替する。
Foekens, Inge (borg)	フレイドウリック・フウクンス
Foekens, Jan	イングウ (ボアブ)・フウクンス
Foekens, Peter	ヤン・フウクンス
Foekens-Petersen, Gurly Maiken	ペーター・フウクンス
	グウルリィ・マイクン・フウクンス
	ペータースン
Fournier, ir. F.L.P.G.	FL.P.G. フォーニア、エンジニア
[?], Frankie	[?] フランキィ
Frits	フリッツ、 Glaser, Frits 参照
G, Hans	ハンス・ヘー
Gallert, de heer J.P.	J.P. ハルラアートウ氏
Geeke	ヘイクウ、 Boesterd, Geeke den 参照
Geleijnse, J.J.W. (Hank)	J.J.W. (ハンク) フラインスウ
Gerda	ヘアダ、 Lieth, Gerda 参照
Gerritsen	ヘアリッツン
Glaser, Frits	フリッツ・フラーザー
Glaser, Max(je)	マックス (マックシュ)・フラーザー
Glaser, (oom) Max	マックス (おじさん)・フラーザー、組長で数学を教える
Groen, Bob	ボブ・フルウン
Groenendijk, Lodie	ローディ・フルウヌンダイク
Haas, Thijs de	タイス・ドウ・ハース
Hank	ハンク Geleijnse, J.J.W. (Hank) 参照
Haring, Jan	ヤン・ハーリング
Haring, Theo	テオ・ハーリング
Harms, de heer H.	H. ハルムス氏
Harst, P.A.H. (Hylke) van der	P.A.H. (ヒルクウ) ファン・ダァー・ハアストウ
Hart, Paul	パウル・ハアトウ
Hartman, Paultje	パウルチュ・ハアトウマン
Hatta (Shogo)	ハッタ (ショーゴ)、通訳
Heijden, Hans v.d.	ハンス v.d. ハイドゥン
Henniger-Douwes Dekker, Sieglinde Ragna Sigrid (tante Lin)	シィフリンドウ・ヘンヌハー ー ダウウエス・デッカー ランヤ・シフリットウ (リン叔母さん)
Hennink	ヘニンク
Hens, A.M. (Tony)	A.M. (トニィ) ヘンス
Herk, de heer G.G. van	G.G. ファン・ヘアク氏、

Hillen, Jan	抑留所のトーコー<商店>の運営維持担当 ヤン・ヒルン、 抑留所のトーコー責任者および住宅責任者 ディック・バース・ベッキングと共に、 De Kampeest <ドウ・キャンプペストゥ >の編集者
Hillinga	ヒリンハー
Hogehuis, W.L. (Wim)	W.L. (ヴィム) ホーフンハウス
Horst, V.d.	V.d. ホアストゥ
Houwen, de heer G.D.	G.D. ハウウェン氏
Huizinga, Jan	ヤン・ハウジンハー
Hylke	ヒルクウ、 Harst, P.A.H. (Hylke) van der 参照
IJlst, pastoor A.J.C.	A.J.C. アイルストゥ、神父
Inge(borg)	イングウ (ボアフ)、Foekens, Inge(borg) 参照
Ingenegeren, ir.A.C.	A.C. インフネイフルン、エンジニア、 バロス第5では教育と娯楽の責任者
Irene, prinses	イレヌ王女
J.	イエイ
[?], Jacques, oom	ジャックおじさん
Jansen, H.J. (Hans)	H. J. (ハンス) ヤンスン、組長 年少少年組の雑役リーダーとしてヒュース・サ ールティンクと交替する。
Janssen, G.W.	G.W. ヤンスン、班長
Janssen, Else Maria (Els)	エルスウ・マリア (エルス)・ヤンスン
Janssen, Johan Gerhard	ヨハン・ヘルハアトウ・ヤンスン
Janssen-Douwes Dekker, Louise Erna Adeline	ルウイズウ・エルナ・アドウリスウ ヤンスン — ダウウエス・デッカー
Joan	ヨアン、Boesterd, Joan den 参照
Johansen, Willie	ヴィリイ・ヨハンスン、 日本人付の当番 [伝達係]
Joop, oom	ヨープおじさん Ranneft, (oom) Joop 参照 Joosten,
Harry Johan Maria	ハリイ・ヨハン・マリア・ヨーストウン
Joosten, ir. J.H.L.	J.H.L. ヨーストウン、エンジニア
Joosten, J.M. (Joop)	J.M. (ヨープ) ヨーストウン
Joosten, L.J.M. (Leo)	L.J.M. (レオ) ヨーストウン
Joosten, W.J.M. (Wim)	W.J.M. (ヴィム) ヨーストウン
Jorritsma, de heer W.	W. ヨアリッツマ氏、抑留所で英語を教える。 組の商店維持管理

Juliana, prinses	ユリアナ王女
Jumelet, de heer D.D.	D.D. ジュムレットウ氏
K., de heer	カー氏
K., Carl	カーアル・カー
Kaay, Albert v.d.	アルバアトウ v.d. カーイ
Kahle, de heer	カアルウ氏
Kalshoven, Geert	ヒィアトウ・カルスホーヴン
Kalshoven, Henk	ヘンク・カルスホーヴン
Kamps, de heer R.E.	R.E. カンプス氏、数学を教える。
Kanemitsu	カネミツ、バロス第5の日本人
Kater, dr. H.J.	H.J. カーター、博士 牧師、1944年9月までグローゴルで 抑留所責任者。
Kerstens, Paul	パウル・ケアストゥンス
Kerstens, de heer P.M.	P.M. ケアストゥンス氏
Keyser, de heer	カイザー氏、ヴィルム通り側の抑留所責任者
Klerk, Giel	ヒイル・クレアク
Kok	コック、「ルーウィガジャの密輸者」
Koning, Jan ('King')	ヤン・コーニング（「キング」）、抑留所警察の一 員
Krafft, dr. A.J.C.	A.J.C. クラフトウ、博士
Kreischer, Meinaud	メイナウトウ・クライシャー
Kriek, K.J. (Hans)	K.J. (ハンス) クリック
[?] , Koentje	[?]、クウンチュ
Krijgsman, N.A.	N.A. クライスマン、F.W. Weeda の未亡人
Kühr, Willy	ヴィリィ・クア
Kunimoto Yoshio	クニモト ヨシオ、朝鮮人、抑留所長
L., V.d.	V.d. エル
Landaal, Jan	ヤン・ランダール
Laudy, de heer	ラウディ氏
Laurens, Edgar	エドゥガー・ラウレンス
[?], Leendert (Leen)	[?] レインダアトウ（レイン）
Leo	レオ、 Joosten, L.J.M. (Leo) 参照
Liesker	リースカー
Lieth, Gerda	ヘアダ・リィツ
Lijtkink	ライティンク、ルーウィガジャ作業員
Lin, tante	リン、叔母さん
	Henniger-Douwes Dekker, Sieglinde Ragna

Lind, de heer	Sigrid (tante Lin) 参照 リントウ氏
Liscaljet, Ir. J.	J. リスカリエットウ、エンジニア、 物理学の教師
Looke, Dik	ディク・ロークウ
Luiting, mevrouw	ラウティング夫人
Malmros, mevrouw	マルムロス夫人
Marie, tante	マリイおばさん Brooshoft-v.Acker, M.V. (tante Marie) 参照
[?], Max	[?], マックス
Max, oom	マックス、おじさん、 Glaser, (oom) Max 参照
Max(je)	マックス (マックシュ)
Meeuwsen, Herman	ヘルマン・メウウスン
Mekel, Rob	ロブ・メイクル
Mellinga, G.	G. メルリンハー
Memelink, Elly	エリイ・メイムリンク
Memelink, Hans	ハンス・メイムリンク
Memelink, ir. O.W.	O.W. メイムリンク、エンジニア
Memelink, Oscar	オスカー・メイムリンク
Meyier, Cornelis Theodorus (Theo) de	コルネリス・テオドルス・(テオ) ドゥ・マイイアー
Meyier, J. Th. (Han) de	ヨハン・テオドルス・(ハン)・ ドゥ・マイイアー
Migawe [Egami Minoru ?]	ミガヴェ [エガミ ミノル?] チマヒ抑留所事務所責任者
Moolenaar, Jacobus Johannes (Jaap)	ヤコブス・ヨハヌス (ヤープ) モ ールナーア 業務管理責任者、スホートウルの右腕
Mori Toshiyuki	モリ トシユキ、 朝鮮人、軍属 (日常の抑留所指導管理) 1945年5月から1945年8月まで。
Muijderman, L.F.H.	L.F.H. マウダーマン
Müller, E.A.J.P.F.T.	E.A.J.P.F.T. ミュウラー スマラン、バンコンの抑留所責任者
Nassuth, G.A. (Götz)	G.A. (グッツ) ナスウツ
Nauta, A.J.N. (Bram)	A.J.N. (ブラム) ナウタ、抑留所炊事場責任者
Nederhof, Jan	ヤン・ネイダアホフ、 組長、ヘンク・ヴァイフンバッハの後任

Neuman, Erik	イアリック・ヌウマン
Neuman, J.J. (Hans)	J.J. (ハンス) ヌウマン (「ヌウトウ」)
Neut	ヌウトウ、 Neuman, J.J. (Hans) 参照
Niels, oom	ニイルス叔父さん Douwes Dekker, Niels Alexander (oom Niels) 参照
Nijdig, G.J. (Beertje)	G.J. (ビィアチュ) ナイダッハ
Nikkels, Henk	ヘンク・ニッケルス
Nikkels, Rob	ロブ・ニッケルス
[?], Nita	[?], ニタ
Noordegraaf, D.A. (Dirk)	D.A. (ディルク) ノーアドゥフラーフ
Noten, Marius van	マリウス・ファン・ノートウン
Oldhoff, de heer H.	H. オルトゥホフ氏、 組長としてスティハーフック氏と交替する。
Olmen, A.G. (Nol) van	A.G. (ノル) ファン・オルムン、(「赤毛」)
Onselen, P.M. (Paul) van	P.M. (パウル) ファン・オンスルン、 抑留所警察の一員
Oom	おじさん、 Glaser, (oom) Max 参照
Ossendrijver, Harrie	ハリィ・オッスンドライヴァー
Ottema, P.G.	P.G. オットウマ、雑役主任
Oyama Mitsuo	オーヤマ ミツオ 朝鮮人、軍属 (日常の抑留所指導管理) 1945年1月から1945年5月まで。
P., Wim	ヴィム・ペー
Peppinck, de heer H.C.A.	H.C.A. ペッピンク氏
Peter	ペーター、 Foekens, Peter 参照
Petersen, Gurly Maiken (Foekens-)	グルリィ・マイクン・(フクンス ー) ペータースン、 Foekens-Petersen, Gurly Maiken 参照
Pinto, de heer [?]	ピントー氏 [?], フランス語を教える。
Plaat, E.J. (Eddie)	E.J. (エディ) プラートゥ
Pluto [G.H. di Mello ?]	[G.H. ディ・メルロー ?] プルトー
Ranneft, G.J. (oom Joop)	G.J. ランヌフトゥ (ヨープおじさん)
Reelick, Jacques	ジャック・レイリック
Reelick, Jan	ヤン・レイリック
Refuge, C.B.F.	C.B.F. ルフージュ、ベルギー人、 アンバラワの抑留所責任者
Rentema, A.P. (Bert)	A.P. (ベアトゥ) レントウマ
Rhijn, Van	ファン・ライン

Rieteke	リイトウクウ、Brooshoofd, Rieteke 参照
[?], Robbie	[?], ロビイ
[?], Ronald	[?], ローナルトゥ、
Ruys, de heer	ラウス氏、フランス語を教える。
Ruyter de Wildt, de heer W.J. de	W.J. ドウ・ラウター・ドウ・ヴィルトゥ氏
Ruyter de Wildt, W.J. (Wim) de	W.J. (ヴィム)・ドウ・ラウター・ドウ・ ヴィルトゥ
S.v.L. =	<ヨンクヒヤー (貴族の称号)>
jhr. J.C.W. Strick van Linschoten	J.C.W. ストゥリック・ファン・リンスホ ートウン
S., Van	ファン・エス、ルーウィガジャでの雑役主任
Saaltink, A.J. (Arend)	A.J. (アールントゥ)・サールティンク
Saaltink, A.N. (Guus)	A.N. (ヒュース) サールティンク ヴァイフンバッハの後任。物理学担当。 1944年12月から1945年1月まで、 抑留所で年少少年組の雑役主任。
Sagami Torao	サガミ トラオ (「ヤン・ドウ・ビイツァー」) 日本人、軍属 (抑留所所長) 1944年7月ー1944年12月
Sahetapy, Frans	フランス・サヘタピイ(「向こう見ずなフ ランス」)
Salomons, Peter	ペーター・サロモンズ
Salomons, Philip	フィリップ・サロモンズ
Salomons, R.A. (Rob)	R.A. (ロブ) サロモンズ
Schenk, de heer	スヘンク氏、学習担当
Schenk, Piet	ピョットゥ・スヘンク
Schedler, Loewi	ルウウィ・スヘッドウラー
Schol, R.C. (Robert)	R.C. (ロバートゥ) スホル
Schoot, A.H.M. van der	A.H.M. ファン・ダァー・スホートゥ、 英語を教える。
Schot, de heer A.W. (oom Wim)	A.W. スホットゥ氏 (ヴィムおじさん)
Schotel, Godfried Abraham	ホットゥフリイトゥ・アブラハム・スホ ートウル 1944年7月21日から抑留所責任者
Schürer, Dick	ディック・シュフウラー
Shimonya Kazuji ¹⁶⁶	シモンヤ カズジ、曹長

¹⁶⁶ 日記では異なる名前が登場し、シモミヤあるいはシモムのようにも記されている。

	1945年5月ー1945年8月抑留所長
Siereveldt, Henk	ヘンク・シイルフェルトゥ
Simons, de heer	シーモンス氏
[?], Sjef	[?], シェフ
Snickers, H.L. (Henk)	H.L. (ヘンク) スニッカーズ
Soffers, A.L.J.	A.L.J. ソッフアス
Soffers, C.A.A. (Kees)	C.A.A. (ケイス) ソッフアス
Stam, Frits	フリッツ・スタム
Stam, Peter	ペーター・スタム、組長
Stegerhoek, Leendert	レインダートゥ・ステイハーフック 数学を教え、組長、ネイダアホフの後任
Stout, Freddy	フレディ・スタウトゥ
Tagaki Seigo	タガキ セイゴ 大尉、チマヒ抑留所長、1944年7月18日 ー1945年9月30日、チマヒ第4、バロス 第5、バロス第6
Tasche, ir. W.J.H.	W. J. H. タッシュュウ、エンジニア
Teerink, Henk	ヘンク・ティアリンク
Terhenne, Ir. T.	T. テルヘンヌ、アンバラワ第7抑留所責任者
Theo	テオ、Meyier, Cornelis Theodorus de 参照
Toxopëus, Meinco	マインコ・トクソペイユス
Toebosch [?]	トゥボス[?]
Truman, president	トゥルーマン大統領
Veen, de heer Van + zoon	ファン・フェイン氏と息子
Veenema, H.P. (Henkie)	H.P. (ヘンキイ) フェイヌマ
Verstraeten, Koekie	クウキイ・フェルストウラートゥン
Verstraeten, T.	T. フェルストウラートゥン
Vlaming, drs. W.N.	W.N. フラーミング、博士候補者 次に受ける授業のクラス分けをし、数学、 力学とドイツ語を教える。
Vogel, Hugo	ヒュウホー・フォーフル
Vogelsang, Constant	コンスタントゥ・フォーフルサンク
Wada	ワダ、日本人、バロス第5抑留所
Wagener, L.J.	L.J. ワーフウナー、雑役主任
Waldman, Jan	ヤン・ワルトウマン
Weeda, F.W. (Freek)	F.W. (フレイク) ヴェイダ
Weeda, Henk	ヘンク・ヴェイダ
Weeda, Kees	ケイス・ヴェイダ

Weiffenbach, Henk	ヘンク・ヴァイフンバッハ、組長
Werson, Jan	ヤン・ヴィアソン
Wielenga, dominee Dr. D.K.	D.K. ヴィルウンハー博士、牧師、 ラテン語を教える。
Wilde, Charles de	チャールス・ドウ・ヴィルドゥ
Wilde, Fred de	フレットゥ・ドウ・ヴィルドゥ
Wilde, mevrouw De	ドウ・ヴィルドゥ夫人
Wilhelmina, koningin	ヴィルヘルミナ女王
Wille, J.J.	J.J. ヴィルウ
Willemse, Joop	ヨープ・ヴィルムスウ
Willemse, Rudie	ルウディ・ヴィルムスウ
Wim	ヴィム、Joosten, W.J.M. (Wim) 参照 Ruyter de Wildt, W.J. (Wim) 参照 Schot, A.W. (oom Wim) 参照
Wins, dokter M.H.	M.H. ヴィンス、医師、バロス側担当の医師
Witbols Feugen, de heer + 2 zoons	ヴィトゥボルス・フェウーフン氏と2人の息子 ヴィルム通り66番の住宅主任
Woltjer, prof. dr. H.R	H.R. ヴォルチャー、教授、博士
Woortman, L.G. (Louk)	L.G. (ルウク) ヴォーアトゥマン
Wouters, M.J.	M.J. ヴァウタァース
Zeylemaker, de heer Piet	ピットゥ・ザイルマーカァー氏 英語担当、第III班第2組、組長
Zwet, C.J. (Kees) van	C.J. (ケイス) ファン・ズウェットゥ
Zijlstra, de heer C.	C. ザイルストゥラ氏、歴史を教える。
Zijlstra, Dikkie	ディッキイ・ザイルストゥラ